

大阪市平野区

長原遺跡発掘調査報告

XVII

平成15・18年度大阪市営長吉出戸南住宅建設工事にかかる発掘調査報告書

2008.3

財団法人 大阪市文化財協会

大阪市平野区

長原遺跡発掘調査報告

XVII

平成15・18年度大阪市営長吉出戸南住宅建設工事にかかる発掘調査報告書

2008.3

財団法人 大阪市文化財協会



NG06-4出土のガラス玉

SB801(316)、SX7105(314・317・318・320~322)、SB7004(315・319)

大阪市平野区

長原遺跡発掘調査報告

XVII

平成15・18年度大阪市営長吉出戸南住宅建設工事にかかる発掘調査報告書

2008.3

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

長原遺跡の北東部は人間の居住には不向きな低湿地であるが、それにもかかわらず、旧石器時代以来、幾多の人々がこの地に足跡を残してきた。今回の調査でも、自然堤防上に営まれた弥生時代の墓地と火災にあった住居跡、古墳時代の住居跡やウマの埋葬、朝鮮半島系の土器など、実に多種多様な発見があった。

長原遺跡では、このような調査成果が30年以上にわたって積み重ねられ、すでに膨大なものとなってきている。これこそ大阪市民の、土地に刻まれた貴重な財産であり、また国民共有の知的財産である。それゆえに、これらの貴重な発見の一つ一つを多くの方々に報告することは私たちを含む関係者一同の重要な責務である。

最後に、発掘調査ならびに報告書刊行に当って、一方ならぬご尽力をいただいた大阪都市整備局（調査当時は大阪市住宅局）、地元住民の皆様、さらには関係者各位に心より感謝の意を表したい。

2008年3月

財団法人 大阪市文化財協会
理事長 脇田 修

例 言

- 一、本書は財団法人大阪市文化財協会が2003年度と2006年度に実施した、大阪市住宅局(調査当時、現・大阪市都市整備局)による平野区長吉出戸8丁目(NG03-5・06-3・4次、NGは長原遺跡を示す)の大阪市営長吉出戸南住宅建設にかかる発掘調査の報告書である。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は、大阪市都市整備局(調査当時は住宅局)が負担した。
- 一、発掘調査は、2003年度の調査が財団法人大阪市文化財協会調査研究部調査課長京嶋寛の指揮のもと、調査課辻美紀が、2006年度の調査が大阪市文化財協会文化財研究部次長南秀雄の指揮のもと、文化財研究部松尾信裕・絹川一徳・杉本厚典が行った。調査の面積・期間などは第I章第2節表2に示した。
- 一、本書の編集は、文化財研究部次長南秀雄および文化財研究部長原調査事務所長積山洋の指揮のもと、杉本が行った。執筆は第III章第1～3節を除いて杉本が担当し、執筆担当者は各節の冒頭に示した。また、出土遺物の保存処理、およびX線・蛍光X線による資料の分析は保存科学室伊藤幸司(保存科学担当係長)が行った。そのほか、貝類の同定は文化財研究部池田研が、石材の同定は同小倉徹也が行った。
- 一、第III章第1節に収録した動物骨同定は、大阪市立自然史博物館学芸課長樽野博幸氏、第III章第2節に収録した動物骨同定は、奈良文化財研究所埋蔵文化財センター松井章氏・京都大学大学院丸山真史氏より玉稿を賜った。また、ガラス製品の検討については奈良文化財研究所肥塚隆保氏・降幡順子氏の協力を得た。そのほか、第III章第5節は大阪大学文学部3回生露原有紗の執筆・協力を得た。
- 一、第III章第3・4節に収録した植物種実同定・樹種同定はバリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
- 一、NG03-5・06-3次調査地の基準点測量・空中写真測量をアジア航測株式会社に、NG06-4次調査地の空中写真測量を株式会社パスコに委託した。
- 一、本書で使用した遺構写真は調査担当者が撮影した。また、遺物写真は西大寺フォトが撮影した。
- 一、発掘調査で得られた遺物・図面・写真などの資料はすべて大阪市文化財協会が保管している。
- 一、発掘調査から本書の作成に係わる作業には補助員諸氏の協力を得た。深く感謝の意を表したい。

凡 例

1. 本書で用いた層位学・堆積学的用語については、[趙哲済1995]に準じる。また、本書における地層名は、調査現場における層序を用いている。なお、「長原遺跡東北地区の基本層序」(六反層序と通称する)との対比は[村元健一2003]、「長原遺跡標準層序」(長原層序と通称する)との対比は[趙哲済2001]に基づき行っており、本文中では六反層序の表記には「RK」を冠し、長原層序の表記には「NG」を冠している。
2. 本書における遺構名の表記には、建物はSB、柱穴はSP、土壌はSK、畦畔はSR、溝はSD、自然流路はNR、その他のものはSXをそれぞれ冠している。遺構番号は基本的に3桁の数字で表し、原則として弥生時代の遺構を900および800番台、古墳時代の遺構を700番台、奈良時代の遺構を600および500番台とした。また、NG06-4次調査地の古墳時代中期の遺構群は100個を超えるため、その遺構群に対しては4桁の遺構番号を与えた。さらに竪穴建物内で検出した柱穴・小穴・土壌などの遺構番号は各竪穴建物ごとに個別に番号を与えた。
3. 遺物には本書での通し番号を付している。ただし、樹種同定資料については遺物取上げ時の登録番号(R番号)も表中に併記した。
4. 水準点はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文中では「TP±〇m」と記した。また、座標値は「世界測地系」に基づく。
5. 本書で用いた地層の土色は[小山正忠・竹原秀雄1996]の新版標準土色帖に従った。
6. 本書で用いた土器編年と器種名については次の文献に拠った。本文中では煩雑を避けるため、これら引用文献をその都度提示することは割愛している。弥生土器：[寺沢薫・森井貞雄1989]、古墳時代の須恵器：[田辺昭三1981]。

本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章	調査の経緯と経過	1
第1節	調査地の位置と既往の調査	1
1)	長原遺跡の位置	1
2)	既往の調査	2
第2節	発掘調査の経過と概要	7
第Ⅱ章	調査の結果	9
第1節	NG03-5次調査	9
1)	基本層序	9
2)	弥生時代中期の遺構と遺物	12
i)	方形周溝墓	
ii)	溝	
3)	弥生時代中期から古墳時代中期の遺構と遺物	32
i)	流路	
4)	古墳時代中期の遺構と遺物	34
i)	土壙	
ii)	溝	
5)	古墳時代後期～飛鳥時代の遺構と遺物	39
i)	畠	
ii)	溝	
6)	奈良時代の遺構と遺物	45
7)	平安時代以降の遺構と遺物	47
8)	各層出土の遺物	47
第2節	NG06-3次調査	49
1)	基本層序	49
2)	弥生時代中期の遺構と遺物	54
i)	溝	
ii)	土壙	
3)	古墳時代中期の遺構と遺物	62
i)	竪穴建物	
ii)	総柱建物と柱穴	
iii)	土壙と溝	
iv)	盛土遺構	
4)	古墳時代後期～飛鳥時代の遺構と遺物	82
5)	各層出土の遺物	84
第3節	NG06-4次調査	85
1)	基本層序	85
2)	弥生時代中期の遺構と遺物	88
i)	土器集積	
3)	弥生時代後期の遺構と遺物	89
i)	竪穴建物	
ii)	土器集積	
iii)	溝	
4)	古墳時代中期の遺構と遺物	106

	i) 竪穴建物	ii) 溝	
	iii) 土壌	iv) ビット	
	v) 落込み		
	5) 各層出土の遺物		122
第Ⅲ章	遺構と遺物の検討		129
第1節	NG03-5次調査地出土の動物骨同定とウマの埋葬		129
1)	はじめに		129
2)	出土動物骨の同定		129
i)	SK702から出土した動物骨	ii) SD705から出土した動物骨	
iii)	NR501から出土した動物骨		
3)	河内における古墳時代中期のウマの埋葬について		131
第2節	NG06-3・4次調査地出土の動物遺存体同定		133
1)	概要		133
2)	種類別の特徴		133
3)	考察		133
4)	まとめ		134
第3節	NG03-5・06-3・4次調査地出土の種実同定		137
1)	はじめに		137
2)	試料		137
3)	分析方法		137
4)	結果		137
i)	種実検出状況	ii) 判明した種実について	
5)	考察		143
第4節	NG03-5・06-3・4次調査地出土の木製品の樹種		147
1)	はじめに		147
2)	試料		147
3)	分析方法		147
4)	結果		147
第5節	出土木製品の樹種の傾向		149
1)	弥生時代後期の建築材の樹種		149
2)	古墳時代中期の柱材の樹種		150
3)	NG03-5次調査SK702出土材の性格について		151
4)	古代の木製品		156
第Ⅳ章	まとめ		157
1)	はじめに		157
2)	弥生時代中期		157
3)	弥生時代後期		160
4)	古墳時代中期		162
5)	古墳時代後期		162
引用・参考文献			163

あとがき・索引

英文目次・要旨

報告書抄録

原色図版目次

- | | |
|---|--|
| 1 弥生時代中期方形周溝墓出土土器
上：NG03-5次調査地SX801出土土器
下：NG03-5次調査地SX802出土土器 | 2 弥生時代竪穴建物出土土器
上：NG06-4次調査地SB802北側土器群
下：NG06-4次調査地SB802東側土器群 |
|---|--|

図版目次

- | | |
|--|---|
| 1 NG03-5・NG06-3次調査地 地層断面
上：NG03-5次I区東壁北半断面(南西から)
中：NG03-5次I区西壁南半断面(東から)
下：NG06-3次北調査地東壁地層断面
(南西から) | 下：SB701・704完掘状況(空中写真) |
| 2 NG06-3・4次調査地 地層断面
上：NG06-3次南調査地東壁地層断面(西から)
中：NG06-4次北壁断面(南東から)
下：NG06-4次14層上面地震痕跡(東から) | 11 NG06-3次調査地(南区) 古墳時代中期の遺構(三)
上：SB704-SP05断面(南東から)
中：SB704-SP01断面(南東から)
下：SB704-SP02断面(南東から) |
| 3 NG03-5次調査地 弥生時代の遺構(一)
上：I区SX801(北北西から)
中：I区SX801(南から)
下：I区SX801西側周溝南部土器出土状況
(西から) | 12 NG06-3次調査地(南区) 古墳時代中期～古代の遺構
上：SD713掘削状況(南東から)
中：SD601掘削状況(南西から)
下：NR602完掘状況(東から) |
| 4 NG03-5次調査地 弥生時代の遺構(二)
上：I区SX801土器棺出土状況(南東から)
中：I区SX801西側周溝北部土器出土状況
(北西から)
下：拡張区SX802掘削状況(南東から) | 13 NG06-3次調査地(北区) 古墳時代中期の遺構(一)
上：SX714～717掘削状況(北から)
中：SX714掘削状況(西から)
下：SX715掘削状況(東から) |
| 5 NG03-5次調査地 古墳時代中期の遺構(一)
上：SK702掘削状況(東から)
中：SK702断面(東から)
下：SK702コウヤマキ材出土状況(北から) | 14 NG06-3次調査地(北区) 古墳時代中期の遺構(二)
上：SX716掘削状況(南西から)
中：SX717掘削状況(北西から)
下：SX714-715周溝断面(南東から) |
| 6 NG03-5次調査地 古墳時代中期の遺構(二)
上：II区畠掘削状況(北から)
中：II区畠掘削状況(西から)
下：II区畠断面(北東から) | 15 NG06-4次調査地 弥生時代後期の遺構(一)
上：SD804完掘状況(北から)
中：SB801・802完掘状況(東から)
下：SB801・802完掘状況(南から) |
| 7 NG06-3次調査地(南区) 弥生時代中期の遺構(一)
上：SD801断面及びSK806検出状況(南西から)
中：SD803完掘状況(東から)
下：SD803土器出土状況(東から) | 16 NG06-4次調査地 弥生時代後期の遺構(二)
上：SB802東側土器群出土状況(北西から)
中：SB802北側土器群出土状況(西から)
下：SB802北側土器群出土状況(南西から) |
| 8 NG06-3次調査地(南区) 弥生時代中期の遺構(二)
上：SD803土器出土状況(東から)
中：SK806遺物出土状況(南西から)
下：SK812遺物出土状況(南から) | 17 NG06-4次調査地 古墳時代中期の遺構(一)
上：SB7001掘削状況(南東から)
中：SB7001内中央粘土堆積(西から)
下：SB7001完掘状況(南から) |
| 9 NG06-3次調査地(南区) 古墳時代中期の遺構(一)
上：SB701～704掘削状況(北東から)
中：SB703掘削状況(北東から)
下：SB703炉掘削状況(南東から) | 18 NG06-4次調査地 古墳時代中期の遺構(二)
上：SB7002～7004掘削状況(南から)
中：SB7004完掘状況(南から)
下：SB7004完掘状況(西から) |
| 10 NG06-3次調査地(南区) 古墳時代中期の遺構(二)
上：SB702掘削状況(南西から)
中：SB702炉掘削状況(西から) | 19 各調査地出土土器
上：NG03-5次調査地SD703出土土器
中：NG06-3次調査地SD803出土土器
下：NG06-4次調査地SB802西側土器群 |
| | 20 NG03-5次調査地 弥生時代中期土器(一) |
| | 21 NG03-5次調査地 弥生時代中期土器(二) |
| | 22 NG03-5次調査地 弥生時代中期土器(三) |
| | 23 NG03-5次調査地 弥生時代中期土器(四) |
| | 24 NG03-5次調査地 弥生時代中期土器(五) |

25	NG03-5次調査地 弥生時代後期～古墳時代中期土器	31	NG06-3次調査地 弥生・古墳時代土器 NG06-4次調査地 弥生時代後期土器(一)
26	NG03-5次調査地 古墳時代中・後期土器	32	NG06-4次調査地 弥生時代後期土器(二)
27	NG03-5次調査地 地層中出土土器 NG06-3次調査地 弥生時代中期土器(一)	33	NG06-4次調査地 弥生時代後期土器(三)
28	NG06-3次調査地 弥生時代中期(二) 古墳時代中期土器(一)	34	NG06-4次調査地 弥生時代後期土器(四)
29	NG06-3次調査地 古墳時代中期土器(二)	35	NG06-4次調査地 弥生時代後期土器(五)
30	NG06-3次調査地 古墳時代中期土器(三)	36	NG06-4次調査地 弥生時代後期土器(六)
		37	NG06-4次調査地 弥生時代後期土器(七) 古墳時代中期土器

挿 図 目 次

図1	長原遺跡の地区割と周辺の遺跡	1	図40	SD708・710出土遺物	45
図2	調査地周辺の既往の調査	4	図41	NR501平面図・断面図	45
図3	NG03-5、06-3、4次調査地の位置と地区割	8	図42	NR501出土遺物	46
図4	調査地位置図	9	図43	各層出土遺物(1)	46
図5	地層断面図	10・11	図44	各層出土遺物(2)	47
図6	おもな検出遺構	13	図45	調査地位置図	49
図7	SX801平面図	14	図46	北区・南区東壁断面図	50・51
図8	SX801木棺墓平面図・断面図	15	図47	南区第9a層上面遺構	52
図9	SX801土器棺墓平面図・断面図	15	図48	SD802～805断面図	53
図10	SX801墳丘断面図	16	図49	SD801出土遺物	54
図11	SX802およびSX802土器棺平面図	17	図50	SD802出土遺物	55
図12	SX802墳丘断面図	17	図51	SD803遺物出土状況	56
図13	SX801土器出土状況図	18	図52	SD803出土遺物	57
図14	SX802土器出土状況図	19	図53	SK806平面図・断面図・SD801断面図	58
図15	SX801土器棺	20	図54	SK806出土遺物	59
図16	SX801墳丘南西コーナー出土遺物	20	図55	南区西半検出遺構平面図・断面図	60
図17	SX801周溝出土土器(1)	22	図56	SK808・809出土遺物	60
図18	SX801周溝出土土器(2)	23	図57	南区東半検出遺構平面図・断面図	61
図19	SX801周溝出土土器(3)	24	図58	SK812出土遺物	61
図20	SX801周溝出土土器(4)	25	図59	南区第7b層上面検出遺構	62
図21	SX802土器棺	26	図60	SB701平面図・断面図	63
図22	SX802周溝出土土器(1)	27	図61	SB702平面図・断面図	64
図23	SX802周溝出土土器(2)	28	図62	SB702炉	65
図24	SX802周溝出土土器(3)	29	図63	SB702出土遺物	65
図25	SX802周溝出土土器(4)	30	図64	SB703平面図・断面図	66
図26	SD803・804断面図	32	図65	SB703炉	66
図27	NR701断面図	33	図66	SB703出土遺物	67
図28	NR701出土遺物	33	図67	SB704・SP706～711平面図・断面図	68
図29	SK702平面図・断面図	35	図68	SB704-SP01・SD713出土柱材	69
図30	SK702出土遺物	36	図69	SK712平面図・断面図	69
図31	SD704・706・707断面図	37	図70	SD713遺物出土状況	70
図32	SD703出土遺物(1)	38	図71	SD713・NR602断面図	71
図33	SD703出土遺物(2)	39	図72	SD713出土遺物(1)	71
図34	SD706出土遺物	39	図73	SD713出土遺物(2)	73
図35	第9c層下面検出遺構	41	図74	SD713出土遺物(3)	77
図36	第9a・9b層下面検出遺構	42	図75	NG06-3次調査地出土のガラス玉・管玉・白玉	78
図37	畠断面図	43	図76	北区第7b層上面検出遺構	79
図38	SD708～711断面図	44	図77	SX714～717間溝断面図	80
図39	SD711出土遺物	44	図78	SX714～717間溝出土遺物	81
			図79	第7a層上面検出遺構	82

図80	SD601断面図	83	図104	SB7002平面図・断面図	111
図81	SD601・NR602出土遺物	83	図105	SB7003平面図・断面図	112
図82	各層出土遺物	83	図106	SB7004平面図・断面図	113
図83	調査地位置図	85	図107	SB7003焼土面出土遺物	114
図84	南壁断面図	86・87	図108	SB7004内柱穴出土遺物	114
図85	SX901平面図	88	図109	調査地西半古墳時代中期溝・土壌・ピット平面図・ 断面図	116
図86	SX901出土土器	88	図110	調査地西半古墳時代中期土壌・ピット断面図	117
図87	第14層内検出遺構配置図	89	図111	調査地西半古墳時代中期ピット断面図	118
図88	SB801・802平面図・断面図	90	図112	調査地東半古墳時代中期溝・土壌・ピット平面図・ 断面図	120
図89	SB801・802内検出遺構断面図	91	図113	調査地東半古墳時代中期土壌・ピット平面図・ 断面図	121
図90	SB801出土遺物	92	図114	出土した柱材	122
図91	SB802西側土器群出土土器	93	図115	NG06-4次調査地出土のガラス玉・管玉・白玉	124
図92	SB802北側土器群出土土器(1)	96	図116	各層出土遺物(1)	126
図93	SB802北側土器群出土土器(2)	97	図117	各層出土遺物(2)	127
図94	SB802東側土器群出土土器	98	図118	SK702ウマの歯出土状況	130
図95	SB802出土遺物	99	図119	弥生時代中期の長原遺跡東北地区西半の遺構分布 図	158
図96	SB802北縁周辺出土土器	100	図120	弥生時代後期の長原遺跡東北地区西半の遺構分布 図	159
図97	SB802土器出土状況	102	図121	古墳時代中期の長原遺跡東北地区西半の遺構分布 図	161
図98	SX803平面図および出土土器	103			
図99	SD804出土遺物	105			
図100	古墳時代中期遺構検出状況	107			
図101	SB7001平面図・断面図	108			
図102	SB7001出土土器	109			
図103	SB7002~7004平面図・断面図	110			

表 目 次

表1	長原遺跡東北地区におけるおもな調査	5	表10	イヌの左下顎骨の計測値	132
表2	本書で報告する調査	7	表11	NG06-4次調査地出土骨種名表	135
表3	NG03-5次調査層序表	12	表12	NG06-3・4次調査地出土骨一覧	136
表4	NG06-3次調査層序表	49	表13	種実同定結果	141
表5	NG06-3次調査地出土玉類一覧表	78	表14	樹種同定結果	147
表6	NG06-4次調査層序表	85	表15	大阪市内出土柱材の樹種	149
表7	NG06-4次調査地出土ガラス玉一覧表	124	表16	コウヤマキ製の木製品	149
表8	NG06-4次調査地出土管玉・白玉一覧表	125	表17	北陸・中部高地~中・四国地方出土柱材の樹種	152
表9	イヌの歯の計測値	132	表18	北陸・中部高地~中・四国地方出土垂木材の樹種	153

写 真 目 次

写真1	SK702から出土したウマの歯の 取上げた直後の状況	130	写真5	種実遺体(1)	144
写真2	NG03-5次調査地出土の骨	131	写真6	種実遺体(2)	145
写真3	NG06-4次調査地出土の骨	135	写真7	種実遺体(3)	146
写真4	SB802炭化米出土状況	143	写真8	木材・炭化材顕微鏡写真(1)	154
			写真9	木材・炭化材顕微鏡写真(2)	155

第 I 章 調査の経緯と経過

第 1 節 調査地の位置と既往の調査

1) 長原遺跡の位置

長原遺跡は大阪市平野区の東南部に位置し、大阪市平野区长吉長原・長原東・長原西・出戸・川辺・六反に所在する。1974年に地下鉄谷町線延長工事に伴う試掘調査で発見されて以降、長原遺跡調査会・大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター・財団法人大阪市文化財協会によって発掘調査が行われており、後期旧石器時代から近世にかけての複合遺跡であることが明らかにされている。現在、長原遺跡は8つの地区に区分され、それぞれ北・東北・東・東南・中央・南・西・西南地区と呼

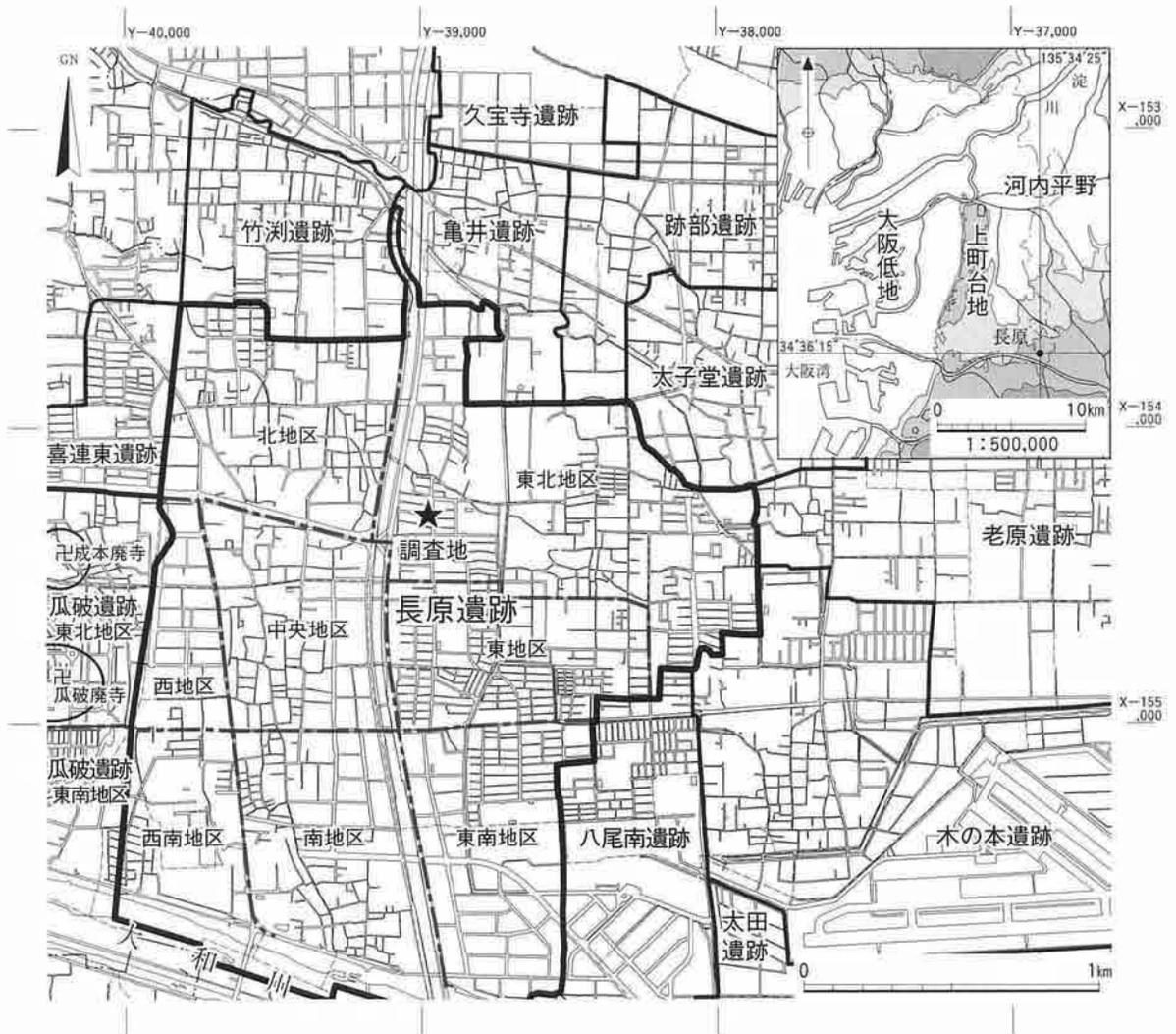


図1 長原遺跡の地区割と周辺の遺跡

称している(図1)。

本書ではNG03-5次調査、NG06-3次調査、NG06-4次調査を報告する。これらの調査地は長吉出戸8丁目に位置し、長原遺跡東北地区に含まれる。東北地区の北と東は八尾市との市境であり、北側で亀井・跡部遺跡、東側で木の本・老原・太子堂遺跡に接する。長原遺跡の中で東北地区は低位段丘層以下がもっとも地中深くに埋没し、その上に沖積層が厚く堆積した地域である。しかし、本調査地は長原遺跡中央・東地区に近く、東北地区の中では低位段丘層が検出される標高は比較的高い。

2) 既往の調査

長原遺跡東北地区では近年、土地区画整理事業に伴う調査が継続して行われ、数多くの成果が得られている。この地区の調査は、1978~85年にかけての飛行場幹線特殊マンホール建設および近畿自動車道松原天理線建設工事に伴い、城山遺跡の名称で実施された。その後、長原遺跡の一部として、大阪市の下水管渠工事、電力管理設工事などに伴う小規模な調査が行われ、1995年度以降、長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴い、毎年発掘調査が継続して実施されている。これと同時に市営住宅の建て替えに伴う発掘調査も東北地区およびその南隣の東地区で行われ、弥生時代中期の墳丘墓、弥生時代後期・古墳時代中期の居住域が見つかった。これらの各調査地での成果について調査年度ごとに触れておきたい(図2・表1)。

1983年度に行われたNG83-1次調査は今回報告するNG06-3次調査地の東隣で実施されたものである[大阪市文化財協会1984a]。この調査では弥生時代前期のピット群、弥生時代中期の住居とみられる方形遺構、古墳時代中期の柱穴を含むピット群などが検出され、付近に弥生・古墳時代の集落が存在することが判明した。

1995年度に行われたNG95-57次調査では、厚い洪水堆積層で埋まった古墳時代後期の敷葉工法によるとみられる土手状遺構や流路、飛鳥時代および平安時代の掘立柱建物などを検出した。

1996年度には、NG95-57次調査地の南側を対象に調査を実施し(NG96-9次)、弥生時代後期から古墳時代初頭の水田、飛鳥時代の掘立柱建物などを検出した。また、大正川の西側ではNG96-40・66次調査が実施され、弥生時代後期の水田、古墳時代後期から飛鳥時代の掘立柱建物、平安時代の遺構群が検出された。とりわけNG96-66次調査地では、ウシの骨を埋納した土壌が見つかり、祭祀の可能性が指摘されている。

1997年度には、長原遺跡東北地区のほぼ中央でNG97-12・13・43・52・56次調査を実施した。NG97-12・52次調査地では、旧石器時代の石器製作址、縄文時代中期以前の流路、縄文時代中期~弥生時代前期の溝・土壌、弥生時代中期の水田、弥生時代後期~古墳時代前期の土壌・ピット、古墳時代中~後期の土手状遺構、掘立柱建物を含む飛鳥時代および平安時代の遺構群などが検出された。旧石器時代の石器製作址からは、14,000点に及ぶ剥片とともに、約50点のナイフ形石器や削器などが出土しており、後期旧石器時代の石器製作技法を検討する上で重要な資料として注目されている。

また、NG97-13・43次調査調査地では東から西へと流れる古墳時代中期の自然流路を検出した。この流路は古墳時代前期の地層を削って流れており、飛鳥時代には堆積が完了していた。この上には

飛鳥時代の溝や土壙が設けられ、居住域となっていた。この流路はNG96-40次調査でも検出されており、古代の集落立地を規定する重要な自然堤防を形成している。

1998年度には、長原遺跡東北地区の東部でNG98-19・20次を実施し、古墳時代中期の流路と盛土遺構を検出した。盛土遺構とその周辺からは祭祀に用いたと考えられる滑石製勾玉・白玉、土製勾玉や多量の土器が出土した。盛土遺構は流路に沿って設けられたと考えられており、古墳時代中期の治水工事の事例として注目される。

1999年度には、都市計画道路敷津長吉線予定地で2箇所を調査を実施し(NG99-19・41次)、NG99-41次調査地では縄文時代早期の土器集中部、縄文時代中期の土壙が、NG99-19次調査地では縄文時代後期の炉跡と土器集積、古墳時代から弥生時代の水田、古代から近世にかけての水田や鋤溝群などを検出した。NG99-41次調査地の現地表下6mの地層で見つかった縄文時代早期の土器は黄島式のもので、大阪市内最古の土器として位置づけられている。

2000年度には、NG00-6次調査を実施した。西隣のNG98-20次調査地で確認されたものと一連の古墳時代中期の盛土のほか、平安時代の流路が検出された。また、遺構に伴うものではないが、重弧文軒平瓦をはじめとする古代の瓦や和同開珎などの銅銭が出土した。

2001年度には、NG01-14次調査を実施した。古墳時代中期および平安時代後期の水田、古墳時代後期から奈良時代にかけての流路が検出され、奈良時代の流路からは人面墨画土器・ミニチュア土器などの祭祀遺物や、ウシ・ウマの骨が大量に出土した。とりわけ大量の人面墨画土器は、共伴する遺物から8世紀前半の年代が与えられており、この祭祀形態の早い段階の資料として重要である。またこの流路はNG02-1・03-5・04-3・05-3次調査地でも検出されており、蛇行しつつ東から西へ流下することが明らかにされている。

2002年度には、NG02-1・4・5・9次調査を実施した。NG02-1次調査地では、弥生時代中期の住居跡・井戸、古墳時代の溝群、飛鳥・奈良時代の流路などが検出された。NG01-14次調査地で見つかった流路の続きから、人面墨画土器の破片や和同開珎が出土している。また、NG02-5次調査地では弥生時代前期から中期初頭、古墳時代前期の水田がそれぞれ見つかった。とりわけ弥生時代前期から中期初頭の水田は、長原遺跡東北地区の中でもっとも古い時期の水田であり、付近のNG97-52次調査地でも検出されていることから、この地域一帯に弥生時代中期初頭の水田が広く分布していたとみられる。

NG02-4次調査ではNG98-20・00-6次調査地で見つかったものと同じ古墳時代中期の盛土遺構が見つかり、多数の土器が出土している。

2003年度には、NG03-9次を実施した。NG97-13・43次調査地で見つかった古墳時代中・後期の流路の続きが検出され、この流路が埋没して形成された自然堤防上に平安時代の井戸などが設けられていた。NG03-5次調査地はNG04-3次調査地の20m北に位置し、弥生時代中期の方形周溝墓2基、古墳時代中期の溝、古墳時代後期の溝群、飛鳥時代から奈良時代前半の流路などが検出された。中でも古墳時代中期の木棺墓からは人骨ではなくウマの歯が出土しており、ウマの埋葬として注目されている[辻美紀2005]。

表1 長原遺跡東北地区におけるおもな調査

調査	おもな内容	文献
城山1mh2	弥生時代前～中期周溝墓状遺構、古墳	大阪文化財センター1980
城山1mh3	弥生時代中期遺物、古墳時代大溝、奈良時代遺物	大阪文化財センター1980
城山B・C区	弥生時代中期方形周溝墓、古墳、飛鳥時代自然流路	大阪文化財センター1986a
城山D・E・F区	弥生時代中・後期集落、古墳時代中期水田・土壇、飛鳥～平安時代溝、中世水田	大阪文化財センター1986b
城山G区	弥生時代土壇群、飛鳥時代～中世水田	大阪文化財センター1986c
NG1	弥生時代中期溝・土壇墓、古墳時代中期溝、飛鳥時代大溝	大阪市文化財協会1978
77年度試掘	奈良時代溝	大阪市教育委員会・難波宮址顕彰会1978
NG12	飛鳥時代杭列・流路・土器溜まり、平安時代土壇	大阪市文化財協会1979a
NG16	弥生～古墳時代中期遺物、弥生時代溝、古墳時代前～中期溝・井戸	大阪市文化財協会1979b
NG17	縄文時代晩期・弥生・古墳時代後期遺物	大阪市文化財協会1979c
NG80-1	TP+7.2mで奈良時代溝、TP+6.9mで砂層(NG8層)	大阪市文化財協会1981a・2006c
NG80-2	弥生・古墳時代遺物	大阪市文化財協会1981b・2006c
NG23	弥生時代中期遺物、古墳	大阪市文化財協会1980・2006c
NG25	縄文時代晩期・弥生時代中期遺物	大阪市文化財協会1980・2006c
NG83-1	弥生時代中期住居、古墳時代中期住居	大阪市文化財協会1984a
NG83-5	TP+4.8mで砂層(NG8層)	大阪市文化財協会1984b・2006c
NG83-22	TP+7.6mで奈良時代包含層	大阪市文化財協会1984c
NG83-43	TP+7.8mで砂層(NG5層)	大阪市文化財協会1984d
NG83-54	TP+8.1mで砂層(NG5層か)	大阪市文化財協会1984e
NG83-63	弥生時代中期集落、弥生時代後期土器棺墓	大阪市文化財協会1984f
NG83-65	弥生時代中期遺物、古墳時代中期土壇状遺構	大阪市文化財協会1984g・2006c
NG84-4	古墳時代中期溝・土壇、飛鳥時代水田、古墳時代砂層なし	大阪市文化財協会1985a・2006c
NG84-18	TP+8.2mで泥質土層	大阪市文化財協会1985b・2006c
NG84-49	TP+7.3mで粗粒砂層(NG5層)	大阪市文化財協会1985c・2006c
NG84-86	弥生時代後期～古墳時代中期遺物、庄内期井戸・建物、古墳時代中期土壇	大阪市文化財協会1985d・2006c
NG85-17	縄文時代晩期遺物	大阪市文化財協会1986・2006c
NG88-6	TP+7.8mで砂層(飛鳥時代初頭の須恵器が出土)、飛鳥時代包含層、奈良時代溝	大阪市文化財協会1989・2006c
NG95-57	TP+8.2mで砂層(古墳時代後期中葉の須恵器が出土)、古墳時代後期溝、平安時代集落	大阪市文化財協会1998a
NG95-77	TP+8.0mで砂層(古墳時代後期前葉の須恵器が出土)、古墳時代後期溝	大阪市文化財協会1996・2006c
NG96-9	弥生時代後期水田、TP+8.2mで砂層、飛鳥・平安時代集落	大阪市文化財協会1999
NG96-40	TP+7.5～8.2mで砂層、飛鳥～平安時代溝	大阪市文化財協会1999
NG96-66	弥生時代中期～庄内期遺物、TP+7.8mで砂層、古墳時代後期～奈良時代集落	大阪市文化財協会1999
NG96-79	旧石器・縄文時代遺物、弥生時代後期～庄内式期遺構、飛鳥・平安時代遺構	大阪市文化財協会1997
NG97-12	旧石器時代遺物集中部、縄文時代遺物、古墳時代中期木製品、飛鳥時代竈屋・掘立柱建物	大阪市文化財協会2000a
NG97-13	古墳時代自然流路、平安時代溝	大阪市文化財協会2000a
NG97-41	縄文時代晩期～弥生時代前期流路、弥生時代中期溝、古墳時代水田、奈良～平安時代遺構	大阪市文化財協会1998b
NG97-43	弥生時代後期溝、古墳時代自然流路、飛鳥時代溝・土壇	大阪市文化財協会2000a
NG97-52	旧石器・縄文時代遺物、古墳時代中期木製品、古墳時代後期土手状遺構、飛鳥時代遺構	大阪市文化財協会2000a
NG97-56	縄文時代後期踏込み跡、平安時代土手状遺構	大阪市文化財協会2000a
NG98-19	古墳時代中期土壇状遺構・土師器・須恵器・玉類・製塩土器	大阪市文化財協会2001
NG98-20	古墳時代中～後期流路、古墳時代中期土壇状遺構・竈穴住居、古代～中世耕地	大阪市文化財協会2001
TS97-7	平安時代後期井戸、土壇	八尾市文化財調査研究会2000a
TS98-8	奈良～平安時代初期の小穴、中世井戸	八尾市文化財調査研究会2000b
NG99-15	縄文時代石器集中部、弥生中～後期・古墳中期集落、飛鳥時代耕地	大阪市文化財協会2002b
NG99-19	縄文時代後期土壇、弥生～古墳時代前期水田、平安時代～近世耕地	大阪市文化財協会2002a
NG99-41	後期旧石器時代遺物、縄文時代早～前期住居址、古墳時代前期水田、平安時代流路・土手	大阪市文化財協会2002a
NG00-6	古墳時代中期盛土遺構、古代溝、平安時代流路	大阪市文化財協会2003a
NG00-30	奈良時代ピット、平安時代土壇・流路	大阪市文化財協会2004a
NG01-14	古墳時代前期溝、古墳時代中期水田・溝群、飛鳥～奈良時代流路(墨画土器・獣骨出土)	大阪市文化財協会2004b
NG01-25	中世水田	大阪市文化財協会2004a
NG02-1	弥生時代中期集落、古墳時代高状遺構、奈良時代流路	大阪市文化財協会2005a
NG02-4	古墳時代盛土、中世水田	大阪市文化財協会2004a
NG02-5	縄文時代中～後期土器、弥生時代前～中期溝・水田、古墳時代前期水田	大阪市文化財協会2005a
NG02-9	旧石器時代遺物、平安時代集落	大阪市文化財協会2003b
NG03-5	弥生時代中期方形周溝墓、古墳時代中期ウマの埋葬、古墳時代後期溝群	本書
NG03-9	弥生時代後期溝、古墳時代中～後期流路、平安時代集落	大阪市文化財協会2006a
NG04-3	弥生時代土壇・溝、古墳時代溝、飛鳥時代溝、奈良時代流路、平安時代溝、中～近世水田・島田	大阪市文化財協会2007a
NG05-3	古代流路、古墳時代溝、弥生時代盛土・溝	大阪市文化財協会2006b
NG06-1	平安時代耕作溝、近世水田	大阪市文化財協会2007b
NG06-2	中世流路、近世耕作溝	大阪市文化財協会2007c
NG06-3	弥生時代後中溝、古墳時代中期竈穴建物・総柱建物・高まり	本書
NG06-4	弥生時代後期竈穴建物、古墳時代中期竈穴建物・ピット・土壇	本書

2004年度には、NG04-3次を実施した。この調査地はNG02-1次調査地の北隣であり、NG02-1次調査地で検出された古墳時代中期の畠、弥生時代中期の居住域を検出した。また、NG01-14次調査地から続くものとみられる奈良～飛鳥時代の流路を検出し、流路内堆積から人面墨画土器が出土した。さらに、この流路の傍に設けられた溝から「米五束」と書かれた木簡が出土した。

2005年度には、NG05-3次を実施した。この調査地においてもNG01-14次調査地から続く奈良～飛鳥時代の流路を検出した。流路によって下位層の大半が削られていたが、弥生土器や縄文時代の土器などが多数出土した。

2006年度にはNG06-1～4次調査を実施した。長原遺跡東北地区東側に位置するNG06-1・2次調査では中世および近世の耕作溝が多数検出された。本書で報告するNG06-3・4次調査地では弥生時代中期の方形周溝墓のものとみられる溝、弥生時代後期の竪穴建物、古墳時代中期の竪穴建物、総柱建物などが見つかっている。

第2節 発掘調査の経過と概要

NG03-5次調査地に先立って、2003年4月9日に行われた試掘調査では、古墳時代から江戸時代までの地層が良好な状態で残存することがわかり、当該期の遺構・遺物の検出が期待された。

本調査に当っては、市営住宅2棟の建設予定位置にそれぞれ調査区を設定し、東西に長い方をⅠ区、南北に長い方をⅡ区と呼称することにした。調査地内に掘削土を仮置きする必要があるため、まずⅠ区の調査を行い、終了次第、Ⅰ区の埋戻しを進めつつⅡ区の調査にかかることになった。2003年5月26日から調査地周辺の整備に取りかかり、同28日から重機を用いて奈良時代の河成層まで掘削を進めた。それ以下の地層は人力で掘下げ、地表下3.5mまでの平面調査をするとともに、部分的に深掘りを行うことで地表下6mまでの地層の堆積状況を確認した。途中、弥生時代の方形周溝墓がⅠ区とⅡ区との境にかかることがわかり、全容を把握するため、原因者との協議の上、Ⅰ区とⅡ区をつなぐ形で調査区を拡張することになった。発掘作業は10月12日に終了し、同18日に埋戻し・鋼板堀等の復旧作業を含めたすべての現場作業を完了した。

なお、7月29日と10月1日に基準点測量を行い、TP値による水準値と世界測地系に基づく座標値を得た。また、9月27日には周辺住民への現地説明会を実施した。

NG06-3次調査地は建設が予定されている建物が南北2棟に分かれるため、その敷地に当る南北2箇所調査区を設け、2006年12月27日から重機による掘削を開始した。奈良時代の湿地性堆積層であるNG6層を除去後、人力による平面調査を開始した。2007年2月15日に基準点測量を、3月14日に空中写真の撮影を行った。写真・図面の記録を完了させた後、北区は同20日から埋戻しを開始した。南区は遺構が多数検出されたため、写真・図面の記録を継続し、それらが完了した3月28日から埋戻しに着手して、同31日に埋戻しを終えた。

NG06-4次調査は2006年12月25日から開始した。周辺の調査結果から、弥生～古墳時代の遺物包含層が現地地表下2～3mに存在することが推定されたため、安全確保のために壁面に一定の傾斜を設けながら、重機によって古墳時代の包含層付近まで掘下げた。以下は人力で掘削をしたが、予測した通り、調査区では同じ検出面で弥生時代から古墳時代の竪穴住居・柱穴・土壌等の遺構が多数検出された。そこで任意分層発掘によって徐々に掘下げを行いながら各遺構の精査を行い、新たに検出された遺構を追加しながら全面の実測作業・写真撮影等を行った。

2007年3月14日には調査区の空中写真測量を行い、さらに遺構掘削や実測作業を継続した。調査

表2 本書で報告する調査

住宅名	調査回数	調査地番	面積	調査期間	担当者
市営長吉出戸南住宅住宅1号館	NG03-5	平野区長吉出戸8丁目	1,180㎡	2003年5月26日～2005年10月18日	辻 美紀
市営長吉出戸南住宅住宅2号館	NG06-3	平野区長吉出戸8丁目	1,361㎡	2006年12月25日～2007年3月31日	杉本厚典 松尾信裕
市営長吉出戸南住宅住宅3号館	NG06-4	平野区長吉出戸8丁目	826㎡	2006年12月25日～2007年3月31日	絹川一徳

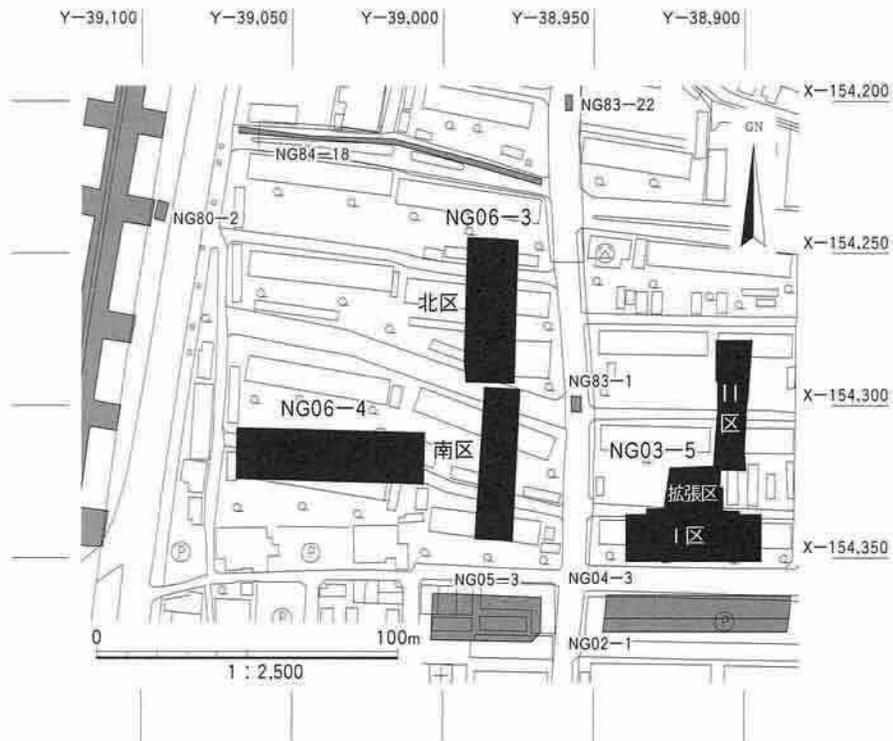


図3 NG03-5、06-3・4次調査地の位置と地区割

の終盤には調査地の埋戻し作業と並行しながら遺構検出・精査・記録等の発掘作業を進め、3月31日にすべての調査を終了した。

なお、3月17日にNG06-3・4次調査地において一般市民を対象とした現地説明会を開催した。事前に新聞報道もされたこともあり、参加人数は450名に上った。

第Ⅱ章 調査の結果

第1節 NG03-5次調査

1)基本層序

深掘りトレンチを含め現地表下6mまでの地層を観察した(図5、表3、図版1)。今回報告するNG03-5・06-3・4次調査地の中でNG03-5次調査地は最も東に位置し、長原遺跡東北地区と堆積環境が似ているため、長原遺跡標準層序(以下、NG層序と略述)とともに長原遺跡東北地区基本層序(以下、RK層序と略述)との対応関係も記した。

第0層：現代の盛土層である。現地表から約1m下、TP+9.2mまで及ぶ。

第1層：近現代の作土層でおもに灰オリーブ色シルト質中粒砂よりなる。

第2層：おもに近世の作土層で、a～e層に細分された。細礫混りオリーブ色シルト質中粒砂よりなり、それぞれの下面で耕作による起伏が見られた。調査区の南側へ向って層厚を増していた。

第3～5層は平安～鎌倉時代の地層で、水成層と作土層の互層からなる。

第3層：第4層を耕起した作土層で、上位に比べ下位は砂礫を多く含んでいた。

第4層：暗灰黄色から暗オリーブ色シルト～細礫で構成され、層厚はⅡ区の中央付近で最も厚く0.30mであった。ラミナが顕著な氾濫性堆積層である。周辺の調査で広く検出されているNG4A層に相当する。

第5層：シルト～シルト質粘土を主体とし、a～cの3層に細分される。第5a層は作土層で、上面で畦畔と踏込みを確認した。第5b・c層は湿地性堆積層であり、下位の第5c層には比較的多く細粒砂が含まれていた。

第6層：自然流路NR501の上位に形成された作土層である。暗オリーブ色粘土質シルト～シルト質中粒砂で構成されていた。

第7層：上位の第7a層、下位の第7b層に二分される。第7b層は粗粒の堆積物で構成され、NR501を埋めていた。もう1つは第7a層で、第7b層の上方および外側に細粒化しながら連続して分布していた。本層中から飛鳥～奈良時代の須恵器・土師器などの破片が出土した。

第8層：調査地全体に分布する湿地性堆積層である。最上位の第8a層は植物の根痕が顕著であり、水成堆積の構造が不明瞭であるため部分的に作土化されたものと判断した。第8c層は植物遺体のラミ

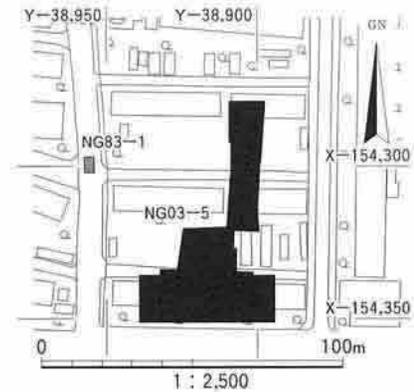


図4 調査地位置図

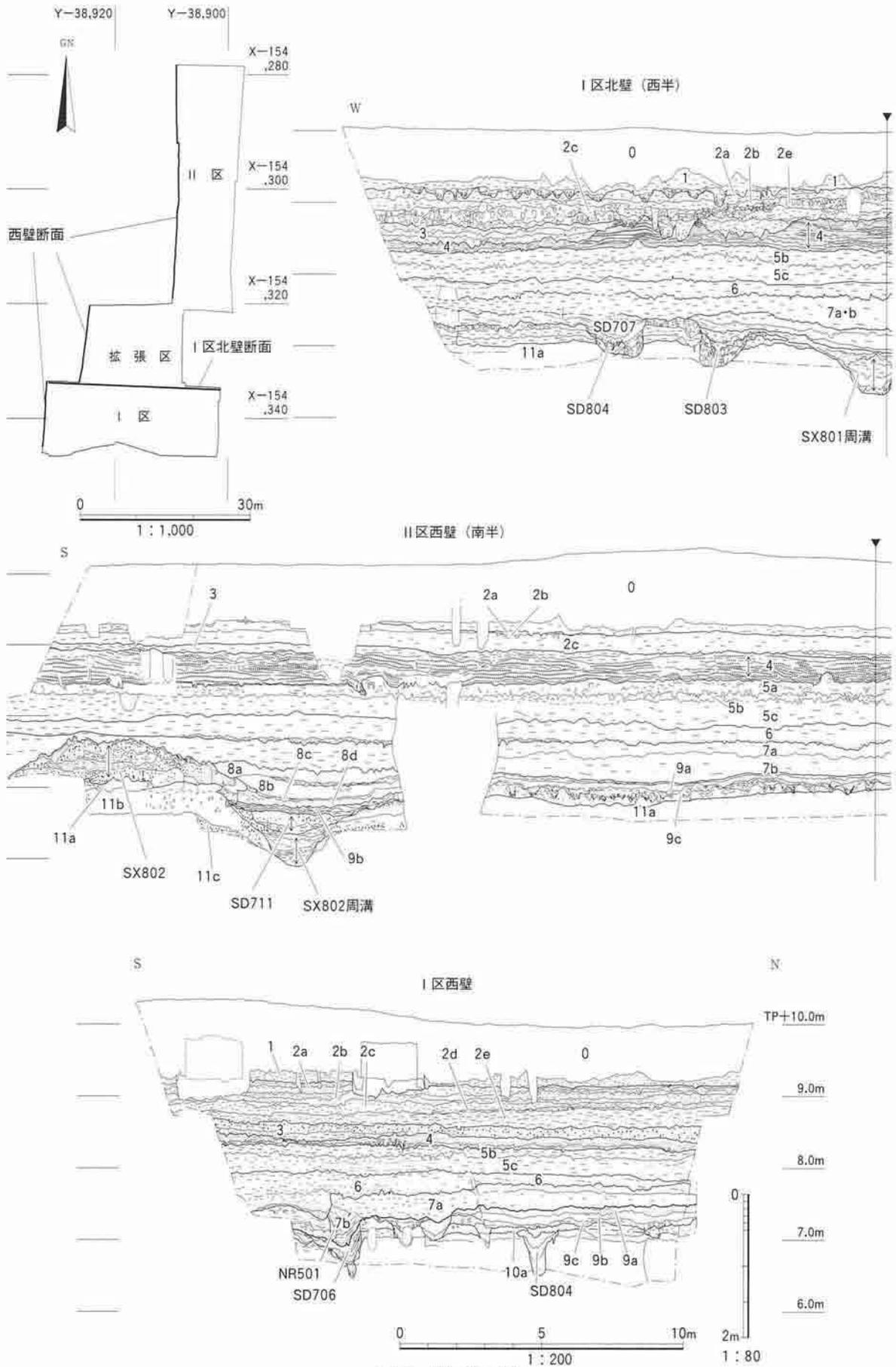
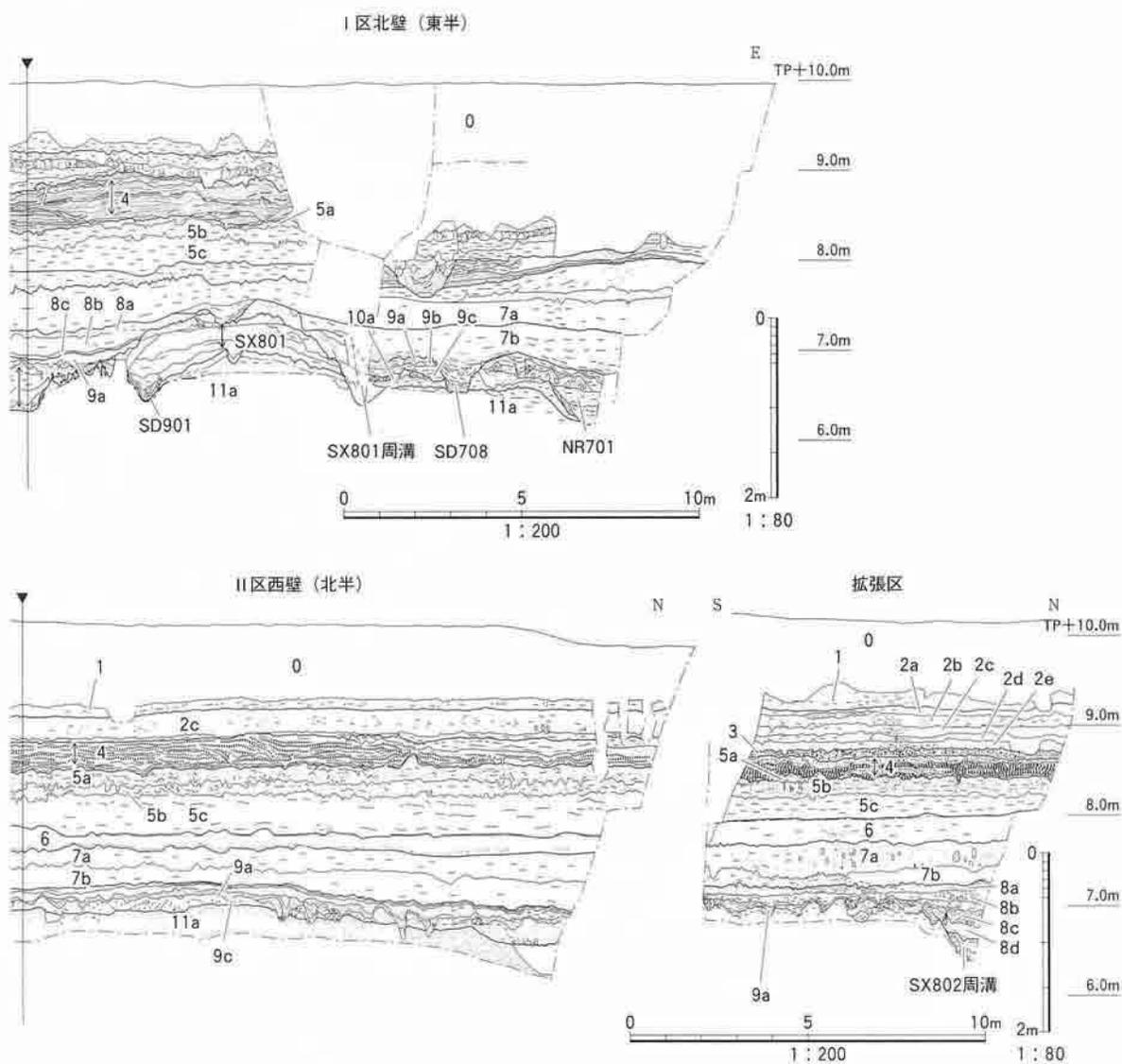


图5 地層断面图



ナが顕著で、調査区全体に拡がることから鍵層の1つとして捉えられる。第8d層は非常に均質なシルトからなる。本層を掘下げると弥生～古墳時代の遺構面が検出された。

第9層：畠遺構に伴う作土(第9a・c層)とその間に狭在する砂礫を主体とした水成層(第9b層)からなる。第9b層はSD708・709・711の埋土でもある。

第10層：I区の北西部で確認できた水成層で、弥生時代から古墳時代中期の遺物を含む。

第11～15層は位置を図示していないがI区中央とII区南部に深掘りトレンチを設定して確認した地層である。いずれの地層も遺構・遺物が認められず、人為的な作用はほとんど及んでいなかった。

第11層：全層厚が1m以上に及ぶ弥生時代前期以前に形成された地層で、湿地性堆積層の第11c層、河川の氾濫による第11b層、古土壌である第11a層に区分された。本調査地では第11a層の上面に弥生時代の遺構が設けられていた。

第II章 調査の結果

第12・13層：いずれも上方に細粒化する水成層で、両層とも上部は暗色化していた。第13層の下部には火山ガラスが含まれていた。

第14・15層：層相からNG14・15層と判断した。第15層はI区の中央深掘りトレンチではTP+5.2m付近で検出できたが、II区では地中深くに埋もれており確認することができなかった。

2) 弥生時代中期の遺構と遺物

本調査地で検出したおもな遺構は図6に示した。以下、各時代順に報告する。弥生時代中期の遺構としてSD901、方形周溝墓SX801・802、溝SD803・804を検出した。SD901は方形周溝墓SX801の下で検出したが、地層から弥生時代中期のものと思われる。SX801・802は南北に並んで設けられており、両者を接続する小溝も認められたため、同時併存したものと判断される。

i) 方形周溝墓

SX801(図6～10・13、原色図版1、図版3・4・20～22) 南北が約13.0m、東西が9.0mのやや南北に長い方形プランの墳丘である。古墳時代の溝や畠状遺構により墳丘は部分的に削られており、

表3 NG03-5次調査層序表

↑：上面遺構、↓：下面遺構

NG03-5層序	岩相	層厚	特徴	遺構	遺物	時代	長原層序	六反層序
第0層		80~100	現代盛土・基礎			現代	NG0	RK0
第1層	灰~灰オリーブ色シルト質中粒砂	≤15	近現代作土	↓動溝		近・現代	NG1	RK1
第2層	a 細礫混り灰オリーブ色シルト質中粒砂	≤20	作土(下位砂ラミナ状)	↓動溝	近世陶磁器	近世	NG2	RK2
	b 細礫混り灰オリーブ~オリーブ色シルト質中粒砂	≤20	作土(下位砂ラミナ状)	↓動溝				
	c オリーブ色細粒砂質シルト	≤18	作土	↓動溝				
	d 灰色砂質シルト~細粒砂	≤8	水成					
	e 細礫混り灰オリーブ色粘土質シルト	≤30	作土	↓動溝				
第3層	にぶい黄褐~灰オリーブ色中~粗粒砂質シルト ~シルト質細礫混り	≤25	作土	↓動溝	土師器	中世	NG4	RK4
第4層	帯灰黄~灰オリーブ色シルト~砂礫	15~30	氾濫性堆積層		土師器・瓦器	平安	NG4A	RK4B
第5層	a 暗灰黄~オリーブ褐色極細粒砂~粘土質シルト	10~20	作土	↑畦畔・水田	土師器	平安	NG4B	RK4B
	b 灰~暗オリーブ灰色粘土質シルト	≤30	湿地性堆積層					
	c 細粒砂混りオリーブ灰色粘土質シルト	≤30	湿地性堆積層					
第6層	暗オリーブ灰色粘土質シルト~シルト質中粒砂	≤40	作土	↓踏込み			[NG4C]	(RK4C)
第7層	a 灰~オリーブ黒色シルト~砂礫	≤90	氾濫性堆積層	↓NR501	須恵器・土師器 (平城宮I~II主体)	奈良	NG5~6A	RK5
	b オリーブ灰色細粒砂~シルト	≤10						
第8層	a 細~極細粒砂混り暗オリーブ色粘土質シルト	≤20	作土?	↓踏込み・植物生痕	須恵器・土師器 (TK209型式)	飛鳥	NG6B~7A	RK6
	b 灰色シルト質粘土	≤30	湿地性堆積層					
	c 灰~オリーブ黒色シルト質粘土~細粒砂	≤10	湿地性堆積層	植物ラミナ発達				
	d 極細粒砂混り暗緑灰~暗オリーブ灰色粘土質シルト	≤15	湿地性堆積層					
第9層	a オリーブ黒色シルト質中粒~細粒砂	≤15	作土	↓畠状遺構	須恵器・土師器	古墳後期?	NG7B?	RK7B?
	b 灰色中粒砂~砂礫	≤30	氾濫性堆積層?	↓SD708-711				
	c 砂礫混りオリーブ黒色粘土質シルト	≤8	作土	↓畠状遺構				
第10層	a 極細粒砂混り暗オリーブ灰色粘土質シルト	≤20	盛土?	↑SD703~707・SK702	須恵器・韓式系 ・土師器(6留前~)	古墳(中期)	NG7Bii	RK7B
	b 極細粒砂混り暗緑灰~オリーブ灰色粘土質シルト	≤15	水成					
	c 砂礫混りオリーブ黒色粘土質シルト	≤15	盛土?					
	d 砂混り黒~暗緑灰色粘土質シルト~シルト質粘土	≤40	水成					
第11層	a オリーブ黒~黒色粘土質シルト(II区:~砂礫)	≤30	暗色化・古土塊	↑NR701・SX801・802 ・SD803~805・SD901	弥生土器	(弥生中~後期) ~弥生(前期)	NG8B~ NG8C	RK9B~ RK9C
	b 暗オリーブ灰~オリーブ黒色シルト質細粒砂~礫	≤150	氾濫性堆積層					
	c 細粒砂混り(暗)オリーブ灰色粘土質シルト	≤30	植物ラミナ発達					
第12層	a 細粒砂混り黒褐色粘土質シルト	≤15	暗色化			縄文晩~弥生前	NG8C~9	RK9C~10
	b 黄灰色砂礫	≤60	砂礫ラミナ状					
第13層	a 灰~黒褐色シルト~砂礫	30~40	暗色化	植物生痕化石 (火山ガラス)			NG12	RK12
	b 暗灰黄色シルト質細粒砂~シルト混り砂礫	10						
第14層	シルト混り暗緑灰色砂礫	≥20					NG14	RK14
第15層	灰色粘土質シルト	≥10					NG15	RK15

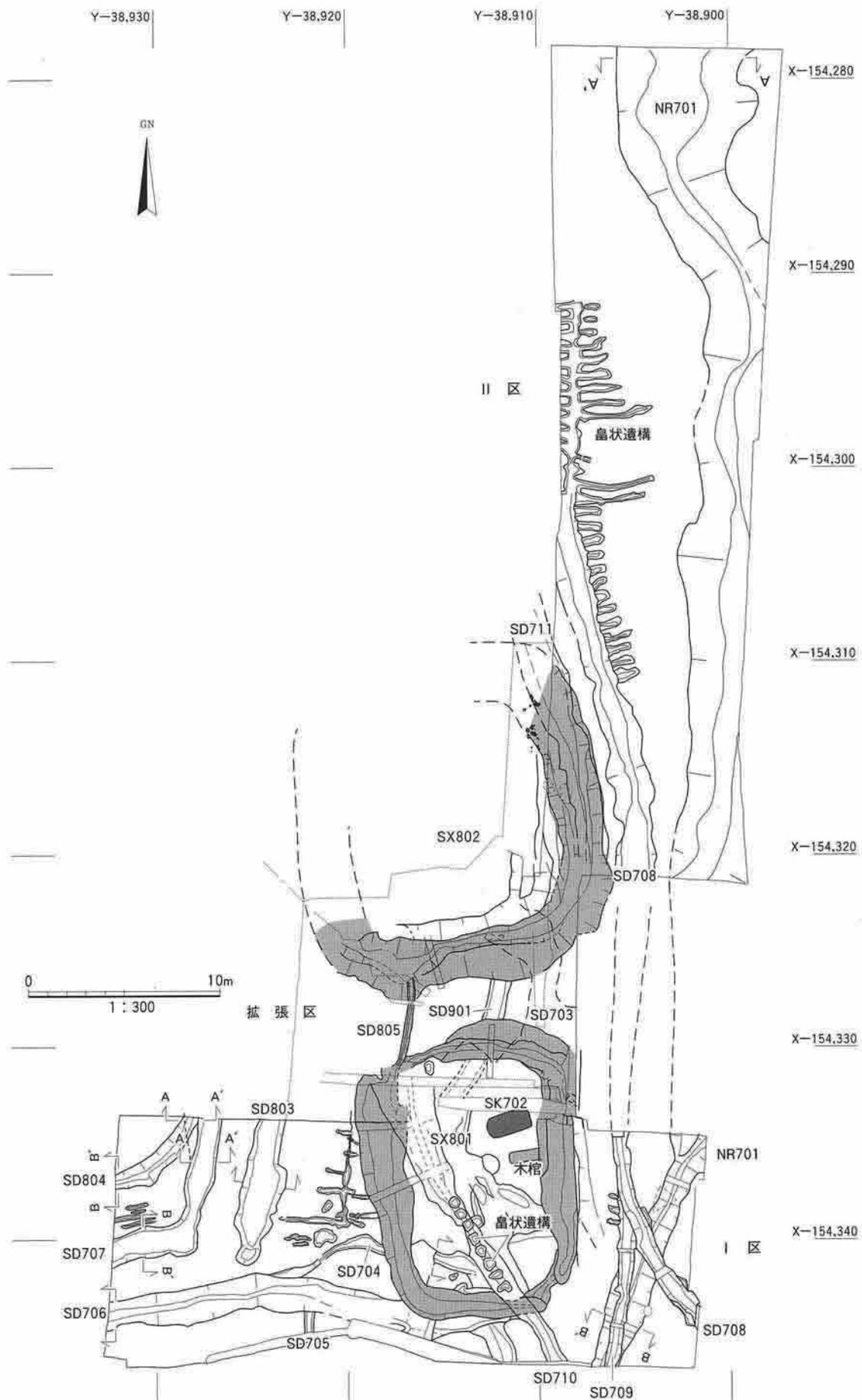


図6 おもな検出遺構

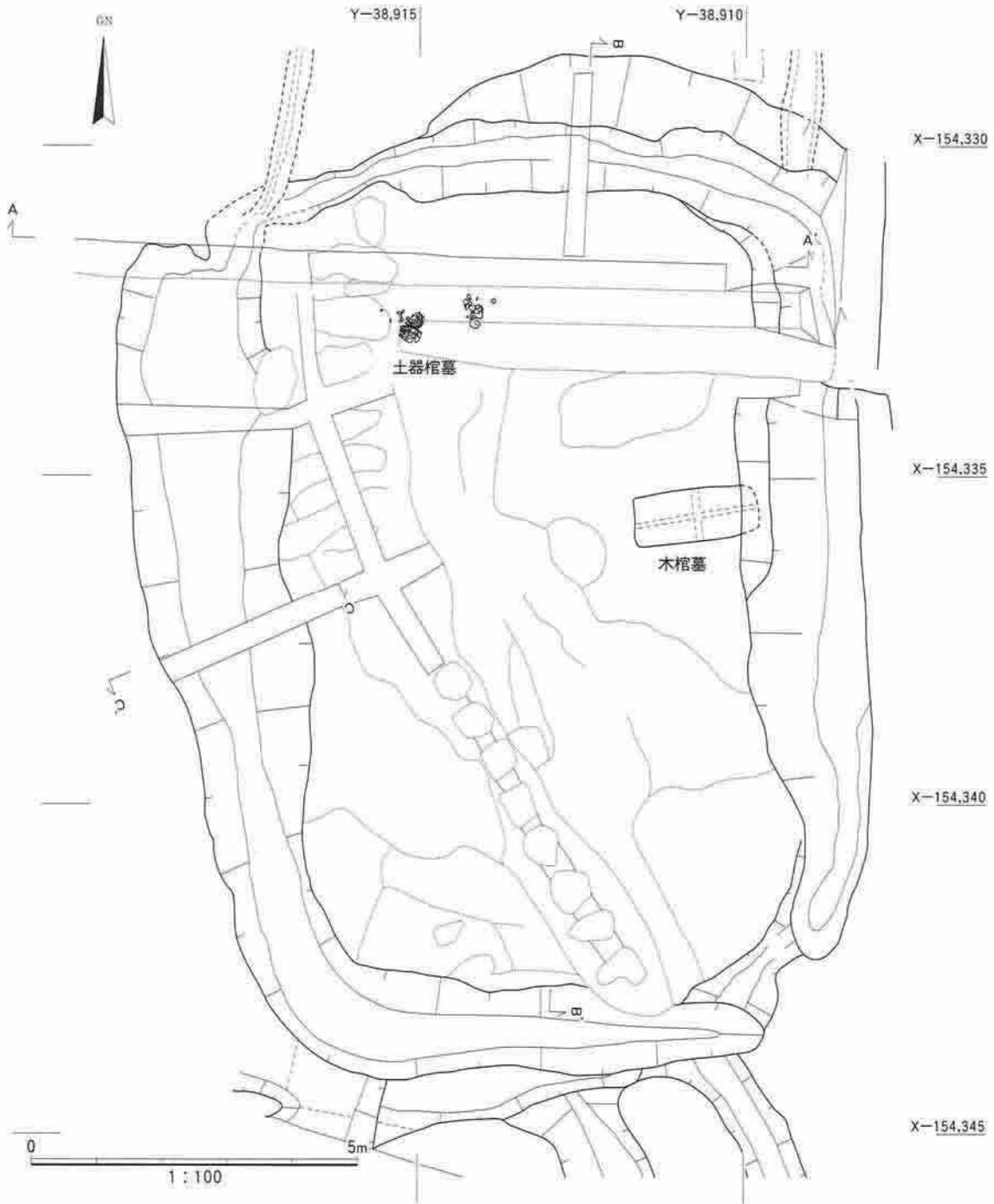


図7 SX801平面図

周溝底からの高さは最も残りのよい北東側で0.7mであった。周溝は最大幅が約1.0~2.0m、深さ0.6mで、北西と南東のコーナーが他の部分より浅く、幅も狭くなっていた。周溝の中からは完形に近い弥生土器が多数出土した。器形には壺・高杯・鉢・台付鉢・甕・蓋があり、時期はいずれも畿内第IV様式(河内IV-3)に位置づけられる(図13)。

主体部は木棺墓の底板と考えられる痕跡と、土器棺に使用されたとみられる大型の鉢を確認した。木棺墓は墳丘主軸に直交して東西方向に設けられており、長さ1.94m、幅0.74m、深さ0.10mで、木質部分はオリーブ黒色細礫混りシルト~シルト質中粒砂に置き替わっていた。

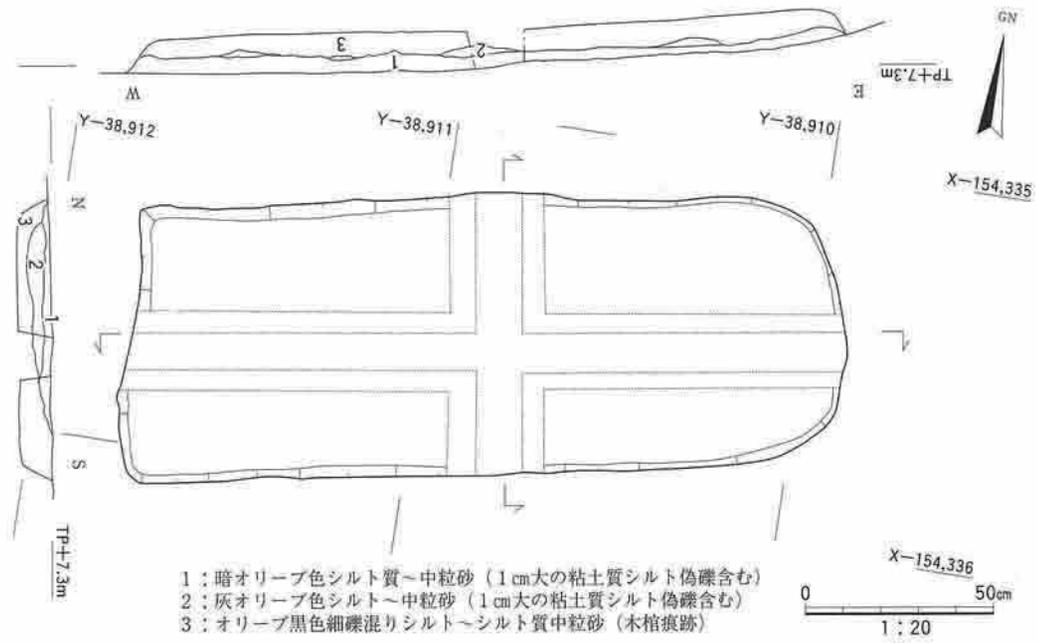


図8 SX801木棺墓平面図・断面図

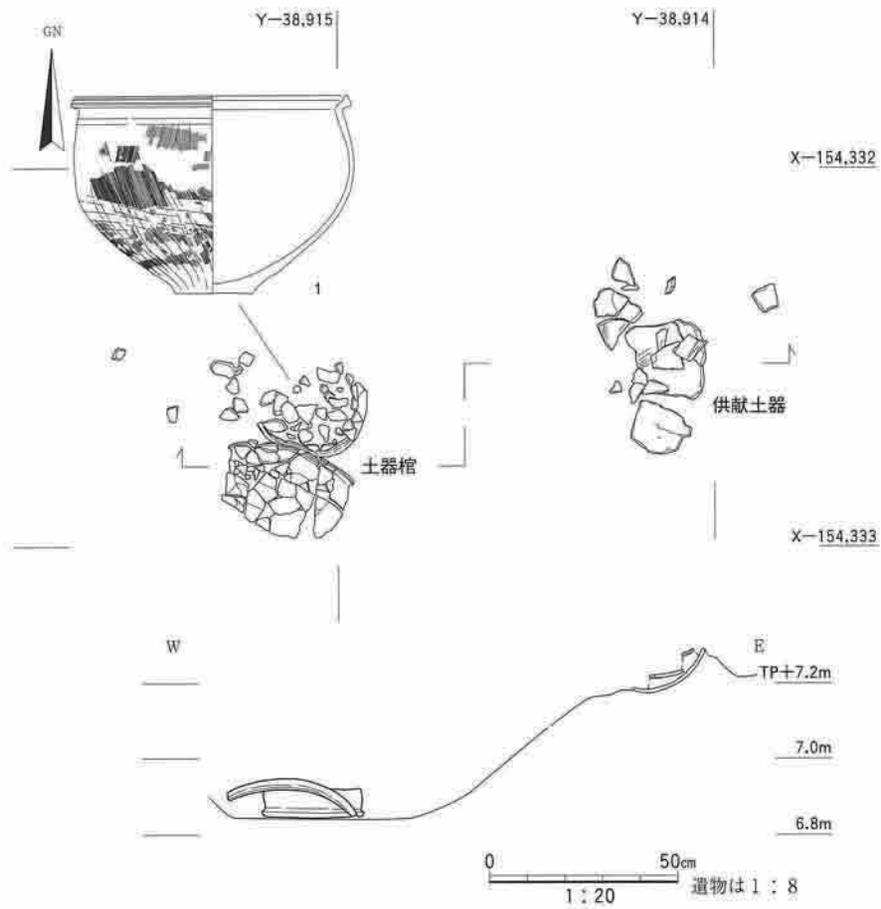


図9 SX801土器棺墓平面図・断面図

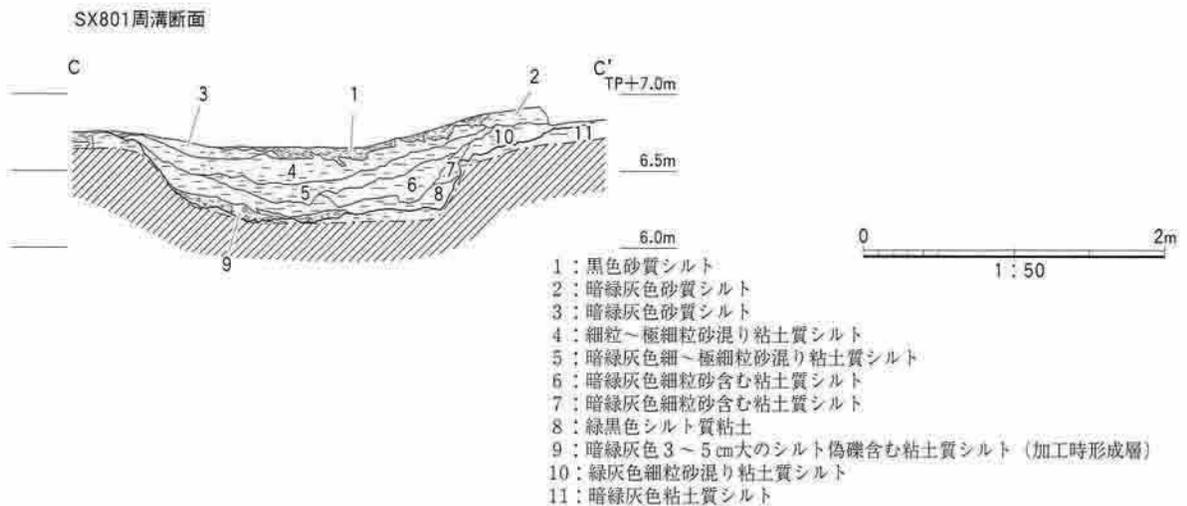
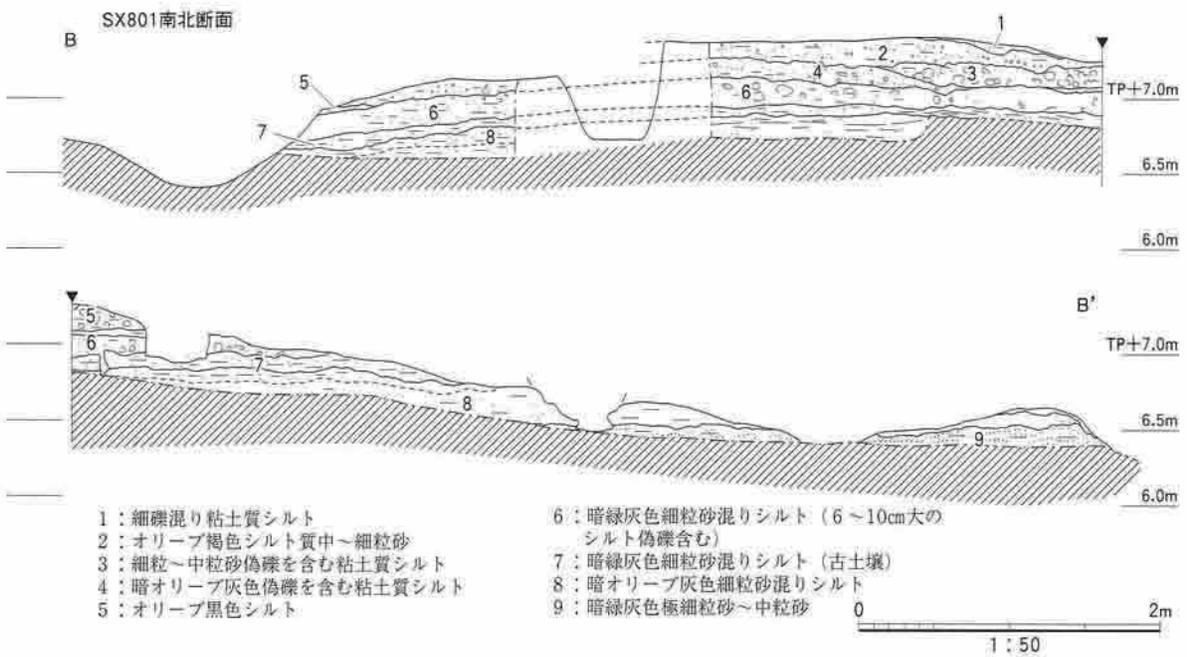
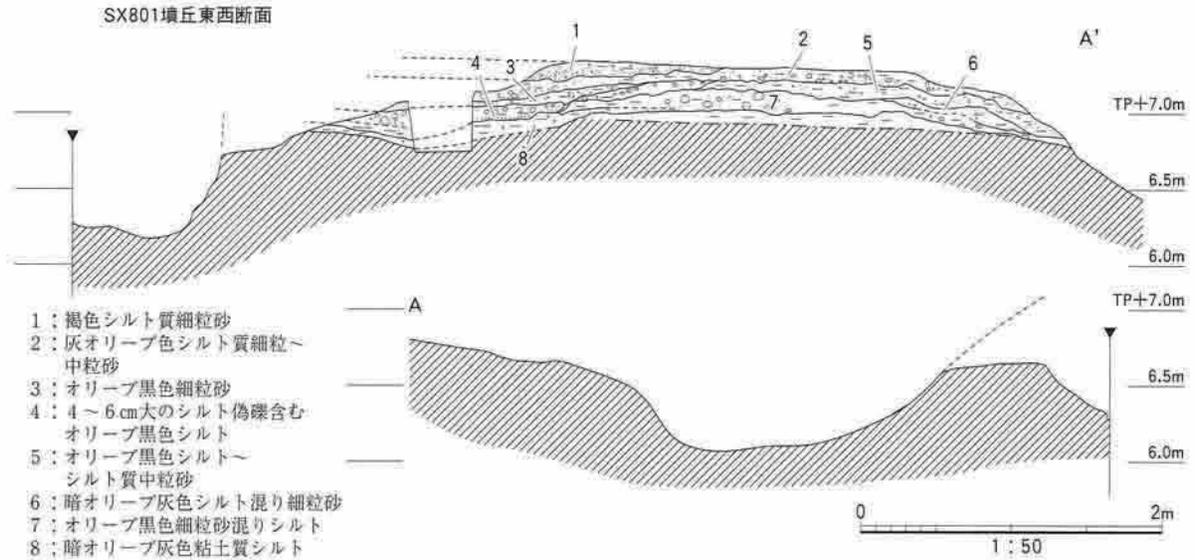


図10 SX801墳丘断面図

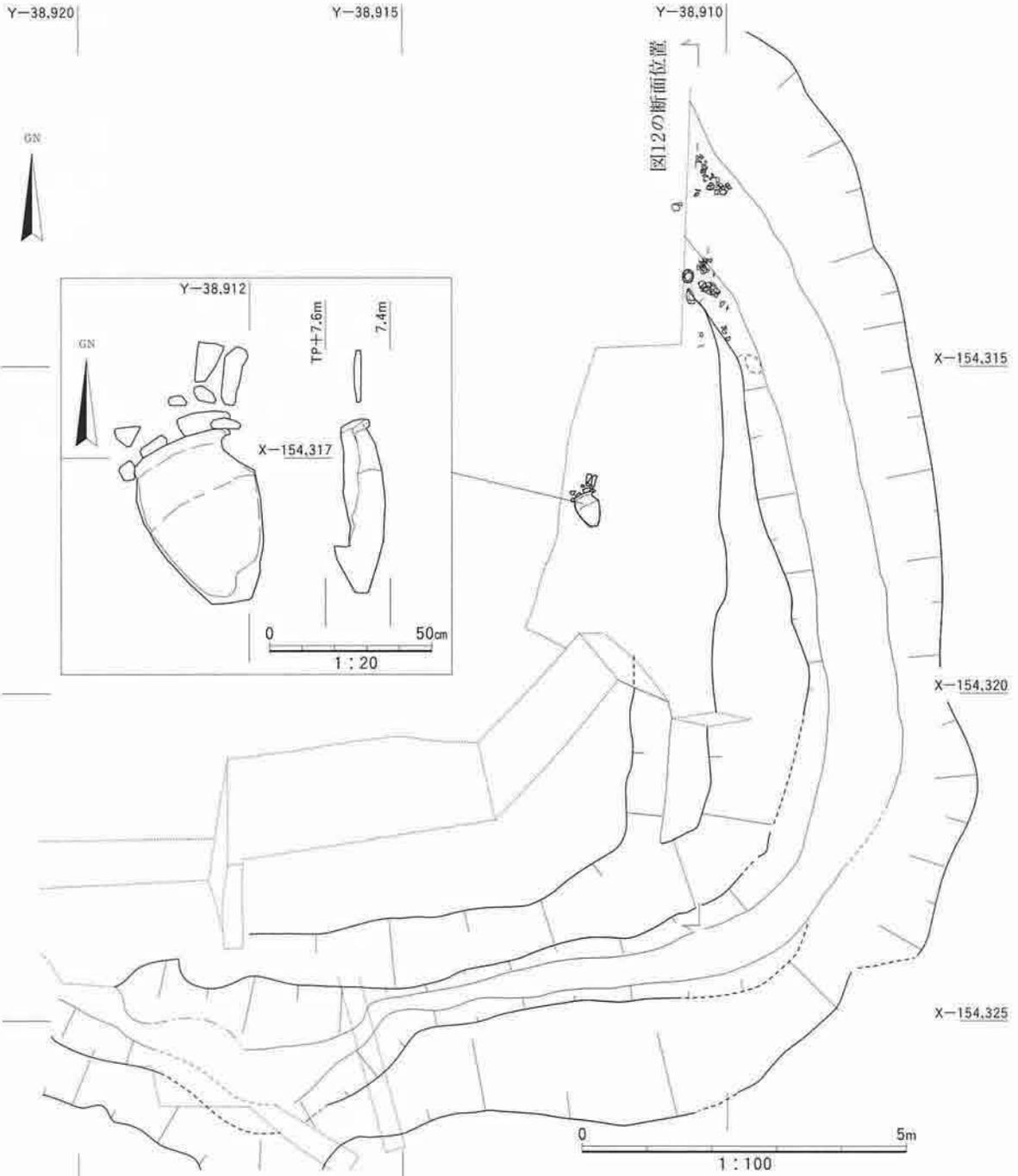
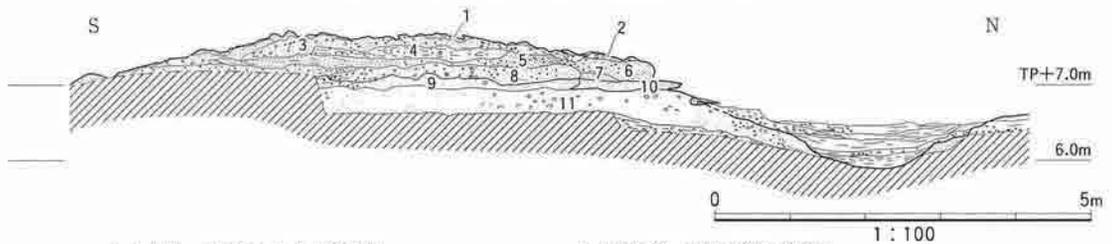


図11 SX802およびSX802土器棺平面図



- | | |
|--|--------------------------|
| 1 : オリーブ黒色シルト質細粒砂 | 6 : 黒色礫～中粒砂混り細粒砂 |
| 2 : 黒色又はオリーブ黒色中粒砂混り粘土質シルト
(粘土・ブロック含む) | 7 : オリーブ黒色シルト混り細粒砂 |
| 3 : 黒褐色礫混り細粒砂～中粒砂 | 8 : オリーブ黒色礫～中粒砂含むシルト質細粒砂 |
| 4 : オリーブ黒色礫混り細粒砂～中粒砂 | 9 : 灰色～オリーブ黒色中粒砂含む細粒砂 |
| 5 : オリーブ黒色シルト質細粒砂 | 10 : 黒色～オリーブ黒色中粒砂含む細粒砂 |
| | 11 : オリーブ黒色礫含む粘土質細粒砂～中粒砂 |

図12 SX802墳丘断面図

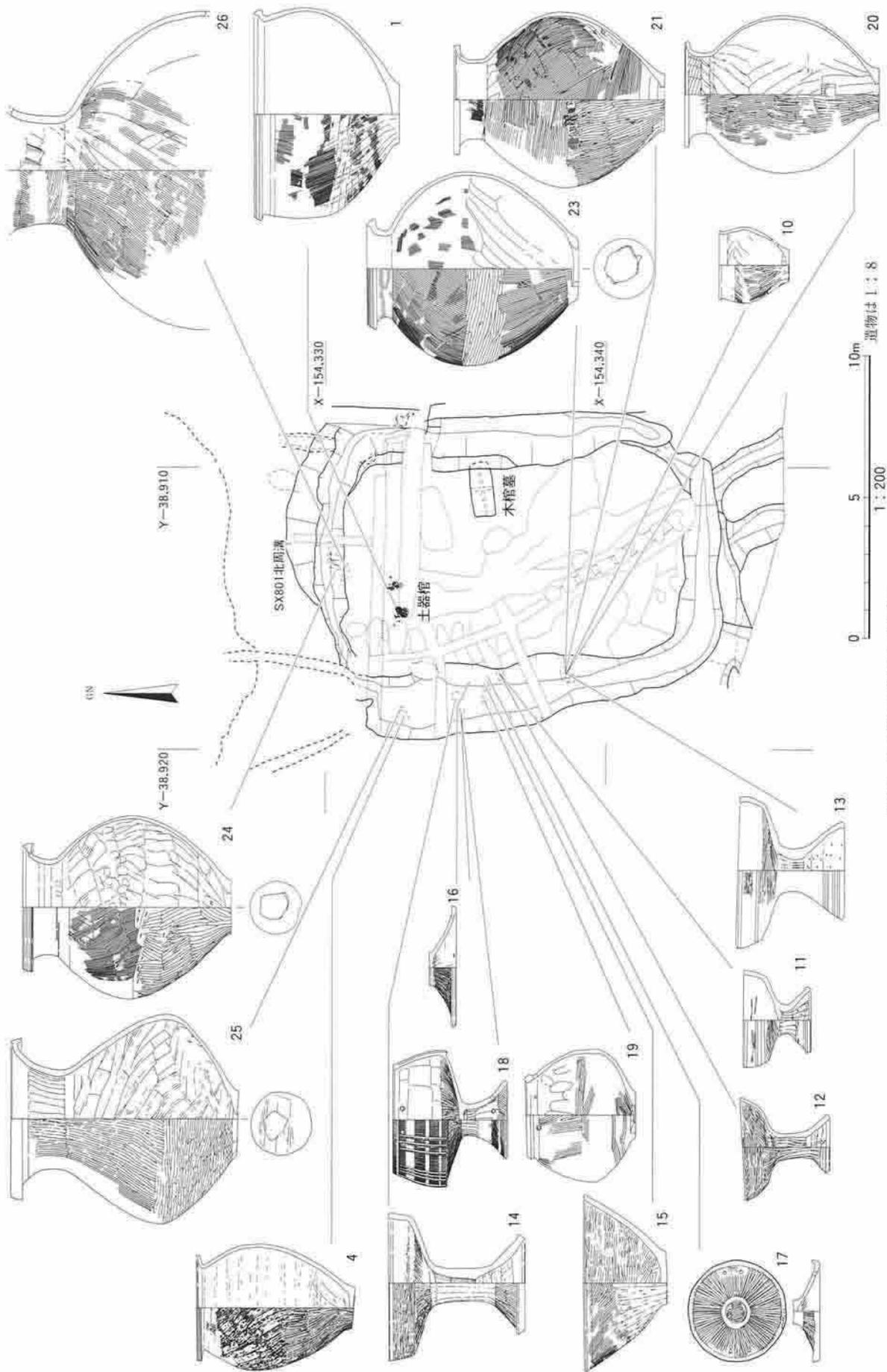


圖13 SX801土器出土狀況圖

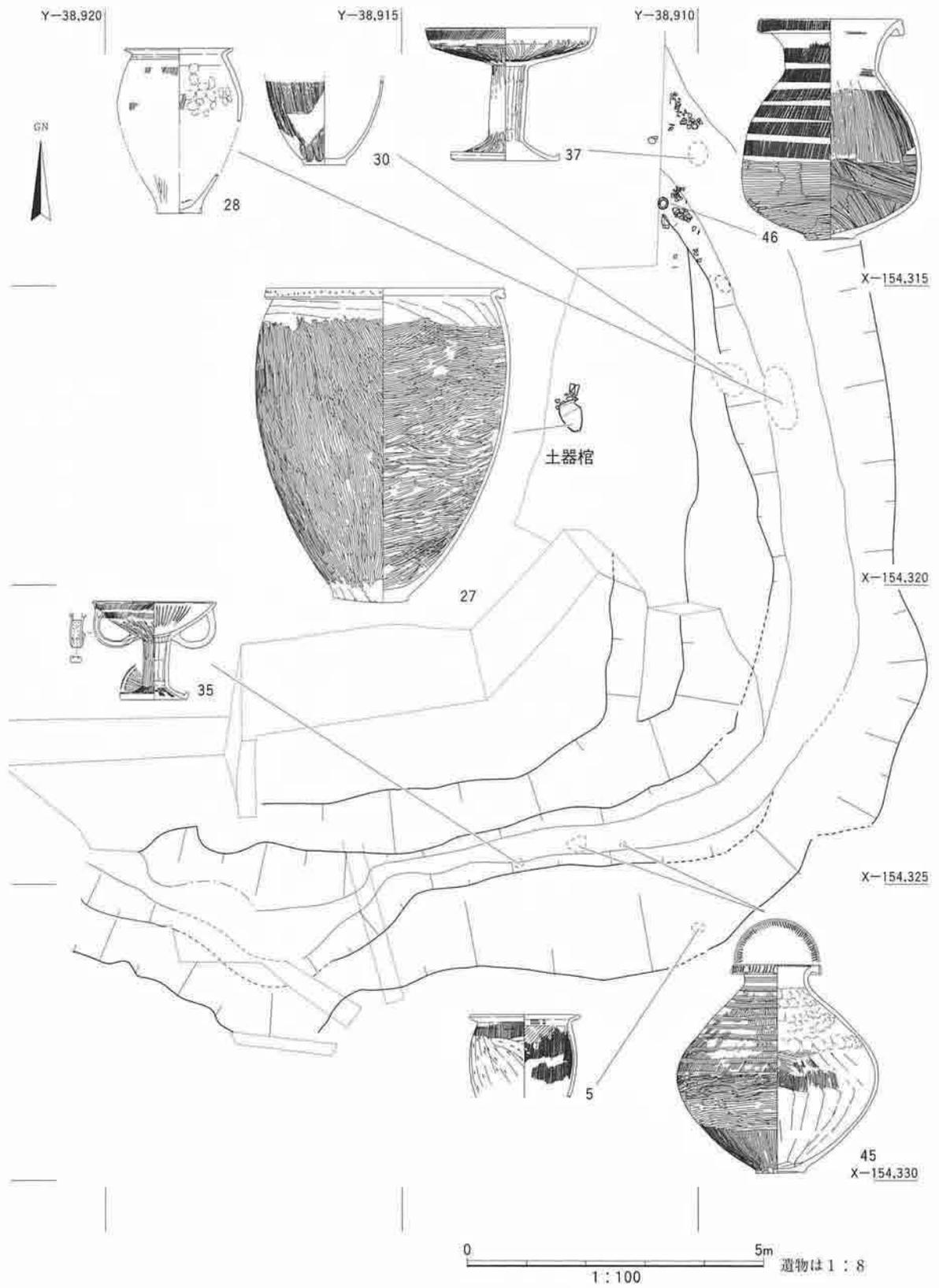


図14 SX802土器出土状況図

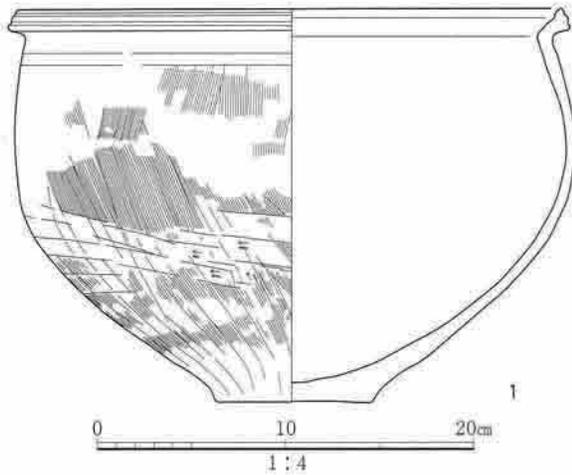


図15 SX801土器棺

土器棺墓は鉢を伏せた状態で出土したものである。墓壙の平面プランは不明であるが、深さ0.40mであった。また、この土器棺の東0.60mの場所で、生駒西麓産の広口壺底部が出土した。残りが悪く図示しなかったが、土器棺の墓壙の肩に立てられた供献土器である可能性が高い。

SX802(図6・12・14、原色図版1、図版4・22~24) SX802は大部分が調査区外にあり、かろうじて検出できた3つのコーナーから、南北約11.0m、東西約10.0mの墳丘が復元できた。

SX801に比べて墳丘の残りはよく、周溝底からの高さは1.5m以上に達する。

調査範囲内では土器棺1基を確認した。土器棺は生駒西麓産の大型甕を用いたもので、口縁部を北に向け、ほぼ水平な状態で出土した。墓壙の規模や形状は不明である。

SX802の東側周溝から南東コーナーにかけて、弥生土器がまとまって見つかった。時期はSX801とほぼ併行する。

SX801・802における遺物の出土状況(図9・11・13・14、図版3・4)

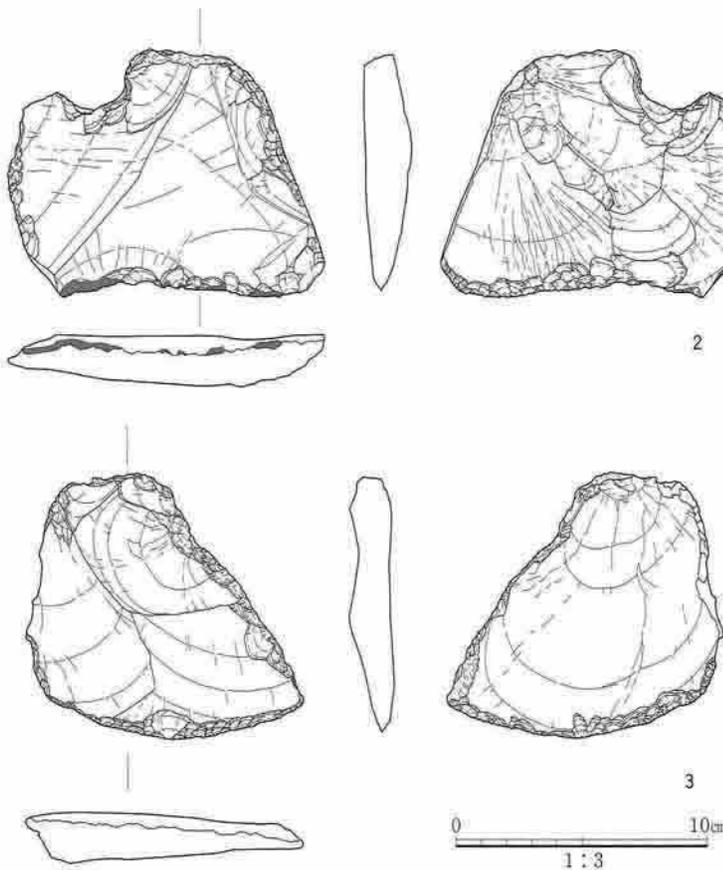


図16 SX801墳丘南西コーナー出土遺物

遺物はSX801の墳丘上から1、墳丘南西コーナーから2・3、周溝から4~27がそれぞれ出土した。

また、SX802の墳丘上から27、周溝からは28~48が出土した。出土した遺物の中で、48は弥生時代後期前半に属し、埋葬時の祭祀に伴うものというよりも、周溝の埋没過程で混入したものとみられる。47も弥生時代中期の土器であるが、他の土器に比べやや新しいものと判断される。これらの周溝から出土した土器はいずれも完形に近い状態であった。次に各遺構ごとに出土した遺物の記述を行う。

SX801から出土した遺物(図15~20、原色図版1、図版20~22)

1は土器棺に使用された大型鉢

である。非生駒西麓産の胎土である。口縁端部を上方に拡張し、外面に2条の凹線文を入れる。体部外面は縦方向のハケを施した後、胴部最大径の位置からやや下に横方向のケズリを入れる。内面はナデで平滑に整える。

2・3はサヌカイト製の打製大型石庖丁である。2は表裏両面から押圧剥離を行い刃部を成形する。また基部には抉りを設けており、この部分に細かな階段状剥離を連続して入れて刃潰しを行う。

3は表裏両面から押圧剥離を行い刃部を整形する。基部とその周辺は階段状剥離を入れて刃潰しを行う。

4～10は甕である。4は口縁端部を上方につまみ上げ、外面に2条の凹線文を施す。体部外面は縦方向にハケを施したのち、下半を縦方向にミガキで整える。内面は底部付近を縦方向にナデを施したのち、下半部を右下から左上、上半部を横方向にナデで整える。体部外面の中位に帯状に煤が付着する。

5は体部外面に縦方向のハケを施したのち、下半を右下から左上方向のケズリで整える。内面は頸部を横方向のハケ、肩部を中心に左下から右上方向の粗いハケで整え、さらに縦方向の細かなハケを施す。口縁部は内外面を同時に横方向のナデで整える。

6は甕の下半部である。外面を縦方向のケズリののち底部付近を中心に縦方向のミガキで整える。内面は縦方向のハケ調整を施す。また、内面に赤色顔料の付着が認められる。

7は甕の上半部である。口縁部は上方につまみ上げ、外面はわずかに凹む。外面は右下から左上にハケ調整を施したのち、縦方向のナデおよび浅いケズリで整える。内面は縦方向のハケを施す。

8は生駒西麓産のものであり、外面は縦方向のミガキを密に施し、内面はナデで整えたのち、下半部に部分的にミガキを入れる。外面には煤、内面にはコゲが付着する。

9・10は小型品である。9は口縁部が短く外反し端部を丸くおさめる。外面は体部から頸部にかけて2条で構成される櫛描文を施す。体部中位に波状文を3帯入れ、それより上位に3帯、下位に4帯の櫛描直線文を施す。内面はナデで整える。

10は口縁部が短く外反し端部は丸みを帯びる。外面は縦方向のハケを施した後、下半部に縦方向のミガキを入れる。内面は縦方向に幅広い単位のハケを施した後、下半に工具を用いた縦方向のナデを施す。他の甕のように使用時の煤やコゲ、熱による底部の変色は認められない。

11～14は高杯である。いずれも脚部から杯部にかけて連続成形し、円盤充填する。11は13を一回り小型にした形態であり、口縁部に1条、屈曲部に2条の凹線文が認められる。杯部外面下半には横方向のミガキが施される。杯部内面は部分的にミガキが認められるが基本的にナデで全体を整える。裾部には横方向のミガキ、脚柱部には縦方向のナデを施す。また、脚部内面は左から右方向のケズリを入れる。

12は杯部内面上半部を左から右方向のミガキで整えたのち、下半部に放射状のミガキを入れる。脚部内面はシボリの痕跡が顕著で、裾部は右から左方向の浅いケズリで整える。

13は杯部内面をナデで整えたのち、下半部に平行するミガキを施す。凹線文は口縁部と屈曲部にそれぞれ1条、裾部に4条を入れる。脚部内面はシボリの痕跡が認められ、裾部から脚部上位にかけて右から左方向のケズリを施す。

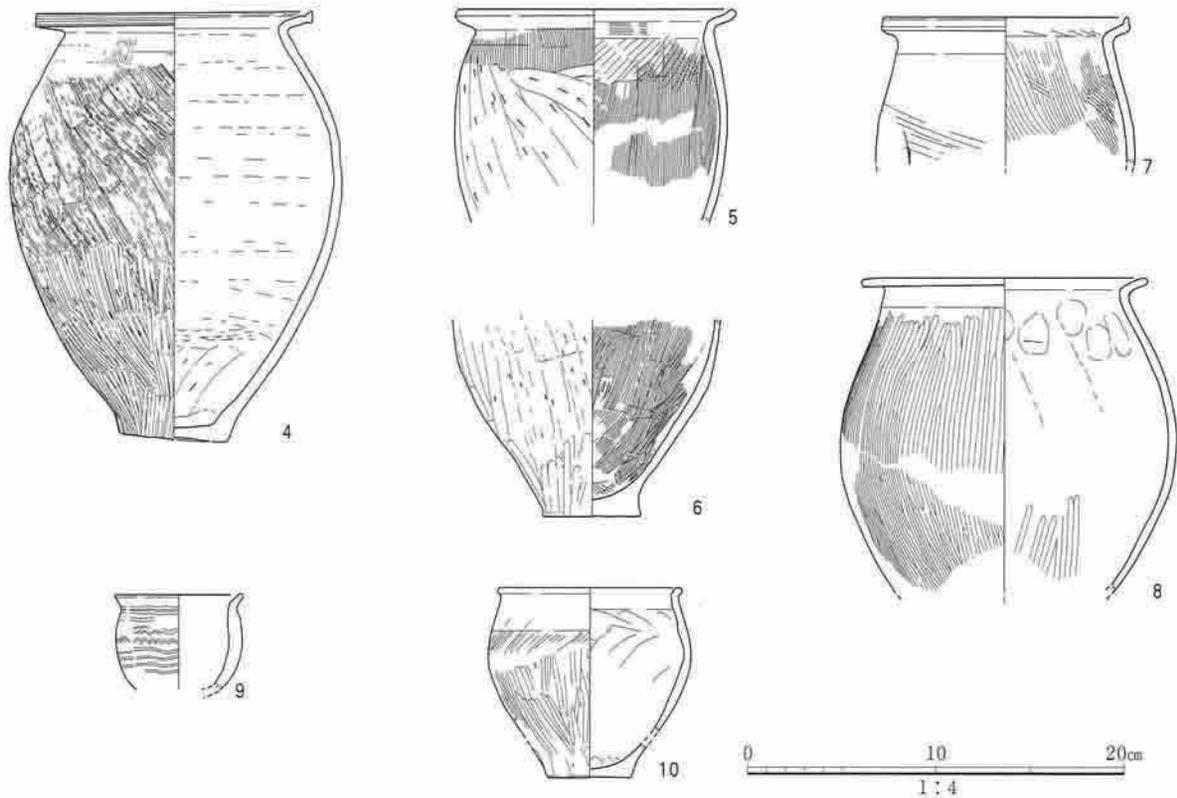


図17 SX801周溝出土土器(1)

14は杯部外面上半部を横方向、下半部を放射状のミガキで整える。内面は上半部に横方向のナデを入れたのち、下半部に放射状のミガキを施す。脚部外面は裾部を縦方向の密なミガキを施し、内面は右から左方向のケズリを入れる。裾端部は面もち、横方向のナデで整える。

15は鉢である。外面は粗いハケで調整したのち、下半部にケズリを入れる。また、底部外面は板状工具でナデを施す。内面は横方向のミガキで整える。

16・17は蓋である。16は生駒西麓産で、外面に放射状のミガキを密に施す。直径0.6cmの孔を2.6cm間隔で2個穿ち、18とセットになる。17は口縁部付近に直径0.4cmの円孔を2.0cm間隔で2個穿つ。外面を放射状のミガキ、内面をナデで整える。19の無頸壺とはセットにはならない。

18は生駒西麓産の台付無頸壺である。肥厚させた口縁部の外面と裾部に斜列点文を入れ、体部外面には簾状文帯を4条入れており、表面にキザミメを施した3条一対の棒状浮文様を配置する。

19は生駒西麓産の無頸壺である。頸部には直径0.6cmの円孔を3.5~4.0cm間隔で2個穿ち、対角に配置する。体部上半を縦方向、下半を横方向のミガキで整える。内面はハケ調整後、ナデで整える。底部中央には焼成後に外側から長径3.0cm、短径2.5cm大の楕円形の穿孔を入れる。

20~25は広口短頸壺である。20は口縁部が上方にわずかに拡張する。体部外面は縦方向のハケを施し、下半部には縦方向のミガキを入れる。体部内面は縦方向のナデで整える。頸部外面はナデ、内面は粗いハケで調整し、口縁部は内外面を横方向のナデで整える。体部下位には穿孔を入れる。

21は口縁端部をわずかに上下に拡張し、外面を横方向のナデで整える。端部からやや内側の位置に直径0.4cmの円孔を4箇所に入れる。頸部は外面をハケのちナデ、内面をナデでそれぞれ整える。体

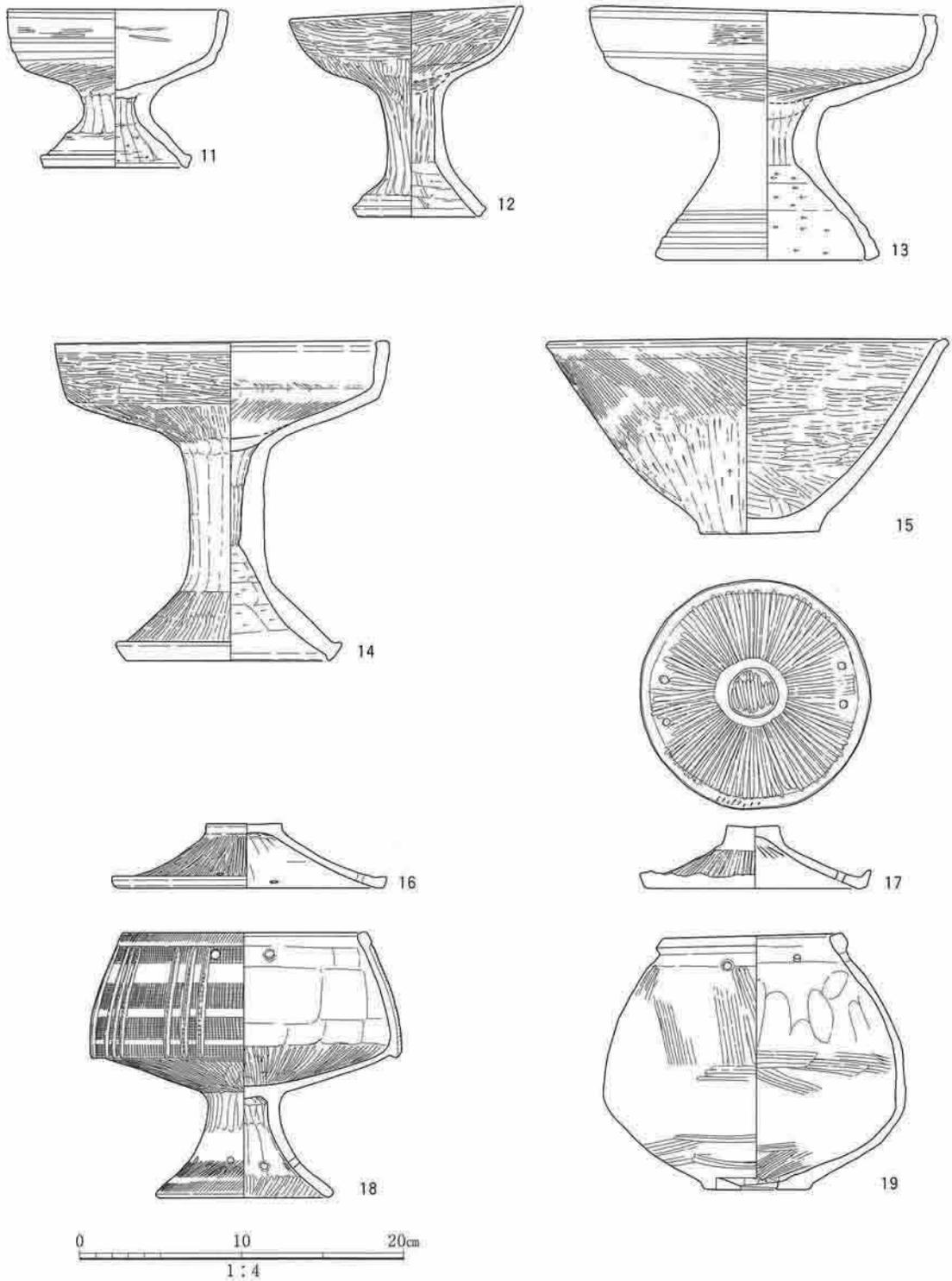


図18 SX801周溝出土土器(2)

部外面には縦方向のハケを施す。上半部はナデで調整したのち部分的に横方向のミガキを入れて平滑にする。下半部は縦方向のケズリののち、縦方向のミガキで整える。内面は底部付近を横方向のナデとハケ、上半部を右下から左上方向のハケで整える。

22は口縁部外面に沈線が2条認められる。外面は浅いケズリを施したのち、下半部にミガキを入れる。内面は縦方向のミガキで整える。底部には焼成後の穿孔が認められる。

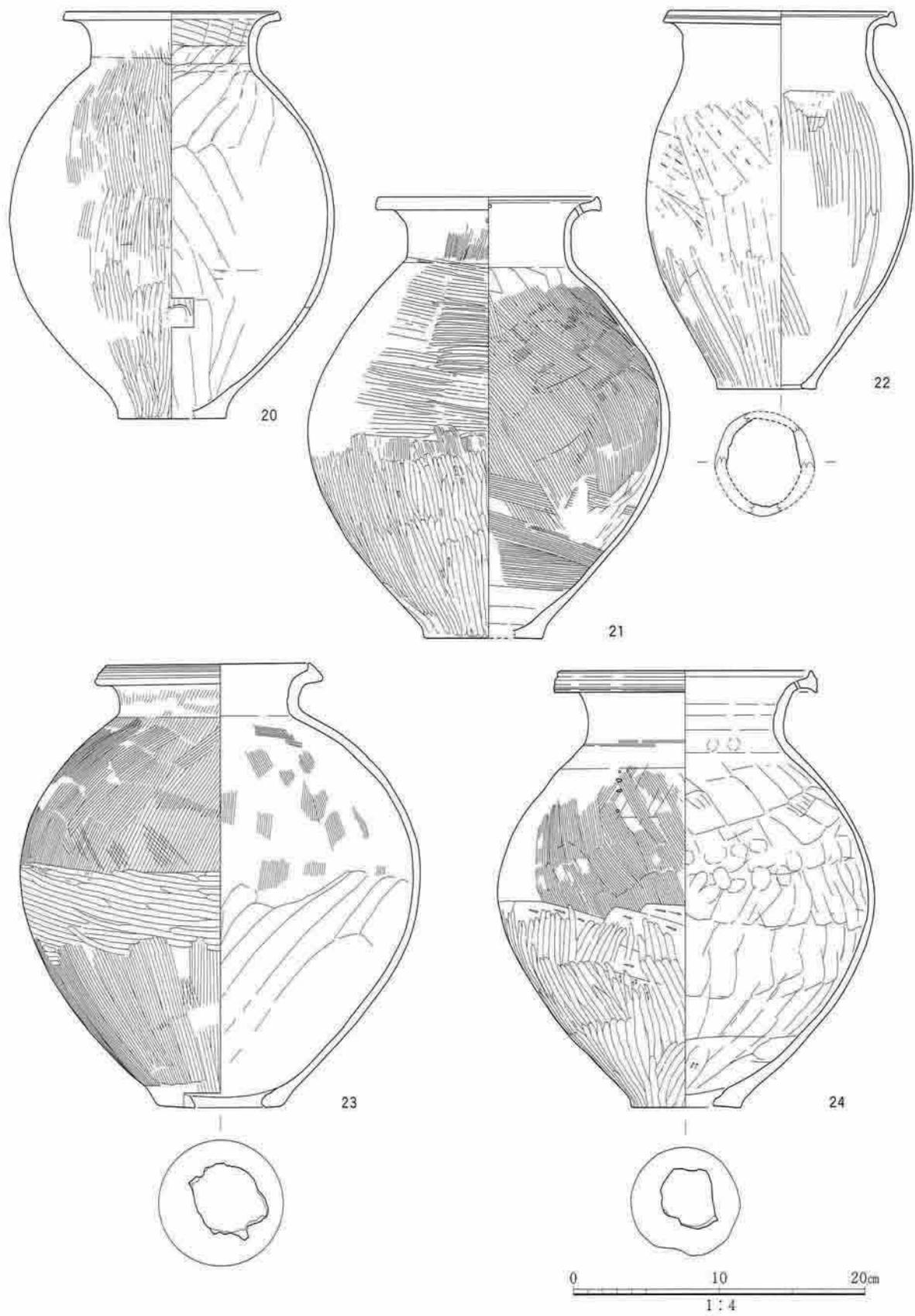


图19 SX801周沟出土土器(3)

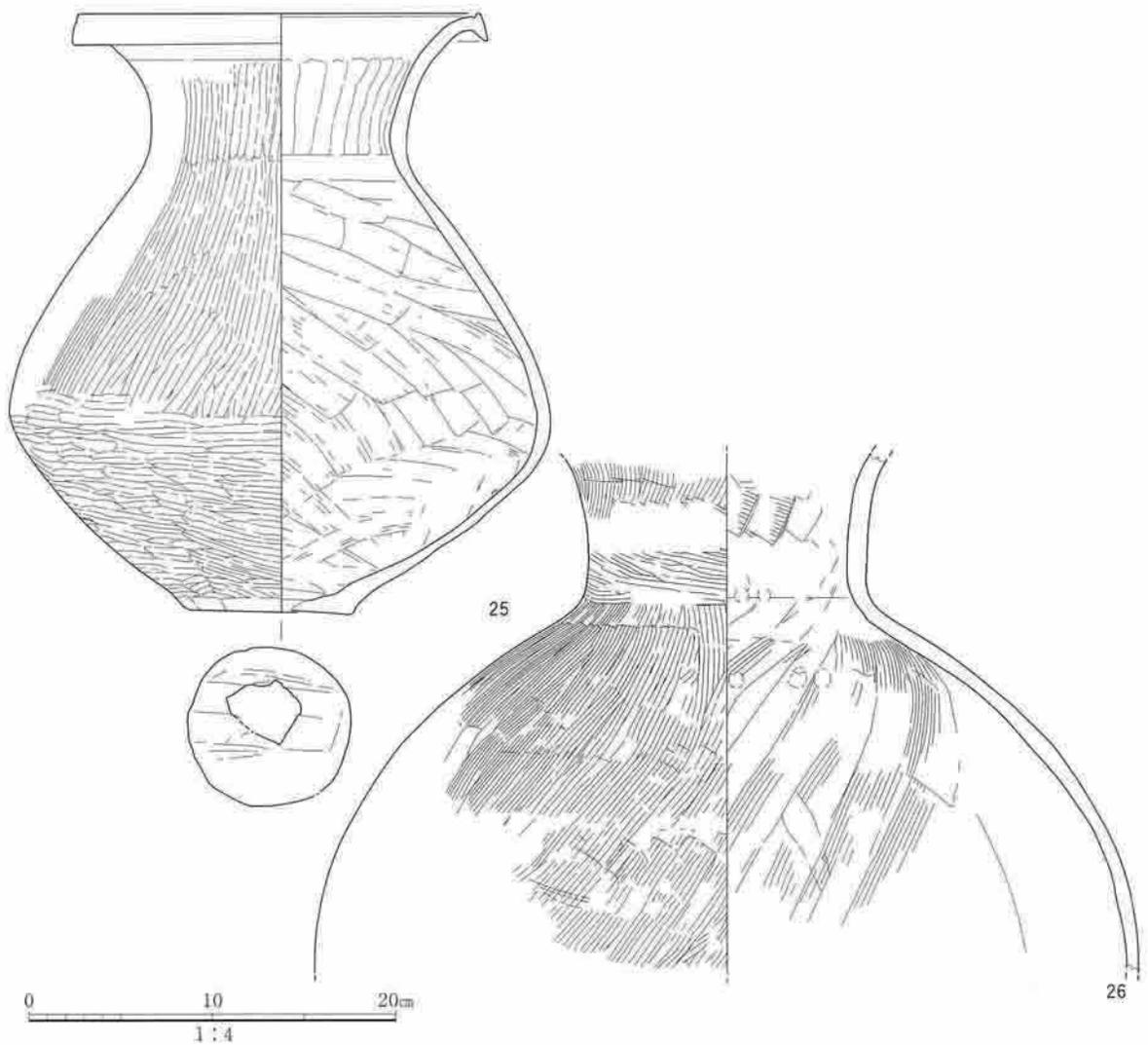


図20 SX801周溝出土土器(4)

23は口縁部外面に3条の凹線文が施される。体部外面は縦方向のハケ調整後、胴部最大径の位置からやや下にかけて横方向のミガキを施す。内面は体部下半にケズリを入れる。底部には直径4.5cmの円形の穿孔を施す。また体部下半には薄く煤が付着する。

24は口縁端部を上下に拡張し、外面に3条の凹線文を巡らせ、肩部には刺突による記号文を入れる。口縁端部からやや内側の位置に直径0.3cmの円孔を2孔一対で穿ち、それらを4箇所配置する。頸部は外面をナデ、内面をオサエとナデで整える。体部外面は縦方向のハケを施し、底部付近に縦方向、中位に左上から右下方向のケズリを入れたのち、縦方向のミガキで平滑にする。内面は底部付近に縦方向のケズリを施すが、基本的に縦方向のナデで整える。体部下半には煤が付着し、底部中央に焼成後穿孔を入れる。

25は口縁部を上下に拡張して横方向のナデで整える。体部から頸部にかけて弧状に連続してたち上がる。外面はミガキで整えており、体部から頸部にかけては縦方向、下半部は横方向に施す。内面は下半部を横方向のハケ、上半部を右下から左上方向のハケで整える。頸部には縦方向にナデを施す。胴部最大径の位置のやや下に、煤とみられる黒色の物質が帯状に薄く付着し、底部に焼成後穿孔が認

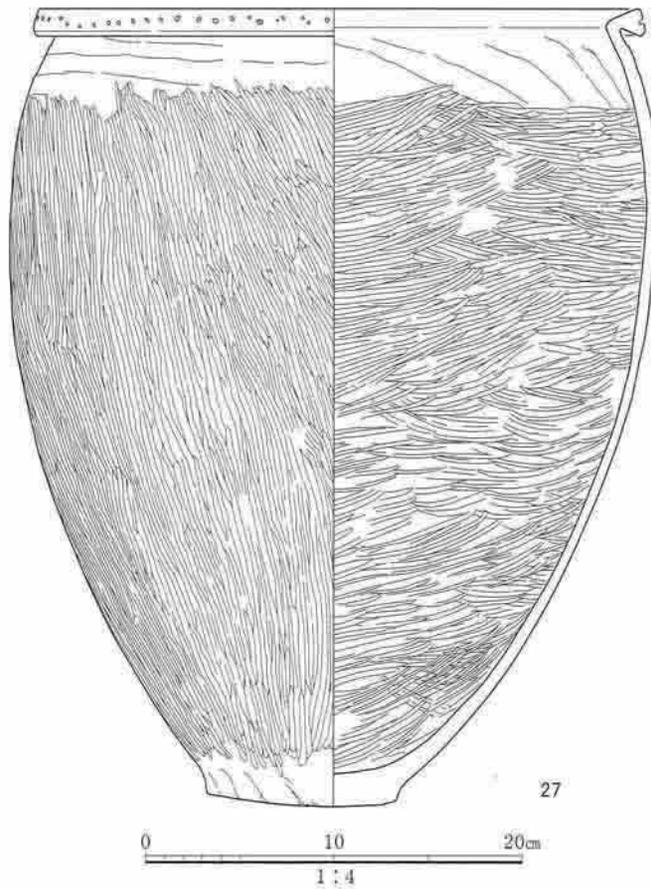


図21 SX802土器棺

められる。

26は大型の壺である。口縁部および体部下半を欠損する。体部から頸部にかけてハケで整えるが、頸部下外面には部分的に横方向のミガキを施す。

SX802周溝から出土した遺物(図21～25、原色図版1、図版22～24)

27はSX802の土器棺に用いられた生駒西麓産の大型甕である。外面にナデを施したのち、縦方向のミガキで整える。内面はナデを施し、横方向のミガキで平滑にする。口縁部は肥厚しており、外面に直径0.2cm、深さ0.3cmの円孔を0.7～1.0cm間隔で入れる。体部下半に煤が付着する。28～48は周溝から出土した土器である。28～34は甕である。28は体部上半を縦方向のハケで整え、下半には縦方向のミガキを施す。内面は縦方向のハケで部分的に整えたのち、肩部付近にオサエを入れる。口縁部は内外面を同時に横方向のシャープなナデで整える。肩部より下に煤の痕跡が顕著である。

29は肩部の張り出した外形である。体部をナデで整えたのち、下半に縦方向にミガキを入れて平滑にする。内面は右下から左上方向にナデを施す。口縁部は内外面を同時に横方向のナデで整える。

30は甕の体部下半である。外面を縦方向のハケ、内面をナデで整える。

31は生駒西麓産である。口縁部を肥厚させ外面にナデを巡らす。体部は外面を縦方向のミガキ、内面をナデとオサエで整える。頸部は横方向のミガキを内外面にそれぞれ施す。

32は生駒西麓産の甕口縁部である。外面は縦～横方向のミガキを施し、内面は接合痕の上にオサエが認められるが、基本的にナデで整える。口縁部には0.6～0.8cm間隔で刺突文が入る。

33は甕の体部下半である。外面は縦方向のミガキ、内面は縦方向のナデで整える。外面に煤、内面にコゲが付着する。

34は小型品であり、口縁部が短く外反し端部は丸みを帯びる。外面は縦方向のハケを施したのち、下半部に縦方向のミガキを入れる。内面は縦方向に幅広い単位のハケを施したのち、下半に工具を用いた縦方向のナデを施す。

35～37は高杯である。35・36は把手をもつ。35は断面が隅丸長方形の半環状の把手を2箇所に取り付ける。把手の上には0.2～0.5cm間隔で刺突文を入れる。杯部外面には口縁部直下に斜列点文を2段

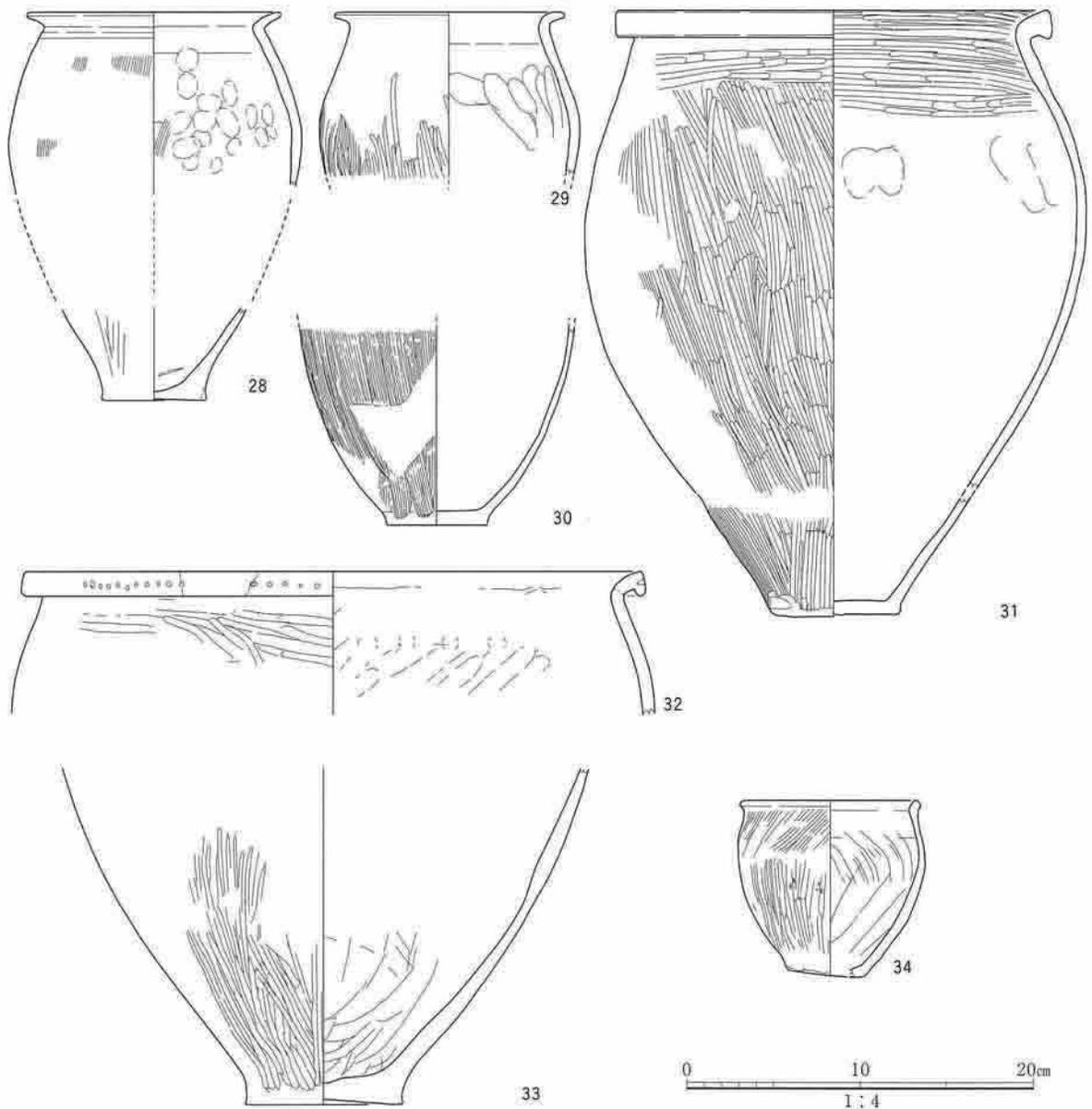


図22 SX802周溝出土土器(1)

に巡らせ、内面はナデののち、放射状のミガキを0.3~0.4cm間隔で規則的に施す。杯部下半から脚部にかけては縦方向のミガキで整える。口縁端部および脚端部には0.2~0.4cm間隔のキザミメを、脚端部付近には0.7~0.8cm間隔の刺突文をそれぞれ入れる。

36は断面が隅丸長方形の半環状の把手を2箇所に取り付ける。把手の上には1列の刺突文が0.2~0.6cm間隔で入る。杯部外面は口縁部直下に列点文を1段、斜列点文を3段にわたって施し、それらの間を横方向のミガキで整える。杯部内面はナデののち、放射状のミガキを比較的に密に入れ、杯部外面下半から脚部にかけては縦方向のミガキで整える。口縁端部および脚端部にはキザミメが0.2~0.4cm間隔で入り、脚端部付近には1.5cm間隔で刺突文を入れる。

37は生駒西麓産である。杯部上半は横方向のナデを施した後、外面に斜列点文を入れる。杯部下半は内外面共に放射状のミガキで平滑にする。脚部外面は縦方向のミガキ、内面は脚柱部を工具によるオサエ、裾部を横方向のナデで整える。

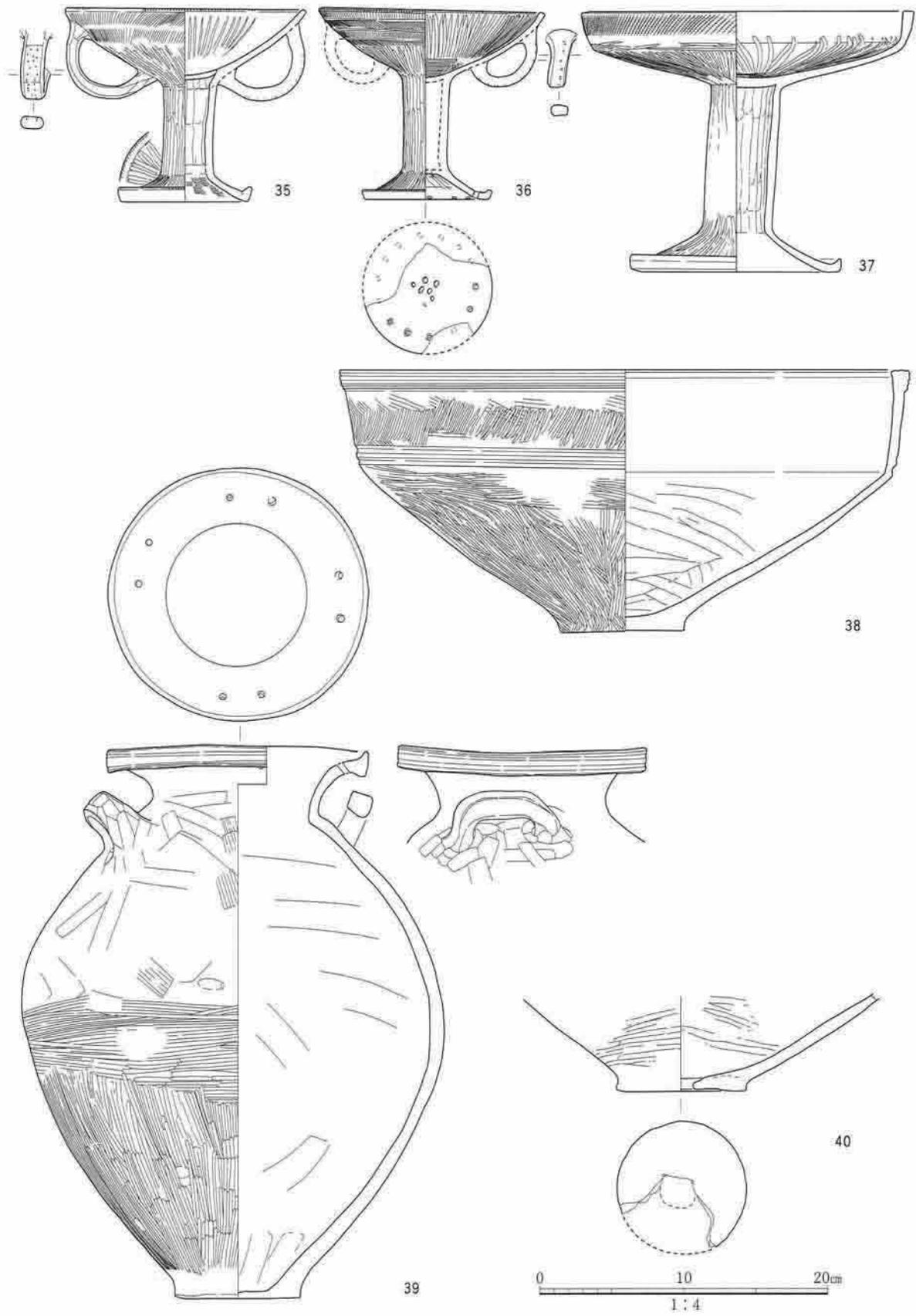


图23 SX802周溝出土土器(2)

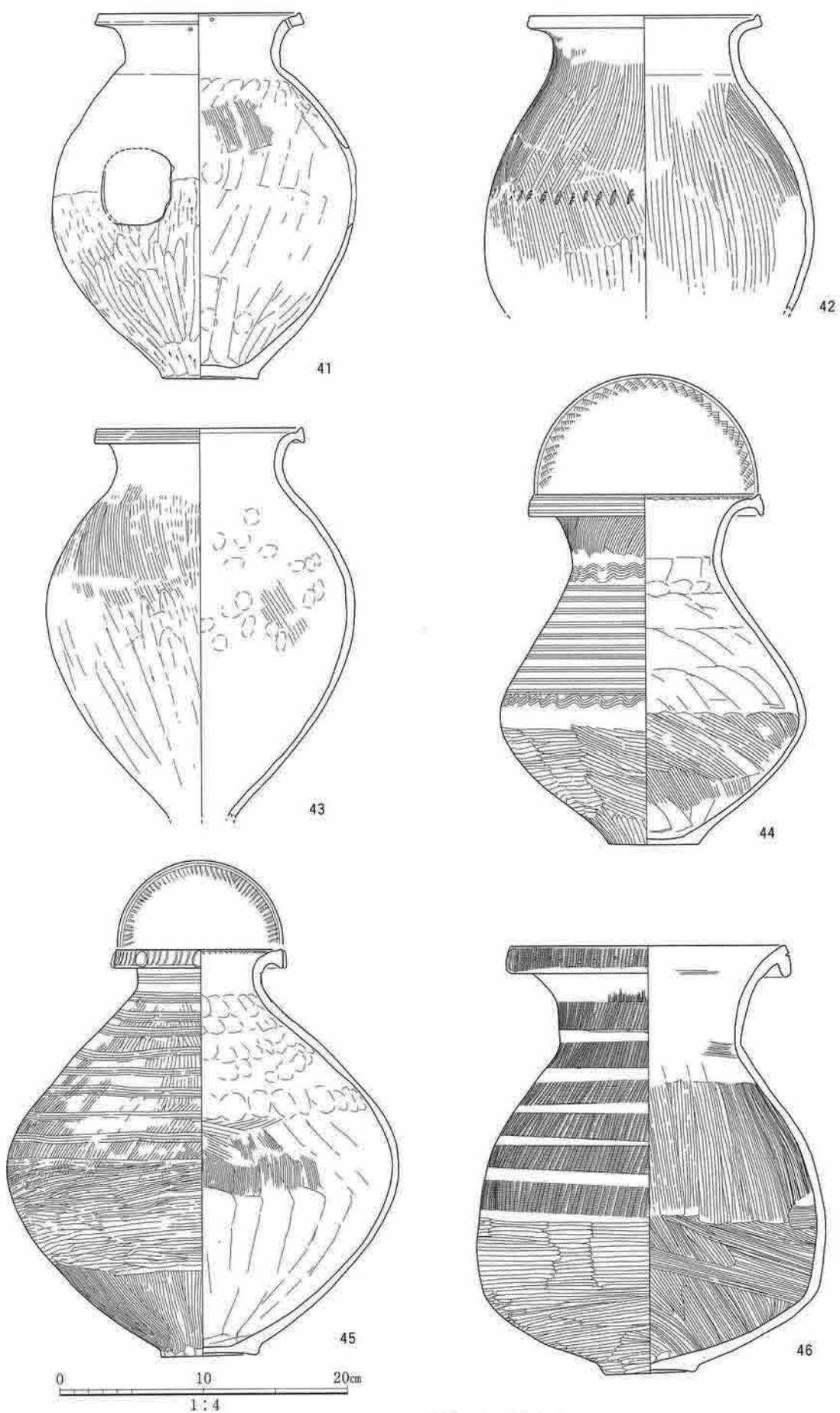
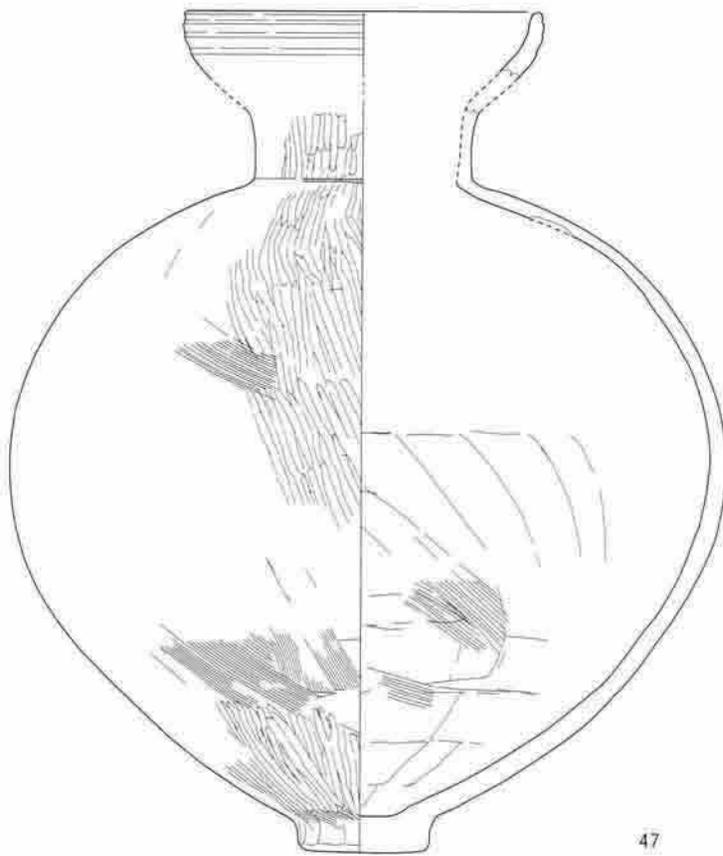
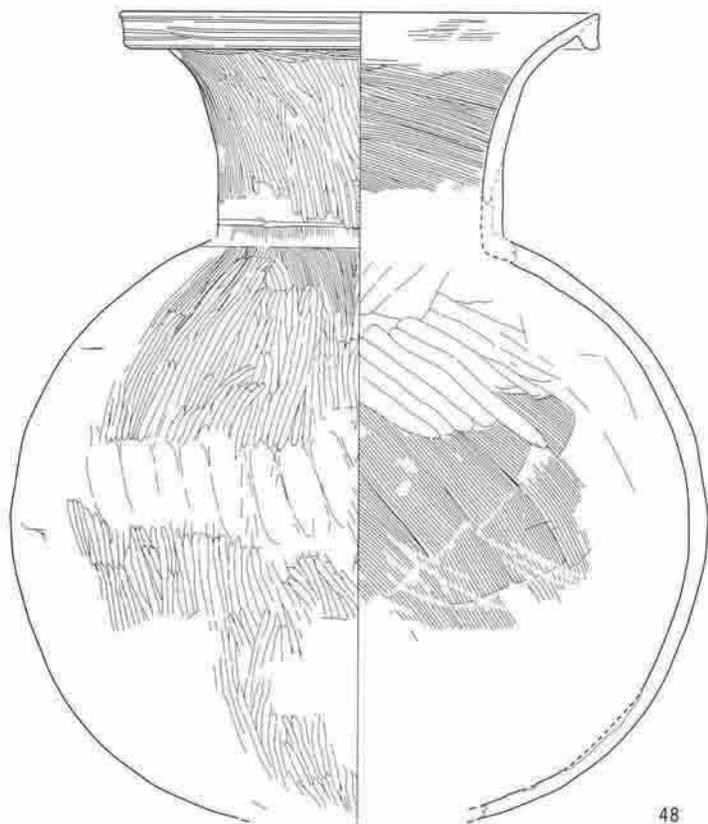


图24 SX802周溝出土土器(3)



47



48

0 10 20cm
1:4

図25 SX802周溝出土土器(4)

38は生駒西麓産の鉢である。口縁部上面と外側面に3条、屈曲部に2条の凹線文を施す。外面は体部下半を縦方向のミガキ、口縁部を斜め方向のハケで調整したのち、ナデおよび縦方向のミガキを入れる。内面は底部付近をオサエとナデ、下半を右下から左上方向のナデ、上半を横方向のナデでそれぞれ整える。

39は把手付き広口短頸壺である。口縁部を上下に拡張し、外面に強いナデを入れており、2条の凹線文状の浅い凹凸が生じている。口縁部のやや内側には直径0.4cmの円孔を2.7~3.0cm間隔で2個穿ち、それぞれ4箇所配置する。また、肩部において断面が方形の把手を2箇所に取り付け、ナデで整える。体部外面はハケを施したのち、中位に横方向、下位に縦方向のミガキを施す。内面はナデで整える。底部付近に帯状に煤が付着する。

40は生駒西麓産の壺底部である。内外面を横方向のミガキで整える。底部には直径2.5cmの焼成後穿孔を外面から入れる。

41~46は広口短頸壺である。41は口縁部をわずかに上方に拡張して面をもたせ、横方向のナデで整える。内側に直径0.4cmの円孔を1.4cm間隔で2孔穿ち、4箇所に配置する。頸部は内外面をそれぞれ横方向のナデで整える。体部はナデ調整後、下半に下から上方向のケズリを施し縦方向のミガキで整える。内面

は部分的に縦方向のハケが認められるが、基本的に縦方向のナデで整える。体部中位に焼成後穿孔が施される。

42は口縁部を上方にわずかにつまみ上げる。外面は体部から頸部にかけて縦方向の粗いハケで整えたのち、下半部にミガキを施し肩部にハケ状の工具の小口を用いて列点文を入れる。内面も外面と同様の縦方向の粗いハケで整える。口縁部は内外面に横方向のナデを巡らせる。

43は口縁端部を上下に拡張し、2条の凹線文を施す。外面は縦方向のハケで調整したのち、下半に縦方向のケズリを施す。胴部最大径付近に円形の剥離が認められ、下半部には煤が付着することから、火にかけて使用することがあったとみられる。内面は部分的に縦方向のハケが認められるが、全体をナデとオサエで整える。胎土には風化した角閃石が多く含まれ、生駒西麓産のものとみられる。

44は口縁部を上下に拡張し外面に3条の凹線文を入れ、内面には斜列点文を密に施す。外面は体部から頸部にかけて縦方向のハケを施した後、ナデで平滑に整える。体部上半に0.3~0.6cmの3条の櫛描直線文を10帯入れ、その上下に6条、4条の櫛描波状文を施す。下半は横方向のミガキで整え、底部付近を縦方向のミガキで整える。内面は部分的に接合痕が遺存するが、体部から頸部にかけてナデとユビオサエ、下半を右下から左上方向のハケで整える。

45は口縁部を上下にわずかに拡張して面をもたせ、0.3~0.5cm間隔で長さ1.0cmのキザミメを施し、さらに9箇所1.0~1.2cmの円形浮文を貼り付ける。また、口縁部内面にも同様の刻目文を0.8~1.0cm間隔で時計回りに施す。外面は縦方向のハケ調整後、体部上半に4条の櫛描文を1.5~2.0cm間隔で10帯入れた後、下半に横方向のミガキを施す。内面下半は下から上方向にハケを施した後さらに左から右方向のハケで整え、下半に縦方向のナデを施す。上半はナデ調整後、横方向に連続してユビオサエを施して整える。

46は口縁部を垂下させて拡張し、幅1.0~1.8cmの簾状文1帯を入れた後、1.2cm間隔で刺突文を施す。体部外面上半から頸部にかけては幅2.0cmの簾状文6帯を入れ、下半部を横方向のミガキで整える。内面は、底部に横方向、体部に縦方向のハケを施し、頸部から口縁部にかけては基本的にナデで整える。角閃石が多く含まれており、生駒西麓産である。

47は受口状口縁の壺である。口縁部外面に3条の凹線文を施し、底部は強く外反してたち上がる。体部外面は右下から左上方向のハケを施したのち、上半部と底部付近に分けて縦方向のミガキを入れる。内面はナデとハケで整える。頸部は外面を縦方向のミガキで平滑にし、内面にはナデを施す。胎土には角閃石が多く含まれており、生駒西麓産である。

48は弥生時代後期前半の広口壺である。口縁部に粘土紐を補充して下に拡張し、外面に3条の沈線文を施す。体部は縦方向のハケを施し、ナデで平滑に整えたのち、上半と下半に分けて縦方向のミガキで整える。内面は中位に縦方向のハケを施したのち、肩部と底部をナデで整える。頸部は外面に縦方向のミガキ、内面に横方向のハケを施す。

SX801・802から出土した土器は完存率が高いものが多く、穿孔をもつものも見られる。また、壺でありながらも体部に帯状に煤が付着し、火にかけて使用した痕跡が認められるなど、通常とは異なる使用法の土器が多い。これらの特徴から、周溝出土の土器は墳墓での祭祀に用いられたとみられる。

ii) 溝

SD901(図6) SX801の下で検出した南北方向の溝で、幅が約1.00m、深さが約0.40mであった。埋土から出土した土器で最も新しいものは畿内第Ⅲ様式の土器片である。弥生時代前期から中期中葉までの土器は、Ⅱ区北部の畝状遺構の堆積土からも出土しており、墓が造られる以前からこの地域の開発が行われていたことを示していると思われる。

SD803(図6・26) SX801とSD804の間で見つかった南北方向の溝状の遺構である。上部が削平されており本来の規模は不明であるが、最大幅が約2.00m、深さは最も深い部分で約0.50mである。

SD804(図6・26) I区の北西部で検出したSD804は幅が約1.50m、深さが最も深い部分で約0.60mの溝である。円弧を描くことから、墓や住居に伴う可能性が考えられたが、それを裏付ける証拠を今回の調査ではつかめなかった。埋土はシルト質細粒砂～粘土質シルトで、水が滞留した状態で徐々に埋まっていったと考えられる。溝底からは弥生時代中期の壺や甕の破片が出土した。

SD805(図6) 幅0.50m、深さ0.30mの溝である。SX801とSX802を連結していた。

3) 弥生時代中期から古墳時代中期の遺構と遺物

弥生時代の墳墓が設けられたのち、調査地の東側に自然流路NR701が形成される。

i) 流路

NR701(図6・27・28、図版25) NR701はⅡ区の東辺に沿って南北に延びる自然流路であり、幅4.0～7.4m、深さは最も深い部分で1.0mであった。NR701は調査地の東側に第11層以前に形成され

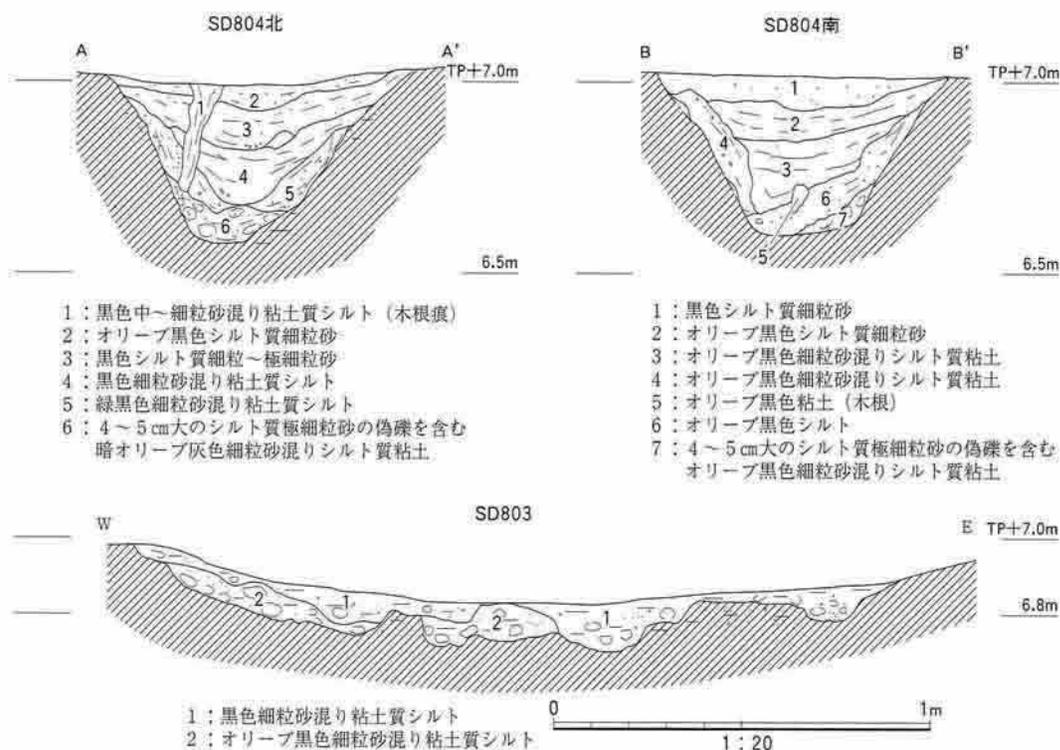
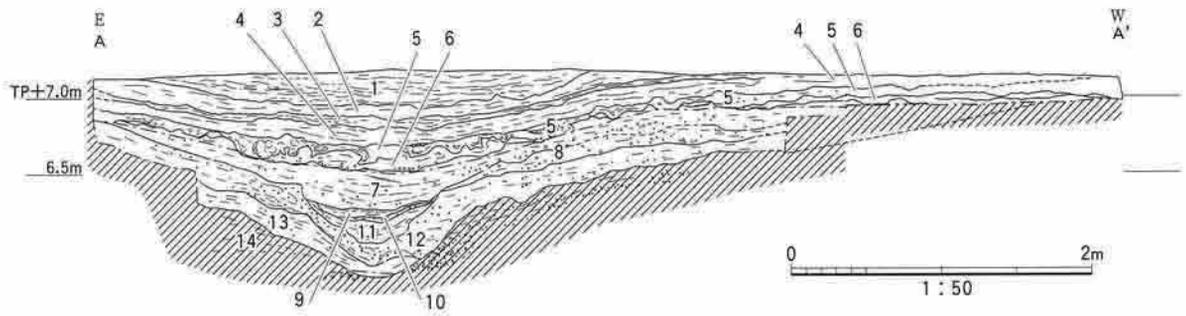
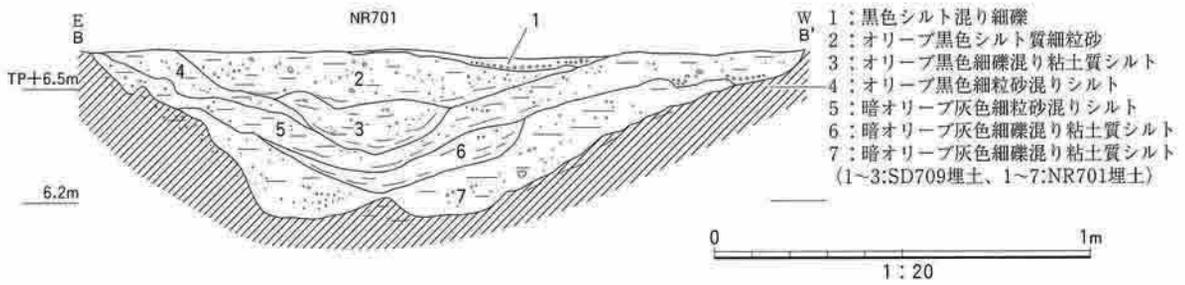


図26 SD803・804断面図(断面位置は図6参照)



- | | |
|--|---------------------------|
| 1: 暗オリーブ灰色シルト質粘土 | 8: 暗オリーブ灰色細礫混り砂質シルト |
| 2: 灰色シルト質粘土 | 9: 暗オリーブ灰色粘土 |
| 3: 灰色シルト | 10: 暗オリーブ灰色シルト混り粗粒砂 |
| 4: 暗オリーブ灰色シルト質粘土 | 11: 暗緑灰色粘土 (腐蝕した植物のラミナ顕著) |
| 5: 暗オリーブ灰色粘土 (この上面から踏込みが入り: 層下面に変形が顕著) | 12: 暗オリーブ灰色砂質シルト |
| 6: 暗オリーブ灰色シルト | 13: 暗緑灰色粗粒砂混りシルト |
| 7: 黒色砂質シルト | 14: 暗オリーブ灰色細粒~中砂 (上方細粒化) |



- | |
|---|
| 1: 黒色シルト混り細礫 |
| 2: オリーブ黒色シルト質細粒砂 |
| 3: オリーブ黒色細礫混り粘土質シルト |
| 4: オリーブ黒色細粒砂混りシルト |
| 5: 暗オリーブ灰色細粒砂混りシルト |
| 6: 暗オリーブ灰色細礫混り粘土質シルト |
| 7: 暗オリーブ灰色細礫混り粘土質シルト (1~3:SD709埋土, 1~7:NR701埋土) |

図27 NR701断面図(断面位置は図6参照)

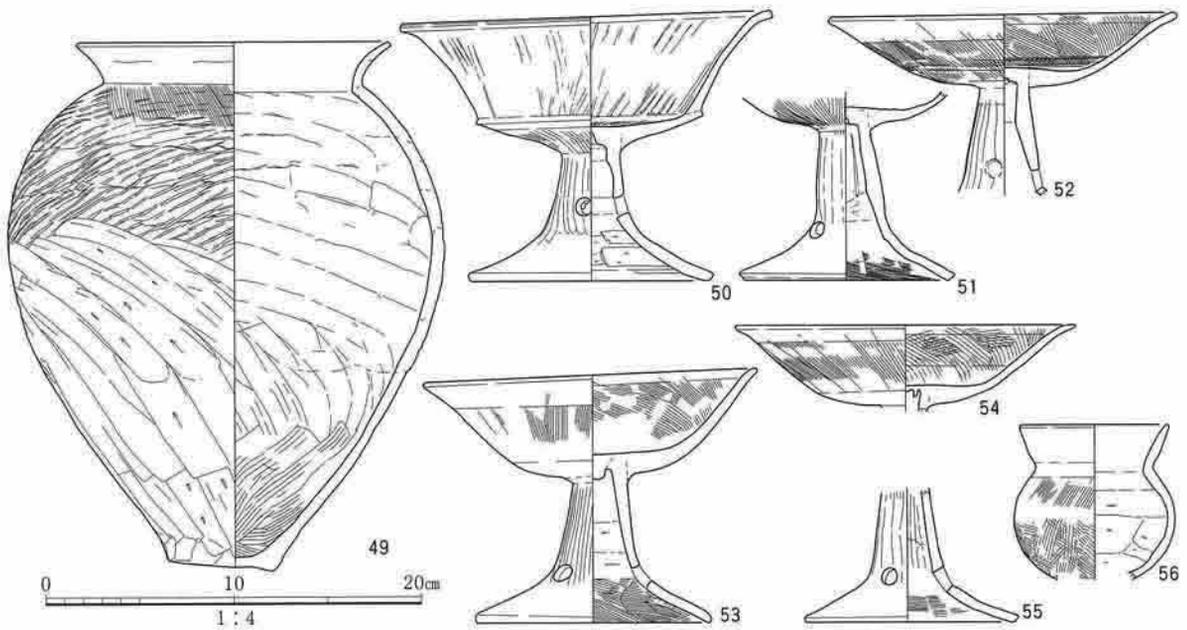


図28 NR701出土遺物

ていた谷を起源とし、第8層によって窪みが完全に埋まるまで継続して機能していたと考えられる。遺物は弥生時代中期から古墳時代中期までの土器を含んでいた。以下、出土遺物について記述する。

49は弥生時代後期の甕、50～55が古墳時代中期の高杯、56が古墳時代中期の小型丸底壺である。

49は体部外面を右上がりのタタキで整えたのち、下半に右下から左上方向のケズリを入れる。内面は右下から左上方向に板状工具を用いたナデを施したのち、下半は縦方向のハケで整える。口縁部は内外面を同時に横方向のナデで整える。

50は有稜高杯である。杯部上半は横方向のナデののち、暗文風のミガキを縦方向に施す。スカシ孔は3個であり、脚部外面は縦方向のミガキ、内面は横方向のナデののち、裾部を左から右方向のケズリで整える。

51は高杯脚部である。スカシ孔は3個である。外面は杯部付近を放射状にハケを施したのち、脚部を縦方向にメントリする。脚頂部内面に刺突痕があり、脚部内面には工具の回転による浅いケズリが認められ、裾部は横方向のハケで整える。

52は内外面を縦方向のハケで調整したのち、口縁部を内・外面ともに横方向のシャープなナデで整える。脚部は工具を用いたナデを外面は縦方向に、内面は横方向に施す。スカシ孔は3個である。

53は杯部内外面に縦方向のハケを施したのち、口縁部内外面を横方向のナデで整える。脚部はスカシを3方向に穿ち、外面は縦方向のミガキ、内面は裾部をハケで調整したのち、脚柱部に横方向のケズリを入れる。

54は内外面に縦方向のハケを施したのち、口縁部を内・外面ともに横方向のシャープなナデで整える。

55は高杯脚部である。スカシ孔は3個である。外面をメントリで整え、内面にはシボリの痕跡が認められる。裾部内面はハケを施したのち、端部付近を横方向のナデで整える。全体的に灰～赤褐色に変色しており、二次的に熱を受けたものと推測される。

56は小型丸底壺である。体部は球形であり、外面をハケ、内面を左から右方向のケズリで整える。

4) 古墳時代中期の遺構と遺物

第10層の上面でウマの下顎骨を納めた土壙と数条の溝を検出した。

i) 土壙

SK702(図6・29・30、図版5) SX801の上で検出した土壙である。規模は上端で東西が約2.20m、南北が約1.00m、下位は一回り小さく掘窪められており、東西が約1.70m、南北が約0.70mであった。埋土の断面を観察したところ、木棺の痕跡と考えられる土のたち上がりや蓋の部分が認められ、西側の小口からは据えられた状態の材が見つかった。また、東側小口からは歯が出土した。

このような状況と、主軸の方向がSX801とほぼ同じであることから、当初SK702はSX801に伴う主体部の1つとして理解していた。しかし、SK702の南側で検出したSX801木棺墓の木棺痕跡に比べて底のレベルがかなり低く、埋土はややしまりに欠けていること、土壙埋土上部からは須恵器甕が出土していることから、SX801に伴うものでなく古墳時代中期に設けられた遺構であることが判明した。

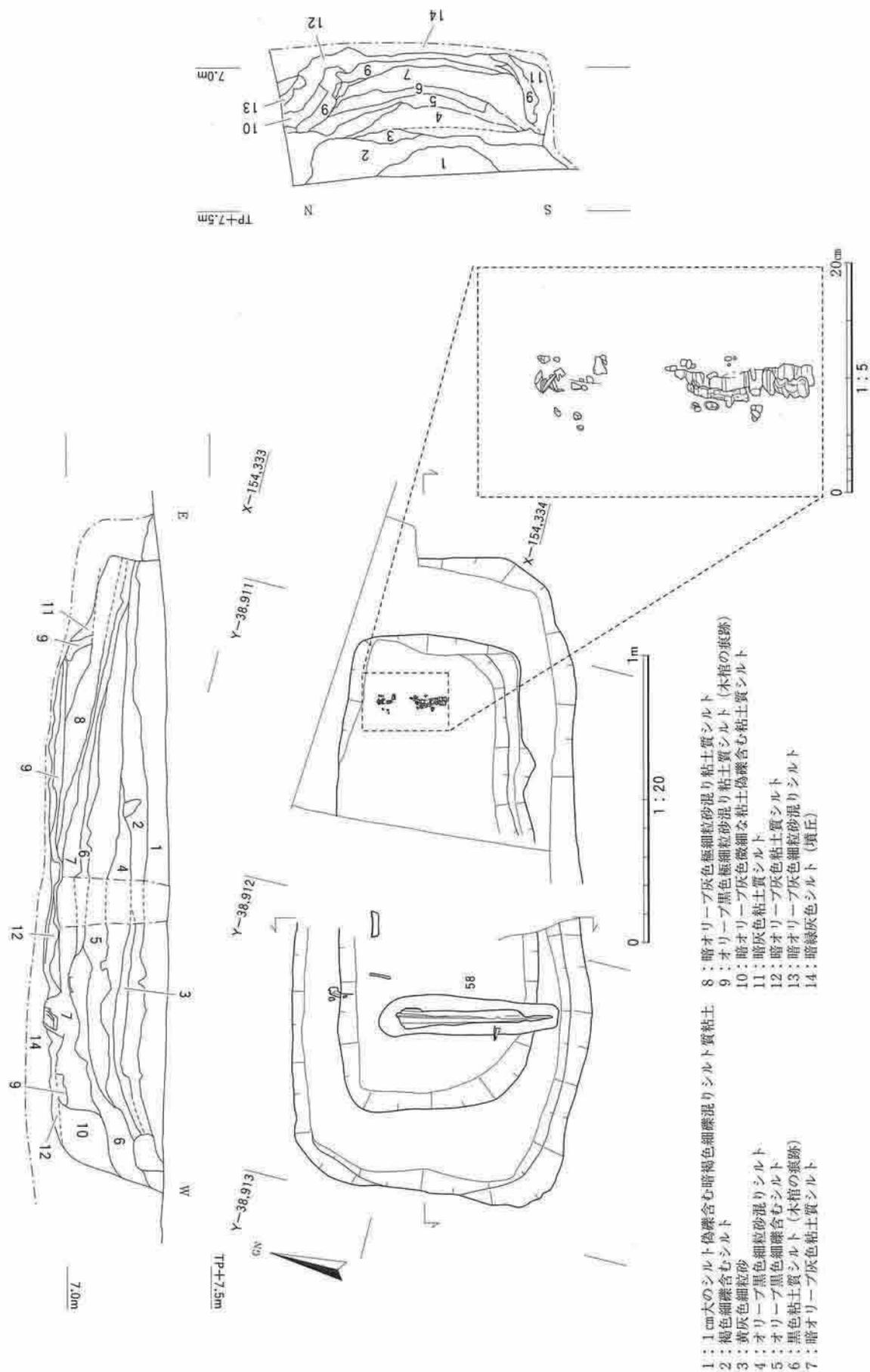


図29 SK702平面図・断面図

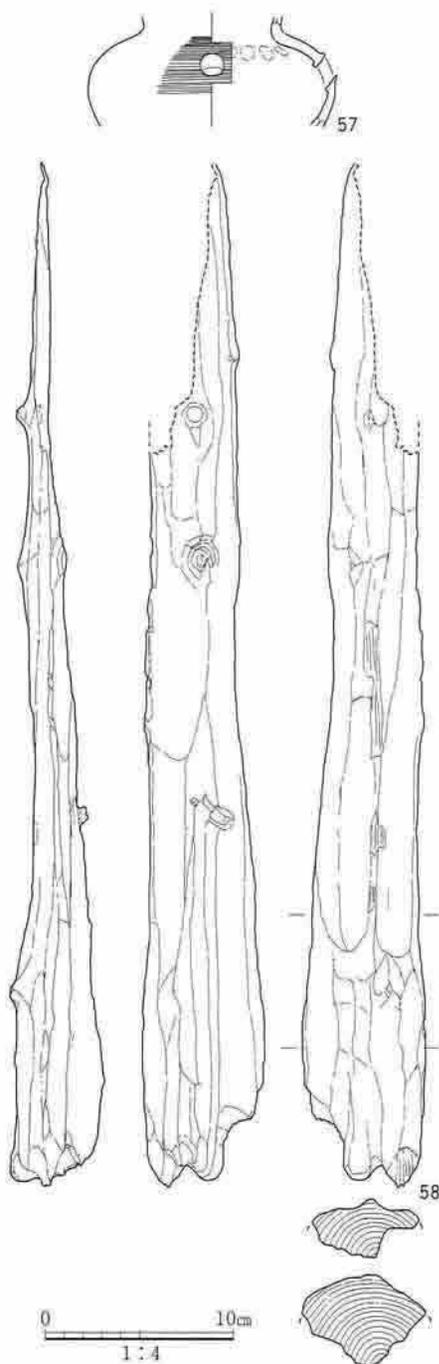


図30 SK702出土遺物

さらに、土壌の底で見つかった歯はウマの下顎骨のもので、中から見つかった木材の樹種は後述するように棺材として当時多く用いられていたコウヤマキであった。下顎骨が土壌の短辺に沿って出土し、下顎骨からコウヤマキ材の出土した棺小口とみられるところまでは1.30m、幅は0.70mと狭いが、第三章第1節で後述するように当時のウマの体躯であれば十分に入る大きさであると推測されることから、SK702はウマの埋葬であると判断した。

57は須恵器甕である。体部のほぼ中位に直径1.2cmの円孔をもつ。外面はカキメを施し、内面はナデで整える。口縁部を欠くため詳しい型式を特定できないが、古墳時代中期のものと思われる。

58は加工痕のある部材である。腐蝕しているが、年輪が切られた部分があり、加工痕と判断した。樹種は第三章第4節で詳述するが、コウヤマキであり、出土状況から棺材の一部であった可能性が高い。

ii) 溝

SD703(図6・32・33、図版19・25・26) I区とII区の境に設けた拡張区で検出した。SD707同様、矩形を描いていたようであるが、残りが悪く全体の形状は不明である。また、深さは0.10mに満たない。しかし、出土遺物は多く、韓式系土器の長胴甕が4個体以上、須恵器の大甕が1個体、溝底に貼付いた状態で出土した。

59は土師器小型長胴甕である。丸底であり、外面は縦方向のハケを施す。内面は水平方向に1.5~2.0cm間隔で接合痕が遺存するが、全体を板状工具によるナデで整える。さらに、底部をオサエで整え、口縁端部は横方向のナデを施す。

60は土師器長胴甕である。底部は平底を呈する。外面は口縁部に縦方向のハケを施したのち、体部から口縁部にかけて連続して縦方向のハケを施す。内面は口縁部を横方向のハケで整えたのち、体部を下から上方向に連続的にケズリで整える。底部はケズリが及ばず、ナデ調整が遺存する。底部以外は体部下半から肩部にかけて煤が付着する。

61は韓式系土器長胴甕である。体部外面は縄文タタキで整える。内面下半は使用痕とみられる磨滅で調整は不明であるが、上半は左下から右上方向のナデを施したのち、肩部を中心に横方向のナデを施す。口縁部は内外面を同時に横方向のシャープなヨコナデで整え、端部が浅く凹む。煤は肩部から底部付近にかけて付着しており、底面のは酸化して煤が消滅している。また、内面にコゲは認

められない。

62は韓式系土器長胴甕である。外面は縄蓆文タタキで整える。内面は底部付近をオサエで整え、体部を左下から右上方向、肩部を横方向のナデで整える。口縁部は内外面を同時に横方向のシャープなヨコナデで整え、端部が凹む。体部から底部外面にかけて縦に長い帯状の黒斑が認められる。煤は肩部から底部付近にかけて付着しており、底面のものは酸化している。また、内面にコゲは認められない。

63は須恵器甕である。口縁部に段をもつ。体部外面を平行タタキで整える。内面は肩部にタタキの当て具の痕跡が残るが、全体をナデで整える。

SD704(図6・31) SD706の北側に重複して東西に延びる溝である。幅約0.60m、深さ約0.20mであった。

SD705(図6) SD706に切られる南北方向の溝である。幅0.45m、深さ0.10mであった。

SD706(図6・31・34、図版26) I区南部で検出した。幅約1.50~1.90mで、西側では深さが約0.60mであった。以下に記すように、TK216型式の須恵器の壺や布留式の甕などが出土した。

64はTK216型式に属する須恵器直口壺である。頸部と体部に6~9条の櫛描波状文が巡る。底部外面には舂圧痕が見られる。

65は布留式の甕である。口縁端部は上方にわずかにつまみ上げる。体部外面を横および縦方向のハケで整える。内面は縦方向のナデで整えたのち、肩部にユビオサエを施す。口縁部は横方向のシャープなヨコナデで整える。

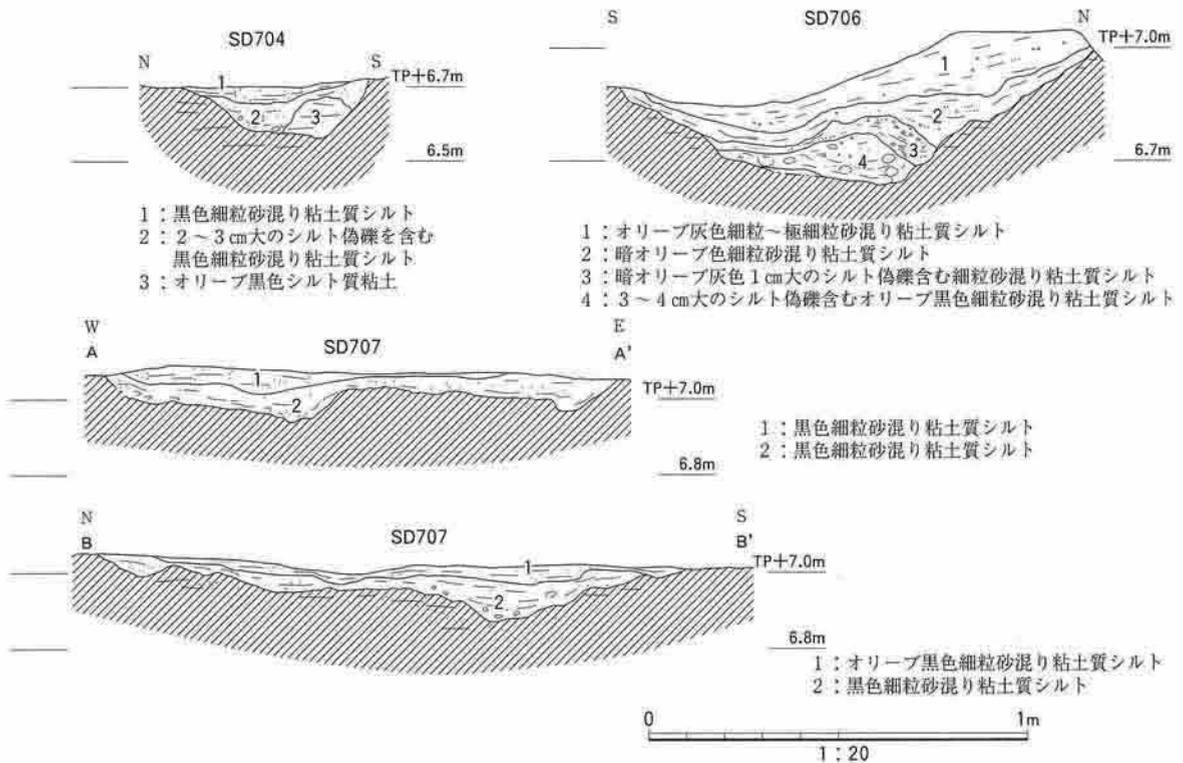


図31 SD704・706・707断面図(断面位置は図6参照)

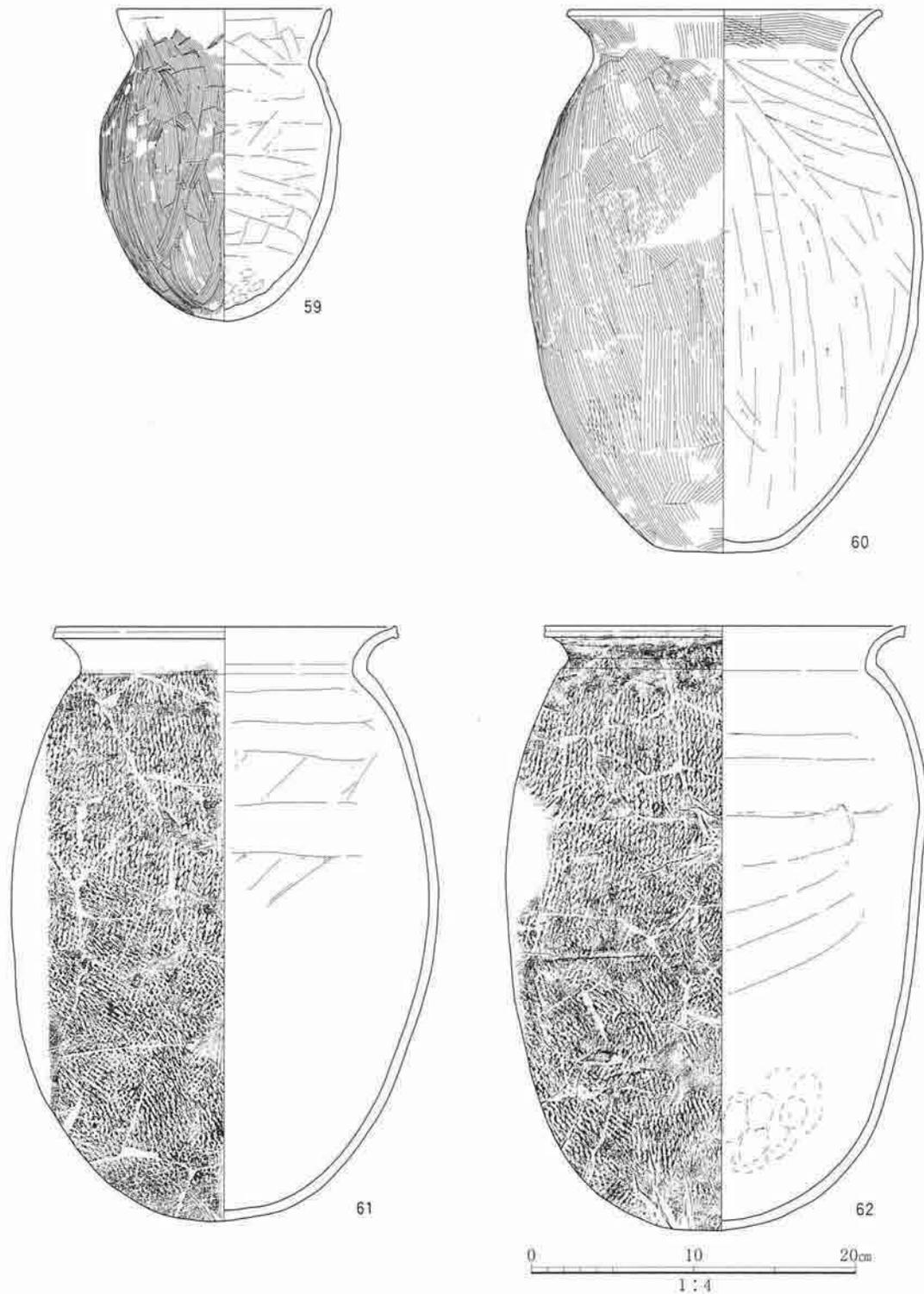


図32 SD703出土遺物(1)

66は杓子状木製品である。長さ20.4cm、幅6.2cmであった。樹種は第Ⅲ章第3節に示すように、コナラ属アカガシ亜属である。

SD707(図6・31) I区の西部で検出した矩形を描く溝で、幅が約1.50m、深さは約0.30~0.40mである。弥生時代中期の土器が多く出土したが、須恵器も埋土中から出土したため、遺構の年代は古墳時代中期に属するものと判断した。

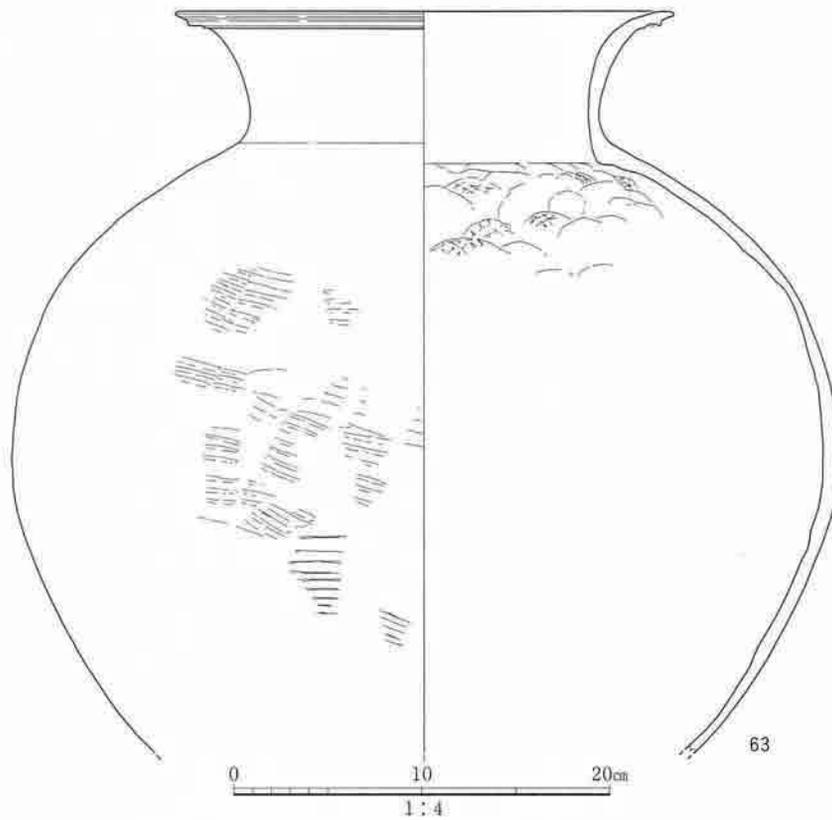


図33 SD703出土遺物(2)

5) 古墳時代後期～飛鳥時代の遺構と遺物

畠と溝を検出した。

i) 畠

第9c層の下面(図35・37)、第9a層の下面(図36・37、図版6)で畠の畝間溝を検出した。これらは

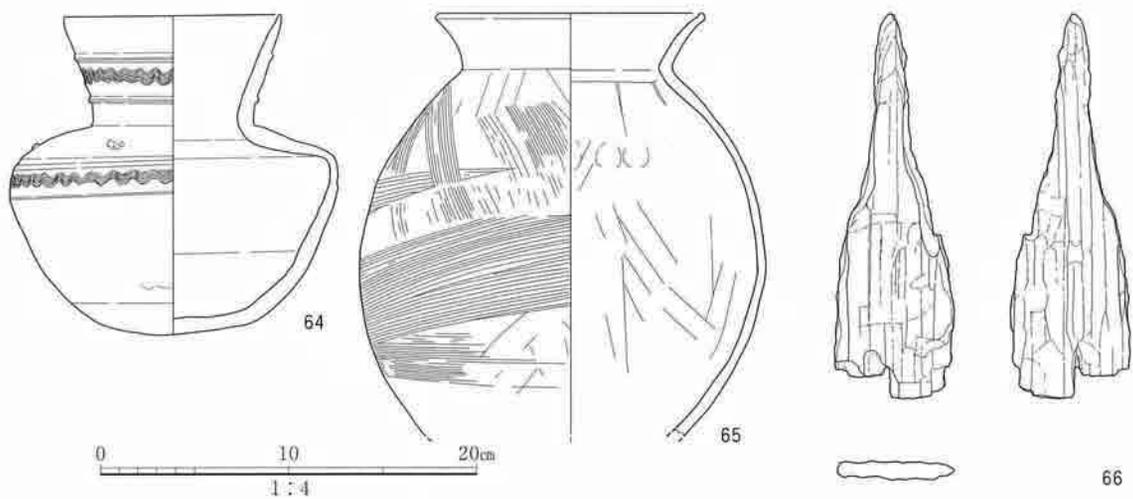


図34 SD706出土遺物

長さが0.60～4.50m、幅が約0.60mで判状あるいは紡錘形をしており、深さ約0.15mであった。I区南側では南北方向のものもあったが、II・拡張区では東西方向に平行して並ぶ状況が観察された。溝の底には、平面では半月状、断面では三角形を呈する耕作道具の痕跡が認められた。遺構の断面からは、耕起した土(第9c層)の上を砂礫からなる水成層(第9b層)が覆い、さらにその上から耕す(第9a層)といった堆積状況が観察された。

花粉・種子等の分析の結果、炭化米が出土し、イネ属型花粉が多産したことから畠と考えられる[上中央子・大庭重信2006]。また、[上中央子・大庭重信2006]での分析との対比のため、図35～37では畠A～Cと領域を入れ、断面図を対応させている。

ii)溝

SD708(図6・36・38・40、図版26) 幅0.50～1.00m、深さ0.10～0.30mで、脇から畠状遺構が東西に延びていた。埋土は畠状遺構の堆積土中に挟在するものと共通しており、これらの溝から畠状遺構に水や砂礫が供給されたと考えられる。

埋土中から70・71が出土した。70は土師器甕である。外面はナデ調整後、下半部に右下から左上方向のケズリを入れる。内面は下半を縦方向、上半部を横方向のケズリで整える。口縁部は内外面を同時に横方向のナデで整える。

71は初期須恵器甕である。肩部内外面をそれぞれ横方向のナデによって調整したのち、口縁部に横方向のナデを巡らす。

SD709(図6・27・36・38) 幅0.65m、深さ0.10mの浅い南北方向の溝で、灰オリーブ色の細礫で埋まっていた。SD708に切られていた。

SD710(図6・36・38・40、図版26) 幅0.50～0.60m、深さ0.10～0.30mの浅い南北方向の溝で、粘土質シルトやシルトといった泥質の堆積であった。埋土中にはオオタニシが含まれていた。

埋土中から72・73が出土した。72は椀形高杯である。スカシ孔は3箇所である。杯部は内外面を横方向のナデで整え、内面に放射状に暗文を施す。脚部外面は縦方向のミガキで整え、脚部内面には工具の回転による浅いケズリが認められ、端部はヘラで切り取って整形する。

73は椀形高杯である。スカシ孔は3箇所である。杯部の内外面を横方向のナデで整え、内面に放射状に暗文を施す。脚部外面は縦方向のミガキで整え、脚部内面には工具の回転による浅いケズリが認められ、端部はヘラで切り取って整形する。

SD711(図6・36・38・39、図版26) 幅0.50～1.60m、深さ0.10～0.30mで、脇から畠状遺構が東西に延びていた。埋土はSD708と類似していた。畠状遺構に見られる砂礫は、このSD708・711を通してもたらされたものと判断される

67は土師器長胴甕である。体部外面は板状工具によるナデ、内面はケズリで整える。いずれも縦方向の調整である。口縁部は内外面を同時にヨコナデで整える。煤、コゲの付着は認められない。

68は須恵器高杯である。椀形の杯部である。脚部内面には接合痕が認められる。

69は須恵器有蓋高杯である。脚部には4個の長方形スカシを2段に入れる。加耶系の陶質土器あるいはTG232～ON231型式に属する初期須恵器であろう[田中清美2005]。

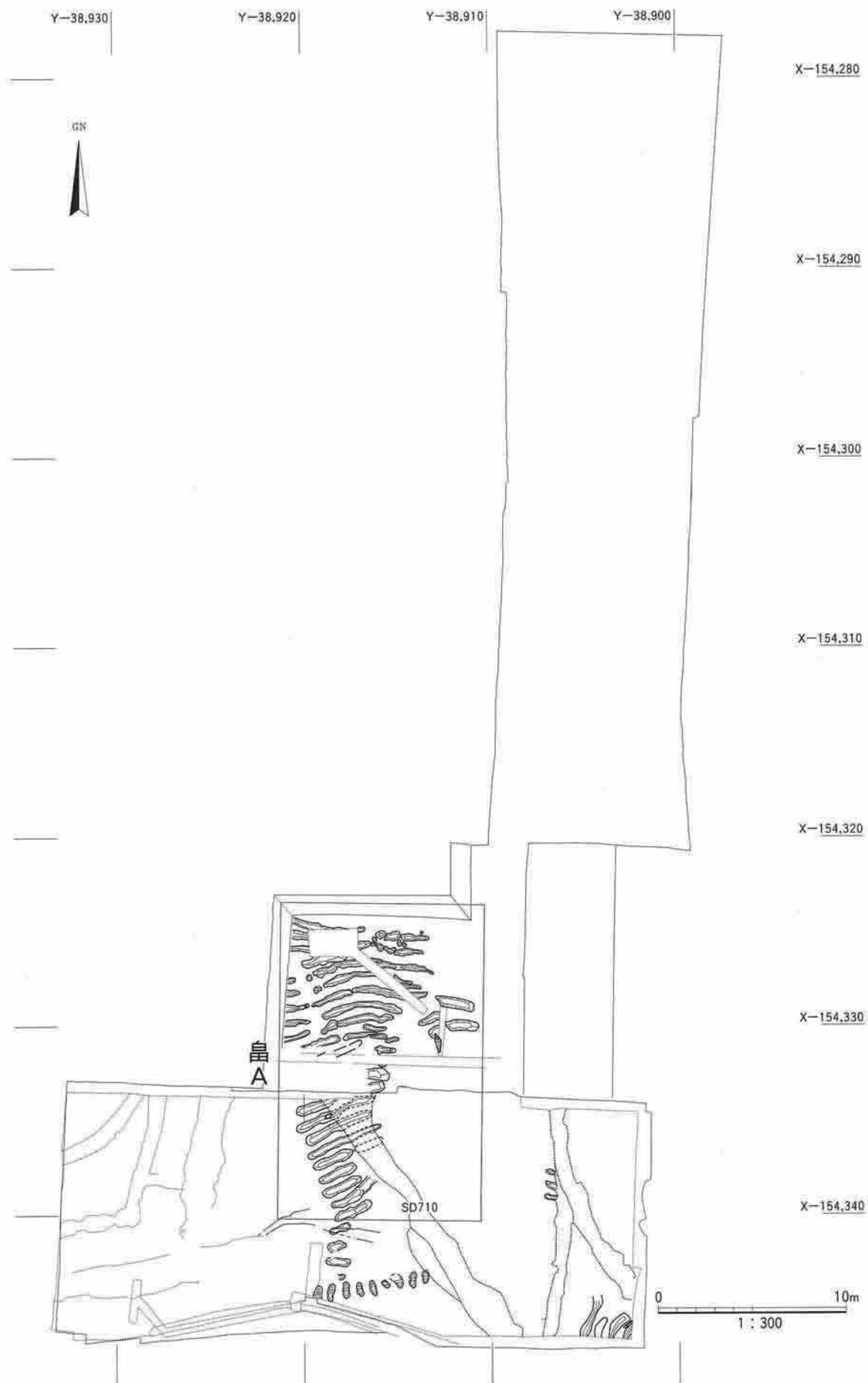
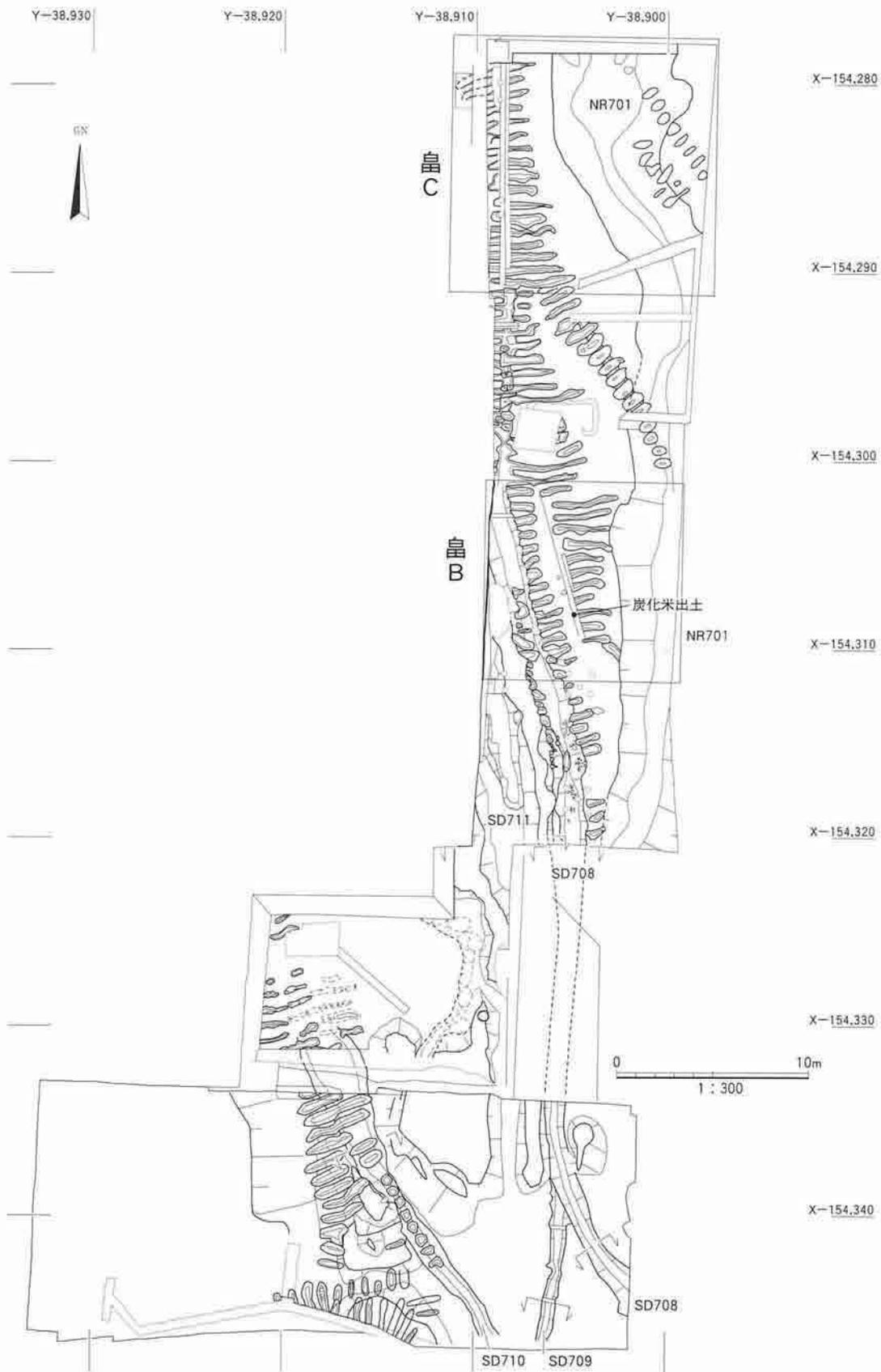


図35 第9c層下面検出遺構(冢A部分の断面図は図37を参照)



SD708~711は第
9b層下面検出遺構

図36 第9a・9b層下面検出遺構(倉B・C部分の断面図は図37を参照)

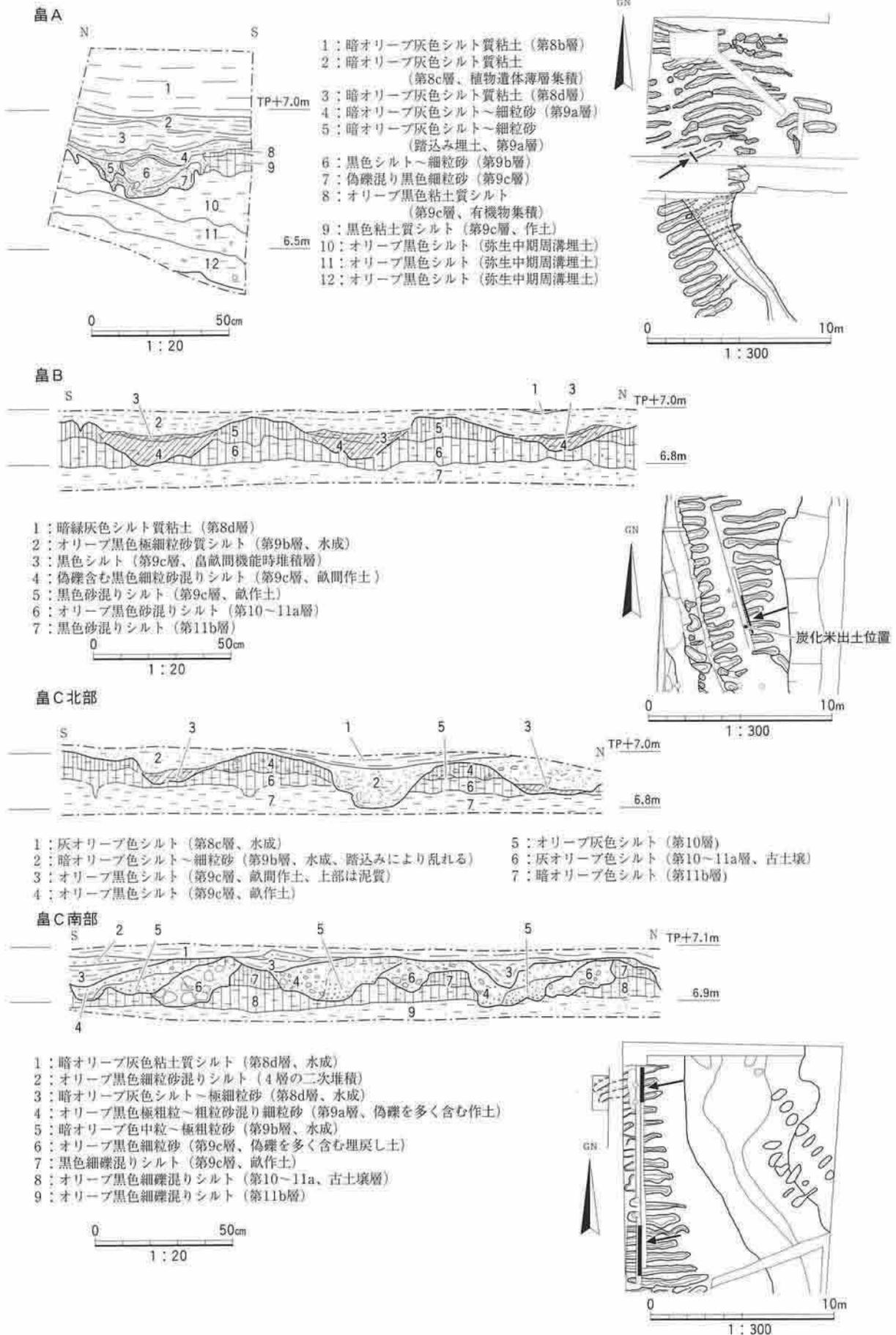


図37 畠断面図(太線は断面の位置、矢印は断面の向きを示す)

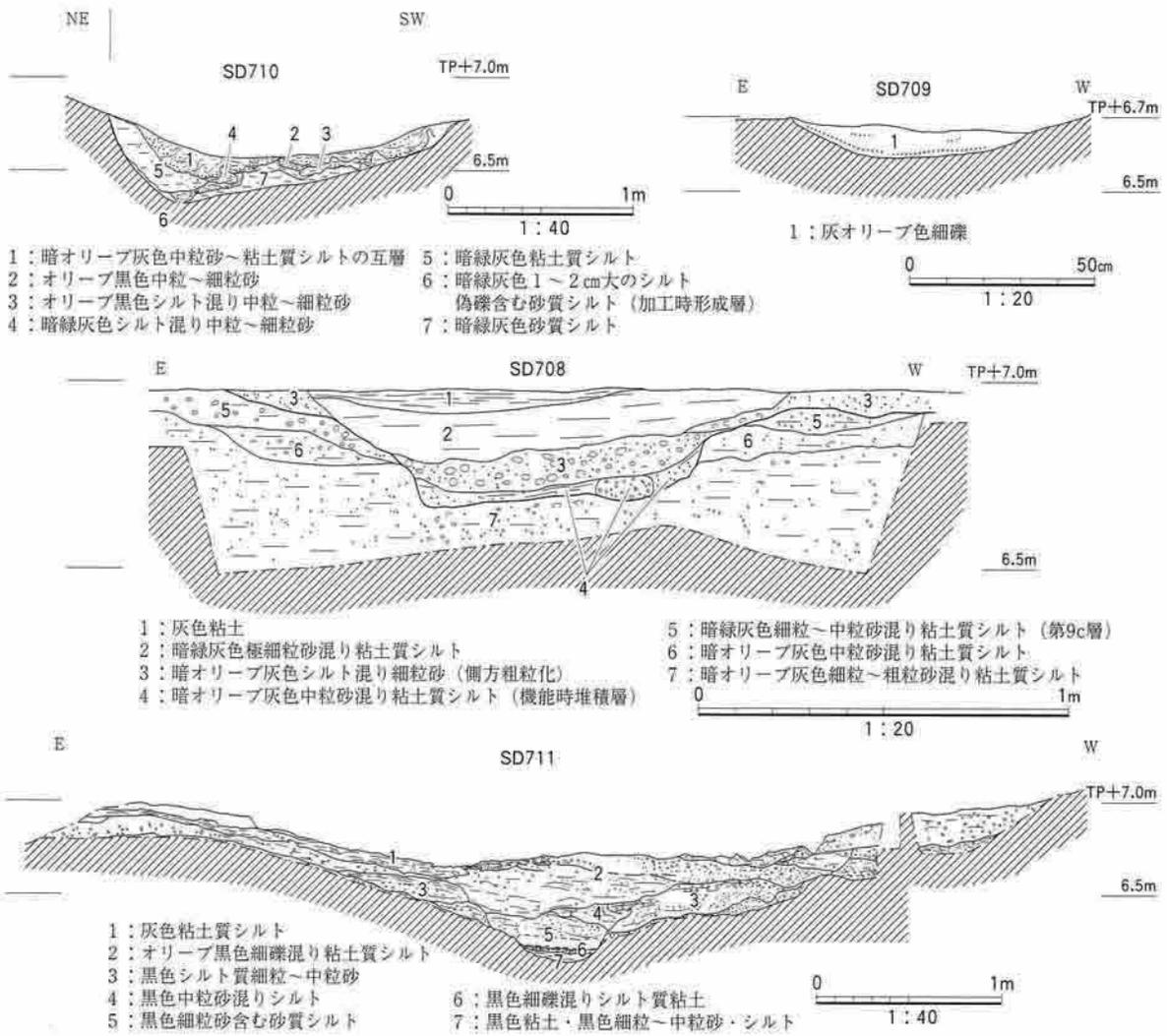


図38 SD708～711断面図(断面位置は図36参照)

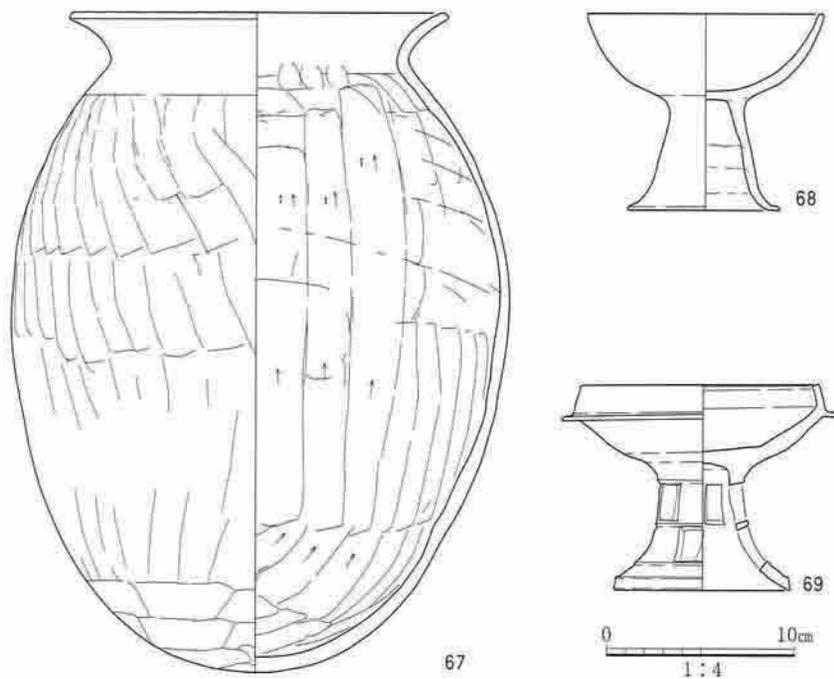


図39 SD711出土遺物

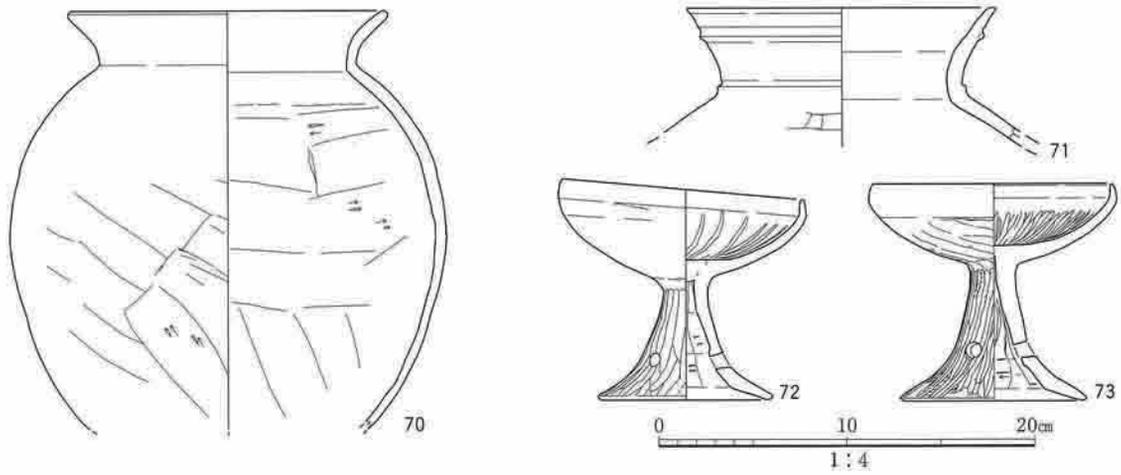


図40 SD708・710出土遺物
SD708(70・71)、SD710(72・73)

6) 奈良時代の遺構と遺物

NR501(図41、図版26) I区南部で第5層を埋土とする東西方向の自然流路NR501を検出した。

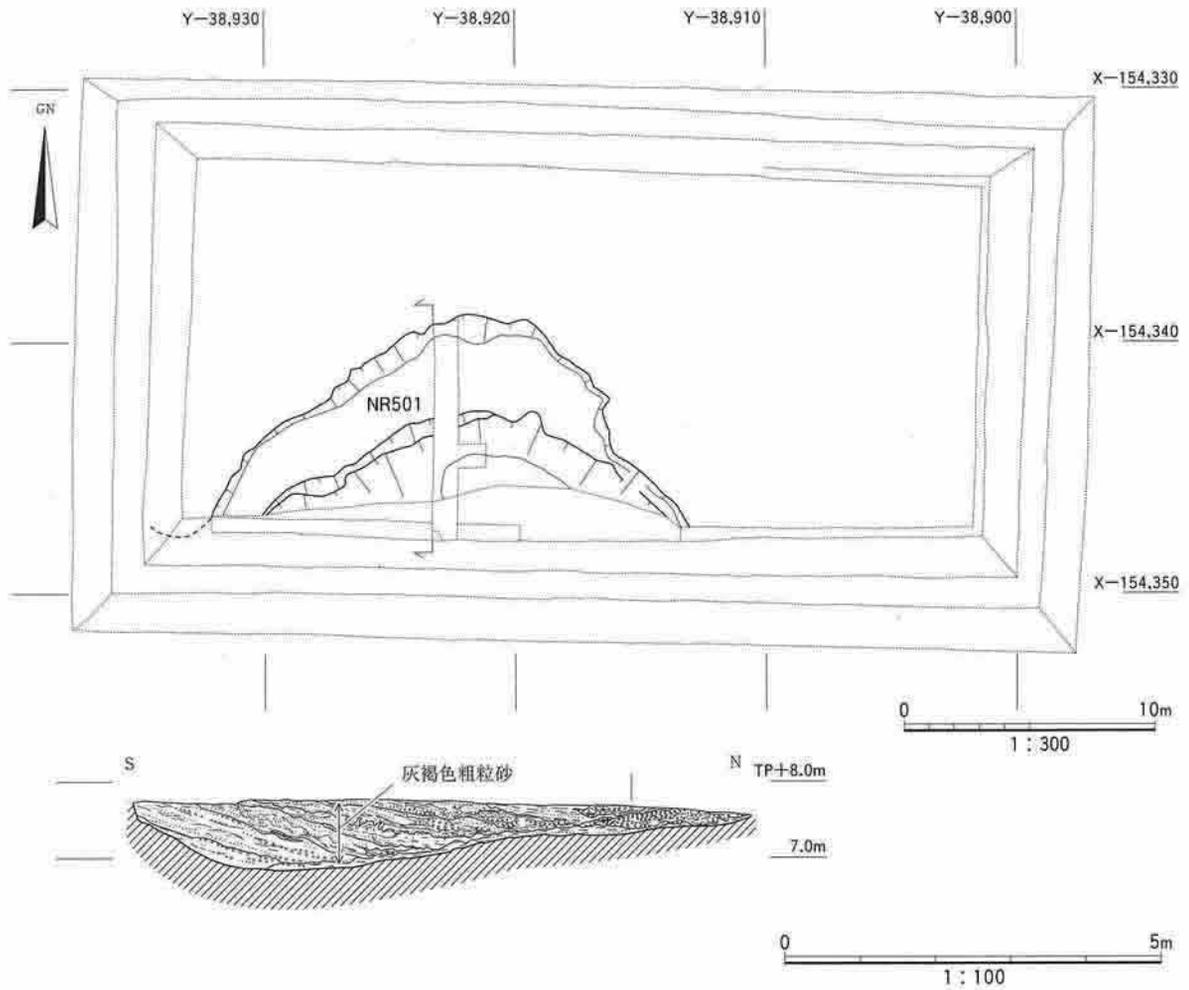


図41 NR501平面図・断面図

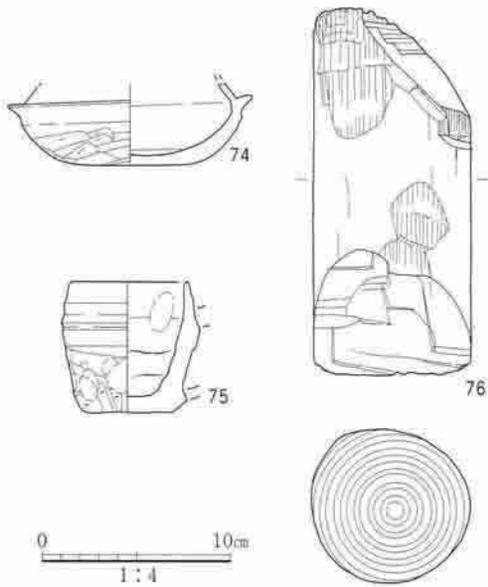


図42 NR501出土遺物

NG01-14次調査で検出されたNR501と一連の流路と考えられる流路であり、蛇行していた。また、本調査区は流路の攻撃面に当たっているためか、NG01-14次調査に比べ遺物の量がかなり少なく、埋土の中位から平城宮土器Ⅰ～Ⅱに相当する土器やイヌの下顎骨(第三章第1節)、イシガイ科の貝類が出土した。それ以外に、Ⅰ区の南西隅では水成層の切合い関係が認められたほか、流路の最下部から飛鳥時代の土器が一定量出土したことから、NR501の下位に先行する流路があった可能性が考えられる。

74は須恵器杯身である。底部外面にケズリを施したのち、側縁部分を右から左方向のケズリで整える。TK73型式に属するとみられる。

75は須恵器把手付き碗である。口縁部は内外面を同時に横方向のナデで整える。底部の外側縁は右から左方向にケズリを施す。

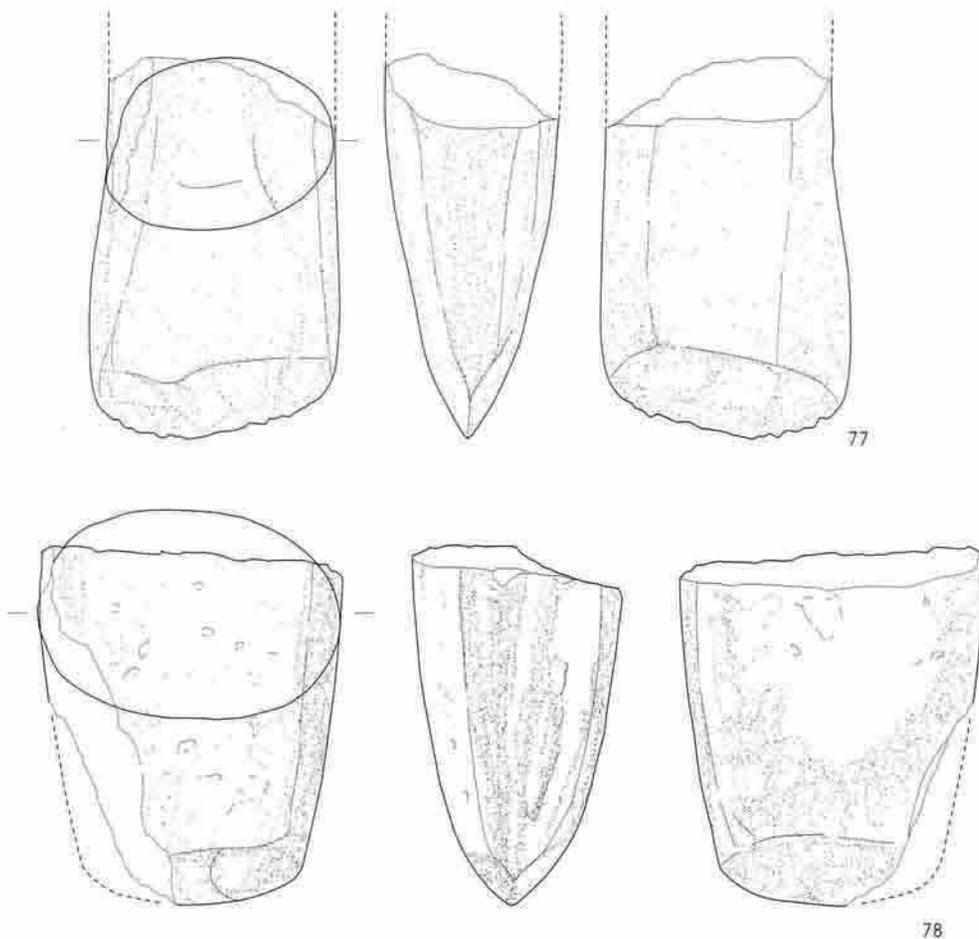


図43 各層出土遺物(1)
第10層(77)、第10層以下(78)

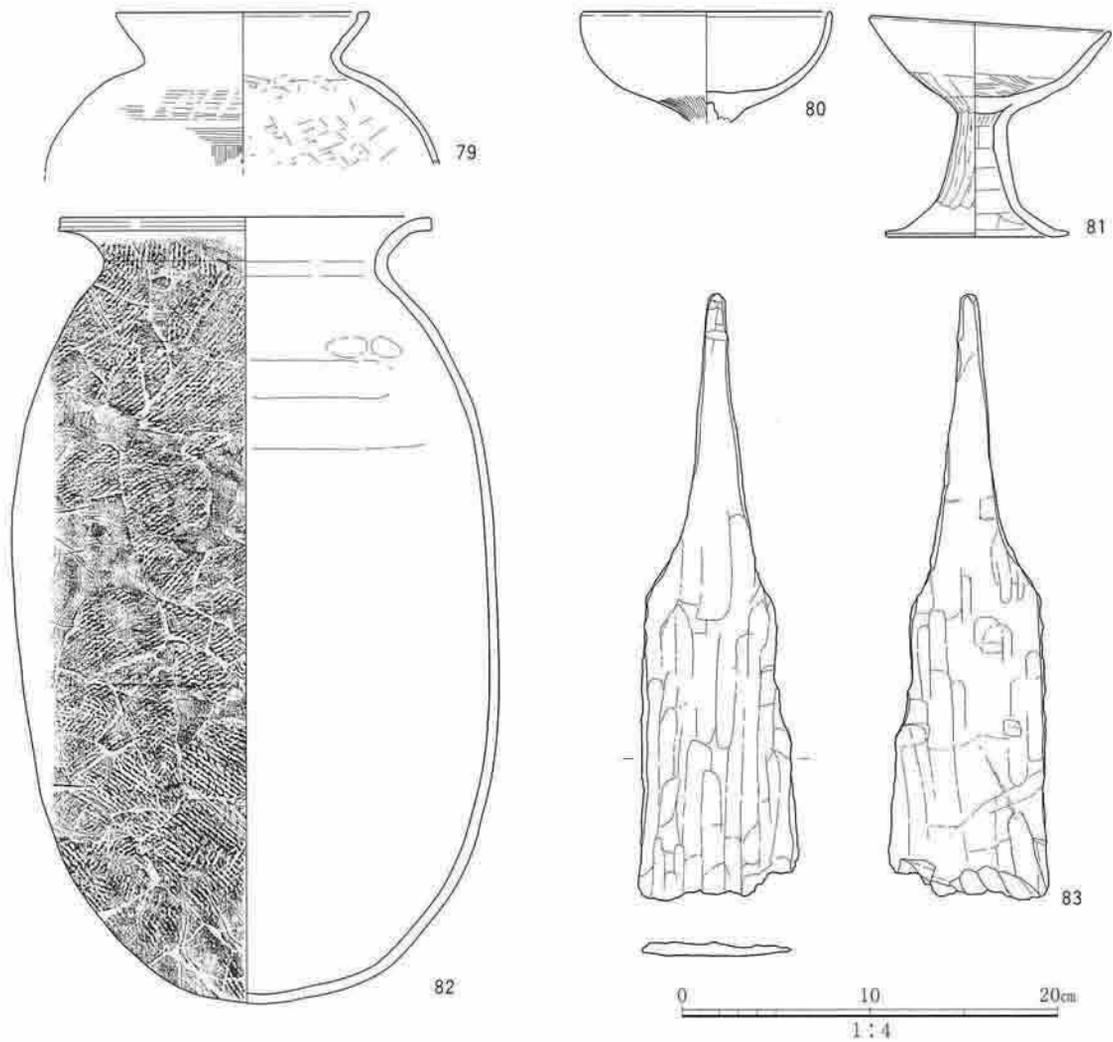


図44 各層出土遺物(2)

第9層(79~81・83)、第8・9層(82)

76は杭とみられる丸太材である。端部に加工痕がある。マツ材である。

7) 平安時代以降の遺構と遺物

第4層より上は基本的に作土から成る。第1・2層の下面で鋤溝群が多数存在することを断面で観察した。各層によって溝の規模は異なるが、いずれも南北方向のものである。本調査区の南側で行われたNG02-1次調査でも、同一層準で南北方向の耕作溝が見つまっている。

8) 各層出土の遺物

各層より出土した遺物について以下に述べる(図43・44)。第10層以下から78、第10層から77、第9層から79~81・83、第8・9層から82が出土した。

77は閃緑岩製の太型蛤刃石斧である。幅5.0cm、厚さ3.4cmであり、基部を欠損するが、長さ7.6cmが残存する。表裏両面から刃部を研ぎ出しており、刃部長は4.8cmである。

78は砂岩製の太型蛤刃石斧である。幅7.0cm、厚さ4.2cmであり、基部を欠損するが、長さ7.0cmが残存する。表裏両面から刃部を研ぎ出しており、刃部長は4.3cmに復元される。破面には赤く変色し、煤が付着した部分が認められ、破損後に熱を受けている。

79は布留式の甕である。口縁部はやや内湾してたち上がり、内外面に横方向のナデを加えて、端部を平坦にしている。体部外面は縦方向のハケののち、横方向のハケで整える。内面は左から右方向のケズリののち、頸部にユビオサエを施す。

80は椀形高杯の杯部である。内外面を横方向のナデで整え、口縁部は横方向のナデを巡らせ、内面には沈線が1条巡る。杯部と脚部の接合部分はハケを施す。

81は高杯である。杯部内面はハケ、外面はナデを施したのち、上半部内外面を横方向のシャープなナデで整える。脚部外面は上から下方向、内面は左から右方向のケズリを施す。裾部は緩やかな横方向のナデで整える。

82は韓式系の長胴甕である。外面は縄蓆文タタキ、内面はナデで整える。ナデの方向は下半は不明であるが肩部は横方向である。口縁部は内外面を同時にヨコナデで整える。煤は肩部から底部付近にかけて付着しており、底面のものは酸化している。また、内面にコゲは認められない。

83は杓子状木製品である。長さ31.6cm、幅8.2cmで、加工痕が表面と側面に認められた。樹種はコナラ属アカガシ亜属であった。

第2節 NG06-3次調査

1) 基本層序

平均層厚1.00mの盛土の下位に分布した地層を、下記の第1a層～第11層に区分した(図46、図版1・2、表4)。

第1a層：黒褐色細粒砂混りシルトで構成される旧住宅建物建設前の現代作土層である。

第1b層：暗オリーブ色細粒砂混りシルトで構成される旧住宅建物建設前の現代作土層である。

第2a層：暗オリーブ色細粒砂混りシルトで構成される近世の作土層である。

第2b層：暗オリーブ色細粒砂混りシルトで構成される近世の作土層である。

第2c層：黄褐色細粒砂混りシルトで構成される近世の作土層である。

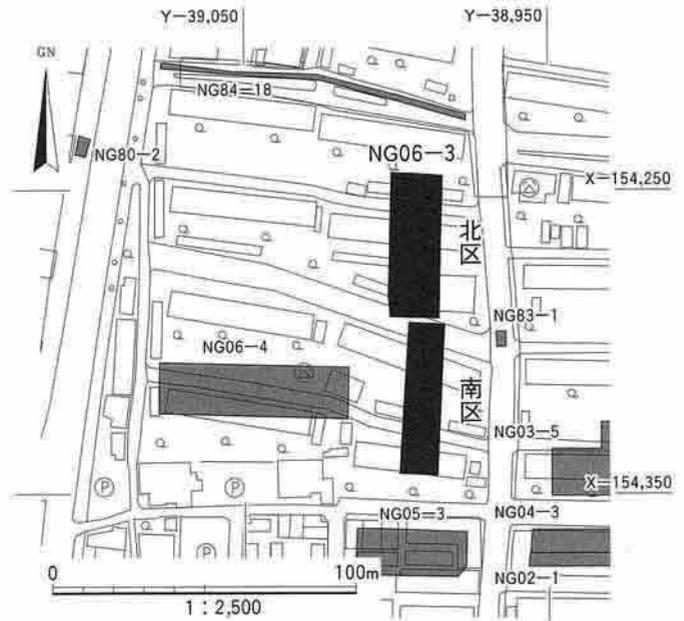


図45 調査地位置図

表4 NG06-3次調査層序表

層序	岩層	層厚(cm)	特徴	検出した遺構	年代	長原層序
第1a層	黒褐色細粒砂混りシルト	5	作土		現代	NG0
第1b層	暗オリーブ色細粒砂混りシルト	4	作土		現代	NG0
第2a層	暗オリーブ色細粒砂混りシルト	5～10	作土		近世	NG1
第2b層	暗オリーブ色細粒砂混りシルト	5～10	作土		近世	NG1
第2c層	黄褐色細粒砂混りシルト	10	作土		近世	NG1
第3a層	にぶい黄褐色細粒砂混りシルト	7	作土		中世	NG4
第3b層	オリーブ褐色細粒砂混り粘土	8～10	作土		中世	NG4
第4a層	オリーブ褐色細粒砂	5～10	水成		平安	NG4
第4b層	灰オリーブ色細粒砂混りシルト	3～50	作土	↑畦畔、踏込み	平安	NG4
第4c層	灰オリーブ色粘土	8～20	作土		平安	NG4
第4d層	灰オリーブ色粘土	10～16	作土		平安	NG4
第5層	にぶい黄褐色細粒砂混りシルト	7	水成		奈良	NG5
第6層	灰色細粒砂混りシルト	20～50	湿地性堆積		飛鳥～奈良	NG5～6A
第7a層	オリーブ黒色細粒砂混りシルト	3	古土壤～作土	↑SD601、NR602	古墳後期～飛鳥	NG6B～7A
第7b層	細礫含む黒褐色シルト混り細粒砂	3～13	古土壤	↑SB701～704、SP705～711、SK712、SD713、SX714～717	古墳中期	NG7B
第8層	浅黄色細粒砂	0～20	水成		弥生後期～古墳前期	NG8A・B
第9a層	灰オリーブ色シルト混り細粒砂	0～5	古土壤	↑SD801～805、SK806、SD807、SK808～812、SD813・814	縄文晩期～弥生中期	NG8C・9A
第9b層	暗緑灰色中粒砂	60～85	水成		縄文後期	NG9B
第10層	オリーブ黒色極細粒砂混りシルト	7	古土壤		縄文早～中期	NG12D
第11層	オリーブ灰色シルト	5	古土壤		後期旧石器	NG13

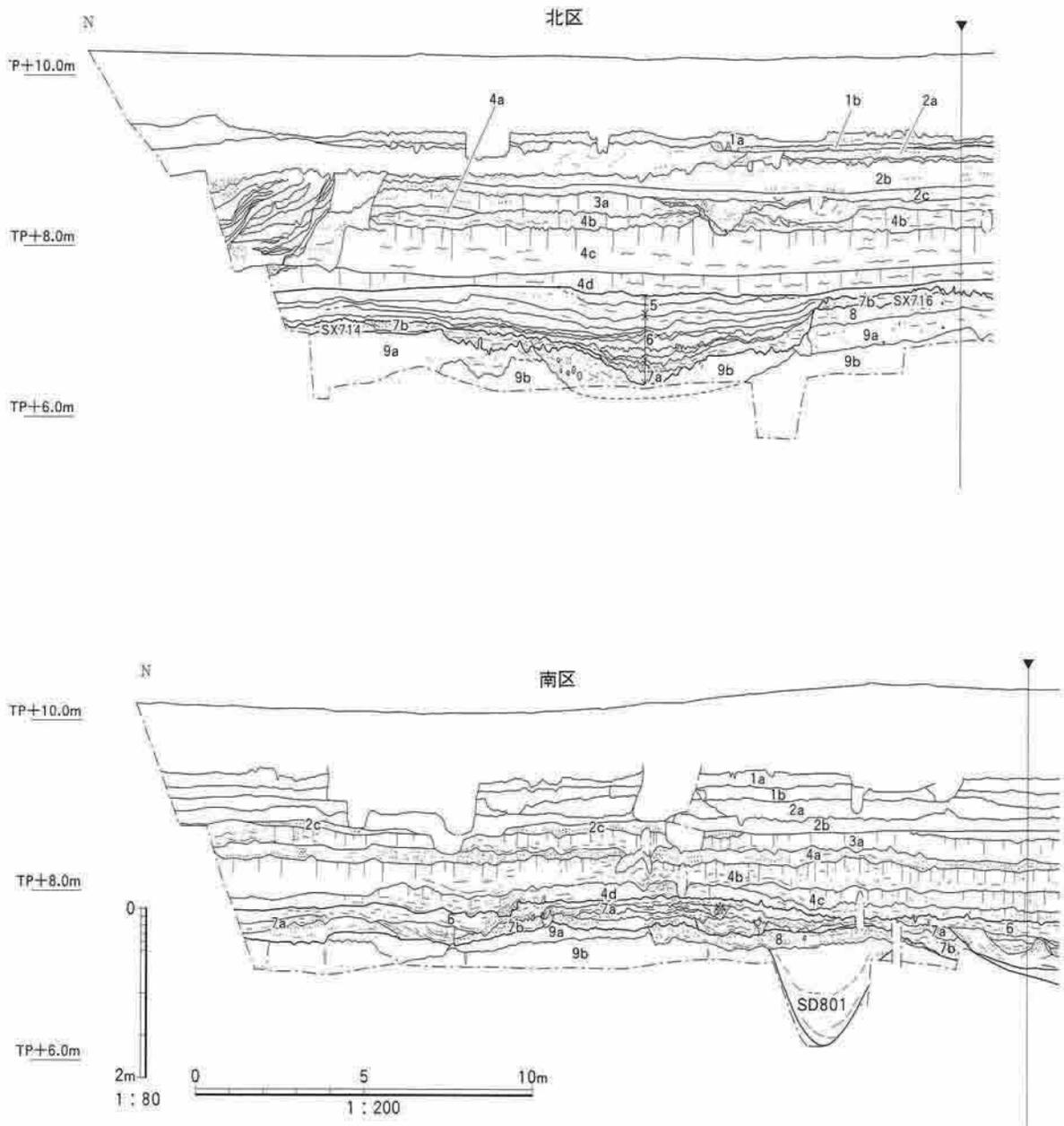


図46 北区・南区東壁断面図

第3a層：にぶい黄褐色細粒砂混りシルトで構成される中世の作土層である。

第3b層：オリーブ褐色細粒砂混り粘土で構成される中世の作土層である。

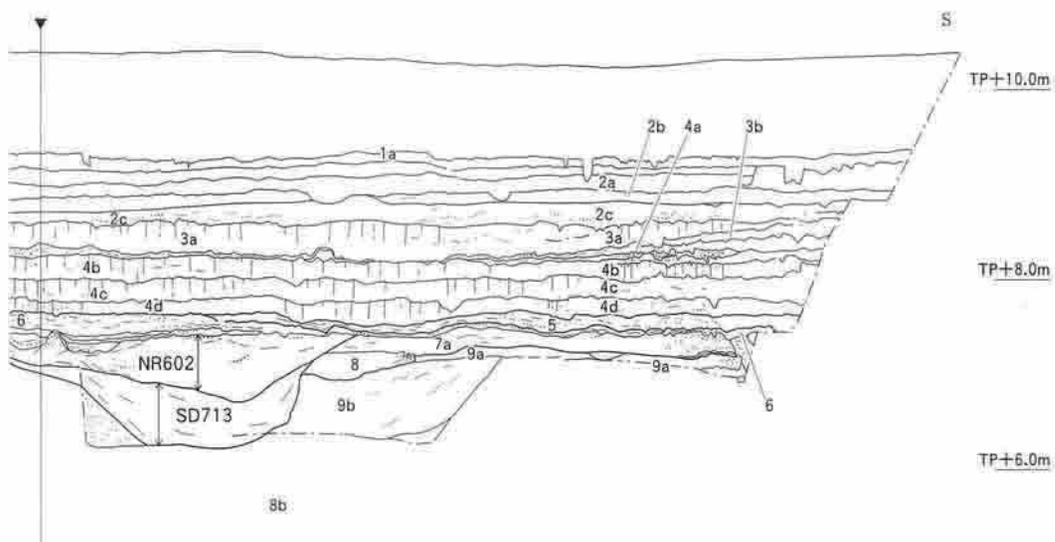
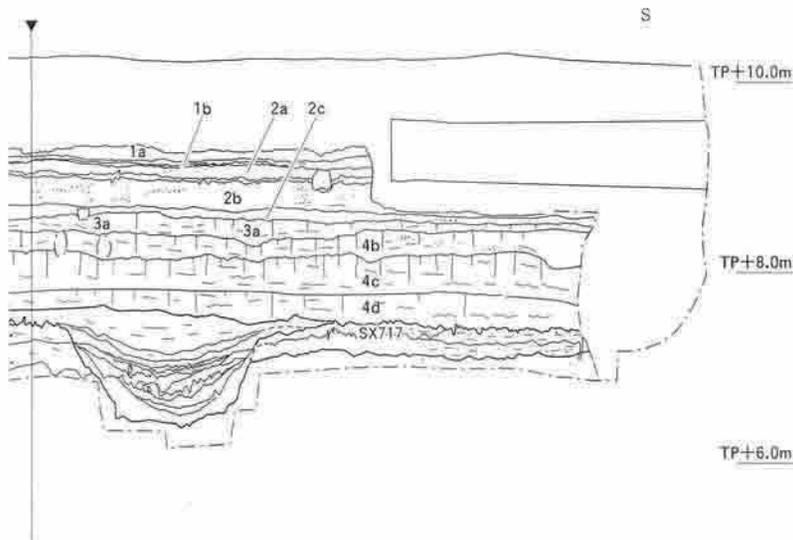
第4a層：オリーブ褐色細粒砂の平安時代の水成層である。

第4b層：灰オリーブ色細粒砂混りシルトで構成される平安時代の作土層である。上面に畦畔と踏込みが認められた。

第4c・d層：灰オリーブ色粘土で構成される平安時代の作土層である。層厚は第4c層が0.08m、第4d層が0.10～0.16mと後者の方が厚かった。

第4d層：灰オリーブ色粘土で構成される平安時代の作土層である。

第5層：にぶい黄褐色細粒砂混りシルトで構成される奈良時代の水成層である。



第6層：灰色細粒砂混りシルトで構成される飛鳥～奈良時代の湿地性堆積層である。南区では層厚0.20m、北区では層厚0.50mと、北へ向うほど厚く堆積していた。

第7a層：オリブ黒色細粒砂混りシルト層で構成される古墳時代後期～飛鳥時代の古土壌である。本層は南区北半では耕起されており、下位の第7b層に由来する2～3cm大の偽礫が含まれていた。その場所において畦畔の残欠が認められたため、南区北半は作土化していたと判断される。本層上面で流路と溝を検出した。

第7b層：細礫含む黒褐色シルト混り細粒砂で構成される古土壌である。この上面で古墳時代中期の遺構を検出した。本層はNG7B層に対比される。

第8層：浅黄色細粒砂で構成される弥生時代後期～古墳時代前期の流路内の堆積層である。本層は

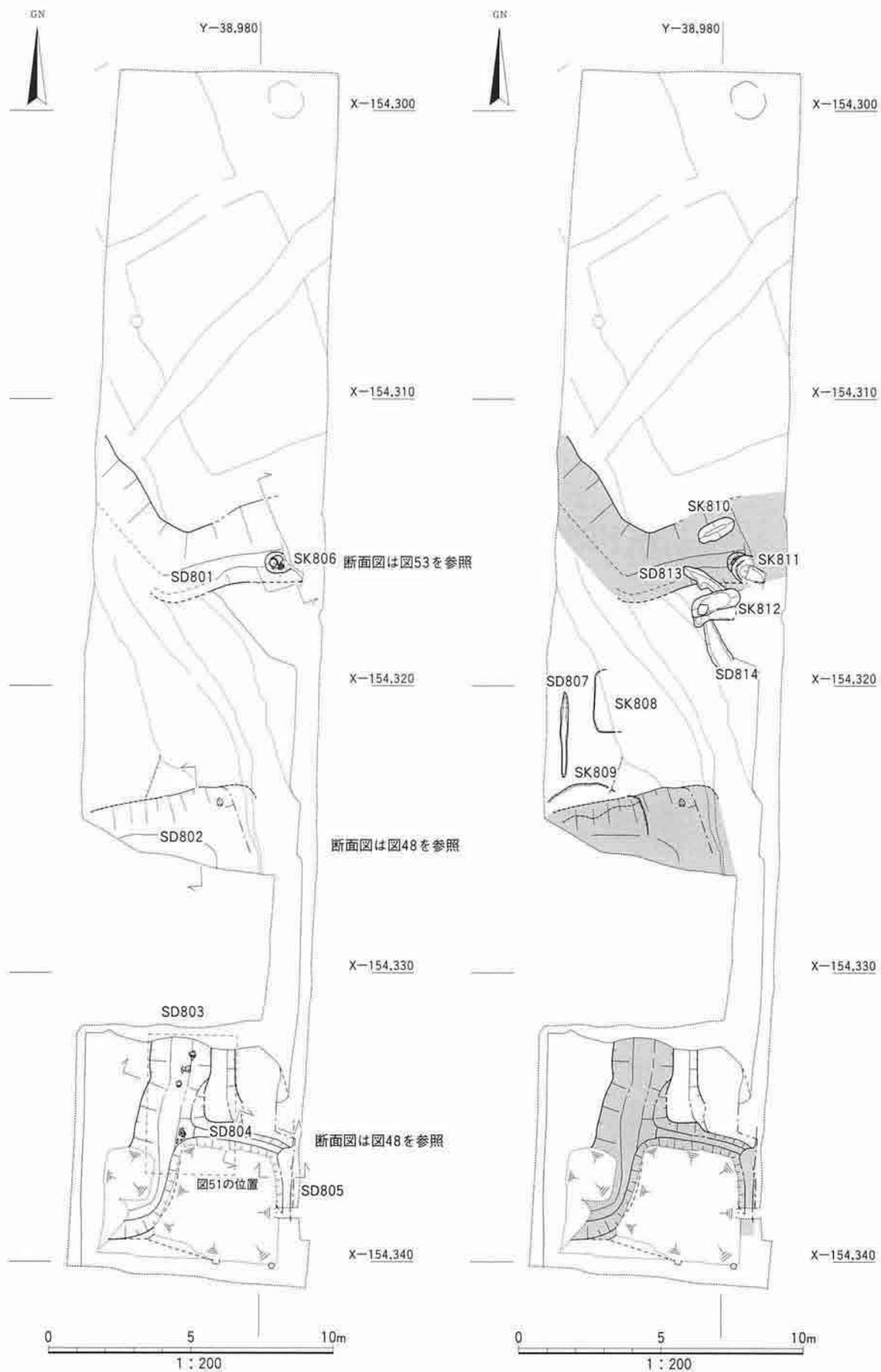


図47 南区第9a層上面遺構
右図はSD801・802埋没後に設けられた遺構

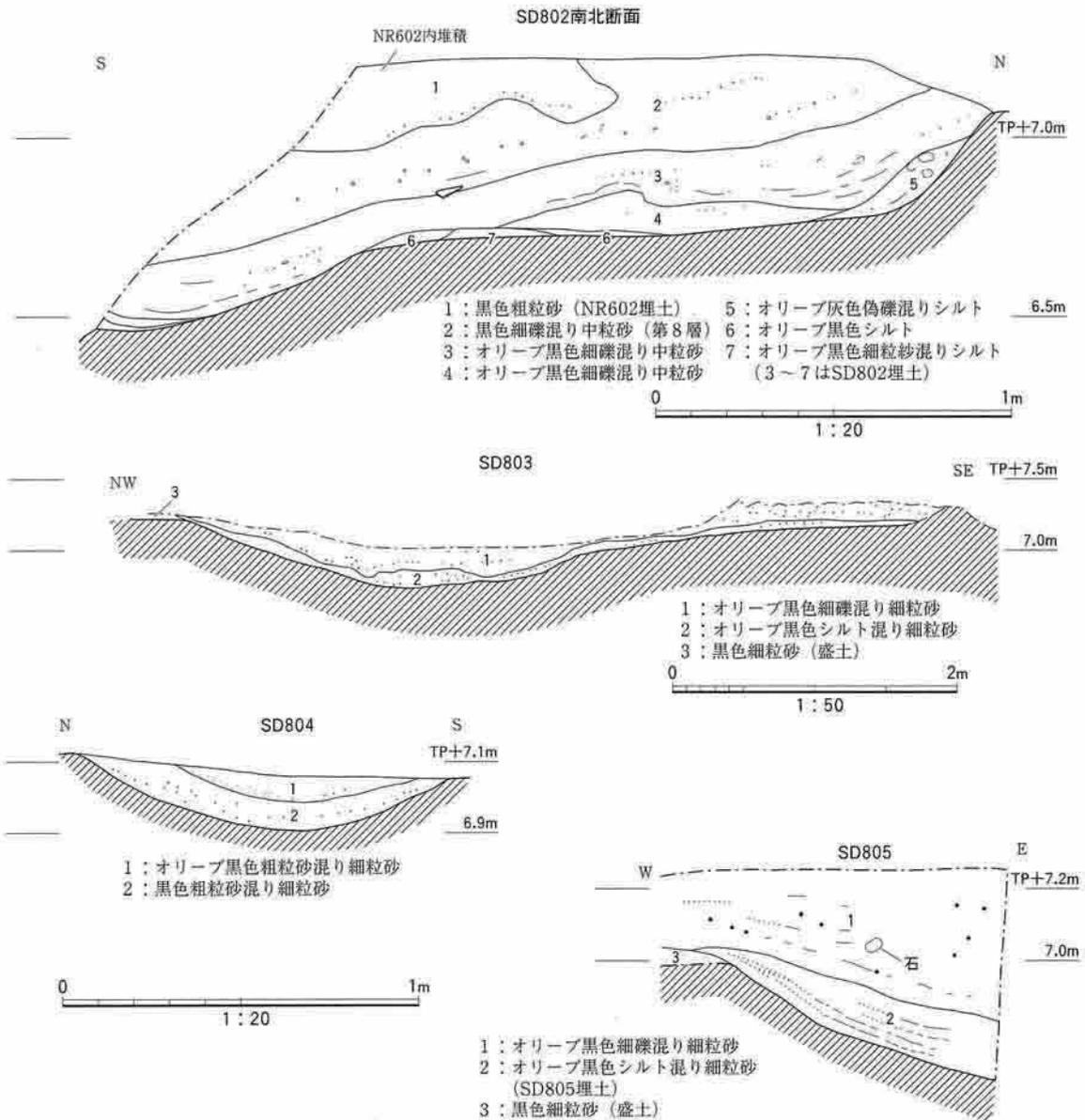


図48 SD802~805断面図

NG8A・B層に対比される。

第9a層：灰オリーブ色シルト混り細粒砂の古土壤層である。この上面で弥生時代中期の遺構を検出した。本層はNG8C・9A層に対比される。

第9b層：暗緑灰色中粒砂層である。下位では直径2.0cmの円礫を含むが、上方は細粒化しており、極細粒砂へと漸移していた。本層は出戸自然堤防を構成するNG9B層に対比される。

以下の第10・11層は南区南半に深掘りトレンチを設けて確認した。

第10層：TP+5.50~5.57mに堆積していたオリーブ黒色極細粒砂混りシルトの古土壤層である。NG12D層に対比される。

第11層：TP+5.50m以下で見つかったオリーブ灰色シルトからなる古土壤層である。上面に乾痕が顕著であった。NG13層以下に対比される。

2) 弥生時代中期の遺構と遺物

南区の第9a層上面において、溝SD801～805、SD801の底で土壌SK806を検出した(図47～58、図版7・8・19・27・28)。また、溝SD801が埋没したのちに土壌SK810～812、小溝SD813・814、さらにSD802が埋没した後にSK809が設けられていた。切合い関係は無かったが埋土が類似していたことから小溝SD807もSD801・802埋没後の遺構と判断した。

溝SD803からは焼成後穿孔を施した土器が出土しており、これと直交あるいは平行して溝SD804・805は設けられていた。さらに、SD801・802も「L」字形に屈曲する形状であることから、方形周溝墓の溝であった可能性が高い。またSD803の西側には層厚0.05～0.09mの盛土が認められた。

i) 溝

方形周溝墓のものと思われる溝SD801～805が最初に掘られ、それらが埋没したのち、小溝SD807・813・814が設けられていた。

SD801(図47・49・53、図版7) 幅2.10～3.00m、深さ0.75mで、最下層にオリーブ灰色シルトが0.2m堆積し、それより上はシルトと細粒砂の互層で埋まっていた。埋土の中層より84・85が出土した。

84は広口壺頸～口縁部である。外面はナデを施したのち、簾状文を口縁部と頸部から体部にかけて施す。頸部から体部の簾状文の幅は4.0cmと幅広い。口縁部には簾状文を施文後、2.0cm間隔で刺突文を入れる。内面は体部にナデを施し、頸部を横方向、口縁部を右下から左上方向のミガキで平滑にする。全体的に二次的に熱を受けており赤く変色する。

85は生駒西麓産把手付き高杯である。杯部の1/3が残存するのみであり、把手を1個として復元している。脚頂部には円盤充填の剥離した痕跡が認められる。把手断面が隅丸方形で、外側に直径0.2cm、深さ0.1cmの刺突文を施す。外面に幅1.5cmの斜列点文を4帯施したのち、外面下半と内面に放射状にミガキを施す。

SD802(図47・48・50・55) 幅2.50m以上、深さ0.50mで、最下層にオリーブ黒色シルトが0.02m堆積し、それより上はシルトと細粒砂の互層で埋まっていた。埋土中より86、溝底より87が出土した。

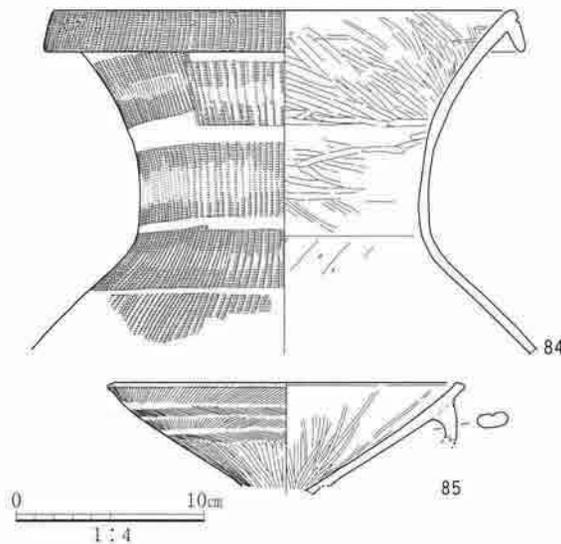


図49 SD801出土遺物

86は高杯杯部である。口縁部を下方に垂下させている。杯部外面は放射状、内面は斜め方向のミガキを施す。口縁部は横方向のナデで整えたのち、外側を横方向にミガキを入れる。

87は大型壺体部である。外面は縦方向のハケ調整後、底部付近に縦方向のミガキを入れる。内面は下半を縦方向、上半を横方向のハケで整える。

SD803(図47・48・51・52、図版7・8・19・27・28) 幅2.10m、深さ0.50mで、最下層にオリブ黒色シルト混り細粒砂が0.1m堆積し、それより上はオリブ黒色細礫混り細粒砂で埋まっていた。溝底より88~91が出土した。

88は生駒西麓産の無頸壺である。頸部に直径0.4cmの孔を2個、一对で2箇所に分ける。体部外面下半は横方向のミガキ、上半はナデで整えたのち、幅1.5cmの簾状文4帯と、斜列点文を1帯入れる。また、口縁端部にも斜列点文が施される。施文方向は簾状文が右から左、斜列点文は左から右である。また体部下半に焼成後穿孔をもつ。

89は広口短頸壺である。底部外面を丁寧なナデで整えたのち体部外面にハケを施し、さらに下半をミガキ、頸部をナデで平滑にする。体部内面は右下から左上方向にハケを施したのち、板状工具を用いた縦方向のナデを入れ、頸部外面に縦方向のハケを施す。また口縁部は上下に拡張し、端部に2条の浅い凹線を入れる。

90は生駒西麓産の長頸壺である。内湾した口縁部が特徴である。外面は体部上半に流水文を施し、その下に幅1.5~1.8cmの簾状文を2帯入れる。また肩部から頸部にかけて幅1.2~1.5cmの簾状文を11帯入れ、その上には幅1.0~1.5cmの列点文を4帯入れる。さらに口縁部には2個一对の円形浮文を4箇所、肩部にはT字形に4個の円形浮文を配し、胴部最大径の位置には3個一对の浮文を8箇所に配置する。内面はナデとオサエで整える。底部付近に焼成後穿孔をもつ。

91は生駒西麓産広口壺である。無文様であり、外面をミガキで整える。内面は縦方向のハケで整える。口縁端部を短く垂下させる。胴部最大径よりやや下に10.0cm大の焼成後穿孔がある。

88~91はいずれもほぼ完形であり、焼成後穿孔も認められるため、供献土器の可能性が高い。

SD804・805(図47・48) 0.50~0.90m、深さ0.21mで、オリブ黒~黒色の粗粒砂混り細粒砂で埋まっていた。

SD807(図47・55) 南北方向の小

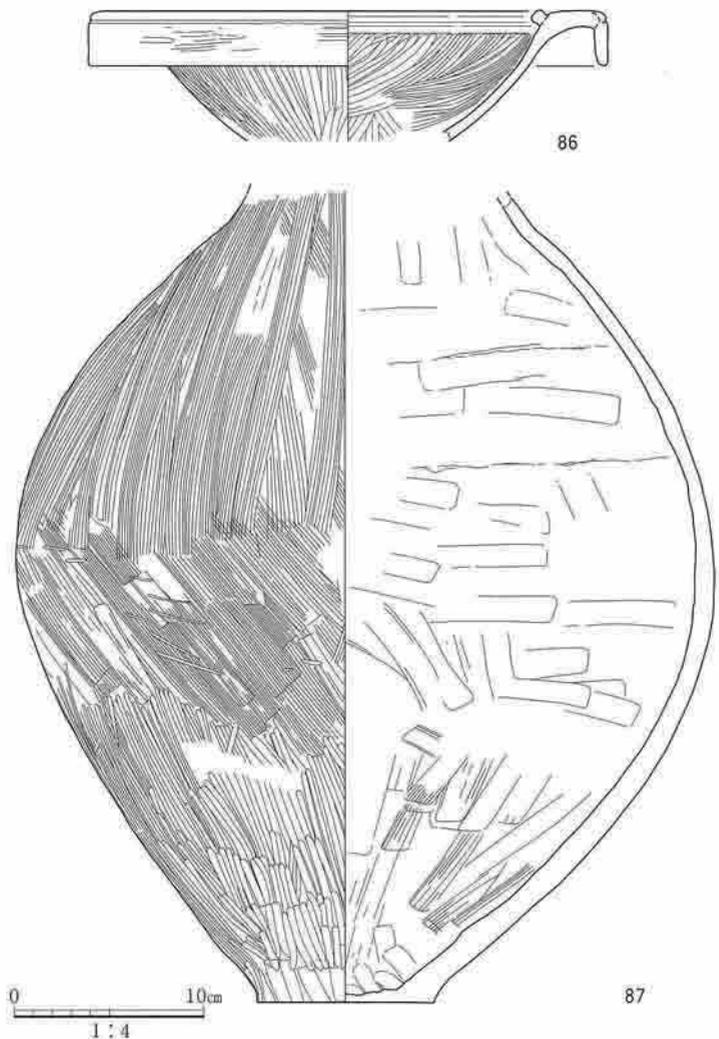


図50 SD802出土遺物

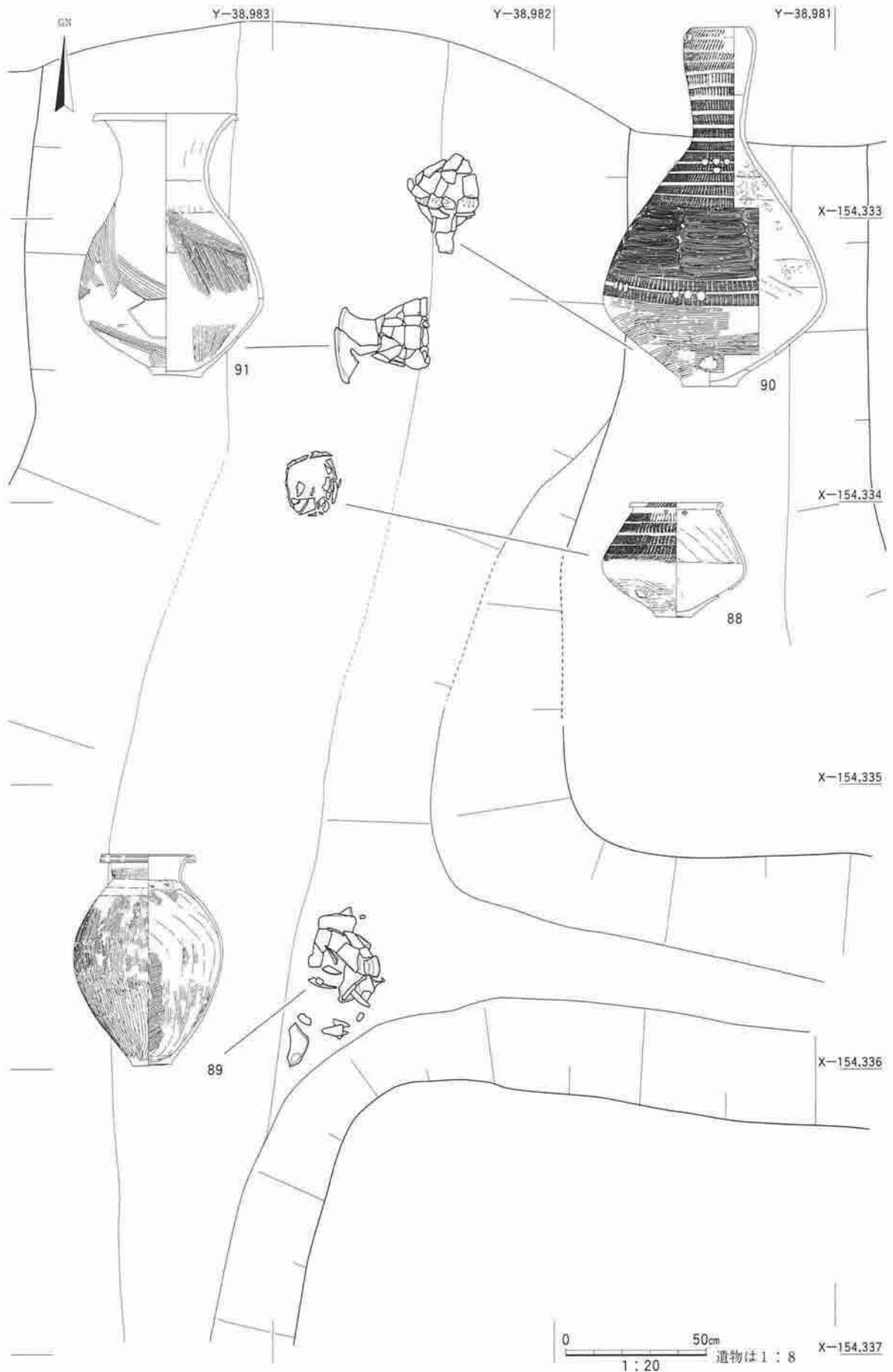


图51 SD803遺物出土状況

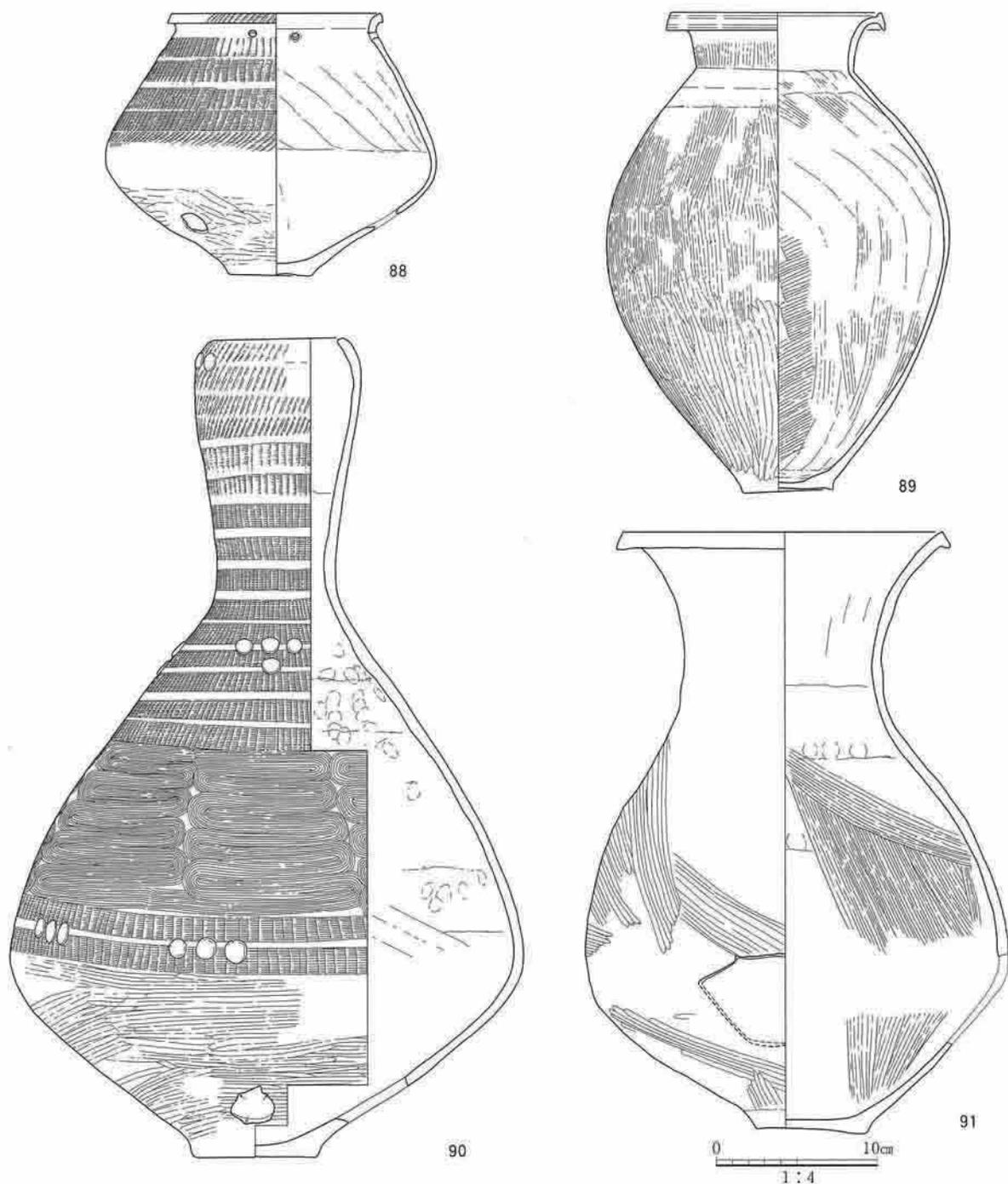


図52 SD803出土遺物

溝で、幅0.20～0.25m、深さ0.12mであった。黒色細粒砂混りシルトで埋まっていた。

SD813(図47・57) 南東から北西方向に延びる幅0.55mの小溝で、深さ0.30mであった。黒色細粒砂で埋まっていた。

SD814(図47・57) 南南東から北北西方向に延びる幅0.70mの小溝で、深さ0.30mであった。SD813と同様、黒色細粒砂で埋まっており、SK812に切られていた。

ii) 土壙

SK806(図47・53・54、図版7・8・28) SD801の溝底に設けられており、直径0.75m、深さ

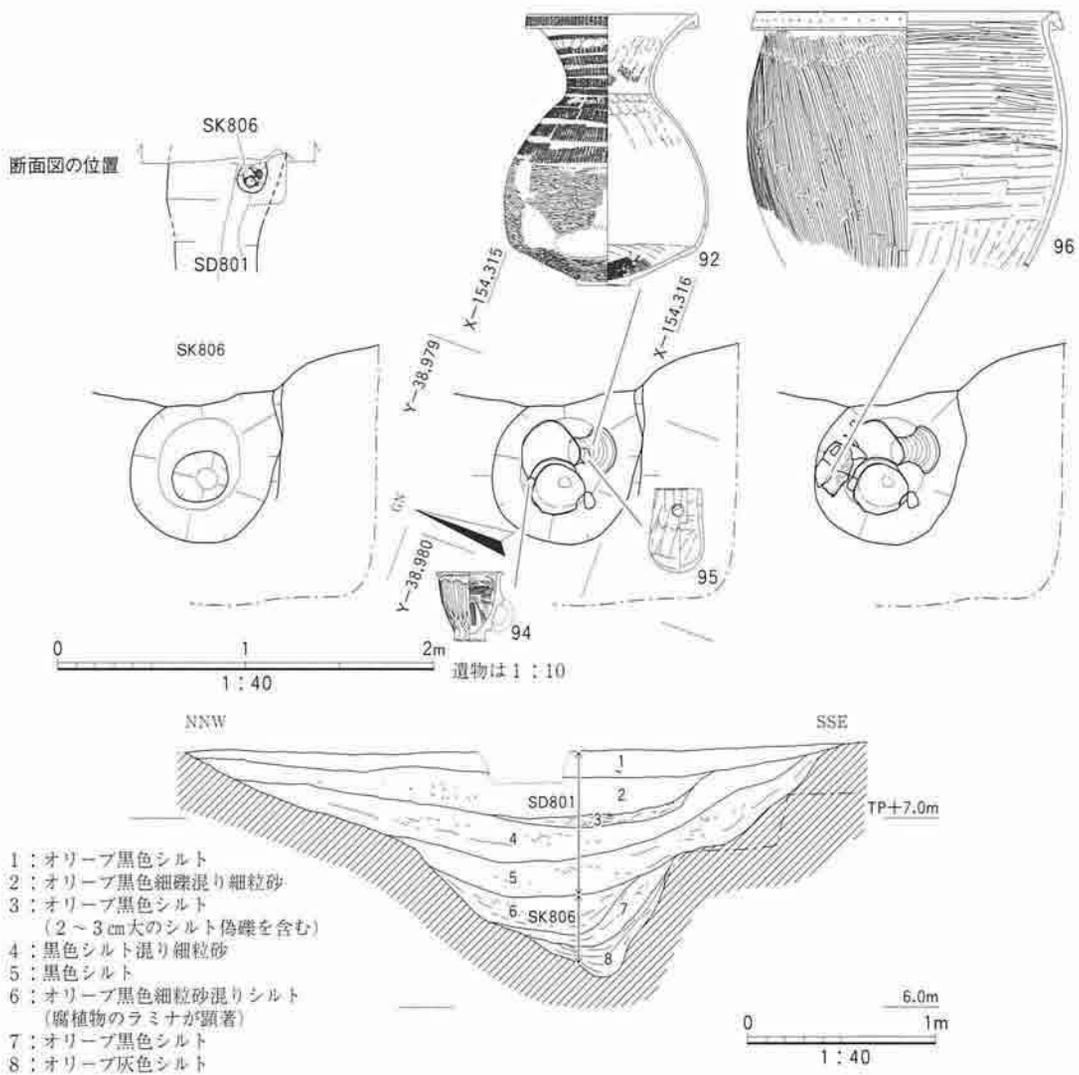


図53 SK806平面図・断面図・SD801断面図

0.44mであった。上層がオリーブ黒色細粒砂混りシルト、中層がオリーブ黒色シルト、下層がオリーブ灰色シルトで埋まっていた。上層には腐植物のラミナが顕著であった。土壌内から92~96が出土した。

92は生駒西麓産の広口壺である。口縁部は垂下させて拡張する。体部外面下半は横方向のミガキで整えており、体部上半から頸部にかけて幅2.0~2.5cmの簾状文7帯と、口縁部に幅1.5cmの簾状文1帯を入れる。これらの簾状文はいずれも右から左方向に施され、口縁部は簾状文施文後に2.0cm間隔で刺突文を施す。内面調整は部位ごとにそれぞれ一定の手法を用いており、底部は横方向のハケ、体部はナデ、頸部はオサエ、口縁部は横方向のナデでそれぞれ整える。体部下半に煤が付着する。

93は生駒西麓産の広口壺底部である。外面を横方向のミガキ、内面を横方向のハケで整える。

94は把手付き甕である。小型の甕に断面が円形で半環状の把手を1箇所に取り付ける。底部をユビオサエで整えずかに外側につまみ出す。体部外面はケズリを施したのち、ミガキで整える。内面はナデ調整後上半部を粗い横方向のハケで整え、下半部は比較的細かな縦方向のハケを施す。外面には黒

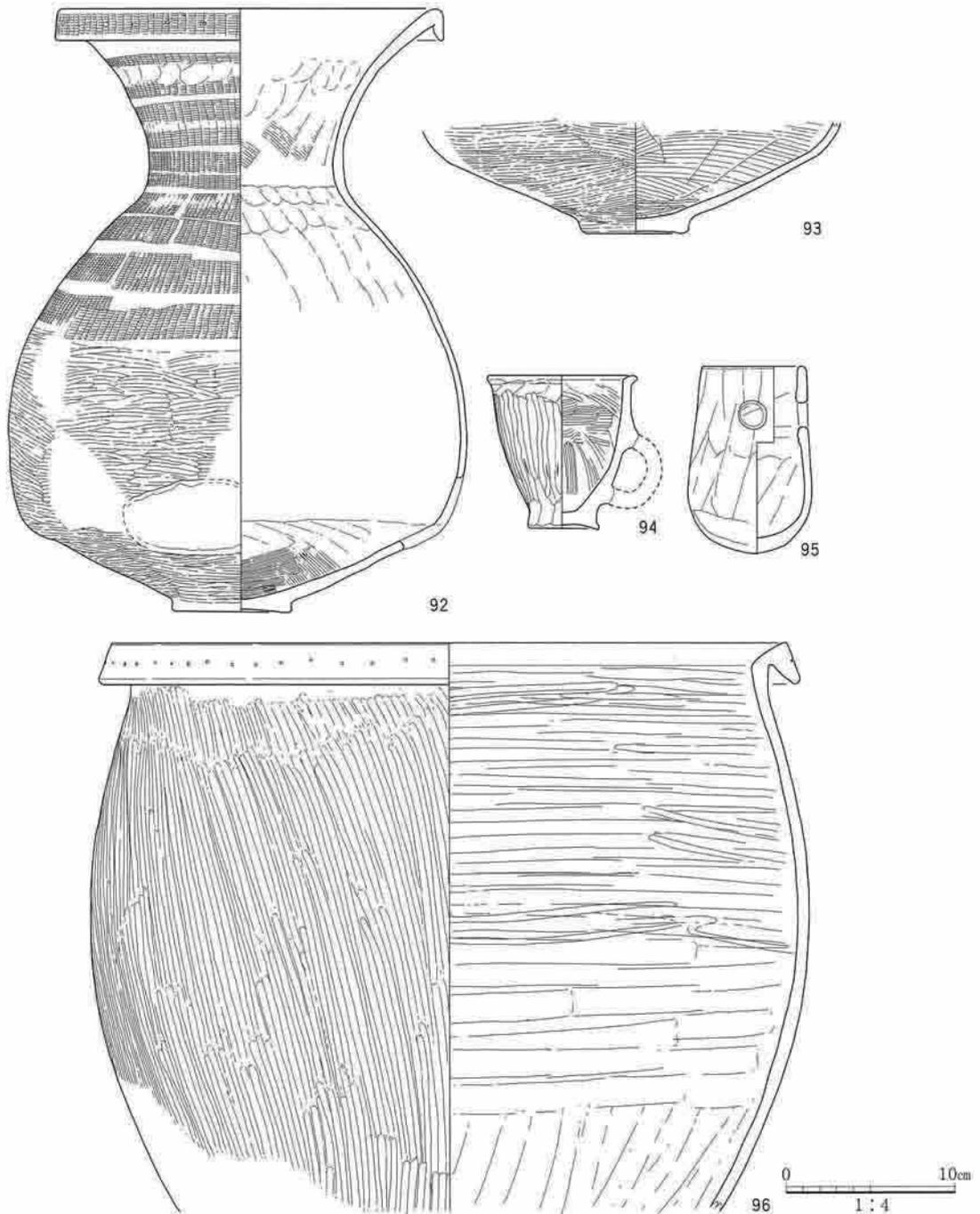


図54 SK806出土遺物

斑が認められるが、火にかけた痕跡はなかった。

95はイイダコ壺である。直径1.7cmの円孔をもつ。内外面をナデ調整で平滑に整える。内面の円孔上部には縦方向に擦痕が認められる。

96は生駒西麓産の大型甕である。口縁部を垂下させ、外面には2.0cm間隔で刺突文を入れる。体部から頸部にかけて外面は縦方向、内面は横方向のミガキで整える。

SK808(図47・55・56) 長さ2.10m、幅0.35m以上、深さ0.05mの土壇である。埋土は黒色細粒砂であった。埋土中から98が出土した。

98は生駒西麓産の脚台である。精良品であり脚付き無頸壺のものとみられる。スカシ孔は10個で、

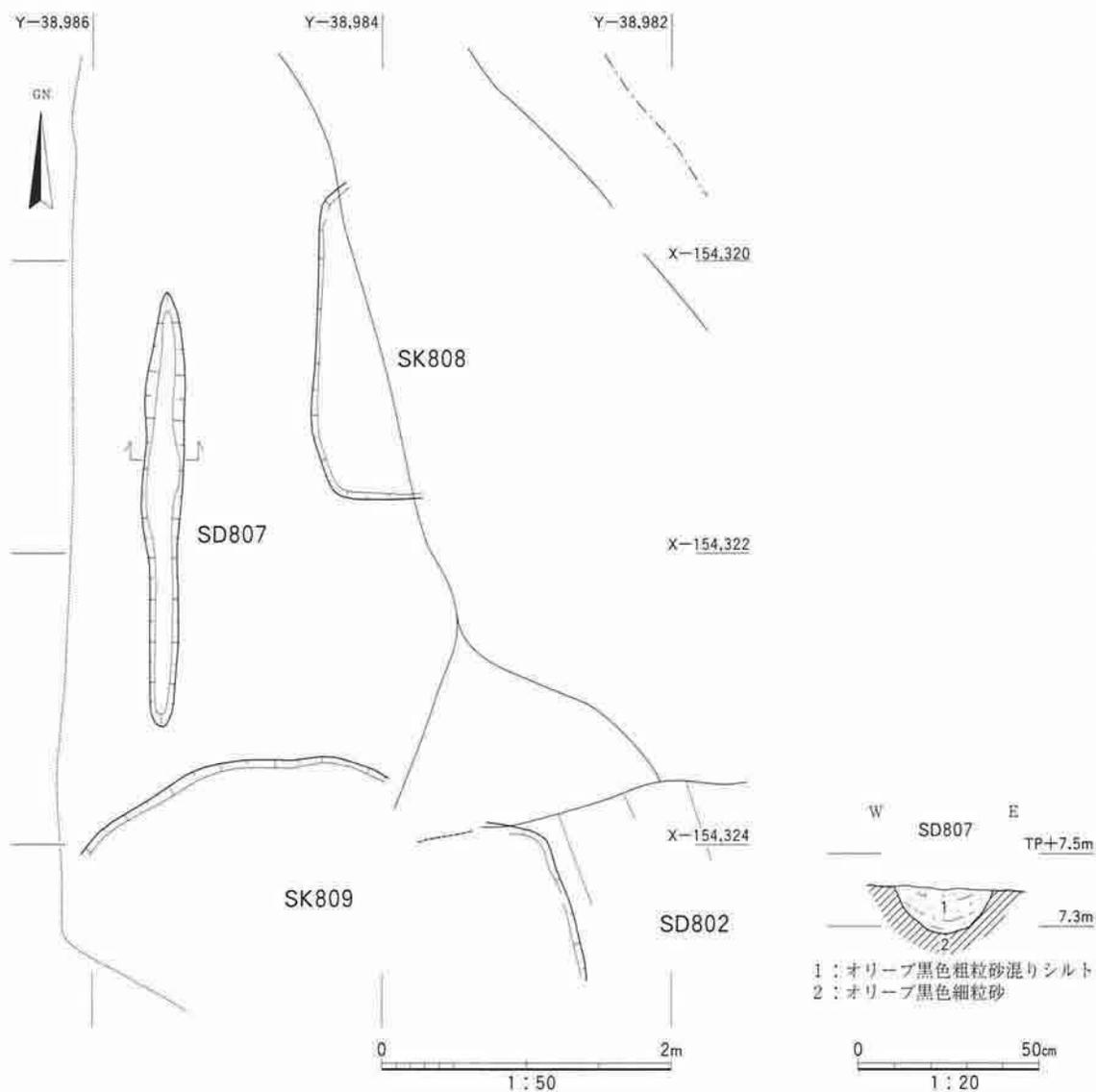


図55 南区西半検出遺構平面図・断面図

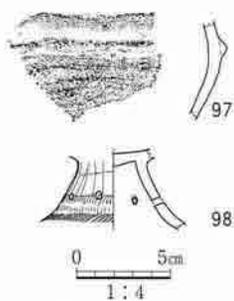


図56 SK808・809出土遺物
SK808(98)、SK809(97)

外面はミガキで整えており、下位に斜列点文を施す。内面はナデ調整である。

SK809(図47・55・56) 東西3.50m以上、南北1.80m以上、深さ0.05mの土壌である。埋土は細礫混り黒色細粒砂であった。埋土から97が出土した。

97は生駒西麓産の船橋式浅鉢である。断面が三角形を呈する突帯をもち、その下には横方向の条痕が認められる。他に弥生土器の細片も出土しており、混入したものとみられる。

SK810(図47・57) 長さ約1.40m、幅0.60m、深さ0.30mの土壌で、黒色細粒砂で埋まっていた。

SK811(図47・57) 長さ1.20m以上、幅1.00m、深さ0.40mの土壌で、黒色細粒砂で埋まっていた。

SK812(図47・57・58) 長さ1.80m、幅0.65m、深さ0.35mの土壌である。埋土は土壌の南側に

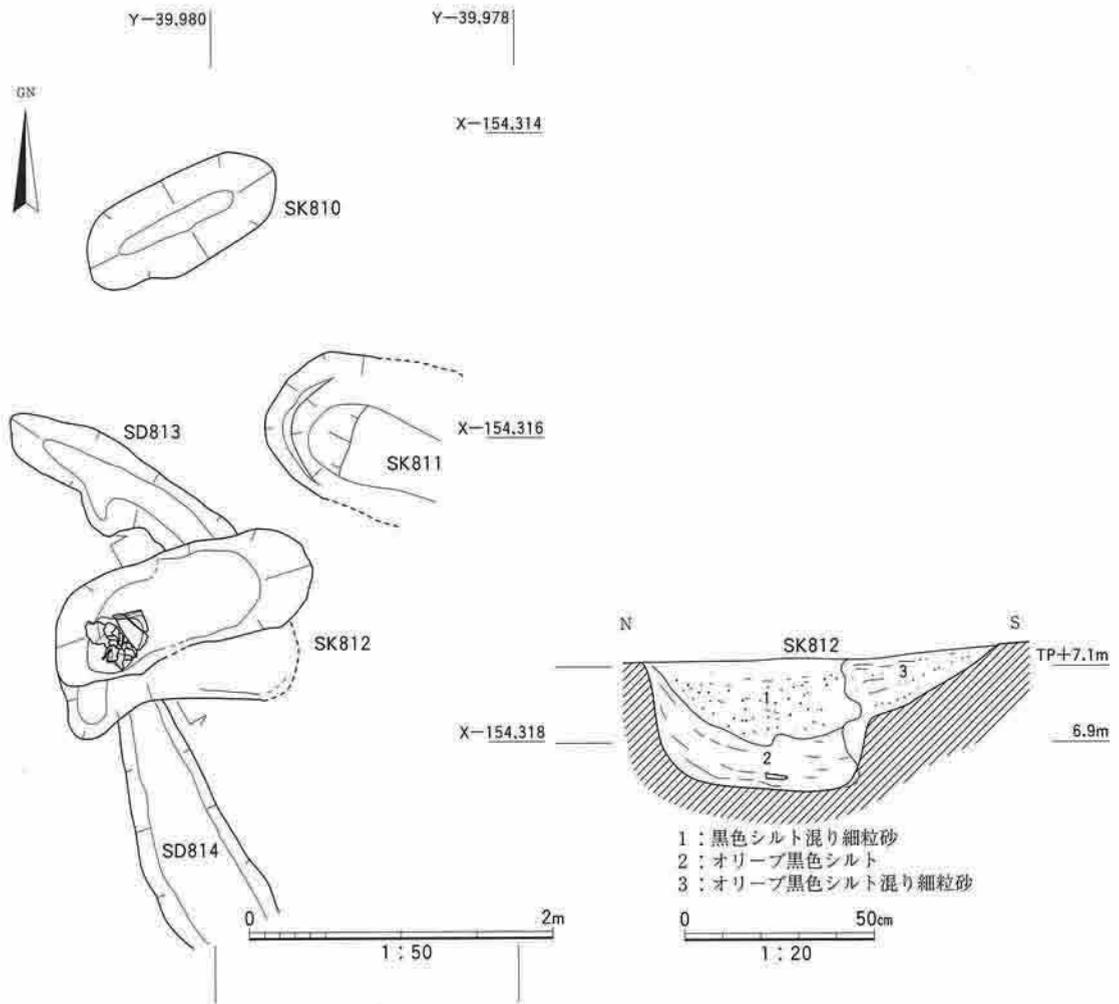


図57 南区東半検出遺構平面図・断面図

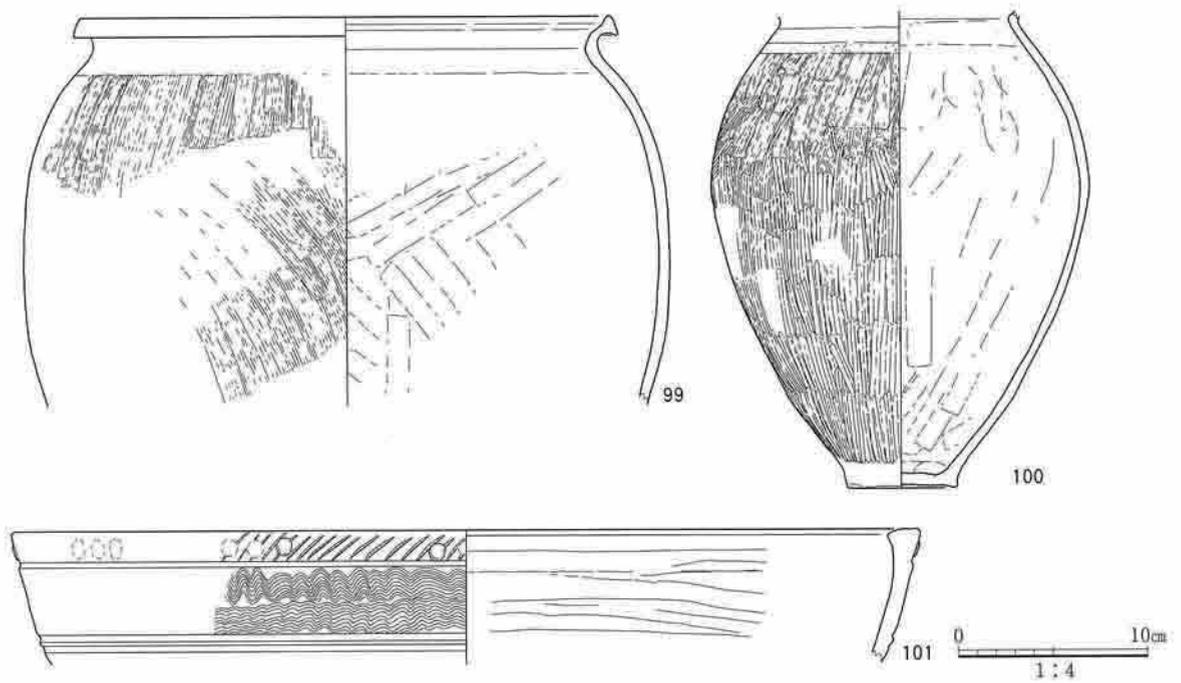


図58 SK812出土遺物

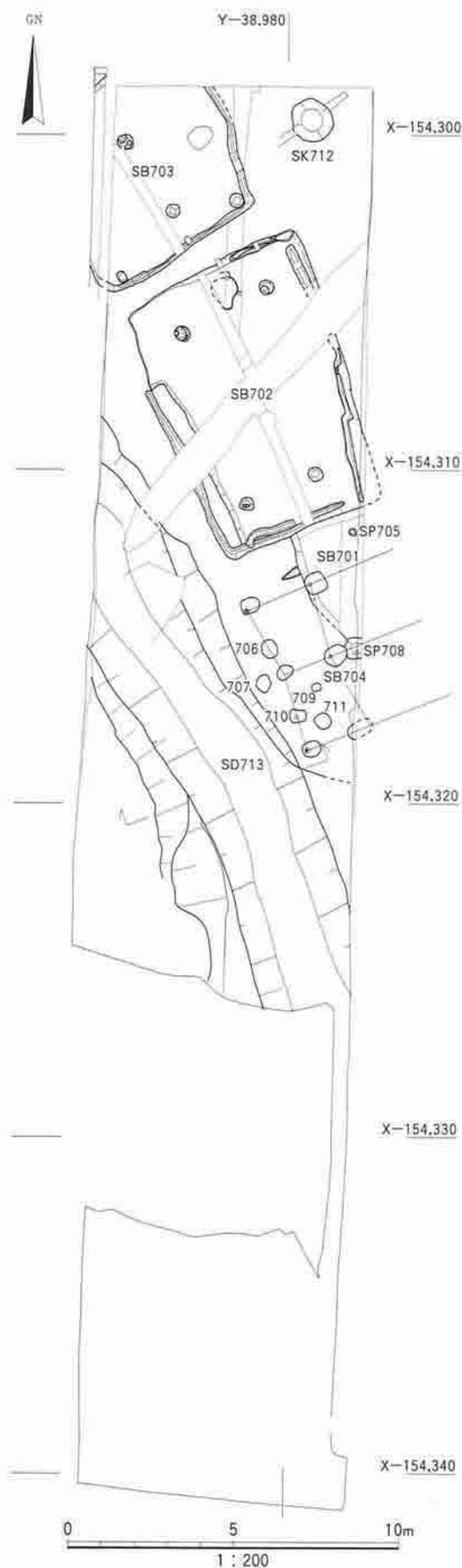


図59 南区第7b層上面検出遺構

オリーブ黒色シルト混り細粒砂が堆積したのち、下位から順にオリーブ黒色シルト、黒色シルト混り細粒砂で埋まっていた。土壌の底から弥生時代中期後葉の土器99～101が出土した。

99は大型の甕である。外面は縦方向のハケ、内面は板状工具によるナデによって整える。口縁部は上下に拡張するが、外面に文様は認められない。

100は甕である。外面は縦方向のハケを施したのち、下半に縦方向のミガキを入れる。内面は全体的にナデで整えており、肩部にオサエが認められる。

101は鉢である。口縁端部には凹線状の起伏があり、口縁部のやや下と屈曲部に凹線文を施す。口縁部外面には斜列点文を施し、円形浮文を7.2cm間隔で付加し、その下に9条で構成される櫛描波状文2帯を入れる。

3) 古墳時代中期の遺構と遺物

南区で古墳時代中期の竪穴建物SB701～703、総柱建物SB704、大溝SD713、柱穴SP705～711、土壌SK712を検出した(図59～78、図版9～14・28～31、表5)。また北区では現地表下3.00mで4箇所の盛土による高まりSX714～717を検出した。

古墳時代中期の建物群は幅4.00mの大溝SD713の東側に分布していた。

i) 竪穴建物

SB701(図59・60・75、図版9・10、表5) 一辺が3.50m以上で方形プランに復元される。調査範囲内ではこの竪穴建物に伴う柱穴、炉などは認められなかった。西辺中央に幅0.25m、長さ0.60mの溝が設けられていた。遺物は埋土中から土器の細片と白玉172～174が出土した。

SB702(図59～63・75、図版9・10、表5) 南北8.30m、東西5.20～5.70mの長方形プランで、深さ0.20mであった。竪穴内部で4箇所のピットを検出した。柱痕跡の明確なものはSP01～04であり、主柱穴

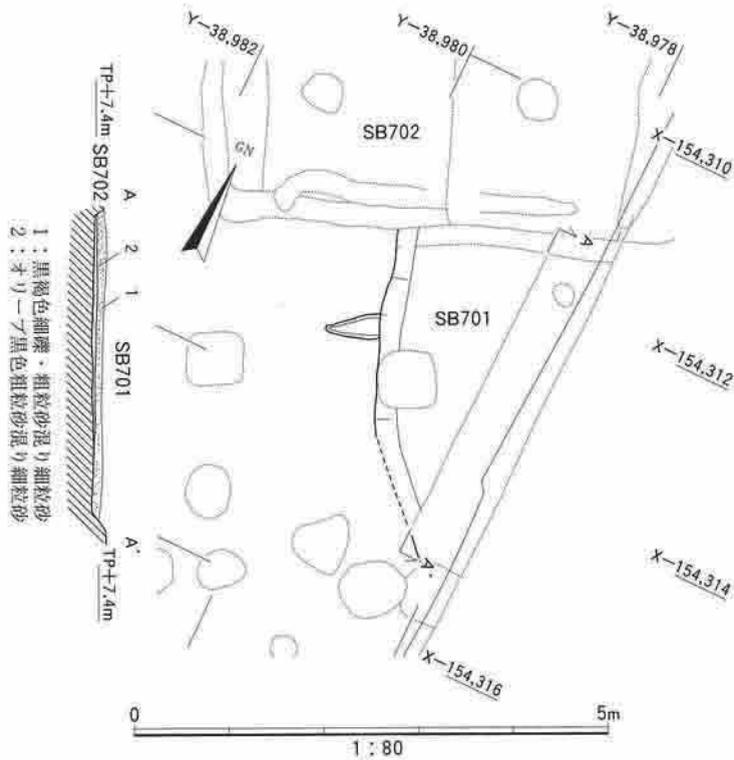


図60 SB701平面図・断面図

とみられる。これらは直径0.40m、深さ0.16～0.30mであり、SP01には直径0.18mの柱痕跡が認められた。柱間隔は2.20～3.50mであった。

屋内の北辺中央には長さ0.96m、幅0.80mに復元される深さ0.10mの浅い窪みが設けられていた。炉と考えられる。浅い窪み内の堆積は6層に分かれ、2～4層には焼土・灰が含まれていた。5層を除去したところで焼土が面的に広がる部分を検出し、二次的に焼けた布留式甕102や製塩土器が出土した。焼土は面的に広がっており、火を焚いた機能面と判断した。さらに6層を除去したところでも焼土を検出し、古い段階の機能面と判断した。

加工面まで下げたところで周壁溝を検出した。周壁溝は深さ0.05mと浅く、北西部には認められなかった。また東側の周壁溝は竪穴南東部において、内側に折れていた。さらに南西部には幅0.50m、長さ5.40mにわたって、0.03mの高まりが認められた。

遺物は土器102・104～107、石錘103、ガラス玉169、溶解したガラス170、白玉175～193が出土した。この中で、102は炉から出土しており二次的に焼けていた。竪穴建物の床面からは103～107が出土した。

また、この竪穴内の土を採取して水洗篩別を行ったところ19点の白玉が見つかった。白玉は175～180が床面から加工面時形成層にかけて出土した。またSP01からは181・182～193が埋土からそれぞれ見つかった。その他、ガラス玉169、溶解したガラス170は埋土から出土した。

さらに炉内の炭・灰・焼土を含む層からは焼けた骨の細片が出土したが、種類を特定することはできなかった。以下、遺物について記述する。

102は土師器甕である。布留式甕のように口縁端部が内側にわずかに湾曲する。外面は体部を縦方

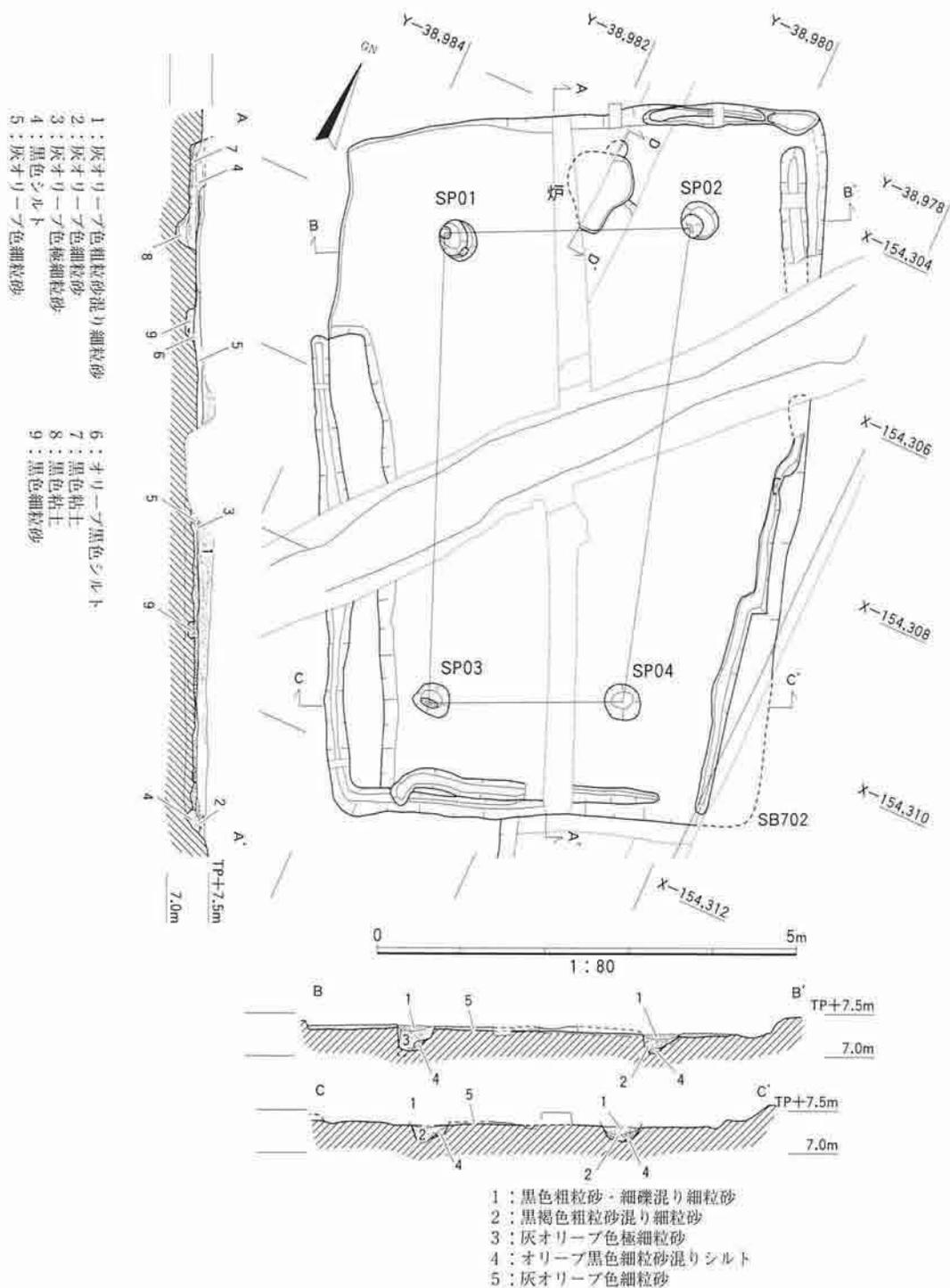


図61 SB702平面図・断面図

向のハケで整えたのち肩部に横方向のハケを施す。内面は頸部をオサエで整えたのち、体部を縦方向のナデで整える。口縁部は内外面をナデで整える。

104は韓式系土器長胴甕とみられる底部付近の破片であり、外面に格子目タタキが認められる。

105は椀形高杯である。口縁部内外面を横方向のシャープなナデで整えており、その時に使用した

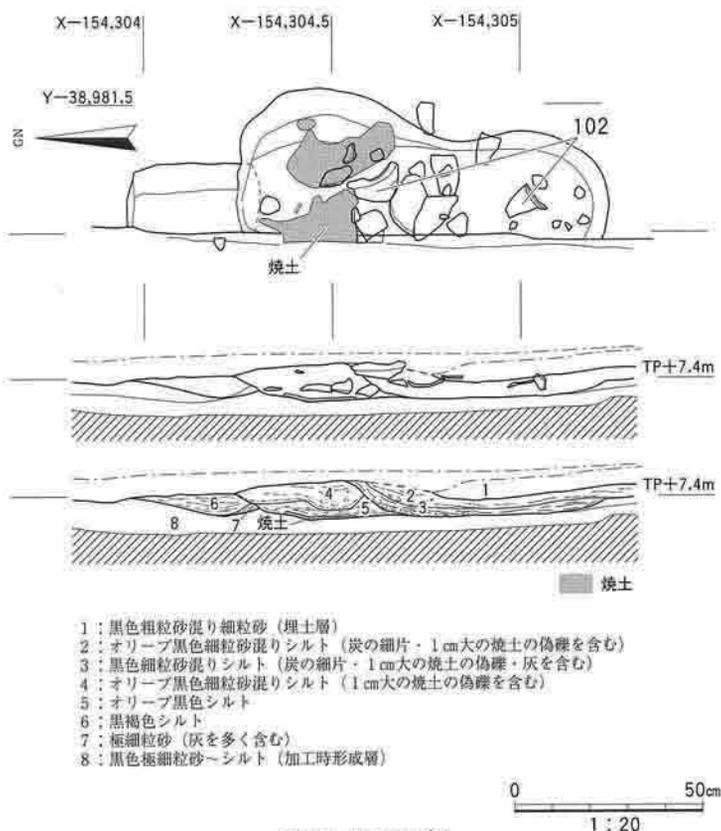


図62 SB702炉

直径0.25cm、厚さ0.13cm、孔径0.05cm、重量0.0085gである。170は歪んだ形状で、気泡が認められることから溶解したものと考えられる。濃緑色を呈しており、長さ0.73cm、幅0.35cm、厚さ0.16cm、重量0.0516gである。いずれもソーダ石灰ガラスに同定された。白玉175～193はいずれも滑石製で、181は側面やや上位に小孔が観察された。

SB703(図59・64～66・75、図版9・28、表5) 南北5.00以上m、東西5.20mの長方形プランで、深さ0.16mであった。竪穴内部で5箇所のピットを検出し、柱痕跡の明確なものは4個であった。こ

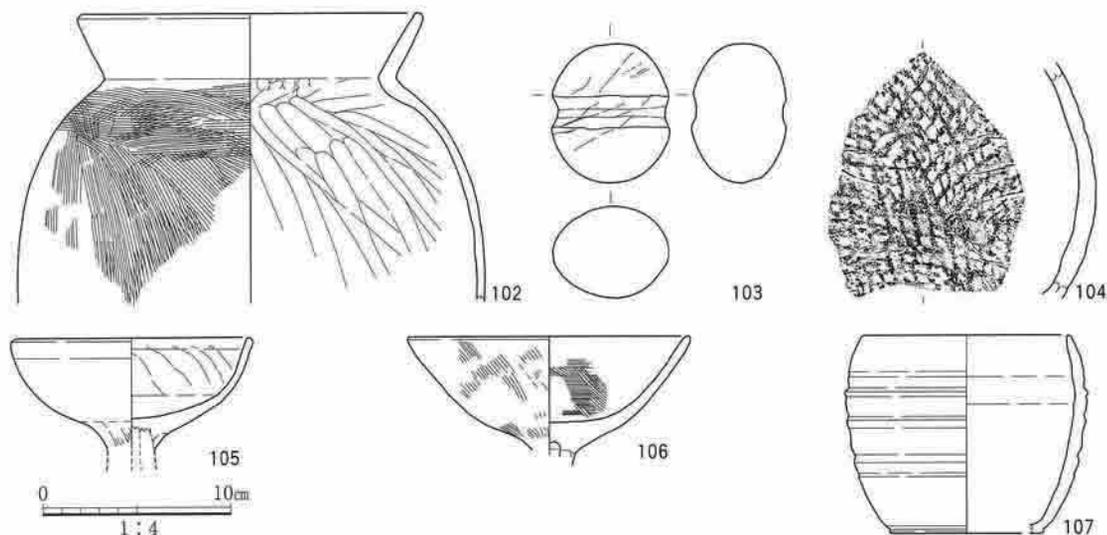


図63 SB702出土遺物

布状工具の痕跡が認められる。

106は高杯杯部である。円盤充填して成形した脚部の側縁に杯部を取付けて成形する。屈曲部は鈍く杯部中位より下がった所に位置している。内外面をハケで整え、口縁端部に横方向のナデを巡らせる。これも二次的に焼けて赤く変色する。

107は鉢である。内外面を回転ナデで調整し、底部外側縁をケズリで整える。TK216型式に属するとみられる。

石錘103は砂岩製で、長さ7.35cm、重さ303.6gである。断面は楕円形を呈し、長径6.2cm、短径5.0cmである。錘の中央に幅1.6cmの溝をもつ。

ガラス玉169は緑色を呈しており、

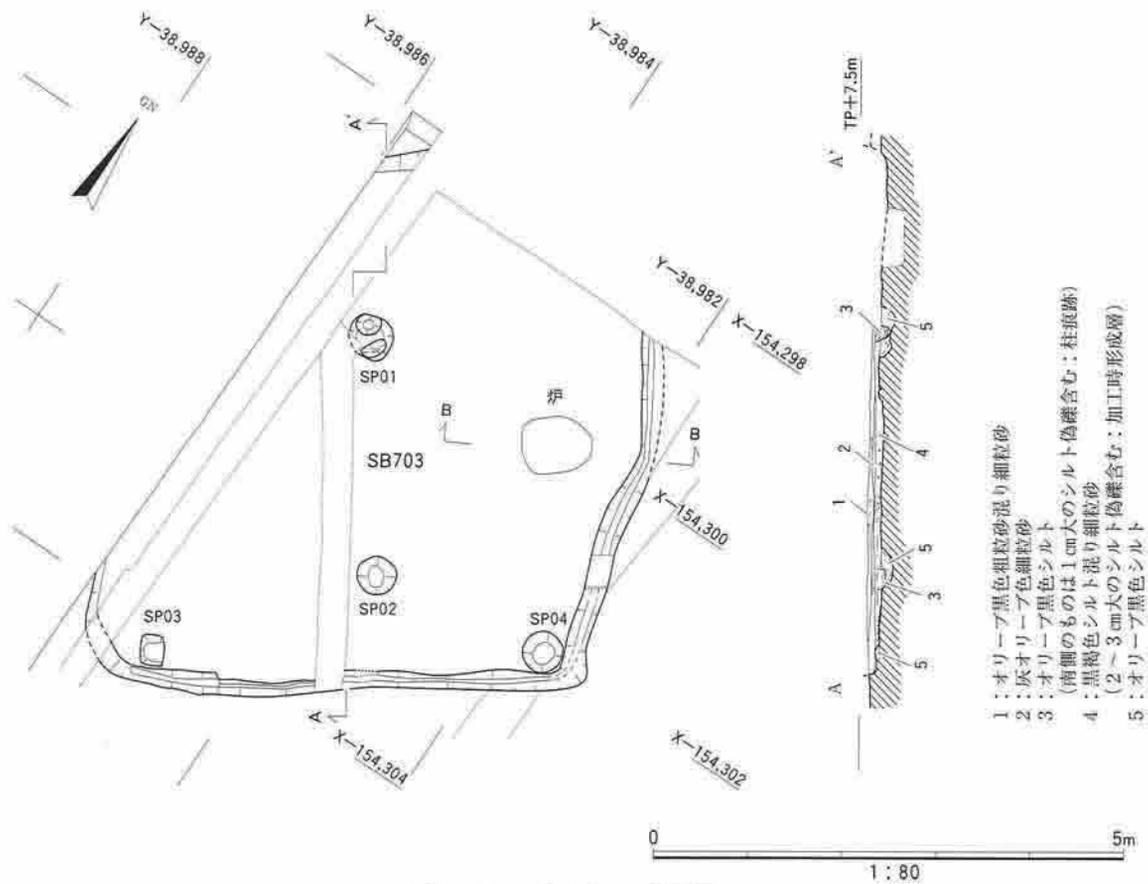


図64 SB703平面図・断面図

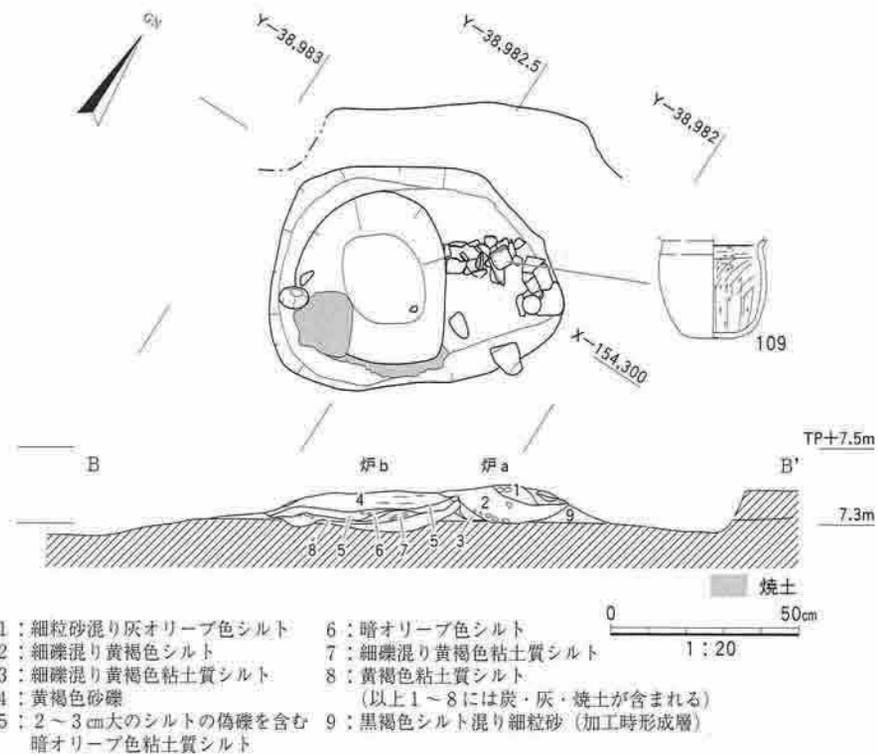


図65 SB703炉

れらの中で中心軸線状に南北に並ぶSP01・02が主柱穴とみられる。これらは直径0.40～0.50m、深さ0.24mであり、柱痕跡は直径0.10m、柱間隔は2.50mであった。また、南東隅に直径0.40m、南西隅に一辺が0.30mの方形のピットがあり、後者においては柱痕跡を確認した。SP01・02に比べると浅いため、補助的な柱とみられる。

屋内の北辺中央には長さ8.00m、幅5.40m、深さ0.10mの浅い窪みが設けら

れていた。埋土は8層に分かれ、炭や灰、焼土が多く含まれており、炉と判断した。この場所からは二次的に焼けた韓式系土器の平底鉢109が出土した。周壁溝は0.04mと浅く、竪穴部分の東・南辺で確認した。

この遺構から出土した遺物は土器108～112、白玉194～199がある。土器は上述したように韓式系土器109が炉跡から、108・110～112は床面からそれぞれ出土した。また、この竪穴内の土を採取して水洗篩別を行ったところ6点の白玉が見つかった。白玉は194が加工時形成層から、195・196が炉の埋土から、197～199が埋土からそれぞれ出土した。

さらに炉内の炭・灰・焼土も採取して水洗篩別を行った。焼けた骨の細片が出土したが、種類を特定することはできなかった(第三章第2節)。

108・109は韓式系土器平底鉢とみられる。108は底部を欠損するが外面は平行タタキ、内面は右下から左上方向のナデで整え、口縁部内外面を横方向のシャープなナデを施す。

109は外面をナデ、内面を縦方向のケズリ、頸部直下を左から右方向のケズリを施す。底部内面はオサエ、外面はナデで整える。口縁部は横方向のナデを巡らす。内外面とも赤く変色し外面には円形の剥離があることから、本来の使用とは異なり、二次的に熱を受けたものとみられる。炉跡付近から出土しており、支脚として転用された可能性がある。

110は韓式系土器長胴甕である。体部外面は縄蓆文タタキ、内面はナデで整える。

111・112は高杯である。111は脚部の側縁に杯部を取付けて成形する。スカシ孔は3個である。杯部内面はナデを施したのち、放射状の暗文を入れ、外面は縦方向のハケで整える。脚部外面はハケを施したのち、縦方向のミガキを入れる。内面は成形時のシボリの痕跡が顕著であり、その上から工具

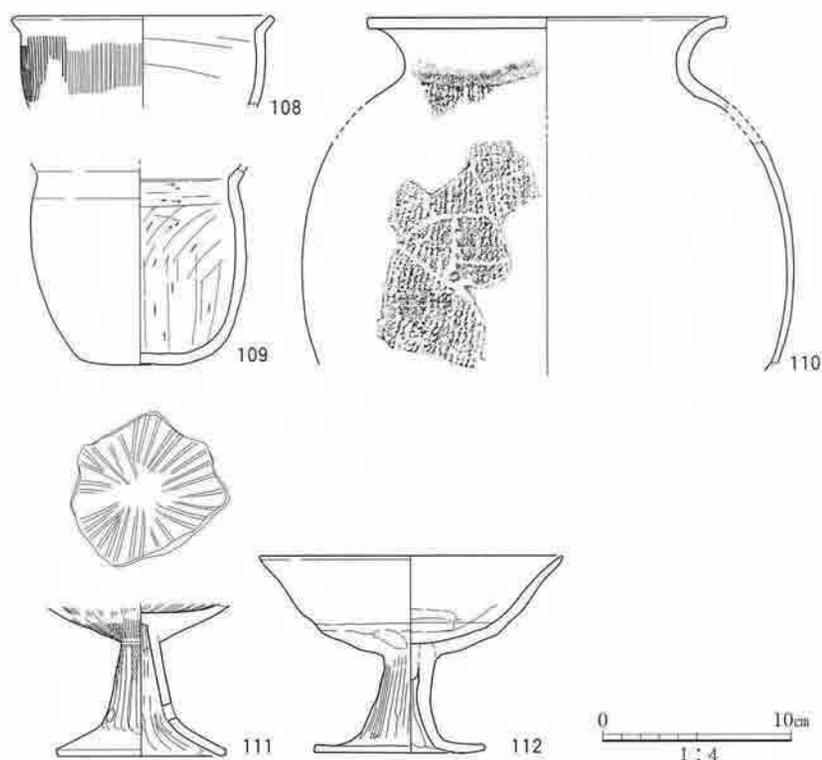


図66 SB703出土遺物

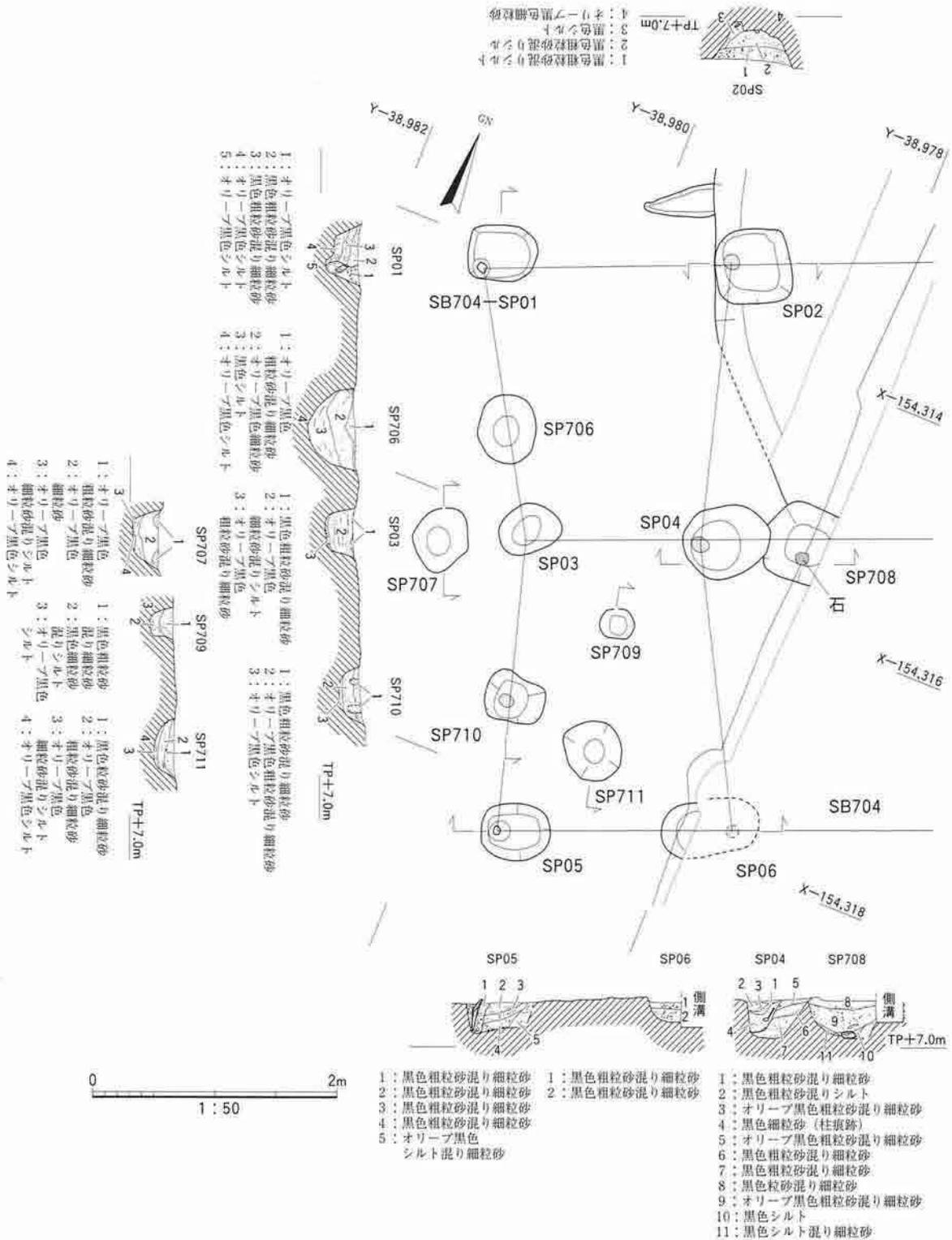


図67 SB704・SP706～711平面図・断面図

を回転させてケズリを施す。

112は円盤充填した脚部の側縁に杯部を取付けて成形する。口縁部内外面を横方向のシャープなナデで整えたのち、杯部下半内面に丁寧なナデを施す。脚部外面は縦方向にミガキを施し、内面には工具の回転による浅いケズリが認められる。裾部は内外面を横方向の緩やかなナデで整える。

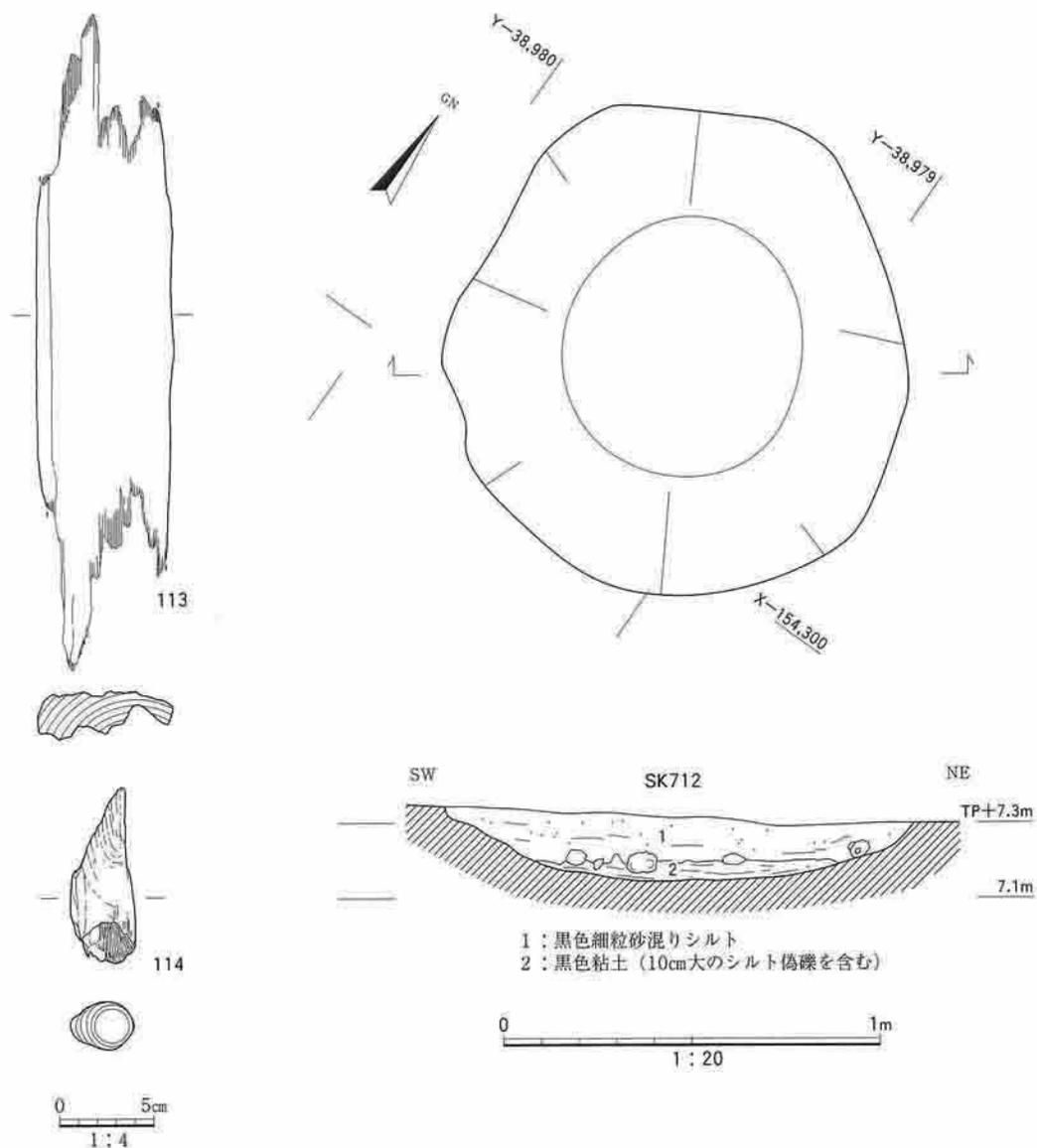


図69 SK712平面図・断面図

図68 SB704-SP01・SD713出土柱材
SB704-SP01(114)、SD713(113)

白玉172~205も滑石製で、197は側面に小孔が観察される。

ii) 総柱建物と柱穴

SB704(図59・67・68、図版9~11) 南北2間、東西2間以上の総柱建物であり、SB701を切って設けられていた。柱間寸法は南北が2.25~2.40m、東西が2.00mであった。柱穴は長さ0.50~0.60m、幅0.40~0.55mの隅丸長方形~方形であり、深さは0.25~0.35mであった。また柱穴内には直径0.10mの柱痕跡が認められ、SP01・07には柱材が残っていた。SB704付近のSP705は柱筋から離れるが、SB704周辺のSP706~711は互いに近接した位置にあり、SB704と規模や方位の類似する建物を構成していたとみられる。またSP706とSP710はSB704の西辺柱列の一部としての可能性もある。

114はSB704-SP01から出土した柱材である。節の部分であり、第三章第3節で述べるように樹種はヒノキ科であった。

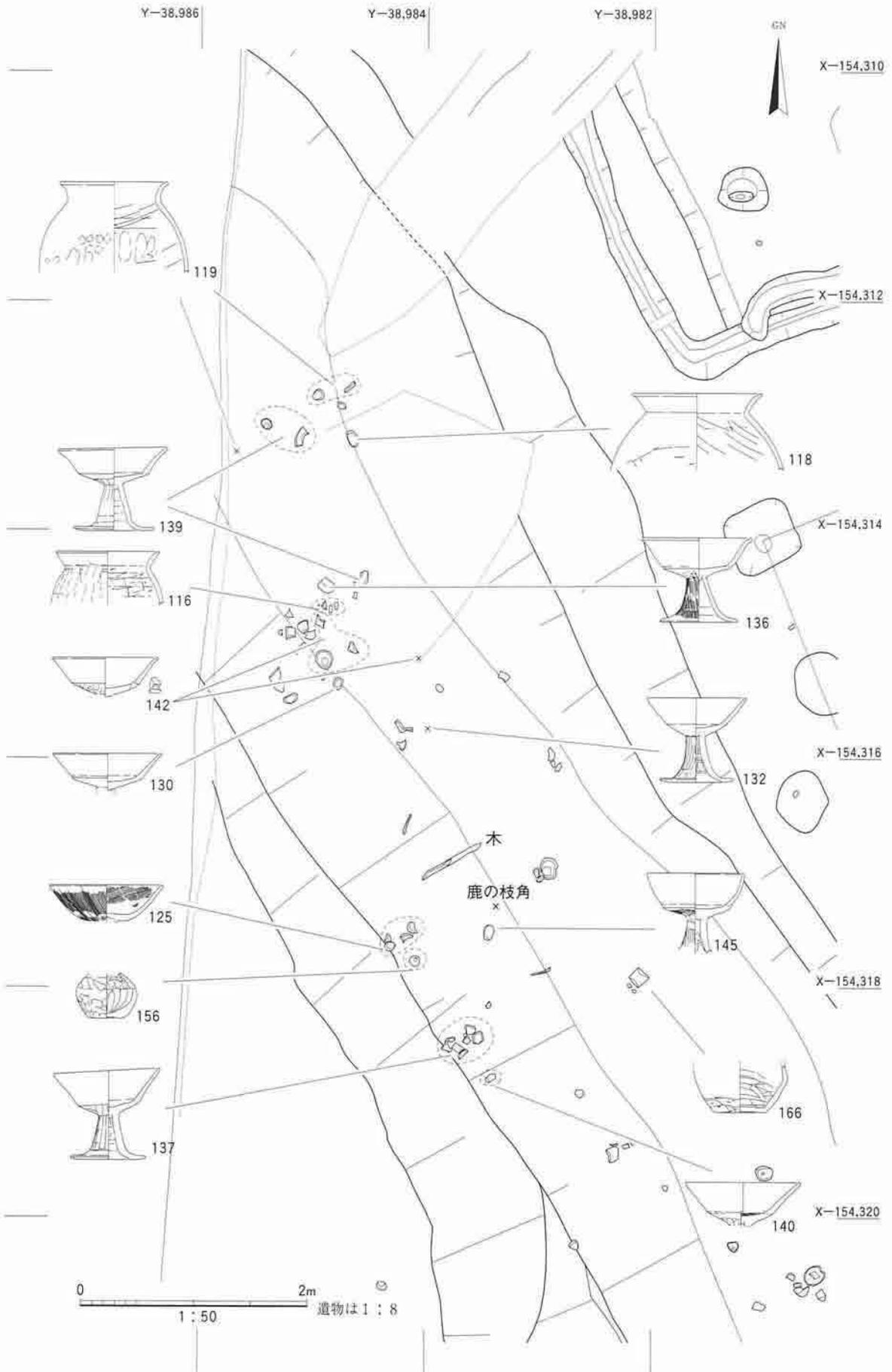
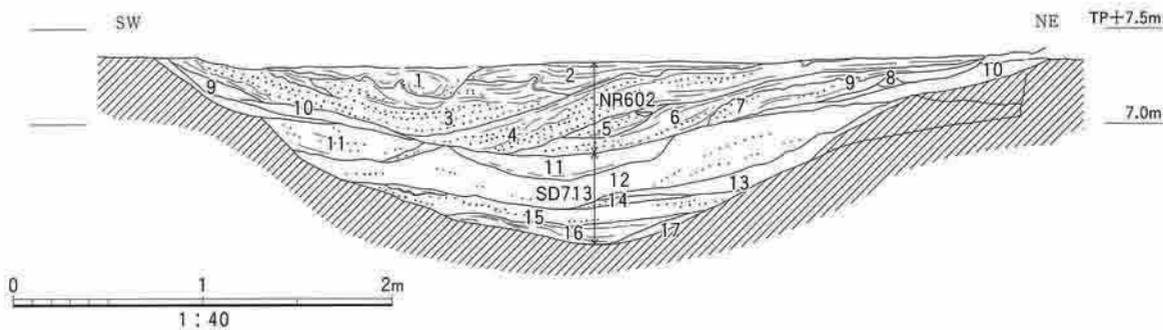


図70 SD713遺物出土状況



- | | | | |
|------------------|------------------|--------------------|------------------|
| 1: 灰色極細粒砂～シルト | 6: 灰色細粒砂～シルト | 11: オリーブ黒色細粒砂混りシルト | 16: 黒褐色粘土 |
| 2: オリーブ黒色粘土 | 7: 灰色シルト～細粒砂 | 12: 黒褐色シルト | 17: オリーブ黒～緑灰色シルト |
| 3: 灰色細粒砂 (下部中粒砂) | 8: 灰オリーブ細粒砂 | 13: 黒色シルト | |
| 4: 灰色細粒砂～シルト | 9: オリーブ黒色シルト～細粒砂 | 14: 灰オリーブ色シルト混り細粒砂 | |
| 5: 灰色細粒砂 | 10: 黒色細粒砂混りシルト | 15: オリーブ黒色細粒砂 | |

図71 SD713・NR602断面図

iii) 土壌と溝

SK712(図59・69) 南区北部で検出した土壌である。直径1.20m、深さ0.16mで、上層が黒色細粒砂混りシルト、下層が10cm大のシルト偽礫を含む黒色粘土であった。埋土からは土師器の細片が出土した。

SD713(図59・68・70～75、図版12・28～30、表5) 南区で検出した溝である。幅4.00m、深

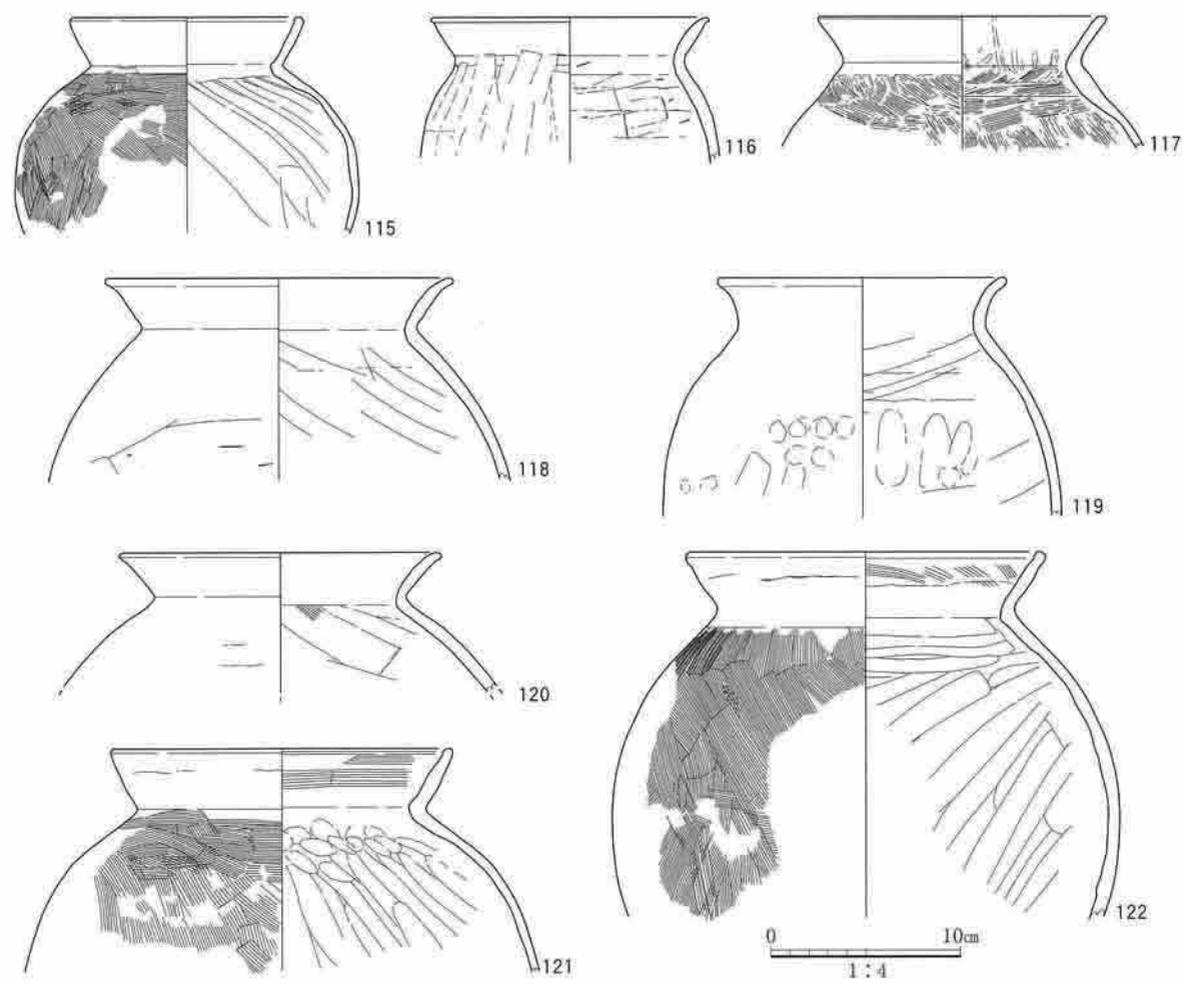


図72 SD713出土遺物(1)

さ0.90m以上の大溝で、シルト～細粒砂で埋まっていた。遺物は溝の底から中位にかけて出土した。遺物の種類は115～168に示した土師器、須恵器、韓式系土器、管玉171、白玉200～205、シカの枝角などがあつた。部位の明瞭な大きな破片が顕著であり、高杯や小型品は完存率の高いものが多く見られた。また、それらを被覆する堆積物が細粒の屑碎物であつた。これらのことから、投棄された直後の位置をほぼ保っているものと判断された。

土師器甕(115～122) 口径が15.0cm未満の115・116と、15.0cm以上の117～122がある。115は布留式甕で、口縁端部は丸く内側にわずかに肥厚する。体部外面はハケ、内面は強いナデを右下から左上方向に入れ、体部中位から頸部のやや下まで達する。肩部と口縁部に煤が付着する。

116は体部外面を縦方向のハケ、内面を左から右方向のケズリで整える。口縁部は内面に横方向のハケを施したのち、内外面を横方向のナデで整える。外面全体に煤が付着する。

117～120は長胴甕である。117は体部は内外面それぞれをハケで整える。口縁部は内面に横方向のハケを施したのち、内外面にナデを巡らす。

118は体部外面はナデで整えたのち、肩部に右から左方向のケズリを施す。内面は右下から左上方向のケズリを施す。口縁部は横方向のシャープなナデで整える。

119は外面は体部をオサエとナデで整え、口縁部から肩部にかけて横方向のナデで整える。内面はオサエを部分的に施したのち、胴部最大径の位置と頸部に左から右方向のケズリを入れる。

120は外面をナデで整えるが、粘土紐の接合痕が部分的に残存する。内面は板状工具によるナデで整え、部分的にハケを施す。口縁部は内外面を横方向のナデで整える。

121・122は布留式甕である。121の口縁端部は丸く内側にわずかに肥厚しており、口縁部内面にハケを施し、外面に接合痕が遺存する。体部外面は縦方向、肩部外面は横方向のハケで整える。内面はナデを右下から左上方向に施し、頸部のやや下にオサエを入れる。122の口縁端部は肥厚し、やや角張った形状である。口縁部内面にハケ、外面に接合痕が認められる。体部外面は縦方向のハケ、内面は左下から右上方向のケズリを施す。体部下半に煤が付着する。

土師器高杯(123～147) 杯部が碗形の123・124、直線的にたち上がる125～147がある。後者は杯部の屈曲が不明瞭な125～126と、明瞭な127～147に区別される。

123は杯部はオサエとナデで調整後、内面全体と口縁部にシャープなナデを巡らす。

124は脚部上端に杯部を付加し成形する。杯部はナデで整え、口縁部内外面を横方向のシャープなナデで整える。

125は脚部が剥離した痕跡が認められ、脚部に杯部を付加して成形したことがうかがえる。外面を縦方向、内面を左下から右上方向のハケで整えたのち、口縁部内外面を横方向のシャープなナデで整える。下半部内面はハケをナデで消したのち、回転ヘラミガキを施す。

126は屈曲部が下位にあり不明瞭である。脚部の側縁に杯部を取付けて成形する。杯部上半の内外面を横方向のシャープなナデで整えたのち、杯部下半の内面に丁寧なナデを施す。脚部外面は縦方向にメントリをしており、内面は工具の回転によるケズリが顕著である。裾部は内外面をシャープな横方向のナデで整える。

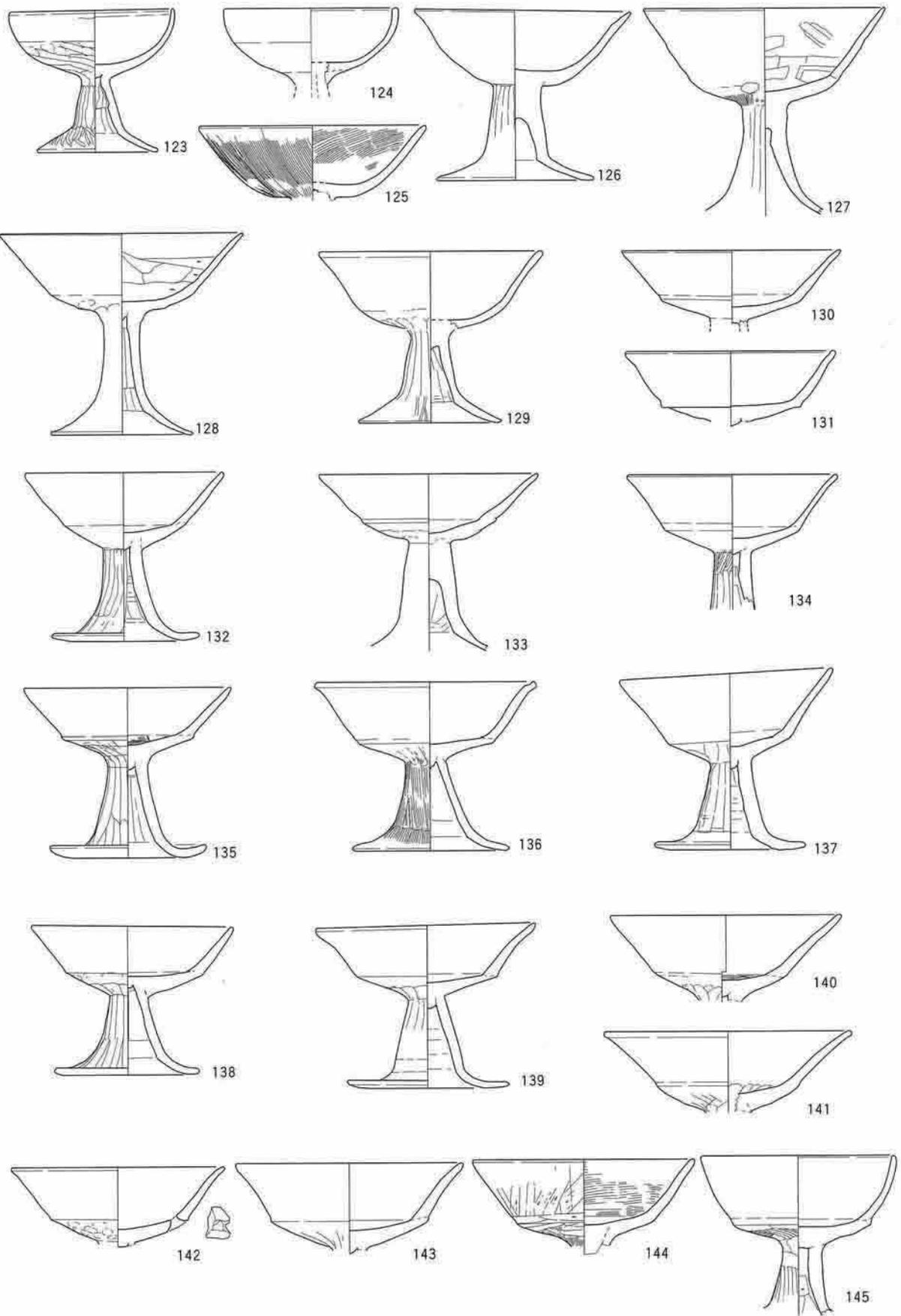


图73 SD713出土遺物(2)

127は杯部上半にシャープなナデを巡らせたのち、下半部内面を工具を用いたナデで整える。杯部と脚部を接合したのち、外面に縦方向にハケ調整を施しさらに浅いケズリを入れる。脚部は全体的に磨滅しているが、外面はメントリをしており内面頂部には回転痕が認められる。

128は円盤充填した脚部の側縁に杯部を取付けて成形する。杯部の外面は下半部をオサエ、上半部をナデで整えたのち、口縁部内外面にシャープなナデを巡らせる。さらに杯部内面を丁寧なナデによって平滑に整える。脚部内面は中位にシボリ痕が残るが、その上位をヘラ状工具で整え、裾部に横方向のナデを巡らせ、外面はナデを施す。

129は口縁部内面から上半部外面にかけてをシャープなナデで整える。脚部外面から杯部下半にかけては縦方向のヘラミガキを施し、裾部は内外面を横方向の緩やかなナデで整える。脚部内面には工具の回転による浅いケズリが認められる。杯部外面に煤が付着する。

130は円盤充填した脚部の側縁に杯部を取付けて成形する。口縁部にシャープなナデを巡らせる。口縁部内外面に部分的に煤が付着する。

131は杯部内面をナデ調整後、下半部の外面、上半部の内外面をシャープなナデで整える。二次的に焼けて全体が赤く変色する。

132は円盤充填した脚部の側縁に杯部を取付けて成形する。口縁部内外面に横方向のシャープなナデを巡らせる。脚部外面は縦方向にメントリをしており、内面には工具の回転による浅いケズリが認められる。裾部は内外面をシャープな横方向のナデで整える。二次的に熱を受け全体的に赤く変色している。

133は脚部に対して杯部がやや小さい。杯部は下半部の内外面をそれぞれオサエとナデで整え、上半部の内外面にそれぞれ横方向のシャープなナデを巡らす。脚部外面はナデとオサエで調整し、脚部内面には工具の回転による浅いケズリが認められる。また杯部内面には煤が付着する。

134は円盤充填した脚部の側縁に杯部を取付けて成形する。杯部内面を丁寧なナデで整えたのち、口縁部内外面を横方向のシャープなナデを巡らす。脚部外面はハケを施したのち、縦方向のミガキで平滑にする。

135は円盤充填して脚部を成形する。杯部下半は内外面をそれぞれハケ調整し、上半部は横方向のシャープなナデで整える。脚部外面は縦方向にメントリをしており、内面には工具の回転による浅いケズリが認められる。裾部は内外面を横方向の緩やかなナデで整える。二次的に焼けて全体が赤く変色する。

136は円盤充填した脚部の側縁に杯部を取付けて成形する。杯部上半の内外面を横方向のシャープなナデで整えたのち、杯部下半の内面に丁寧なナデを施す。脚部外面は縦方向のハケで整え、杯部と脚部の接合部分にはハケののち、浅いケズリを上から下方向に施す。内面には工具の回転による浅いケズリが認められる。裾部は内外面を横方向の緩やかなナデで整える。

137は円盤充填して脚部を成形する。口縁部内外面を横方向のシャープなナデで整える。脚部外面は縦方向にメントリをしており、内面には工具の回転による浅いケズリが認められる。裾部は内外面をシャープな横方向のナデで整える。二次的に熱を受け全体的に赤く変色している。

138は円盤充填した脚部の側縁に杯部を取付けて成形する。口縁部内外面を横方向のシャープなナデで整えたのち、杯部下半の内面に丁寧なナデを施す。脚部外面は縦方向にメントリをしており、内面には工具の回転による浅いケズリが認められる。裾部は内外面をシャープな横方向のナデで整える。

139は円盤充填によって脚部を成形する。杯部上半をシャープなナデで巡らせたのち、下半部の内面を工具を用いたナデで巡らせる。脚部は外面を縦方向のナデ、内面をナデで整えたのち、裾部に横方向のナデを巡らす。

140は全体にナデを施したのち、上半部の内外面をシャープなナデで整える。杯部内面の下半部はヘラミガキで平滑にする。

141は脚部の側縁に杯部を取付けて成形したものともみられる。下半部の外面はナデ調整後、オサエを入れる。杯部内面は放射状にナデを施す。

142は杯部に焼成後穿孔があり、さらに二次的に焼けて全体が赤く変色する。

143は杯部内面にナデを施したのち、上半部の内外面をシャープなナデで整える。接合部付近は縦方向にハケを施し、さらに浅いケズリを入れる。二次的に焼けて全体が赤く変色する。

144は円盤充填した脚部の側縁に杯部を取付けて成形する。外面は杯部上半に縦方向の浅いケズリを入れたのち、屈曲部とその上下を横方向のケズリで整える。また、内面は下半をナデ、上半を横方向のハケで整える。さらに口縁部内外面を横方向のシャープなナデで整える。

145は屈曲部が下位にあり、杯部内面の上半を横方向のシャープなナデで整える。下半部の内面は基本的に成形時のオサエやナデの痕跡をとどめる。脚部から杯部下半外面にかけてハケが施される。

146・147は大型品である。146は杯部上半の中位に接合痕が認められる。全体的にナデで整えたのち、外面は縦方向のミガキを疎らに施す。内面は横方向ののちに縦方向にミガキを施す。口縁部の内外面には横方向のシャープなナデを巡らす。屈曲部の剥離面に、接合時に入れたカキメ状の工具痕が認められる。円形の剥離が外面に認められ、屈曲部の剥離面が赤く変色しており、破片の状態で二次的に焼けたとみられる。147は内面を板状工具によるナデで整えたのち、内外面を横方向のシャープなナデで整える。

その他の土師器 鉢148、小型直口壺149・150、ミニチュア151～160が出土した。

148は鉢である。体部外面はハケ、内面は口縁部に横方向のハケを施したのち、体部を左から右方向のケズリで整える。

149・150は直口壺である。149は体部外面をナデ、内面をハケで整える。頸部は内外面いずれも横方向のナデで整える。体部下半には煤が付着する。150は体部外面をナデ、内面をナデとオサエで整える。頸部は内外面にそれぞれ横方向のナデを巡らす。

151～160はミニチュアである。158は小型丸底壺、159は小型直口壺に分類することも可能であるが、同時期の一般的な小型丸底壺・直口壺が器10cm以上であるのに対して、いずれも器高が8.0～9.0cmと一回り小さく、成形時の接合痕が多く残した雑な作りであることからミニチュアに含めた。

151は平底鉢とみられる。細片であるが、たち上がりの形状から平底とみられる。手捏ねで成形しており、内外面をそれぞれナデで整える。外面の下半がやや黒みを帯びており、二次的に熱を受けた

可能性がある。

153は甗である。手捏ねで成形する。直径0.9cmに復元される円孔を体部中央にもつ。外面は頸部をオサエ、体部をナデで整え、内面は頸部に成形時のシボリの痕跡が認められる。

152・154～159は壺である。152は手捏ねで成形した体部に粘土帯を付加して口縁部としている。体部外面はナデ、内面はオサエで整える。

154は手捏ねで成形しており、外面はオサエ、内面は工具の痕跡が認められるが基本的にナデ調整である。全体的にやや赤く変色し外面には煤が付着しており、二次的に熱を受けたものと推測される。

155は丸底で幅1.5cmの粘土帯を輪積み成形する。外面はナデ、内面はオサエで整え、口縁部は内外面を横方向のナデで整える。また底部外面は右から左方向に抉り取りが認められる。

156は中央部分がやや凹んだ平底である。肩部内外面には粘土紐の接合痕が認められる。外面上半をナデ、下半をオサエ、内面上半をオサエ、下半をナデで整える。

157は内面をオサエ、外面をナデで整える。口縁部内外面を緩やかなナデで整え、外面底部には右から左方向に浅いケズリを施す。

158は底部の中央がやや凹む。直径7.0cmの円盤の上に幅0.6cmの粘土紐を巻き上げて成形する。体部内外面はそれぞれナデとオサエで整え、口縁部は横方向のシャープなナデを巡らす。

159は偏球形の体部で頸部から口縁部にかけて直にたち上がる。底部外面には右から左方向のケズリを入れ、内面にはナデを施す。頸部から口縁部にかけて内外面をシャープなナデで整える。

160は鉢である。外面をオサエ、内面をハケで整える。口縁部内外面を横方向の緩やかなナデを巡らす。

須恵器・韓式系土器 161・162は須恵器であり、163～168が軟質焼成の韓式系土器である。

161は甕口縁部である。口縁部外面に粘土帯を付加して肥厚させる。全体を回転ナデで整形する。162は器台杯部の破片とみられる。外面に鋸歯文を施す。

163は蓋でありツマミ部分はオサエで整える。褐灰色に変色し二次的に熱を受けたものとみられる。

164は平底鉢で、内外面をそれぞれナデで整える。口縁部外面は横方向のシャープなナデを巡らす。

165は体部外面には細かな格子目タタキを施しており、内面は横方向のナデで整える。口縁部は横方向のシャープなナデで整えており、端部を上下に拡張する。166は外面はナデ、内面は横方向のナデで整える。外面底部たち上がり部分には右から左方向のケズリが施され、底部外面には指紋が多く付着する。内外面とも赤く変色し外面には円形の剥離があることから、本来の使用とは異なり、二次的に熱を受けたものとみられる。

167は甗、168は甗底部である。167は把手上部に長さ3.6cm、幅1.8cm、深さ0.5cmの凹みを設け、下部には直径0.3cm、深さ0.5cmの円孔を穿つ。体部外面は上半部を縦方向の平行タタキで整え、中位に1～2条の横線を入れる。また、体部内面はナデで整える。口縁部は内外面をシャープなナデで整える。168は外面を横方向のナデ、内面を右下から左上方向のナデで整える。直径2.1～2.5cmの8個の円孔が円周上に配置されていたとみられる。

玉類 断面観察に用いたアゼ部分を水洗したところ管玉1点、白玉6点が出土した。管玉171は滑

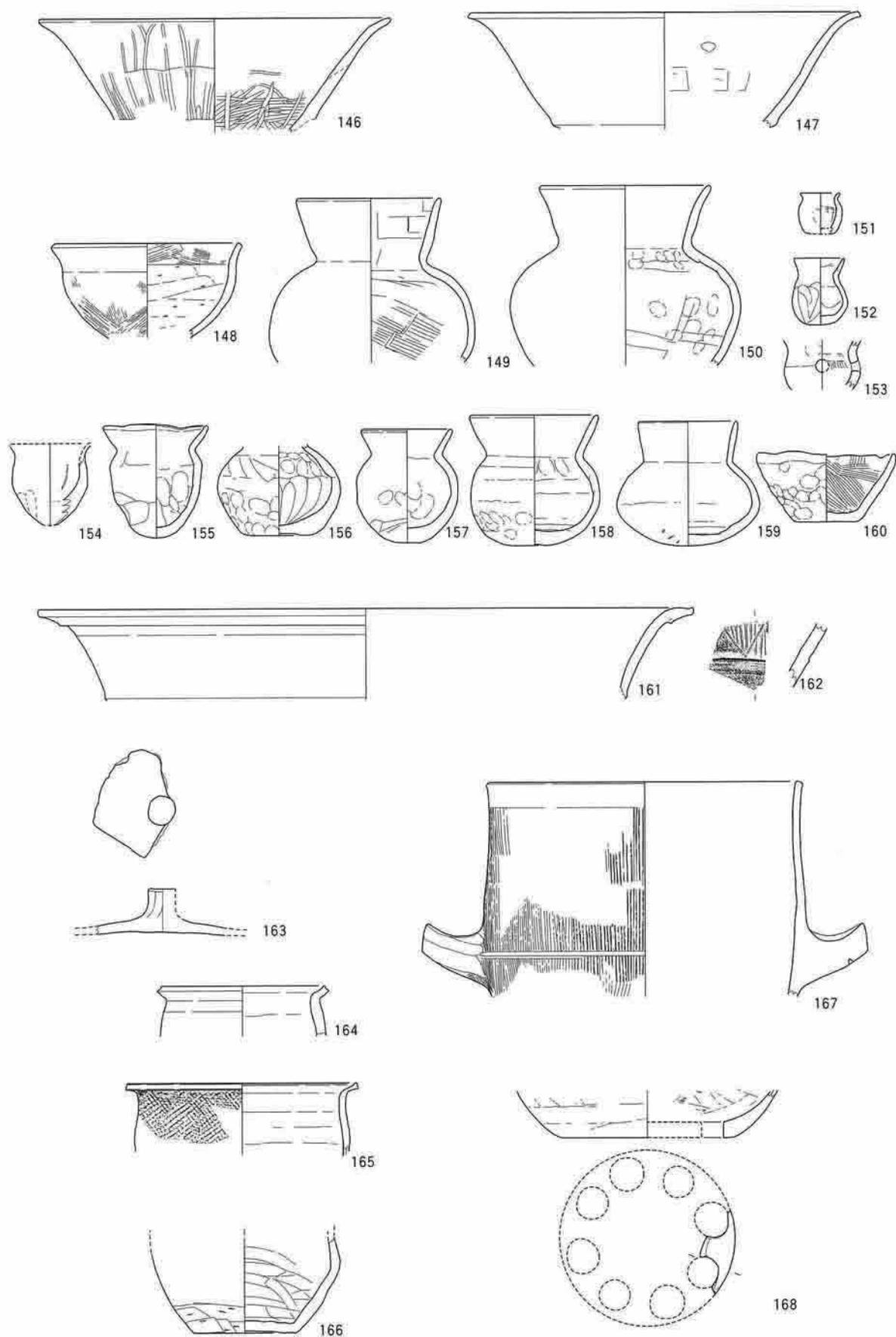


图74 SD713出土遺物(3)

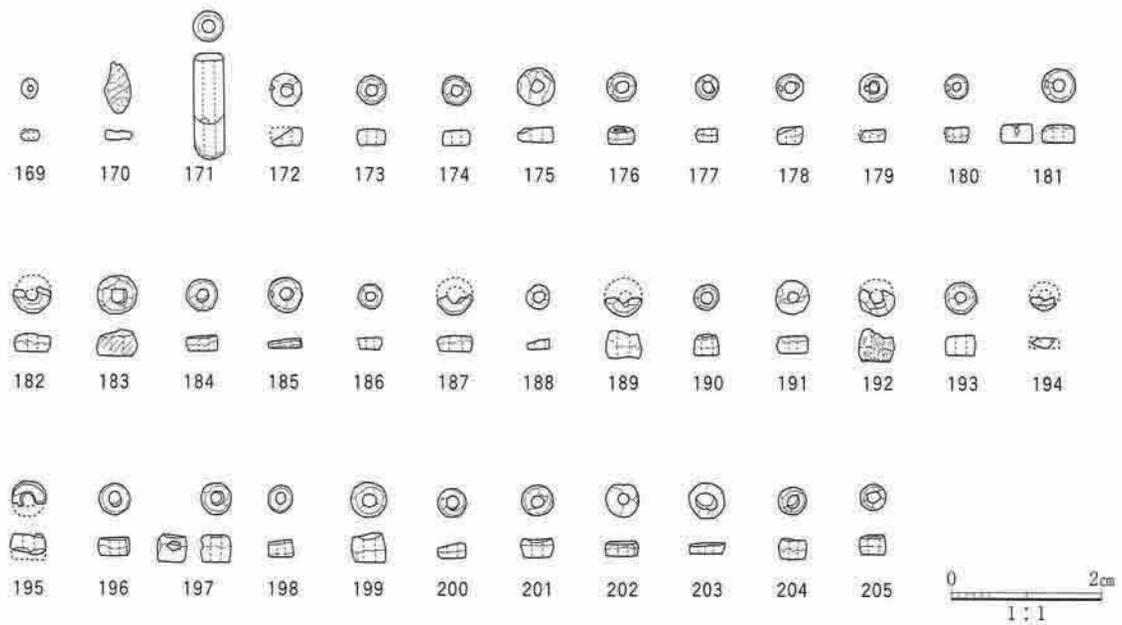


図75 NG06-3次調査地出土のガラス玉・管玉・白玉

表5 NG06-3次調査地出土玉類一覧表

単位：mm

報告番号	種類	材質	遺構	出土位置	径	高さ	孔径	状態	備考
171	管玉	管玉	SD713		0.420	1.400	0.386	隣接層位から出土のものとの接合	
172	白玉	滑石	SB701		0.430	0.260	0.124	完形?	
173	白玉	滑石	SB701		0.383	0.223	0.125	完形	
174	白玉	滑石	SB701		0.389	0.178	0.115	完形	
175	白玉	滑石	SB702	北西部床～加工面	0.495	0.183	0.168	完形	
176	白玉	滑石	SB702	中西部床～加工面	0.384	0.228	0.137	完形	
177	白玉	滑石	SB702	中東部床～加工面	0.317	0.167	0.111	完形	
178	白玉	滑石	SB702	中東部床～加工面	0.368	0.217	0.118	ほぼ完形	黒色
179	白玉	滑石	SB702	中東部床～加工面	0.385	0.169	0.116	ほぼ完形	
180	白玉	滑石	SB702	南東・南西部床～加工面	0.328	0.187	0.116	ほぼ完形	
181	白玉	滑石	SB702	SP01内	0.440	0.243	0.127	ほぼ完形	
182	白玉	滑石	SB702	北西部埋土	0.481	0.232	0.146	破片	
183	白玉	滑石	SB702	北東部埋土	0.550	0.292	0.177	完形	やや黒色
184	白玉	滑石	SB702	中西部埋土	0.427	0.161	0.139	完形	
185	白玉	滑石	SB702	中西部埋土	0.448	0.121	0.125	ほぼ完形	
186	白玉	滑石	SB702	中西部埋土	0.315	0.147	0.114	完形	
187	白玉	滑石	SB702	中東部埋土	0.491	0.209	-	破片	
188	白玉	滑石	SB702	中東部埋土	0.321	0.131	0.117	完形	
189	白玉	滑石	SB702	中東部埋土	0.467	0.390	-	破片	
190	白玉	滑石	SB702	南東部埋土	0.347	0.260	0.121	完形	
191	白玉	滑石	SB702	南東部埋土	0.445	0.241	0.132	完形	やや黒色
192	白玉	滑石	SB702	南東・中東部埋土	0.472	0.424	0.149	破片	
193	白玉	滑石	SB702	南東・中東部埋土	0.411	0.244	0.117	完形	
194	白玉	滑石	SB703	北東部床～加工面	0.308	0.137	-	破片	
195	白玉	滑石	SB703	炉	0.470	0.270	0.188	破片	
196	白玉	滑石	SB703	炉	0.439	0.225	0.148	完形	
197	白玉	滑石	SB703	北西部埋土	0.409	0.342	0.159	完形	
198	白玉	滑石	SB703	北東部埋土	0.336	0.224	0.116	完形	
199	白玉	滑石	SB703	埋土	0.492	0.377	0.140	完形	
200	白玉	滑石	SD713		0.416	0.185	0.120	完形	
201	白玉	滑石	SD713		0.440	0.245	0.143	完形	やや黒色
202	白玉	滑石	SD713		0.464	0.189	0.145	完形	
203	白玉	滑石	SD713		0.493	0.142	0.189	完形	
204	白玉	滑石	SD713		0.378	0.272	0.143	完形	
205	白玉	滑石	SD713		0.353	0.260	0.113	完形	

石製であり、それぞれ別の層位から出土したものが接合した。2つに折られて投棄された可能性がある。白玉200～205も滑石製である。

また柱材の一部が出土した(図68)。113は分割材であり、欠損しているが断面は四角形と判断される。第三章第3節で述べるように樹種はヒノキ科であった。

iv) 盛土遺構

SX714～717(図76～78、図版13・14・31) 盛土遺構であり、第8a層の上に形成され、細礫や第9層の偽礫を含んだ細粒砂で構成されていた。盛土の厚さはSX715で0.20～0.80m、それ以外は0.10～0.30mであり、いずれも調査範囲外にさらに高まっていく状況が認められた。高まりの規模はSX714が東西・南北とも3.50m以上、SX715が南北16.00m以上、SX716が南北7.00m以上、SX717が南北8.00m以上であった。いずれの高まりからも主体部を検出することはできなかったが、盛土の状況から古墳である可能性も考慮すべきであろう。SX714～717の間に設けられた溝は幅2.30～3.50m、深さ0.40～0.80mであり、埋土中からは縄文時代晩期、古墳時代前～中期の土器が出土した。

206は長原式深鉢で、低い突帯の上にキザミメを0.4cm間隔で入れる。生駒西麓産である。

207は長原式深鉢で、口縁部のやや下に低い突帯を貼付けており、その上に浅いキザミメを0.3～0.5cm間隔で入れる。生駒西麓産である。

208は土師器甕である。球形の体部で、丸底である。外面はナデ、内面は下から上方向のケズリで整える。体部中位には直径3.0～4.0cmの円形剥離が帯状に連続して認められる。

209は甕である。体部外面は横方向のタタキ、内面はナデで整える。底部外面付近は左から右方向にケズリを施す。底部の孔は中心に直径4.0cmの円孔を入れ、その周辺に直径2.0cmの円孔を8個配置する。口縁部は内外面をシャープな横方向のナデで整えており、端面がわずかに凹む。

210は陶質土器壺である。灰褐色を呈しており、焼成は良好である。体部外面は縄蓆文タタキで整

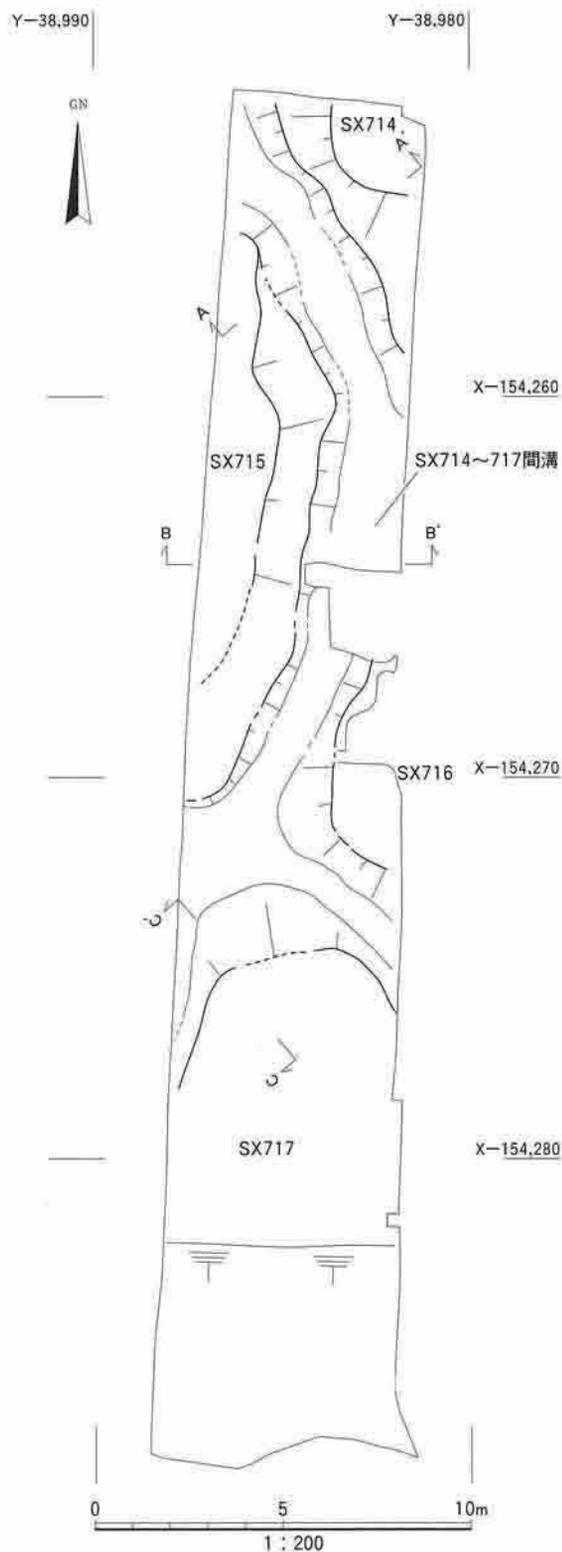
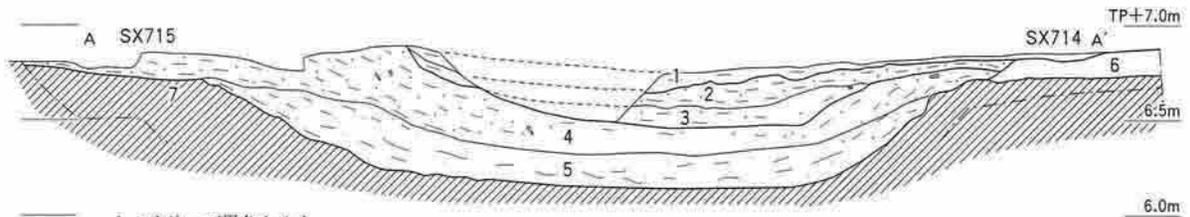
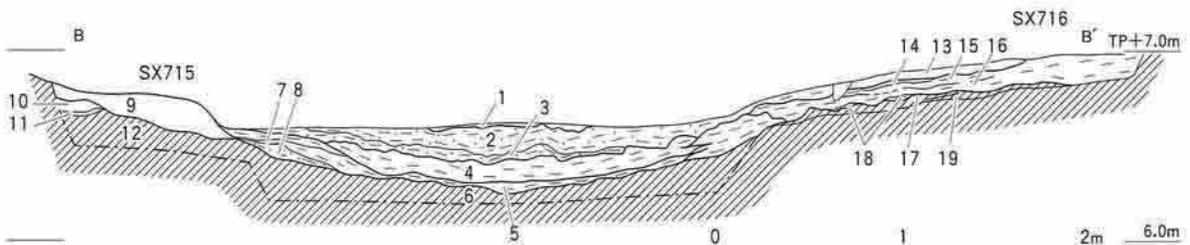
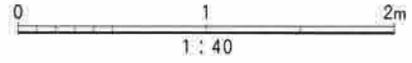


図76 北区第7b層上面検出遺構

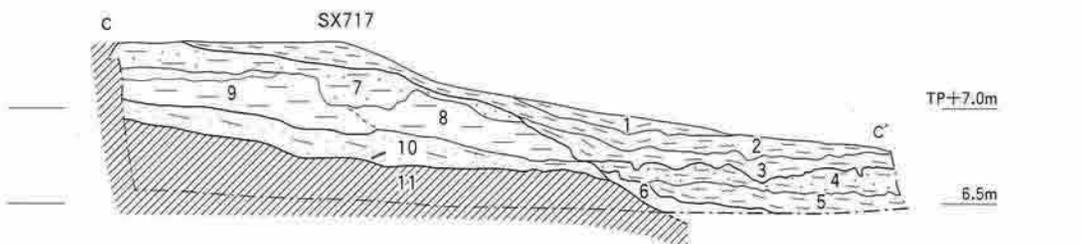
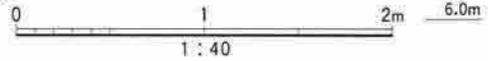


- 1: オリーブ黒色シルト
- 2: 黒～黒褐色細礫混り粘土
- 3: 黒色細粒砂混りシルト
- 4: 黒褐色細礫混り暗灰色シルト～シルト質細粒砂
- 5: 黒褐色砂質シルト
- 6: オリーブ黒色細粒砂混りシルト (SX714盛土)
- 7: 暗オリーブ灰色細粒砂



- 1: 灰色シルト
- 2: 灰色粗粒砂混り粘土
- 3: 黒色中～粗粒砂混り粘土
- 4: 黒色粘土 (機能時堆積層)
- 5: 黒色粘土
- 6: 黒褐色シルト質粘土
- 7: オリーブ黒色シルト
- 8: オリーブ黒～黒色粗粒砂混り粘土質シルト
- 9: オリーブ黒色粗粒砂混りシルト (盛土)
- 10: 灰～オリーブ黒シルト質粘土

- 11: 灰～オリーブ黒色粘土
- 12: 暗オリーブ灰色細粒砂
- 13: 暗オリーブ灰～黒色粗粒砂混り粘土
- 14: 暗オリーブ灰色粘土 (盛土)
- 15: 暗オリーブ灰～オリーブ黒色粘土 (盛土)
- 16: オリーブ黒～黒色粘土 (盛土)
- 17: オリーブ黒～黒色粘土
- 18: オリーブ黒～黒色粘土
- 19: 黒細粒砂



- 1: オリーブ黒色炭化物混り粘土 (水成層)
- 2: オリーブ黒色炭化物含む粘土 (水成層)
- 3: 黒～オリーブ黒色粘土質シルト (黒色粘土偽礫・灰緑色シルト偽礫を含む) (機能時堆積層)
- 4: 黒色細礫混り粘土
- 5: 黒色粘土
- 6: 黒～オリーブ黒色 (暗灰色粘土)
- 7: 黒褐色中～粗粒砂混りシルト (盛土)
- 8: 黒色粘土質シルト (盛土)
- 9: 黒～オリーブ黒色粘土質シルト (盛土)
- 10: オリーブ黒色シルト質極細粒砂
- 11: 暗緑灰色シルト質細粒砂

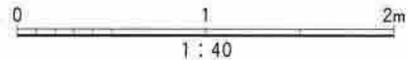


図77 SX714～717間溝断面図

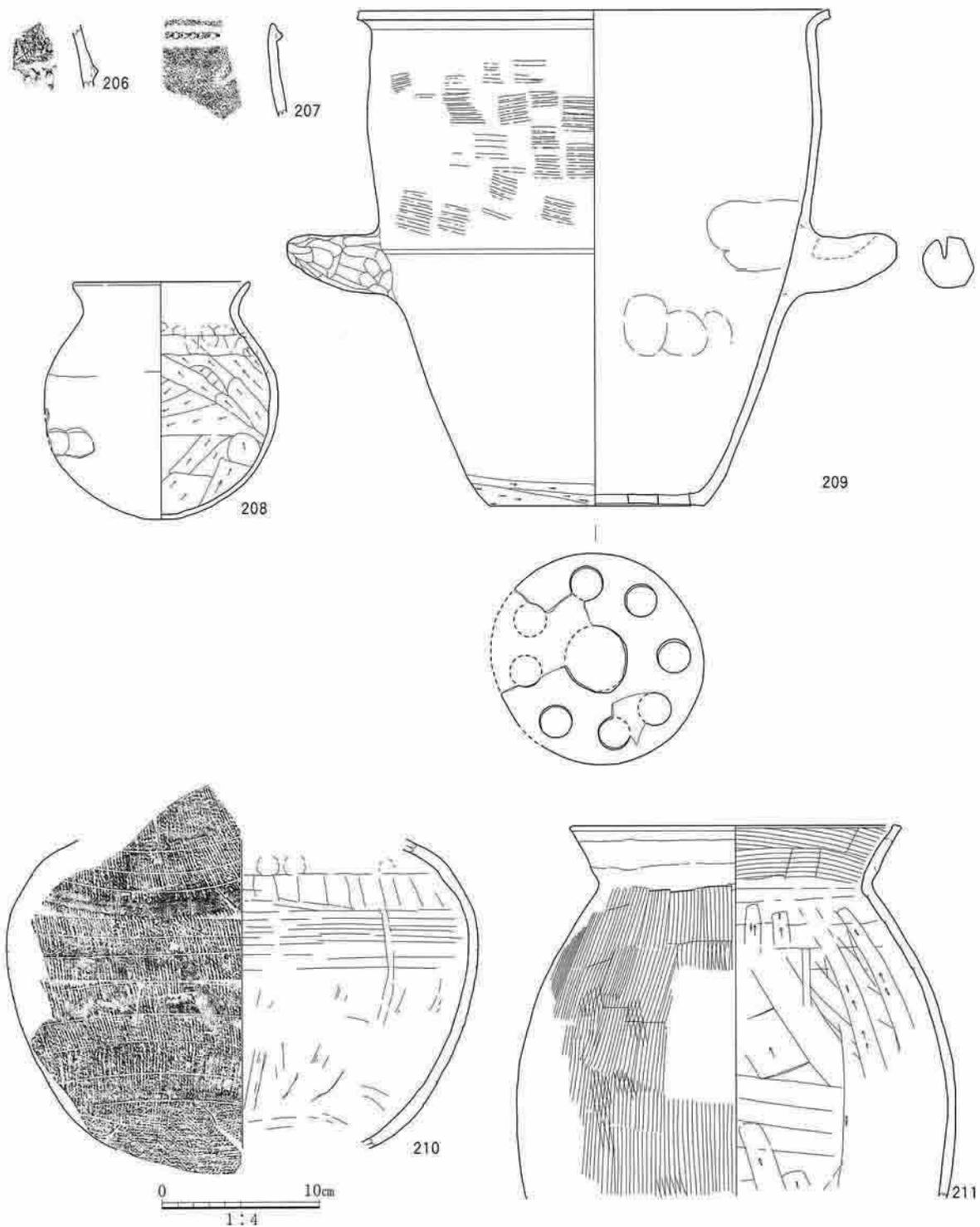


图78 SX714~717間溝出土遺物

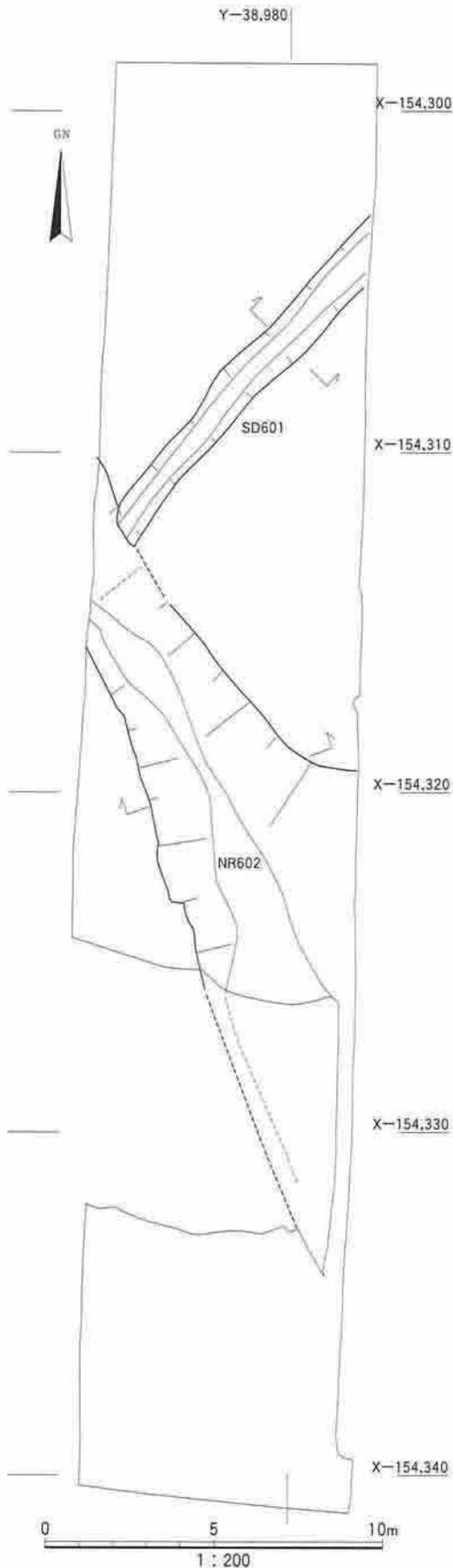


図79 第7a層上面検出遺構
NR602断面図は図71を参照

えたのち、圏線を11条入れる。内面は肩部にオサエが残るが、基本的に下半は縦方向、上半は横方向のナデで整える。

211は土師器長胴甕である。体部外面は縦方向のハケで整え、内面は接合痕が顕著であり、オサエを施したのち、板状工具を用いた横方向のナデで整え、縦方向のケズリを施す。口縁部外面は粘土紐の接合痕が残されているが、内面は横方向のハケで整える。

4) 古墳時代後期～飛鳥時代の遺構と遺物

南区において古墳時代後期の流路と溝を検出した(図79～81、図版12)。

SD601(図79～81、図版12) 幅2.50m、深さ0.50mの溝で、南西から北東に設けられていた。南西端はNR602と接しており、埋没はNR602より早い。最下層のオリブ黒色細粒砂層がNR602に入っており、SD601とNR602はほぼ同時に機能していたとみられる。埋土から212～216が出土した。

212は韓式系土器平底鉢である。体部外面を縦方向のハケ、内面を横方向のナデを巡らせる。口縁部は内外面を横方向のナデで整える。全体が赤褐色に変色しており二次的に焼けたことがうかがえる。

213は韓式系土器の体部破片で、外面に格子目タタキが認められる。

214は須恵器の壺口縁部である。器壁は薄く、回転ナデによってシャープに整える。口縁部の傾きをもとに、TK216～208型式に属すと判断される。

215は土師器鉢である。片口に復元される。体部内外面に輪積みの痕跡が顕著であり、外面は縦方向のナデとオサエ、内面はナデを施す。口縁部は内外面を横方向のナデで整える。

216は須恵器の台付鉢である。内外面とも回転ナデで整え、外面には4条のカキメを巡らす。

NR602(図71・79・81、図版12) 幅3.00～6.50mの溝で、ラミナの傾斜から南東から北西に流下していたと

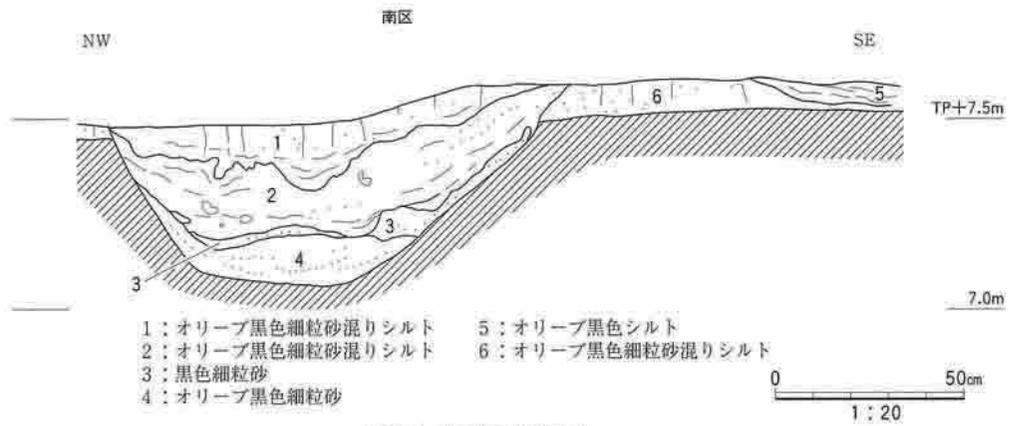


図80 SD601断面図

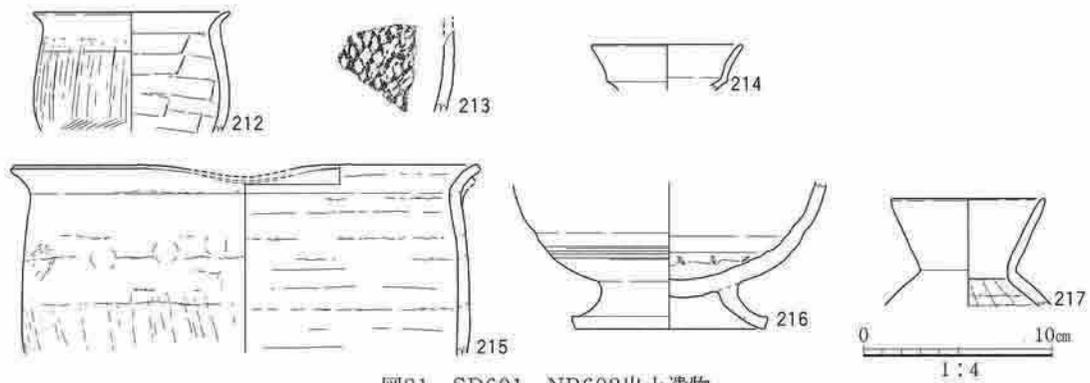


図81 SD601・NR602出土遺物

SD601(212~216)・NR602(217)

判断した。幅の狭い北側ほど深く、南側が0.50mであるのに対して、北側は0.80mの深さであった。流路は細礫を含む中粒砂で埋まっており、ラミナが顕著であった。流路内堆積から217が出土した。

217は土師器の直口壺である。内面肩部には輪積みの痕跡が明瞭に残される。形態的な特徴から古墳時代中期に属するとみられ、遊離資料とみられる。

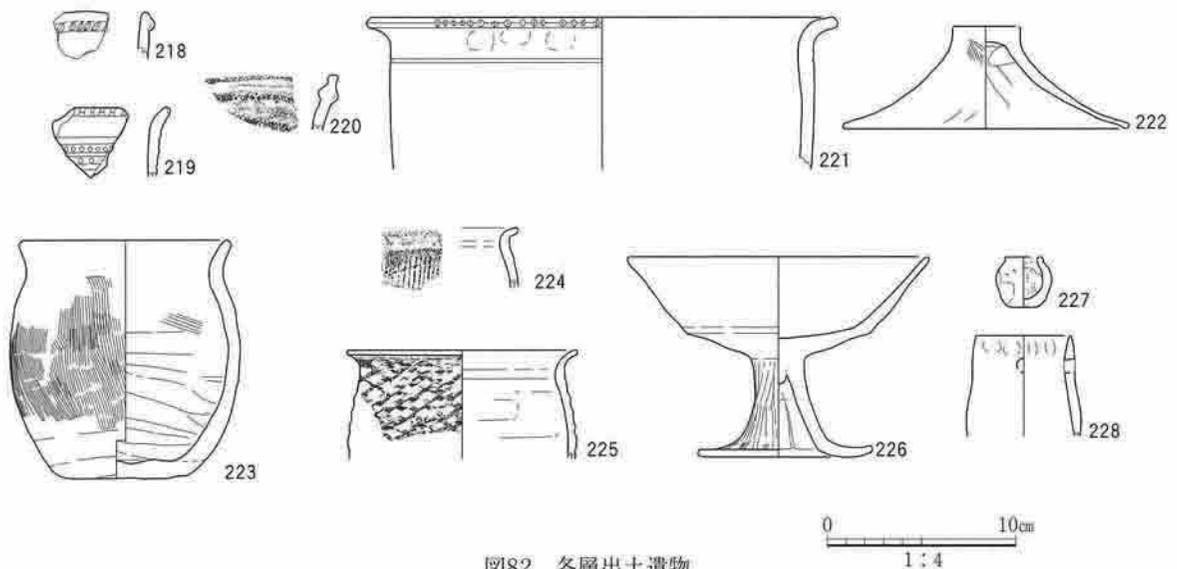


図82 各層出土遺物

第9a層(218~222)、第7a・b層(223~228)

5) 各層出土の遺物

各層中から出土した遺物について以下に述べる(図82、図版31)。218～222は第9a層から、223～228は第7a・b層からそれぞれ出土した。218は長原式とみられる突帯文土器の口縁部である。胎土は生駒西麓産である。口縁部には浅いキザミメが0.1～0.2cm間隔で入る。

219は弥生時代前期の甕口縁部である。内外面を同時にナデで整え、口縁端部にキザミメを施す。頸部には沈線を3条巡らせ、沈線間には直径0.2cmの円形の刺突文を0.2～0.3cm間隔で入れる。

220は船橋式の浅鉢口縁部である。外面に突帯を貼り付けて下方に拡張し、内面にも突帯を1条付加する。胎土は生駒西麓産である。

221は弥生時代前期の甕である。内外面を縦～斜め方向のナデで整える。頸部に1条の沈線を巡らせ、口縁部は内外面を横方向のナデで整えたのち、0.3～0.8cm間隔でキザミメを入れる。

222は弥生土器の蓋である。外面は縦方向にハケを施したのち、ナデで整えており、内面は全体をナデで平滑にする。口縁部の内外面に煤や炊きこぼしの痕跡は認められない。

223は韓式系土器平底鉢である。粘土紐の巻き上げによって成形する。外面は縦方向のハケ、内面は部分的にハケ調整が認められるものの、横方向のナデで整える。底部内外面は成形時のナデとオサエの痕跡がそのまま残る。口縁部は内外面を横方向のナデで整える。

224は韓式系土器平底鉢の口縁部である。体部外面に鳥足文タタキが認められ、内面は横方向のナデで整える。口縁部は内外面を横方向のナデで整える。

225は韓式系土器平底鉢である。体部外面に格子目タタキが認められ、内面は横方向のナデで整える。口縁部は内外面を横方向のナデで整える。

226は土師器高杯である。円盤充填で脚頂部を閉塞しており、脚部に杯部を付加して成形したとみられる。杯部内外面は磨滅しているが横方向のナデを巡らせていたことがうかがえる。脚部外面は縦方向のハケ調整後にミガキで整え、内面は板状工具によるナデを横方向に施す。

227はミニチュアの壺である。狭いが平底部分を作り出している。手捏ねで成形しており、内外面にオサエの痕跡が顕著である。全体的に赤く変色し、二次的に熱を受けたものとみられる。

228はイイダコ壺である。直径0.8cmの円孔をもつ。全体をナデを施したのち、口縁部内外面をオサエで整える。

第3節 NG06-4次調査

1) 基本層序

調査地周辺は平坦地で標高は10.4mであった(図83・84、図版2、表6)。本調査では、現地表下約4.0mまでの地層を第0～21層まで細分した。第0～11層は重機により除去し、第12～21層は人力により平面的な遺構検出作業を行いつつ掘削した。なお、第17～21層は調査地西半で地層観察を目的とした深掘りトレンチで確認した地層である。各地層の特徴については表6にまとめ、周辺調査地の調査結果も参考にしながら長原遺跡標準層序との対比を行った。

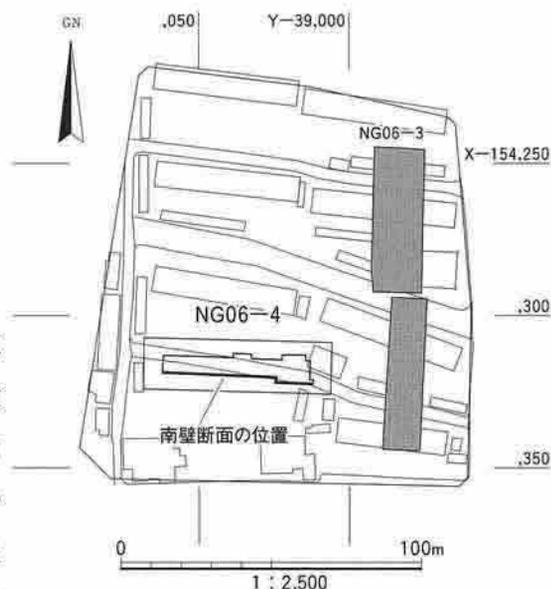


図83 調査地位置図

表6 NG06-4次調査層序表

層序	主な岩相	層厚 (cm)	主な遺構	主な遺物	長原遺跡標準層序 2001	時代
0	盛土	90~100			NG 0	現代
1	オリーブ黒色細粒砂質シルト(作土)	20~30			NG 1	近・現代
2	オリーブ灰色極細粒~細粒砂質シルト(作土)	10~20			NG 2	近世
3a	灰オリーブ色細粒砂質シルト(作土)	10			NG 3	室町~鎌倉
3b	灰オリーブ色細粒砂質シルト(作土)	10~15				
4a	オリーブ黄色極細粒砂質シルト(作土)	10~20				
4b	黄褐色極細粒砂質シルト(作土)	5~15				
5	にぶい黄色中粒~粗粒砂	≦40	河川		NG4Bii	
6a	灰色シルト質粘土(上部は作土化が進行)	15~25			NG4C	平安
6b	灰色シルト質粘土	10~20			NG 5	奈良
7a	オリーブ灰色粘土混り粗粒砂(水成層)	5				
7b	オリーブ灰色粗粒砂(水成層)	5~10				
7c	灰色粘土混り粗粒砂(水成層)	5				
8a	オリーブ灰色シルト質粘土(上部は作土化?)	20~40			NG6A	飛鳥
8b	灰色シルト質粘土	5~15				
9	灰オリーブ色シルト質粘土(自然堆積)	3~8			NG6B	
10	灰色シルト質粘土(自然堆積)	15~20			NG7A	
11a	暗緑灰色粘土質シルト(炭化物を含む・水成層)	10~20			NG7B	古墳時代中~後期
11b	暗緑灰色粘土質シルト(水成層)	10				
12	灰色粘土質シルト(西半のみ。有機質に富む・水成層)	10			NG7B~8B	弥生時代中期~古墳時代中期
13	暗緑灰色シルト質粘土(自然堆積)	10~15		土師器・須恵器		
14	オリーブ黒色粘土質シルト(古土壌)	20~30	↑ 堅穴住居(古墳・弥生時代)・土城・柱穴・小穴・堅穴状遺構・溝・土器集積	須恵器(TK73~208型式)・製塩土器・韓式系土器・土師器・弥生土器(IV-V様式)・鉄旗・石砲丁・サヌカイト剥片・管玉・ガラス小玉	NG7B~8B	弥生時代前~中期
15	暗オリーブ灰色シルト質粘土	5~15	↑ 土器集積	弥生土器(IV様式)		
16	オリーブ灰色粘土混り極細粒砂質シルト(自然堆積)	10~15			NG9B~11	縄文時代後~晩期
17	オリーブ灰色極細粒砂質シルト(自然堆積)	30~40				
18	オリーブ灰色シルト質粘土(自然堆積)	10~15				
19	灰黄褐色極細粒砂質シルト(古土壌)	10	深掘りトレンチ(西半)で確認	サヌカイト製石鏃	NG12	縄文時代早~後期
20	暗灰黄色シルト混り極細粒砂(古土壌・乾痕)	5~10			NG13	後期旧石器時代
21	灰オリーブ色細粒砂混り粘土(自然堆積)	≦20			NG14	

↑：上面検出遺構 ←：地層内検出遺構

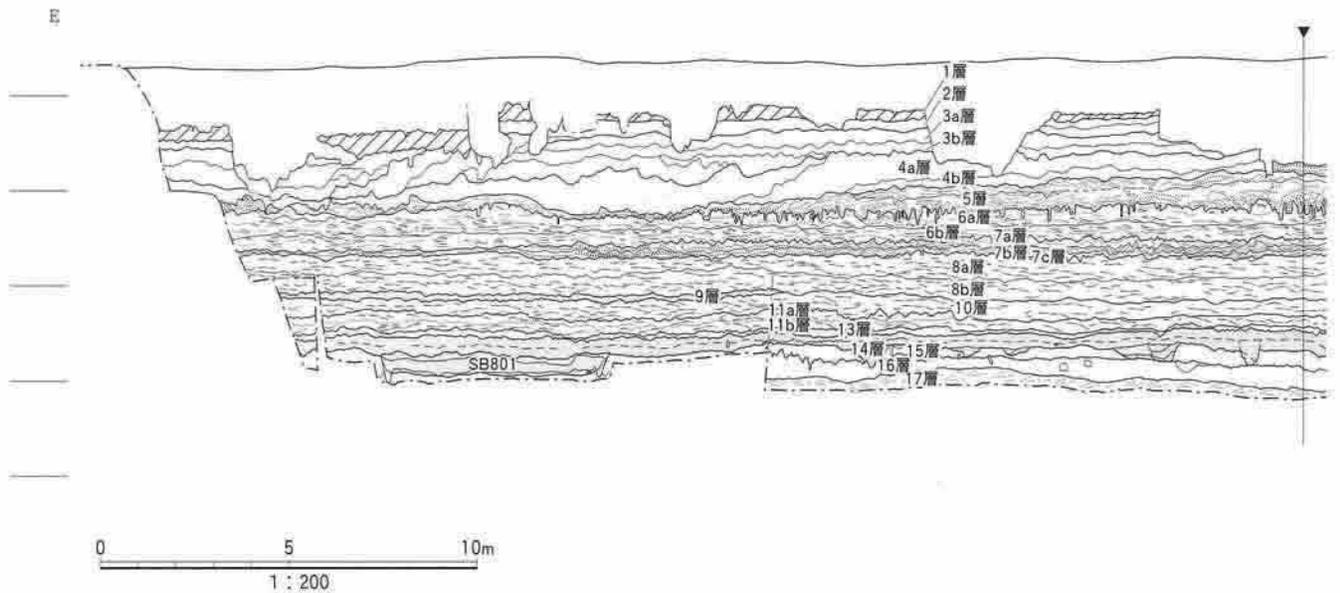
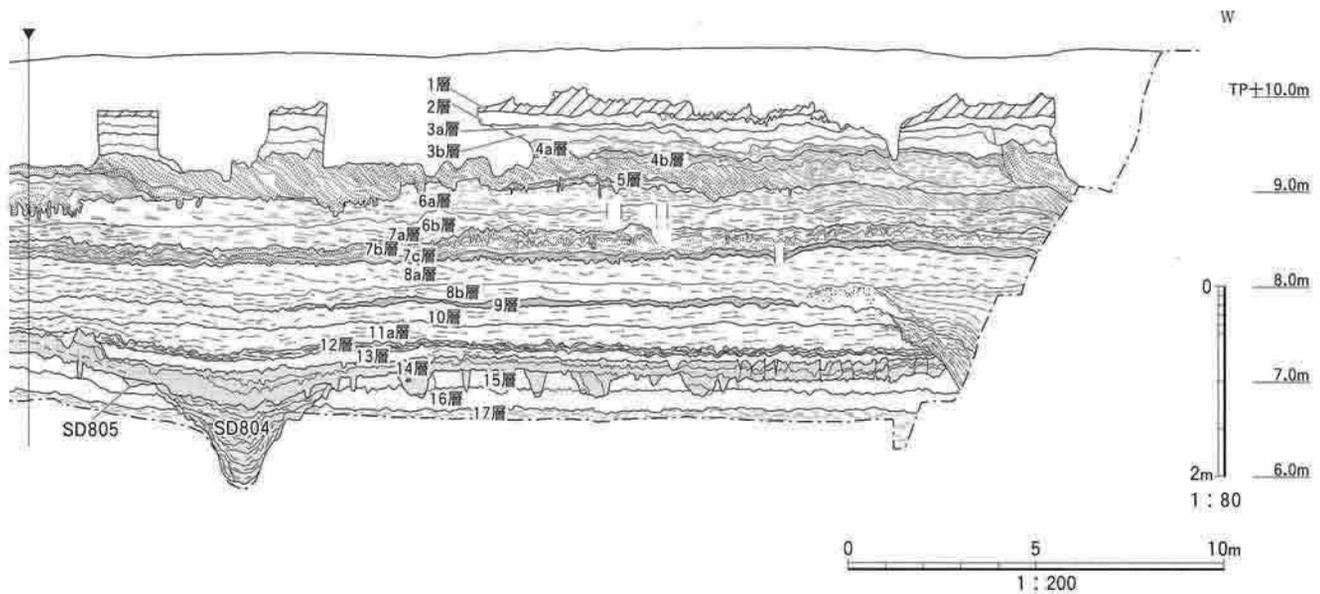


図84 南壁断面図

- 第1層：オリブ黒色細粒砂質シルトで、近・現代の作土層である。NG1層に対比される。
- 第2層：オリブ灰色極細粒～細粒砂質シルトで、近世の作土層である。NG2層に対比される。
- 第3a層：灰オリブ色細粒砂質シルトで、作土層である。NG3層に対比される。
- 第3b層：灰オリブ色細粒砂質シルトで、作土層である。NG3層に対比される。
- 第4a層：オリブ黄色極細粒砂質シルトで、作土層である。NG3層に対比される。
- 第4b層：黄褐色極細粒砂質シルトで、作土層である。NG3層に対比される。
- 第5層：にぶい黄色中粒～粗粒砂で、河川堆積層である。NG4Bii層に対比される。
- 第6a層：灰色シルト質粘土で、作土層である。上部は作土化していた。NG4C層に対比される。
- 第6b層：灰色シルト質粘土で、水成層である。NG4C層に対比される。
- 第7a層：オリブ灰色粘土混り粗粒砂で、水成層である。NG5層に対比される。
- 第7b層：オリブ灰色粗粒砂で、水成層である。NG5層に対比される。
- 第7c層：灰色粘土混り粗粒砂で、水成層である。NG5層に対比される。
- 第8a層：オリブ灰色シルト質粘土で、水成層である。NG6A層に対比される。
- 第8b層：灰色シルト質粘土で、水成層である。NG6A層に対比される。
- 第9層：灰オリブ色シルト質粘土で、水成層である。NG6B層に対比される。
- 第10層：灰色シルト質粘土で、水成層である。NG6B層に対比される。
- 第11a層：炭化物を含む暗緑灰色粘土質シルトで、水成層である。NG7A層に対比される。
- 第11b層：暗緑灰色粘土質シルトで、水成層である。NG7A層に対比される。
- 第12層：灰色粘土質シルトで、水成層である。調査地の西半に分布しており、腐植物を多く含んでい



た。NG7B層に対比される。

第13層：暗緑灰色シルト質粘土で、水成層である。層中から土師器・須恵器が出土した。NG7B層に対比される。

第14層：オリブ黒色粘土質シルトで、古土壤である。本層上面には地震の痕跡が顕著であった(図版2)。層中で弥生時代後期～古墳時代中期にかけての竪穴建物・ピット・溝などを検出した。NG7B～8B層に対比される。

第15層：暗オリブ灰色シルト質粘土で、古土壤である。上面で弥生時代中期の土器集積を検出した。NG8B～9A層に対比される。

第16層：オリブ灰色粘土混り極細粒砂質シルトで、水成層である。NG9B～11層に対比される。

第17層：オリブ灰色極細粒砂質シルトで、水成層である。縄文時代後から晩期の遺物を含んでおりNG9B～11層に対比される。

以下の地層は調査地西部のトレンチ調査で明らかになった地層である。

第18層：オリブ灰色シルト質粘土で、水成層である。NG9B～11層に対比される。

第19層：灰黄褐色極細粒砂質シルトの古土壤で、縄文時代早～後期のNG12層に対比される。層中からサヌカイト製石鏃が出土した。

第20層：暗灰黄色シルト混り極細粒砂で、古土壤である。乾痕が顕著で、NG13層に対比される。

第21層：灰オリブ色細粒砂混り粘土で、古土壤である。乾痕が顕著であった。NG13層からの乾痕が入っていた。NG14層に対比される。

2) 弥生時代中期の遺構と遺物

i) 土器集積

SX901(図85・86) 竪穴建物SB802の調査区東端の第15層上面で検出した。土器の破片がほぼ水平な状態で東西1.20m以上、南北1.90mの範囲に散乱しており、東側は竪穴建物SB802によって切られていた。この土器集積からは229~232が出土した。いずれも弥生時代中期の甕である。

229は体部の外面を横方向のタタキで整形したのち、縦方向のハケを施す。内面は縦方向のハケを施したのち、オサエを入れる。口縁部は内外面を横方向のナデで整える。230は体部外面を縦方向のハケで整えたのち、下半部を縦方向のミガキで整える。内面は縦方向のハケののち、口縁部内外面を横方向のナデで整える。231は生駒西麓産であり、体部外面をナデ調整後、縦方向のミガキで整える。内面は肩部まで縦方向のハケを施したのち、ナデで平滑にする。口縁部には横方向のシャープなナデを巡らせ、内面がやや凹む。232は大型品である。口縁端部を上下に拡張し外面を横方向のナデで整える。体部は外面に縦方向のハケを施し、内面は右下から左上方向のハケで整える。体部下半に煤が部分的に付着する。

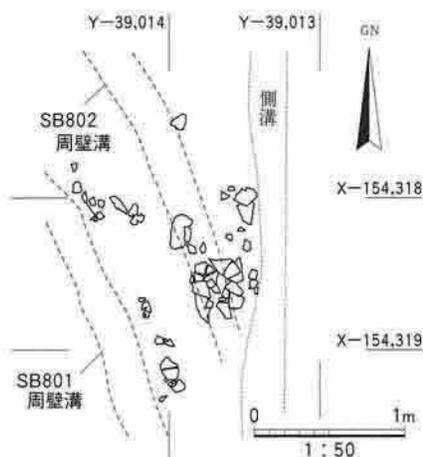


図85 SX901平面図

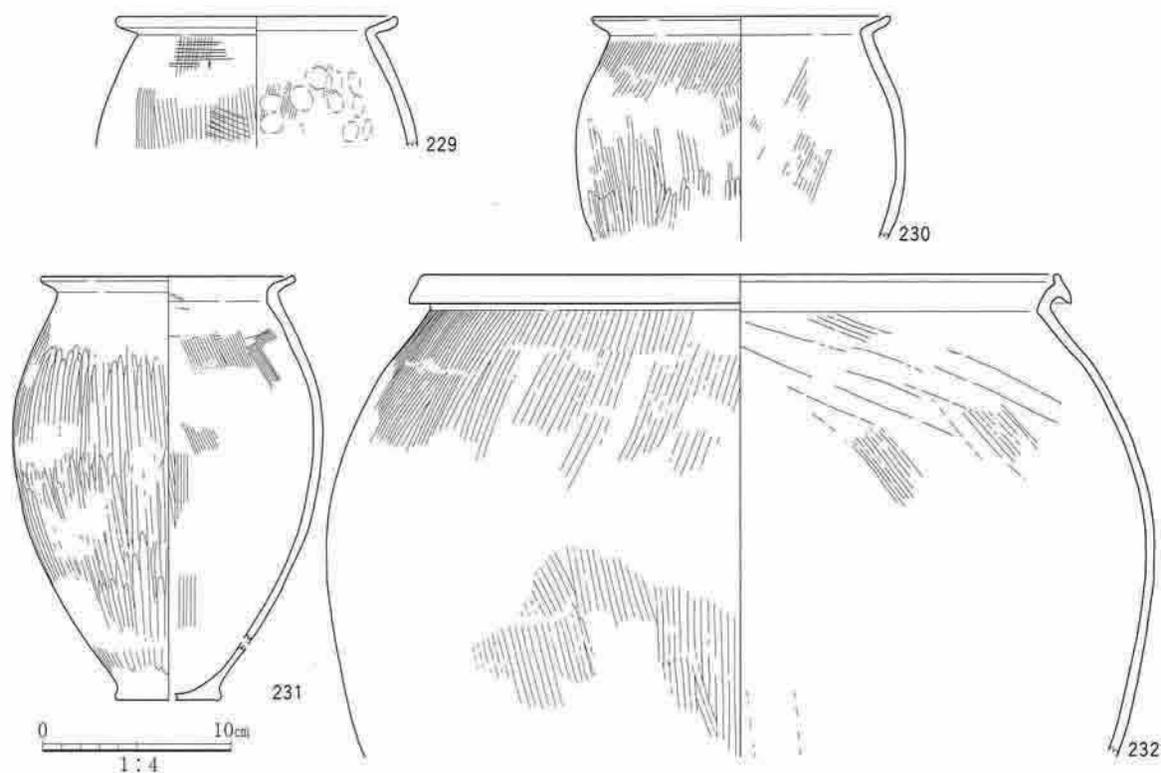


図86 SX901出土土器



図87 第14層内検出遺構配置図(1:200)

3) 弥生時代後期の遺構と遺物

弥生時代後期の遺構は竪穴建物2基と土器集積1箇所、溝2条を第14層内で検出した(図87～99、原色図版2、図版15・16・19・31～37)。第14層は古土壌であり、本来の遺構形成面が判別しづらく、第15層との層界まで掘下げて遺構の輪郭を把握した。

i) 竪穴建物

SB801(図87～90・115、図版15・31、表7) 調査区東端付近で検出した竪穴建物である。SB801は隅丸方形で一辺約6.10mであった。竪穴の覆土からはガラス小玉、土製品等が出土した。そのほか西半で溝・土壙、中央で柱穴・小穴等を検出した。

SK101は東西0.52m、南北0.48m、深さ0.15mの炉である。埋土中には炭や灰、焼土が多く含まれており、高杯233が出土した。

SP102は直径0.34m、深さ0.25mで、柱痕跡は直径0.13m、深さ0.26mであった。柱痕跡には灰色粘土質シルトが堆積していた。

SP104は直径0.33m、深さ0.06mで、柱痕跡は直径0.14m、深さ0.07mであった。柱痕跡にはオリブ黒色粘土質シルトが堆積していた

SP106は直径0.23m、深さ0.18mで、柱痕跡は直径0.09m、深さ0.18mであった。柱痕跡には黒色

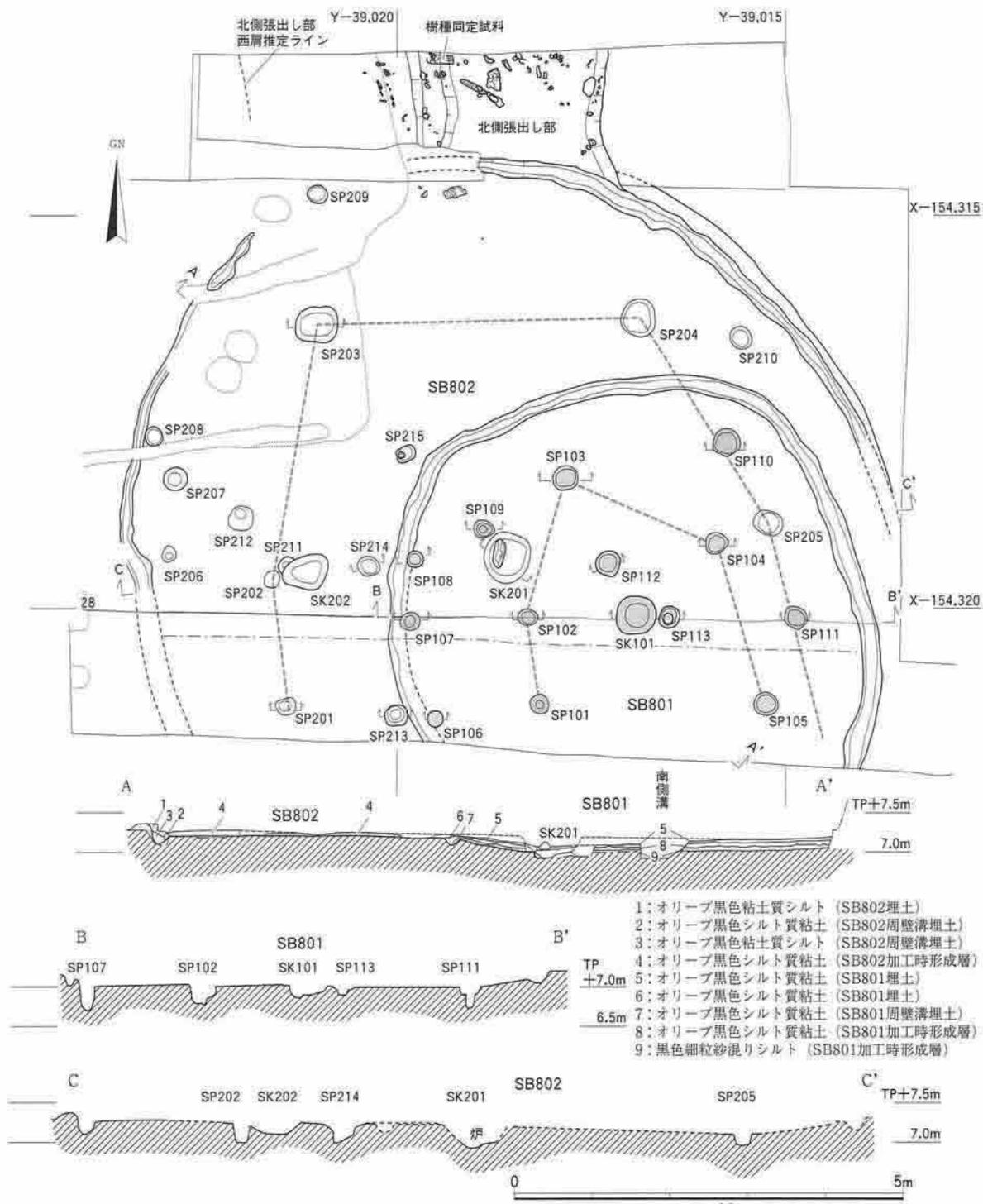


図88 SB801・802平面図・断面図

粘土質シルトが堆積していた。

SP108は直径0.22m、深さ0.13mで、柱痕跡は直径0.15m、深さ0.13mであった。

SP109は直径0.31m、深さ0.09mで、柱痕跡は直径0.19m、深さ0.09mであった。柱痕跡には灰色粘土質シルトが堆積していた。

SP110は直径0.36m、深さ0.10mで、柱痕跡は直径0.15m、深さ0.15mであった。柱痕跡には灰色オリーブ黒色粘土質シルトが堆積していた。

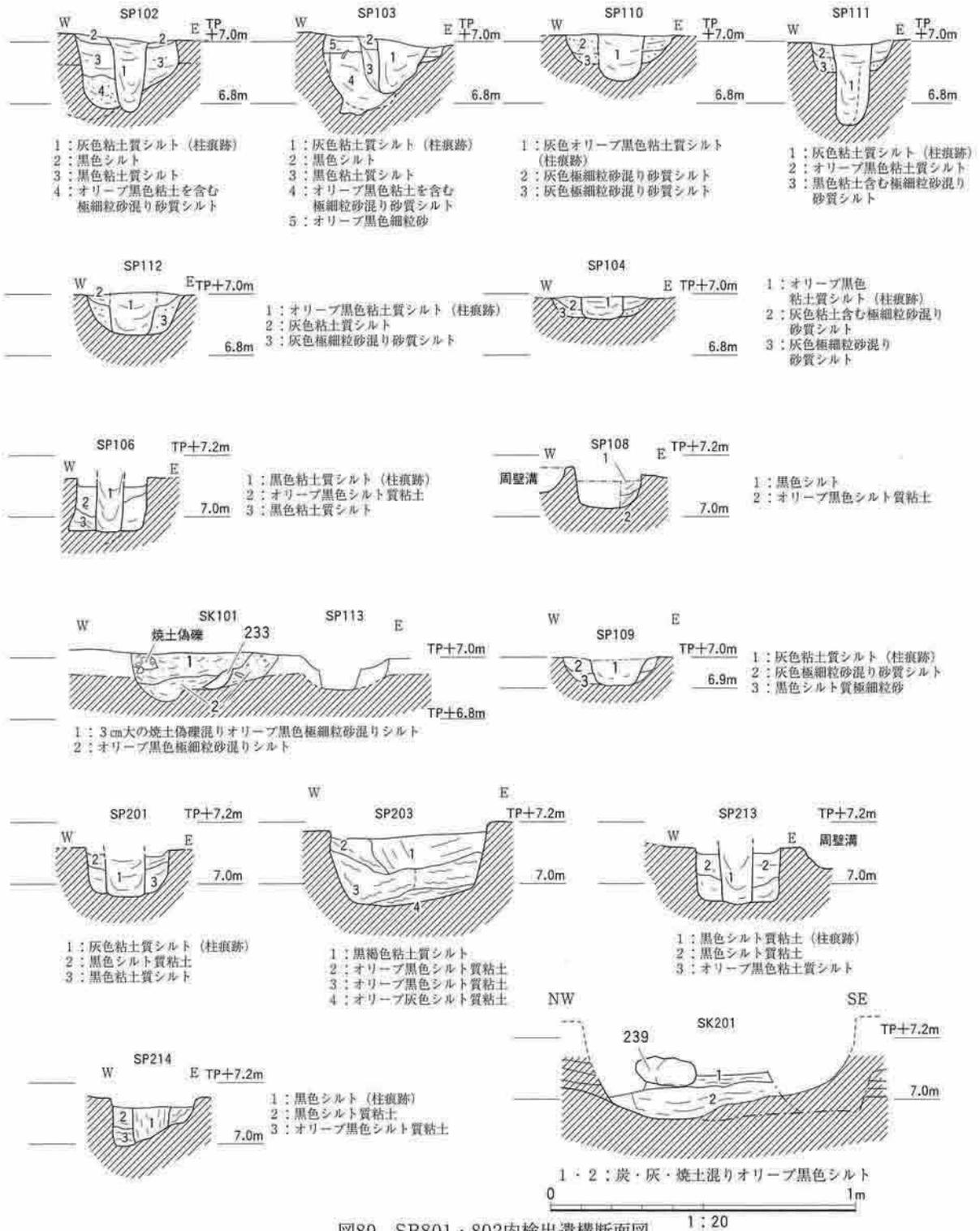


図89 SB801・802内検出遺構断面図

SP111は直径0.27m、深さ0.10mで、柱痕跡は直径0.13m、深さ0.27mであった。柱痕跡には灰色粘土質シルトが堆積していた。

SP112は直径0.32m、深さ0.14mで、柱痕跡は直径0.15m、深さ0.14mであった。柱痕跡にはオリーブ黒色粘土質シルトが堆積していた。

遺物は床面から234～239が、中央の炉SK101から233がそれぞれ出土した(図90、図版31)。

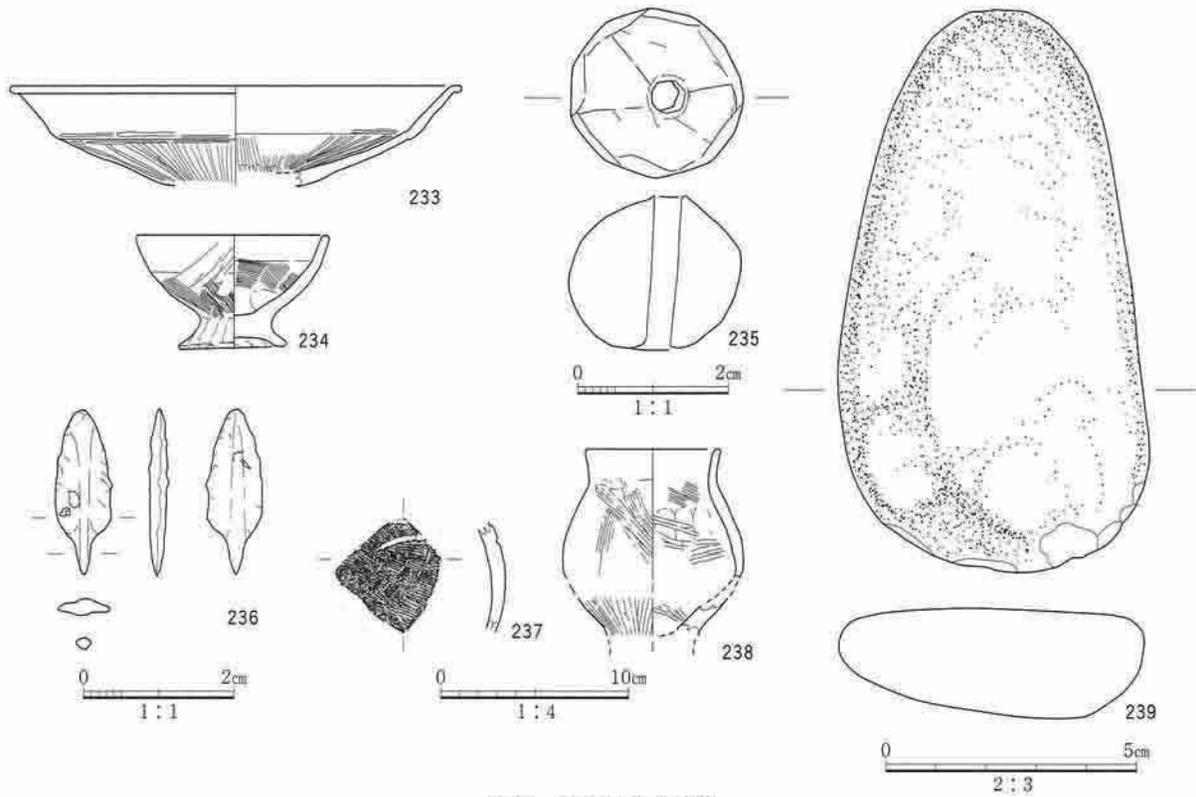


図90 SB801出土遺物

233は高杯の杯部である。外面下半部を縦方向のミガキ、屈曲部を横方向のミガキで整える。内面下半部は放射状にミガキを施したのち、屈曲部に横方向のミガキを施す。

234は台付鉢である。内外面にそれぞれハケを施し、口縁部内外面を横方向のシャープなナデで整える。脚台は内外面にオサエを施す。

235は土玉あるいは土錘と考えられる土製品である。直径2.3cm、高さ2.0cm、孔径0.4cmで、重さは10.1gである。表面はナデで整える。

236は青銅製の有茎式銅鏃である。刺返は無く、脊部分が厚い。長さ2.15cm、幅0.70cm、厚さ0.20cm、茎部直径は0.14cmである。重量は1.32gである。

237は壺類肩部とみられる破片で、ヘラ状工具による沈線文を少なくとも2条入れる。

238は台付無頸壺に復元される。体部外面をハケで整えたのち、右下から左上のミガキで平滑にする。内面はハケを施し、オサエとナデで整えたのち横方向のミガキで平滑にする。脚台部外面は縦方向、内面は右下から左上方向のミガキを入れる。

239は砂岩製の敲石で、長さ11.1cm、幅6.2cm、厚さ2.2cmである。先端を部分的に研磨する。

SB802(図87～89・91～97、原色図版2、図版15・16・19・32～36) 調査区の東端付近で検出した大型の円形竪穴建物である。北半および北側張出部に、炭化材が比較的多く分布していたため、焼失したものとみられる。直径9.90mであり、北・西・東の各壁沿いには土器群が認められた。土器群(西側土器群、北側土器群、東側土器群)は住居床面にそのまま置かれた状態であった。出土した土器は二重口縁壺・長頸壺・高杯・器台・鉢・甕などである。

各土器群に付着した土を洗浄したところ植物遺存体が多数見つかり、遺物の中にも植物遺存体が含

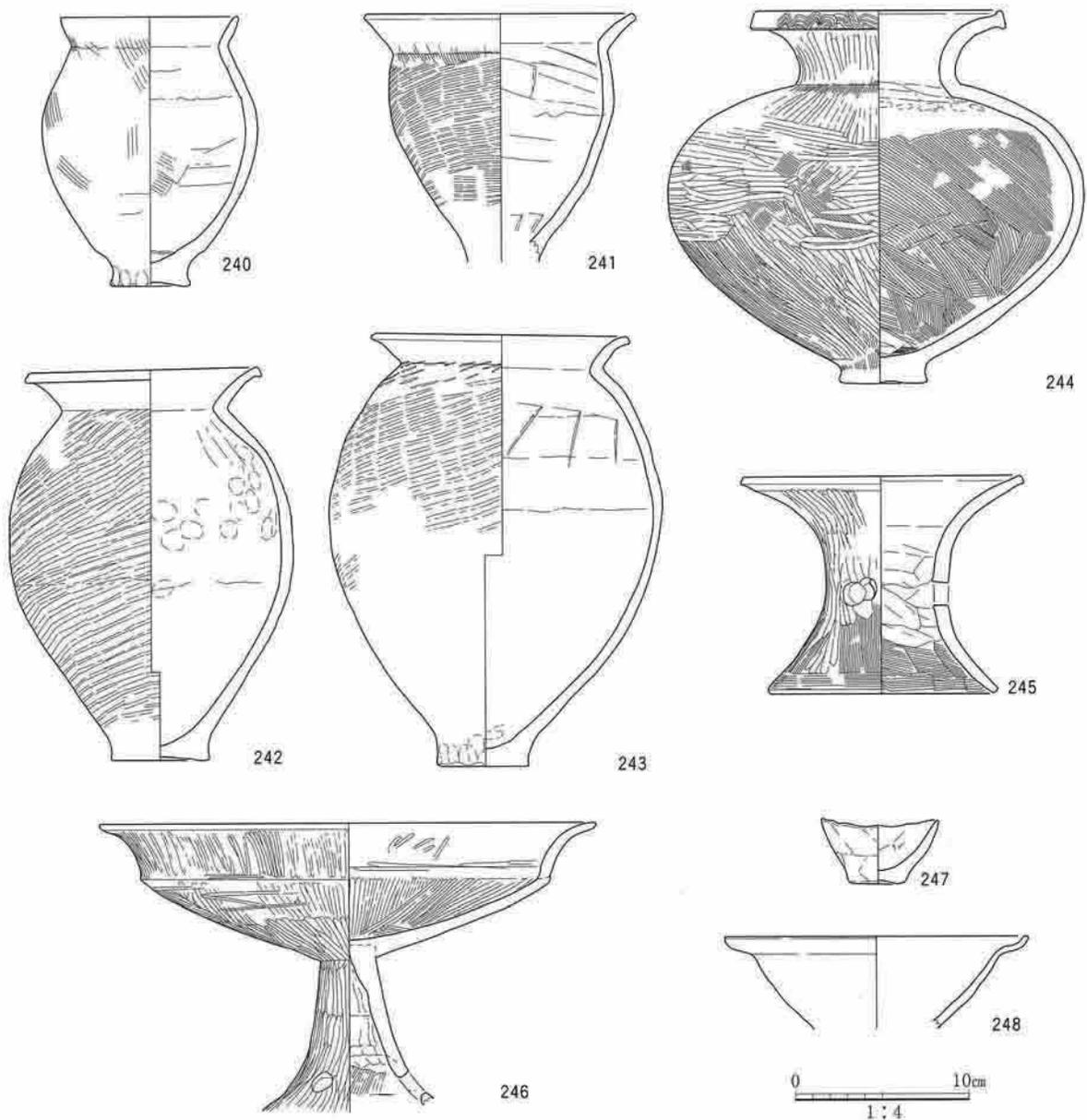


図91 SB802西側土器群出土土器

まれていた。広口壺244の内部には多量の炭化米が塊状で入っていた。これらは穎が認められず胚乳の状態であったため、脱穀した生米(玄米)の状態で保存されていたと推測されている(第Ⅲ章第3節)。また、高杯267の脚部下からもイネの胚乳が多数出土している(第Ⅲ章第3節、写真4)。これらの資料は穀物利用のありかたをうかがう貴重な資料である。

SB802は覆土から焼土塊や炭化材片が多数出土しており、出土した土器の一部に被熱痕跡も見られることから火災により焼失した可能性が高い。上部構造を復元する目的で、北側張出し部から出土した垂木の可能性がある炭化材の樹種同定を行っている(第Ⅲ章第4節)。

SK201は炉である。直径0.64m、深さ0.32mで、焼土や炭、灰を含むオリーブ黒色シルトで埋まっていた。

SP201は直径0.28m、深さ0.14mで、柱痕跡は直径0.13m、深さ0.15mであった。柱痕跡には灰色粘土質シルトが堆積していた。

SP214は直径0.28m、深さ0.16mで、柱痕跡は直径0.12m、深さ0.11mであった。

SP213は直径0.28m、深さ0.18mで、柱痕跡は直径0.11m、深さ0.19mであった。柱痕跡には黒色シルト質粘土が堆積していた。

住居の床面で出土した土器は西、北、東の3群に大別される。いずれも完存率が高い土器が多く、北・東群の土器は二次的に焼けたものが多かった。

SB802西側土器群出土土器(図91・97、図版19・32)

240は甕である。外面を縦方向のハケで整えたのち、ナデを施す。内面は体部下半を右下から左上へハケを施したのち、ナデで整える。上半は部分的に横方向のハケを施すが、全体を緩やかなナデで整える。肩部は粘土紐の接合痕が幅2.0cm間隔で残る。

241は甕である。体部外面は右上がりのタタキで整える。内面は横方向のナデで整える。頸部から口縁部にかけて縦方向のハケを施したのち、口縁部内外面を横方向のナデで整える。また、外面には下半部に帯状に煤が付着しており、円形剥離やクラックが顕著である。

242は甕である。外面のタタキは右上がり主軸を揃えて施されているが、胴部最大径の位置よりやや下には接合痕が明瞭に残っている。内面にはナデを施し、体部上半を中心にオサエで整える。口縁部内外面は横方向のナデを巡らせ、端部をメントリする。底部外側縁が赤く変色しており、火にかけられて使用したことがうかがえる。

243は甕である。外面は底部をオサエ、体部をナデ調整後、上半部に右上がりのタタキを施す。内面は上半部に幅3.0cm間隔で粘土帯の接合痕が残存するが、全体をナデで整える。また、肩部には右から左方向の板状工具を用いたナデ、底部にはオサエの痕跡が認められる。口縁部内外面は横方向のナデを巡らせる。

244は広口壺である。体部が張出しており偏球形を呈する。口縁部を上下に拡張し、6条の櫛描波状文を施す。外面は頸部を縦方向のミガキ、体部を縦方向のハケで整えたのち、肩部と下半部にそれぞれ縦方向のミガキ、体部中に横方向のミガキを施す。内面は頸部と体部の接合部周辺をナデとオサエで整える。底部はやや上げ底状になっており、浅いケズリが部分的に認められる。

245は器台である。スカシ孔は3個で、1箇所には穿孔のやり直しが認められる。脚部外面はハケ調整後、縦方向のミガキで平滑にし、内面は横方向のナデを施す。裾部は内外面をそれぞれ横方向のハケで整える。

246は高杯である。スカシ孔は3個である。杯部は外面上半部と下半部にそれぞれ縦方向のミガキを施したのち、屈曲部に横方向のミガキを入れる。内面は下半部が縦方向のミガキで、上半部の屈曲部付近を横方向のミガキで整える。脚部外面は縦方向のミガキで平滑にし、内面には上半部にシボリの痕跡が残るが、下半部は縦方向のハケで整えている。

247はミニチュアの鉢である。内外面をそれぞれナデで整える。口縁部には調整を施さない。

248は鉢である。口縁部はやや受口状を呈する。残りが悪く表面の調整は不明である。全体的に赤く変色しており、二次的に熱を受けている。

SB802北側土器群出土土器(図92・93・97、原色図版2、図版16・33・34)

249は甕である。体部は外面全体をタキで整形する。内面は底部に縦方向のハケを施したのち、体部に右下から左上方向のハケを入れる。口縁部は内外面を横方向のナデで整える。

250は片口の鉢である。外面の調整は頸部に縦方向のケズリやハケ、体部中にミガキが認められるがナデが主体である。内面はナデを施している。口縁部は横方向のナデで整えており、底部外面には植物種子の圧痕が認められる。

251は鉢である。口縁部が外反する。磨滅しているが、底部外面を横方向のナデで整え、内面にはハケを施した痕跡がある。

252は鉢である。口縁部は受口状を呈しており、内外面を横方向のナデで整える。外面には体部上半に、幅1.5～2.0cm間隔で接合痕がある。外面は底部付近を縦方向にミガキを施しており、内面には磨滅しているものの、部分的に縦方向のミガキの痕跡がある。

253は高杯である。スカシ孔は3個で、杯部外面は上半部と下半部をそれぞれ縦方向のミガキで整える。内面下半部は磨滅して不明であるが、上半部は横方向のミガキを施す。口縁部および頸部の屈曲部には横方向のシャープなナデを施す。脚部外面は縦方向にナデを施したのち、裾部を縦方向のミガキで整え、さらに端部に横方向のシャープなナデを施す。内面は上半部にシボリの痕跡があり、裾部は横方向のハケを施したのち、ナデで整える。

254は高杯である。スカシ孔は4個で、杯部外面は屈曲部に横方向のミガキを施したのち、上半部と下半部にそれぞれ縦方向のミガキを入れる。内面は全体を横方向のミガキで平滑にする。脚部外面は縦方向のミガキで整える。内面は上半部にシボリの痕跡が残るが、下半部は横方向のハケを施す。

255は高杯である。スカシ孔は3個で、脚部側縁に杯部を取付ける。杯部は内面の下半部は残りが悪いため調整は不明であるが、外面下半は縦方向のミガキ、上半は内外面を同時に横方向のナデで整える。脚部外面は縦方向のナデを施したのち、裾部に縦方向のミガキを密に入れる。内面は上半部にシボリの痕跡があるが、裾部内面から端部にかけて横方向のナデで整える。全体的に赤く変色しており、二次的な熱を受けている。

256は高杯である。スカシ孔は3個で、脚頂部側縁に杯部を取付けて成形する。杯部は内外面とも残りが悪く調整は不明である。脚部外面は縦方向のナデで整えたのち、裾部に縦方向のミガキを密に入れる。内面は上半部にシボリの痕跡があるが、裾部内面から端部にかけて横方向のナデで整える。全体的に赤く変色しており、杯部下半外面に比較的大きな円形剥離痕もあることから、二次的に熱を受けたと考えられる。

257は長頸壺である。肩部に記号文を施す。体部上半から頸部を連続的に縦方向のハケで整えたのち、下半部に横方向のハケを施す。内面は頸部を横方向のハケ、体部はナデで整える。また、底部付近にハケ原体の痕跡があるため、ナデに先行してハケを施したとみられる。

258は細頸壺である。体部が偏球形を呈する。外面は頸部を縦方向のミガキ、体部上半と下半を縦方向、中位を横方向のミガキでそれぞれ平滑にする。内面は頸部にハケを施したのち、体部下半をナデ、上半を縦方向のミガキで整える。頸部と体部の接合部より下った位置にシボリの痕跡が認められ、その上からオサエを入れる。

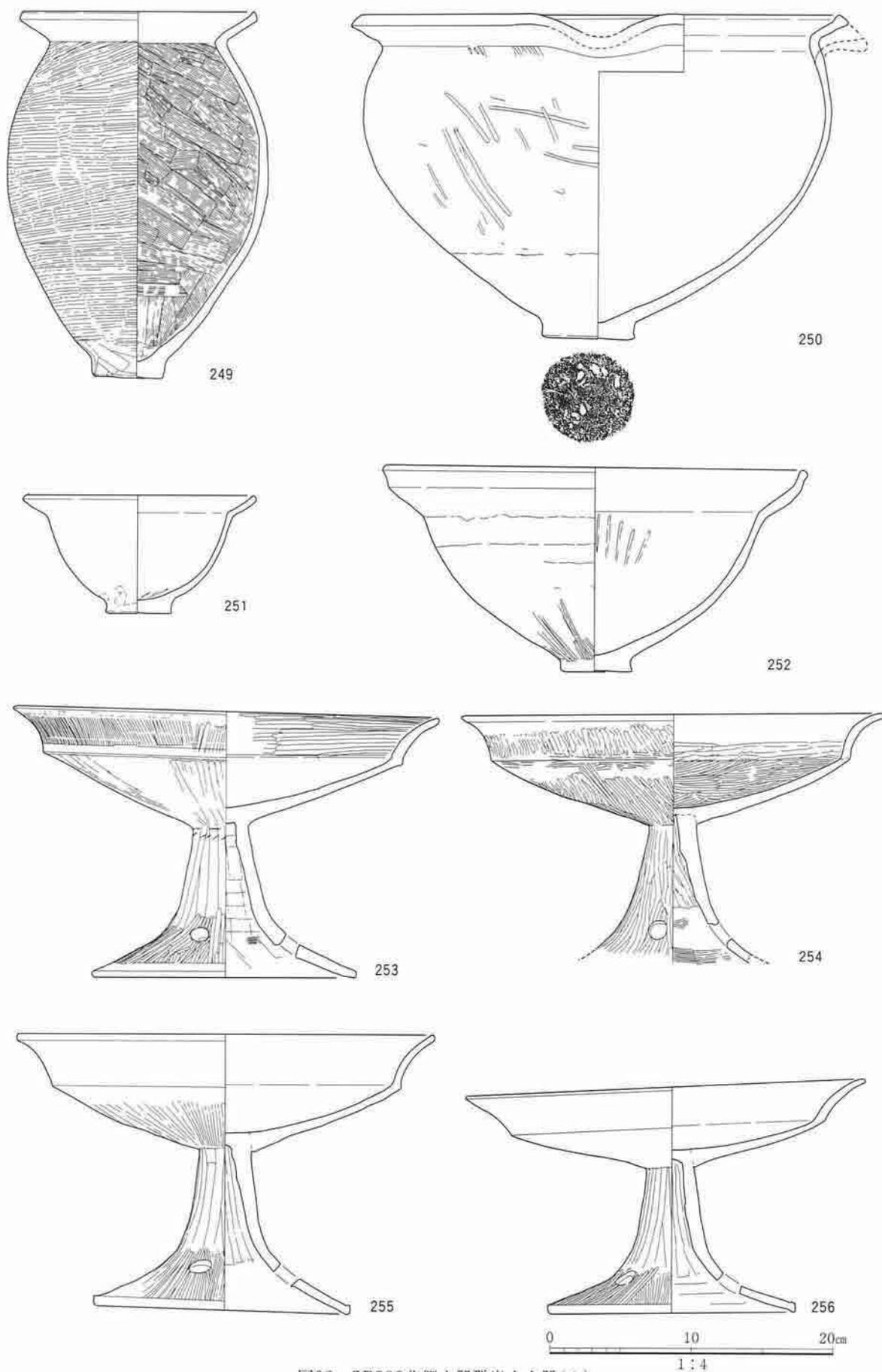


图92 SB802北侧土器群出土土器(1)

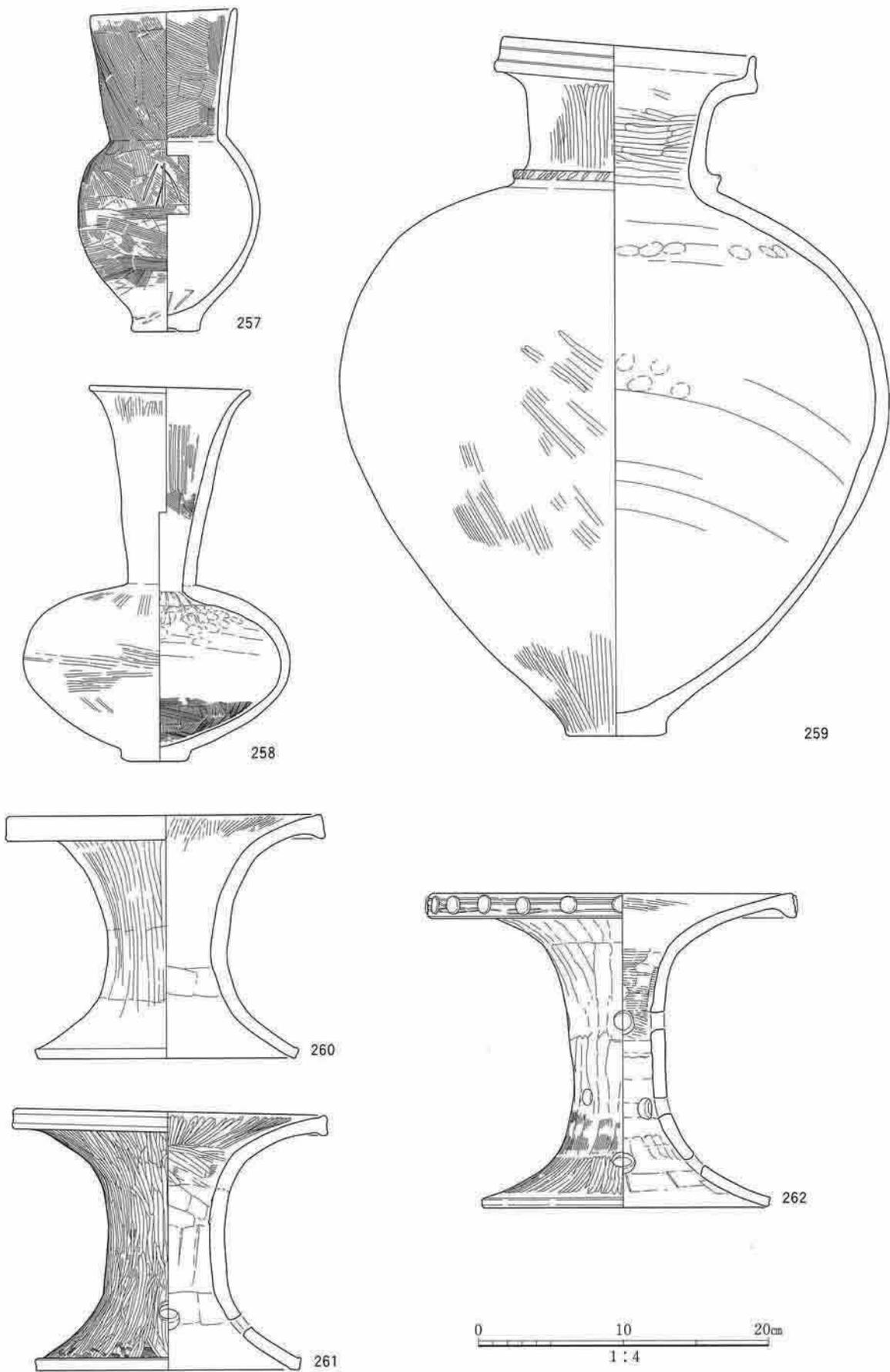


图93 SB802北侧土器群出土土器(2)

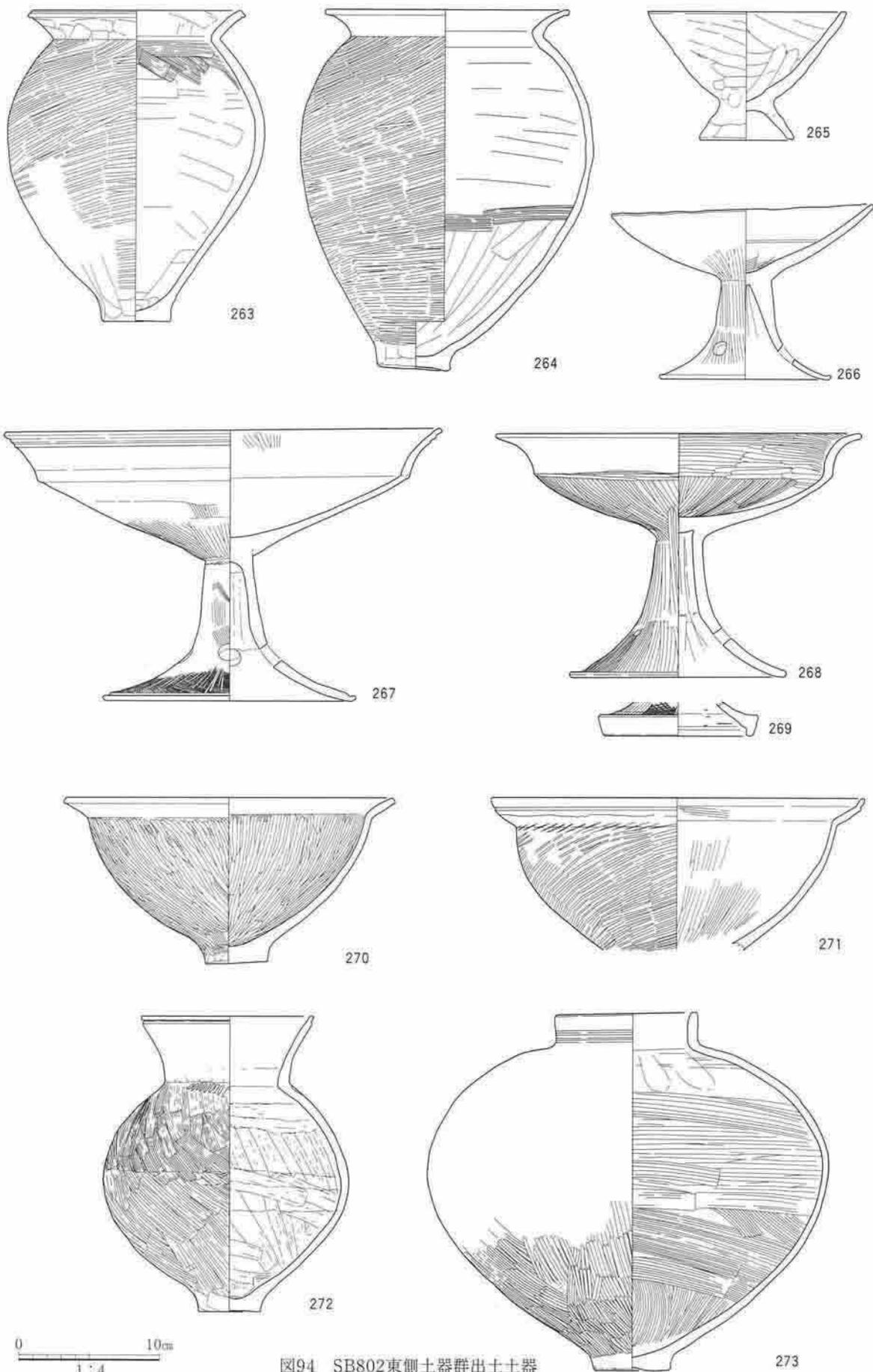


图94 SB802東側土器群出土土器

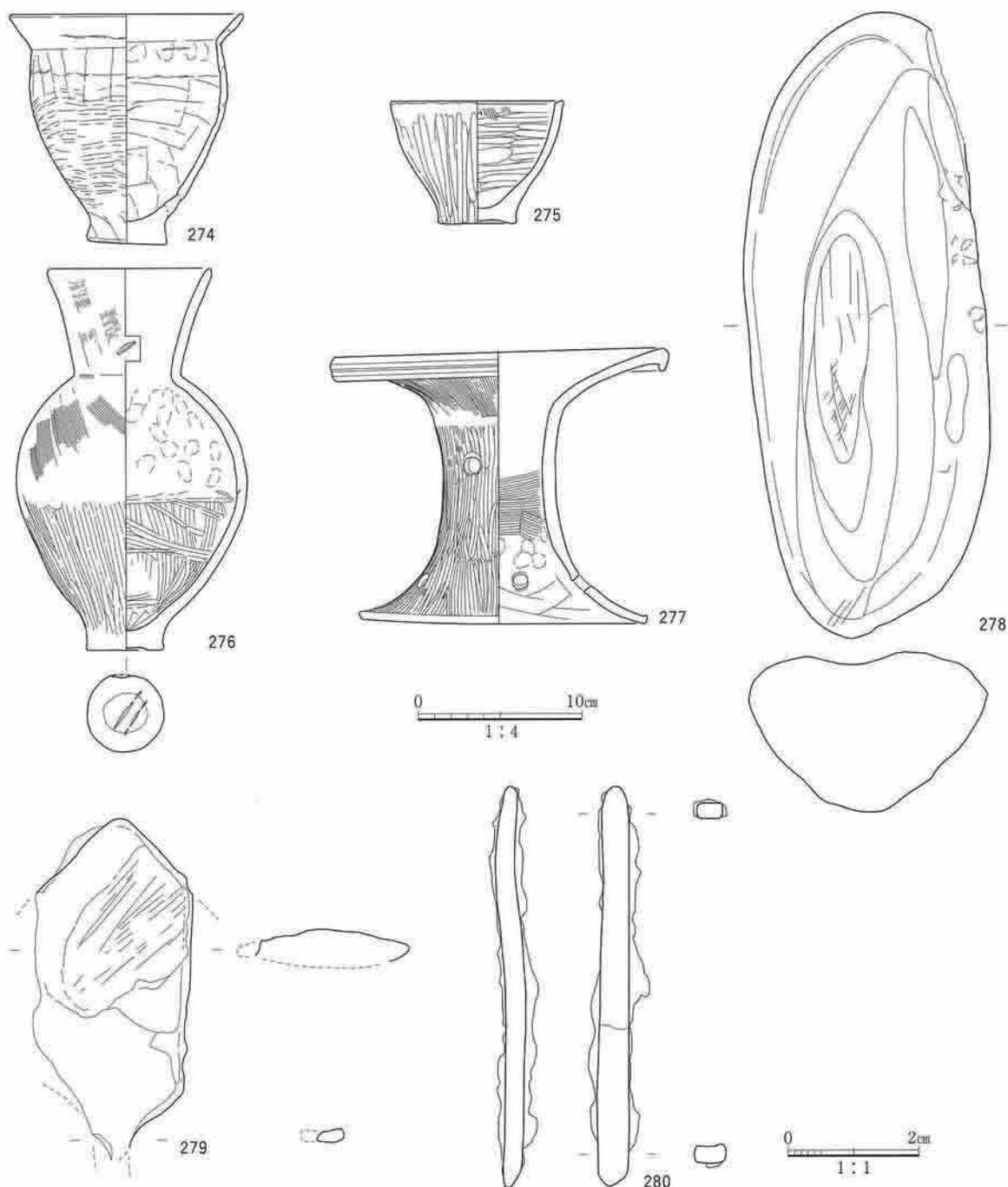


図95 SB802出土遺物

259は二重口縁壺である。口縁部は短く直立し、外面に2条の沈線を入れる。頸部には突帯をもち、キザミメを0.4~0.8cm間隔で斜めに入れる。体部外面はナデで平滑に整えたのち、外面に縦方向あるいは右下から左上方向にミガキを施す。内面は中位に横方向のナデを施し、上半部には部分的にオサエを入れる。頸部外面は縦方向、内面は横方向のミガキを施す。

260は器台である。口縁部をわずかに下方に拡張し、横方向のシャープなナデを巡らす。スカシ孔は無い。脚部外面には全体に縦方向のミガキを密に施す。内面は脚柱部を横方向のナデで整えたのち、脚端部を横方向のシャープなナデ、受部を縦方向のミガキで平滑にする。

261は器台である。口縁部を上下にわずかに拡張して横方向のシャープなナデで整える。スカシ孔

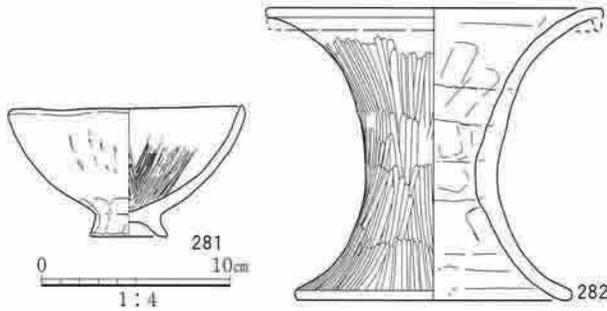


図96 SB802北縁周辺出土土器

は4箇所直径1.0cmである。脚部は部分的にハケを施すが、縦方向のミガキを密に入れる。内面は脚部を板状工具を用いたナデで整えたのち、裾部を横方向のナデ、受部を連続的な放射状のミガキで平滑にする。

262は器台である。脚柱部が狭く、大きく開いた受部が特徴である。口縁部を下方に拡張し、3～4条の沈線を入れたのち、3.0cm間隔で円形浮文を貼り付ける。脚部には直径1.3cmのスカシ孔を3段にわたって入れており、各段は4個のスカシ孔で構成される。脚部外面は縦方向のハケを施した後、板状工具を用いた縦方向のナデで整える。また、裾部は縦方向のハケを施したのちにナデで整え、さらに縦方向のミガキを密に施す。内面は脚部上半を横方向のハケで整えるが、下半は調整を施さず、成形時の粘土紐の接合痕が1.3～2.0cm幅で残る。受部はナデを施したのち、横方向のミガキで平滑にする。

SB802東側土器群出土土器(図94・97、原色図版2、図版16・35・36)

263は甕である。体部は外面全体をタタキで整える。内面は底部に縦方向のハケ、体部に右下から左上方向のハケを施したのち、肩部を右から左方向のハケで整える。口縁部は内外面を横方向のシャープなナデで整えており、沈線が1条巡る。全体的に赤く変色し、体部下半を中心にして直径4.0cmの円形剥離が認められるため、二次的に熱を受けたとみられる。

264は甕である。体部は外面全体をタタキで整える。内面は底部から体部下半を縦方向、上半を横方向のナデでそれぞれ整えたのち、中位よりやや下に横方向のハケを施す。口縁部は内外面を横方向のナデで整える。底部外面に植物茎の圧痕が付着している。

265は台付鉢である。外面を横方向のナデ、内面を横方向のナデののち、下半を縦方向のナデで整える。脚台部分は粘土紐を巻上げた痕跡が明瞭に見られる。

266は杯部が皿状の高杯である。スカシ孔は3個である。杯部は外面を縦、内面を横方向のハケでそれぞれ整えたのち、上半内面にナデを巡らす。脚部は外面に縦方向のハケを施し、内面は上半部にシボリの痕跡があるが、裾部内面から端部にかけて横方向のナデで整える。口縁端部はヘラで切り取り整形する。杯部内面は黒色を呈し、中位に0.2cm幅で帯状に剥離痕が認められる。

267は高杯である。スカシ孔は4個で、口縁部外面に2条の凹線文を入れる。杯部は外面下半部と内面上半部に縦方向のミガキがわずかに認められるが、その他の部分は磨滅しており調整は不明である。脚部外面は右下から左上方向のハケを施したのち、縦方向のミガキで平滑にする。内面はシボリの痕跡が上半部にあり、裾部を横方向のナデで整える。杯部が赤く変色しており、二次的に焼けたものと推測される。

268は高杯である。スカシ孔は3個で、杯部外面は屈曲部に横方向のミガキを施したのち、上半部を横方向のナデで整える。下半部は縦方向にミガキを施す。内面は下半部に縦方向のミガキを施したのち、上半部を横方向のミガキで整える。脚部外面は縦方向のミガキ、内面は上半部にシボリの痕跡

が残るが、その上から工具によるオサエを施す。裾部は横方向のナデで整える。変色した部分が認められ、二次的に焼けている。

269は高杯裾部である。端部が肥厚しており、下方にやや拡張する。外面は縦方向のミガキで平滑に整えたのち、斜格子文を入れる。内面は右から左方向のケズリを施す。細片であるため特定できないが、吉備地域の弥生時代後期前半の上東式に属する可能性もある。

270は口縁部が外反する鉢である。内外面に縦方向のミガキを密に施す。底部裏面は平行なケズリを入れる。

271は受口状の口縁の鉢で、口縁部外面に1条の沈線を入れる。体部外面を右上がりのタタキで整え、内面を縦方向のミガキで平滑にする。底部外面では無く、内面が赤く変色していることから、二次的に熱を受けたものとみられる。

272は短頸壺である。口縁部外面に1条の沈線が入る。外面は体部下半を右下から左上方向の粗いハケで整えたのち、上半部に縦方向の細かなハケを施し、肩部に9個のキザミメを入れる。底部裏面には2条の平行する工具の圧痕が認められる。内面は底部から肩部にかけて連続的に縦方向のハケを施したのち、体部中位を右から左方向のハケで整える。頸部、肩部と体部中位には1.5cm間隔で粘土紐の接合痕が残る。

273は直口の短頸壺である。胎土には角閃石が多く含まれており生駒西麓産のものとみられる。頸部の付け根に3条の沈線を入れる。体部外面はナデを施したのち、下半を縦方向のミガキで整える。内面は底部付近に縦方向のハケを施したのち、下半から肩部にかけて右から左方向のハケで整える。

竪穴建物床面および埋土出土遺物(図95・97、図版36)

274は小型の甕である。外面を右上がりのタタキ、内面下半を下から上方向、上半を右から左方向のナデで整える。体部上半から口縁部にかけて2.0~3.0cm幅で接合痕が残る。

275は鉢である。外面をナデで整えたのち、縦方向のミガキで平滑にする。内面は縦方向のハケを施したのち、横方向のミガキで整える。

276は長頸壺である。頸部に記号文を施す。体部上半を右下から左上方向、頸部を縦方向のハケで整え、体部下半に縦方向のミガキを密に入れる。内面は頸部をナデ、体部上半をオサエ、下半をミガキでそれぞれ整える。底部外面には2条の平行する線刻を入れる。

277は器台である。口縁部を下方に垂下させ、外面に横方向の強いナデを施す。スカシ孔は上段に3個、下段に4個を入れる。脚柱部はハケ調整後、縦方向のミガキで整える。内面は脚柱部に横方向のハケを施したのち、脚裾部から端部にかけて横方向のナデで整える。また受部は外面を縦方向のハケ、内面をナデで整える。

278は砂岩製の磨石である。長さ38.0cm、幅15.1cm、厚さ9.7cmで、上面が溝状に浅く凹む。

279は鉄鎌である。平面が六角形を呈し、長さ5.10cm以上、幅2.50cm、茎部分が幅0.55cmであった。

280は不明鉄製品である。長さ6.10cm、幅0.45cm、厚さ0.25cmであった。

SB802北縁周辺出土遺物(図96)

281は台付鉢である。体部外面をナデ、内面を縦方向のハケで整える。口縁部内外面に横方向のナ

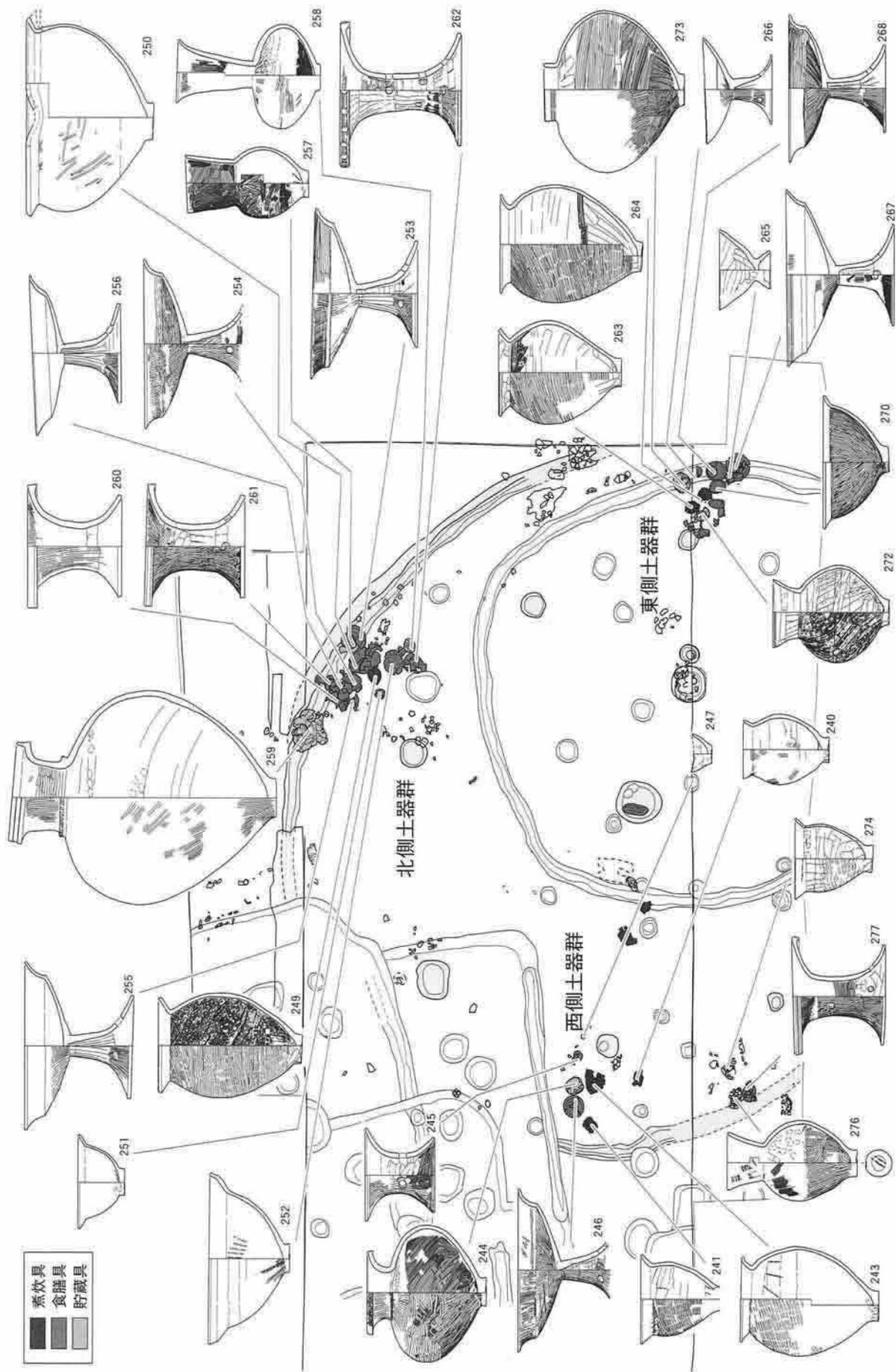


図97 SB802土器出土状況(1:80)

遺物は1:10

デを巡らす。脚台部はオサエで整える。

282は器台である。口縁部は剥離痕が認められるため、粘土紐を貼り付けて下方に拡張していたものとみられる。スカシ孔は無い。脚部外面には全体に縦方向のミガキを密に施す。内面はオサエとナデを施すものの不十分であり、脚柱部を中心に粘土帯の接合痕が2.0cm幅で残る。受部内面および裾部内面から端部にかけて横方向のナデを施す。

ii) 土器集積

SX803(図87・98、図版36) 破片がほぼ水平な状態で東西3.80m、南北2.30mの範囲に散乱していた。出土した土器は弥生時代後期のものである。

283は広口壺である。頸部が緩やかに外反してたち上がり、口縁部は肥厚する。体部外面は縦方向

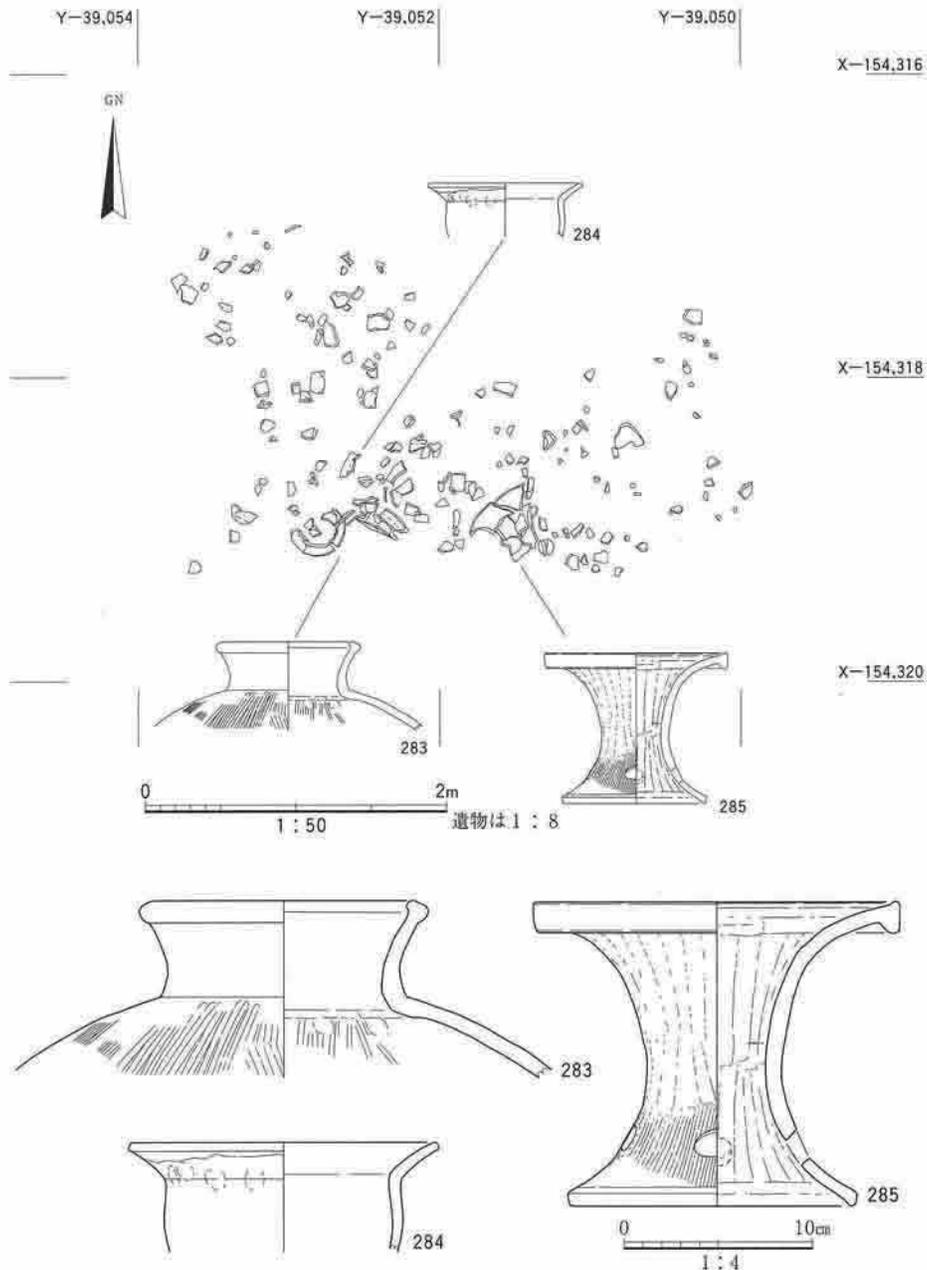


図98 SX803平面図および出土土器

のミガキ、内面は縦方向のハケを施す。

284は口縁部が大きく開く形に復元され、鉢とみられる。口縁部直下に接合痕が残り、屈曲部にオサエを施す。

285は器台である。口縁部は下方に拡張し、横方向のシャープなナデで整える。スカシ孔は4個あり、脚部外面はナデを施したのち、裾部を中心に縦方向のミガキを入れる。内面は脚柱部を縦方向のナデで整えたのち、脚端部および受部を横方向のナデで整える。

iii) 溝

SD804(図84・87・99、図版15・37) 調査区の中央で検出した幅4.20m、深さ1.40mの大溝で、南北方向に延びていた。

弥生時代中期の遺物286・302も含むが、弥生時代後期の遺物が多く出土した。また溝の埋没後の窪みからは古墳時代中期の甕297が出土した。

286は緑色片岩製の石庖丁である。両面穿孔によって直径0.6cmの紐孔を1.9cm間隔で設ける。刃部は表裏から研ぎ出すが、表面からの研磨の方が幅広い。背の部分も研磨しており、丸みを帯びる。

287は生駒西麓産の広口壺である。口縁部を下方に拡張し、頸部の付け根には突帯がある。外面は体部をナデで整え、頸部は縦方向のハケを施したのち、ナデを部分的に入れる。内面は頸部をナデ、頸部直下をオサエで整える。

288は広口壺である。口縁部を肥厚させ横方向のシャープなナデで整え、直径1.2cmの円形浮文を0.5～0.7cm間隔で施す。さらにこの浮文の上に直径0.9cmの竹管文を印刻する。頸部外面は横方向のナデ、内面は横方向のハケで整えたのち、ナデを施す。

289は壺の頸部である。5個の列点文を施す。

290は壺の体部とみられる破片である。線刻文を入れており、施文後、縦方向のミガキを施す。

291は線刻文を施した破片である。2条および1条の櫛状の施文原体で曲線を描く。

292は大型器台である。口縁部を下方に拡張し、外面に7～9条の櫛描波状文を入れたのち、その上には直径1.0cmの円形浮文を1.2～1.5cm間隔で付け、浮文の上に竹管文を印刻する。口縁部内面にも8条の櫛描波状文を入れる。

293・294は大型器台である。293は裾部であり、外面を縦方向のミガキ、内面をナデで整える。294は口縁部を下方に拡張し、外面に7～8条で構成される櫛描波状文を施す。さらにその上に直径1.0cmの円形浮文を1.2cm間隔で施し、浮文上に直径0.7cmの竹管文を印刻する。また、口縁部の内側にも8条で構成される櫛描波状文を入れる。外面には脚部から裾部にかけて縦方向のナデを丁寧に施し、7、9、14条で構成される幅2.3～4.5cmの沈線文を6帯入れ、ヘラ描き鋸歯文を脚部中位および裾部に施す。直径2.5cmのスカシ孔を上・下段ともに3箇所設ける。内面は1.5～2.0cm間隔で輪積みの痕跡が顕著であるが、受部はナデを丁寧に施して整え、さらに縦方向のミガキで平滑にする。

295・296は甕の口縁部である。295は頸部に5個の列点文を施す。296は口縁部が受口状を呈しており、頸部に5個以上の列点文を施す。外面はタタキを施したのち、部分的に縦方向のハケを施す。内面は右下から左上方向のナデを施す。口縁部内外面をシャープなナデで整える。

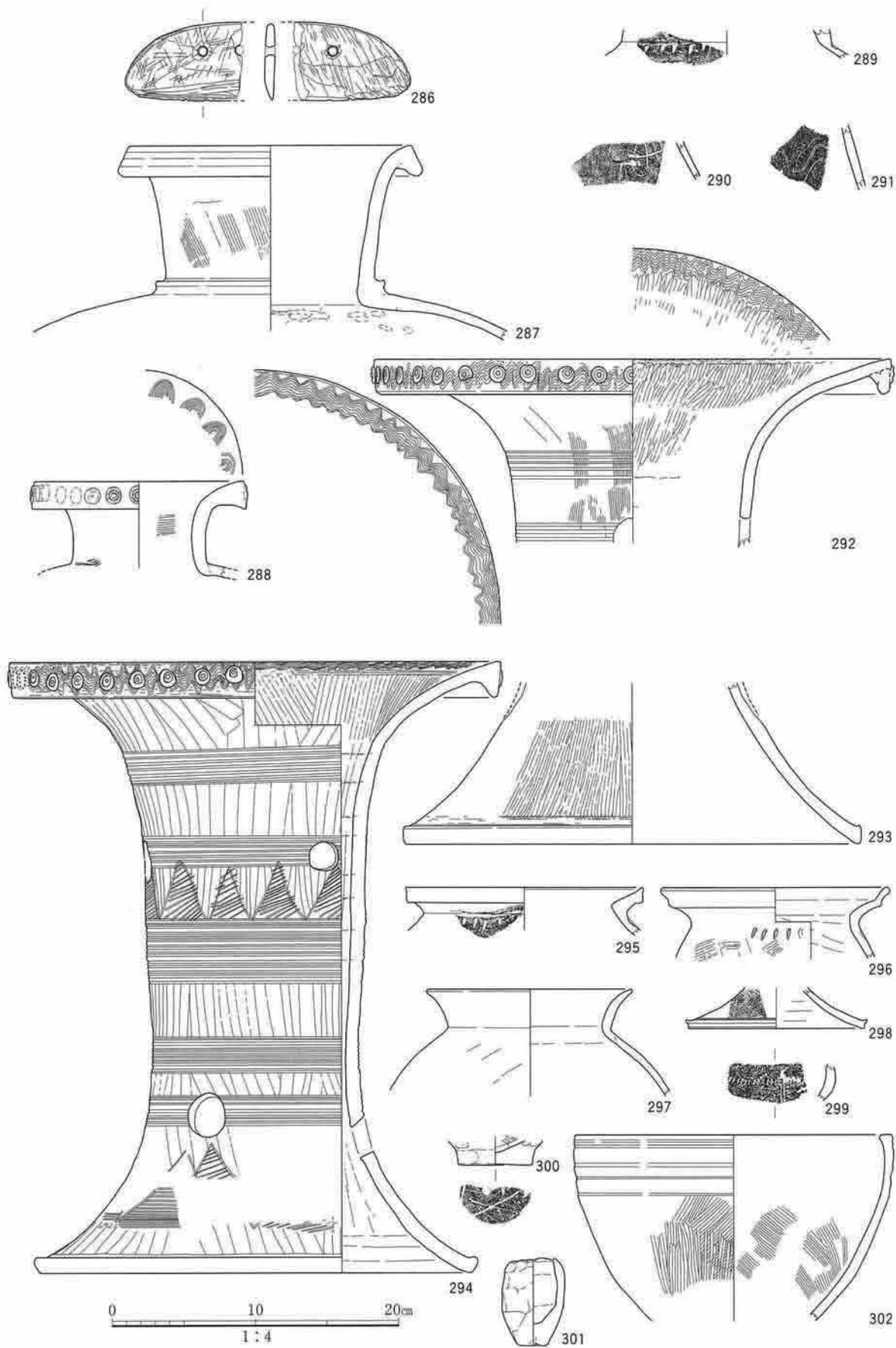


图99 SD804出土遺物

297は古墳時代中期の甕である。体部内外面をナデ、口縁部を横方向のナデで整える。外面に煤が付着する。

298は高杯の脚裾部である。内外面いずれも横方向のナデで整えるが、端部にはさらに横方向のシャープなナデを巡らせており、端面に1条の沈線が入る。やや上位に斜方向の列点文を施す。

299は体部が張出しており鉢の破片とみられる。胴部最大径の位置よりやや下に細かな列点文が18個ある。

300は甕底部である。底部裏面には木葉の葉脈痕がある。

301は生駒西麓産のミニチュア壺である。手捏ねで成形し、内外面にはオサエが顕著である。

302は弥生時代中期後葉の鉢である。器高が高いものに復元され、口縁部外面には5条の凹線文を入れる。体部はハケを施したのち、下半部を縦方向のミガキで整える。内面は下半部を右下から左上方向のハケで整えたのち、上半部に横方向の強いナデを施す。

SD805(図84・87) SD804内の東部で検出した。幅0.30m、深さ0.20mの溝であり、SD804に平行して設けられていた。

4) 古墳時代中期の遺構と遺物

弥生時代後期の溝SD804は古墳時代中期においても南北に延びる浅い窪みとして残っており、古墳時代中期の遺構はこの南北方向の落込みの東側に設けられていた。南北6.0m、東西30.0mの範囲において、竪穴建物4基、溝8条、土壙19基、ピット71個、落込み2箇所と、多数の遺構が分布していた。

i) 竪穴建物

調査地中央で1基、東側で3基を検出した。

SB7001(図87・100~102、図版17・37) 調査地中央で検出した一辺4.00~4.60mの方形の竪穴建物である。竪穴内部の中央を残して周囲をロ字状に掘下げ、整地を行っており、南東隅部に長原14層以下の地層から掘出された地山の粘土塊が置かれていた(南東粘土堆積)。中央部にも長さ1.10m、幅0.50mの長方形の窪み内に長さ0.80m、幅0.20m、厚さ0.10mの粘土塊が置かれていた(中央粘土堆積)。粘土塊は土壙内に整地土を入れて平坦にならしたのちに置かれたもので、粘土塊に何かを包み込んだり、挟み込んだ状況は認められず、ほぼ粘土のみをそのまま固めて置いていた。

SP01は一辺0.25m、深さ0.16mであった。柱痕跡は認められなかった。

SP02は直径0.24m、深さ0.08mで、SP01に切られていた。SP01・SP02ともに埋土は黒色粘土質シルトであった。

SP03は直径0.46m、深さ0.24mで、柱痕跡は直径0.12m、深さ0.18mであった。柱痕跡にはオリブ黒色粘土質シルトが堆積していた。

SP04は直径0.30m、深さ0.27mで、柱痕跡は直径0.12m、深さ0.22mであった。柱痕跡にはオリブ黒色粘土質シルトが堆積していた。

遺物は竪穴の床面から303~306が出土した。303は韓式系土器長胴甕である。口縁部を注ぎ状にす

る。外面は縦方向の平行タタキを施す。

304は韓式系土器平底鉢である。外面を縦方向、内面を横方向のハケでそれぞれ整える。端部は横方向のナデを巡らす。

305・306は高杯である。305は「ハ」字形に開く脚部が特徴的で、スカシ孔はもたない。杯部外面は横方向のナデののち、縦方向のミガキを施す。内面は横方向のナデののち、下半部に横方向のミガキ

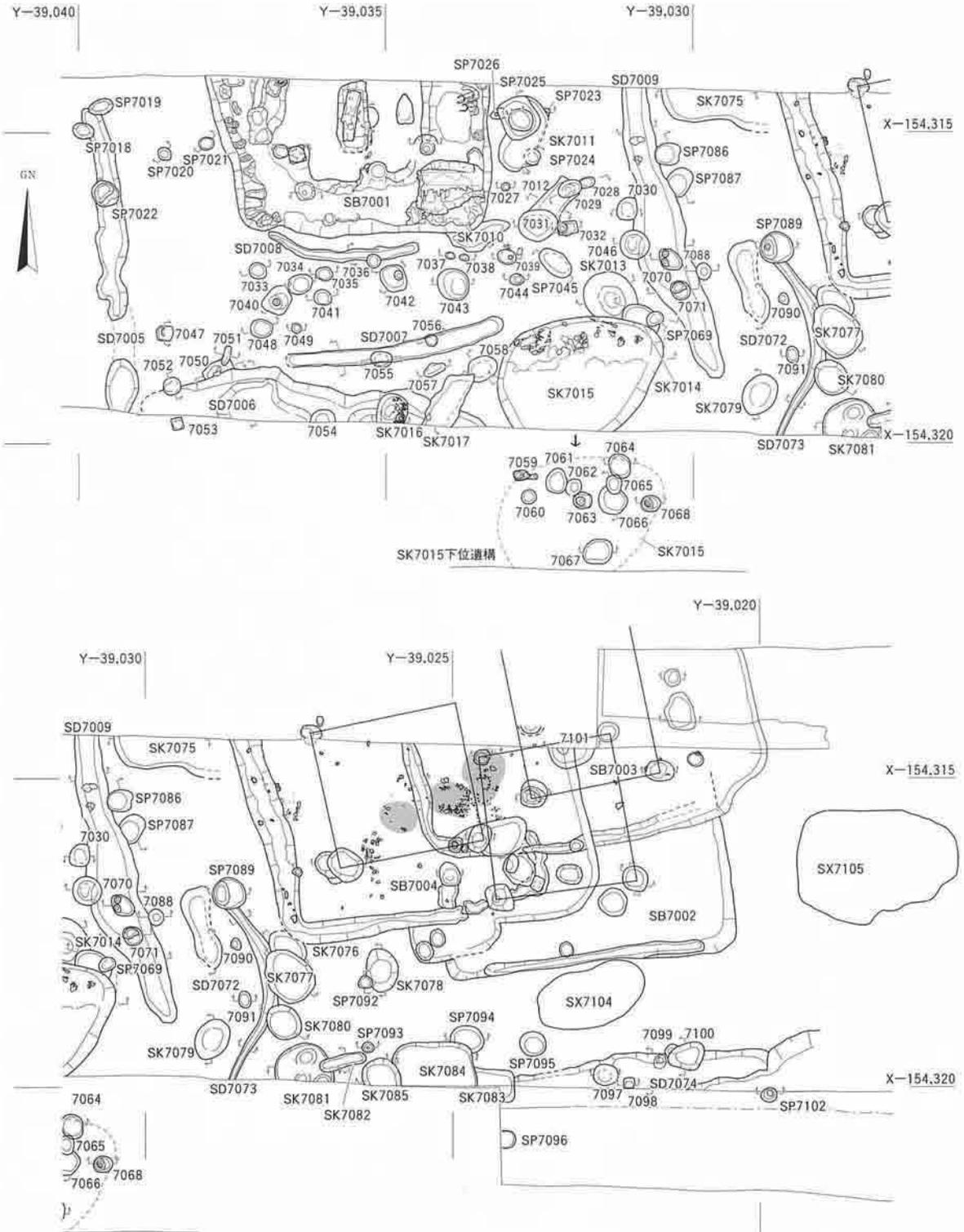


図100 古墳時代中期遺構検出状況

1:100

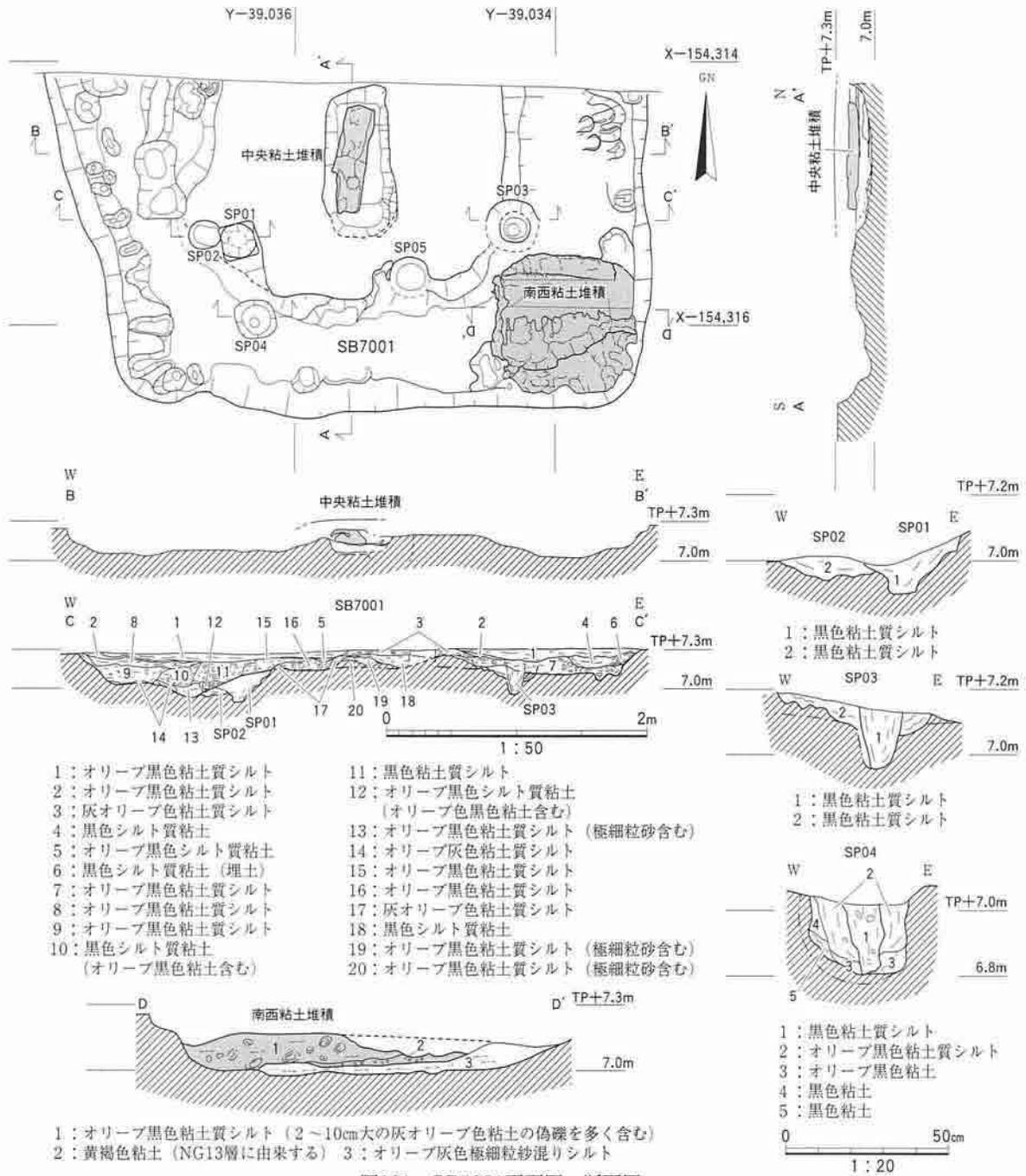


図101 SB7001平面図・断面図

を施す。脚部は内外面を縦方向の、裾部を横方向のナデでそれぞれ整える。306は須恵器の形態をしているが、焼成は瓦質である。脚部に3個のスカシ孔がある。杯部内外面を回転ナデで整える。杯部中位に3条のヘラ描沈線文を入れ、裾部にも沈線文が認められる。

SB7002(図87・100・103・104、図版18) 調査地東側で検出した一辺4.90mの方形の竪穴建物である。SB7003・7004に切られていた。多数の柱穴の中で、対称な位置にあるSP01・03・02・04を主柱穴と判断した。柱間隔は2.40mであった。

SP01は直径0.27m、深さ0.20mで、柱痕跡は直径0.14m、深さ0.12mであった。柱痕跡はオリブ黒色粘土質シルトであった。SP03は直径0.35m、深さ0.24mであった。SP02は直径0.40m、深さ

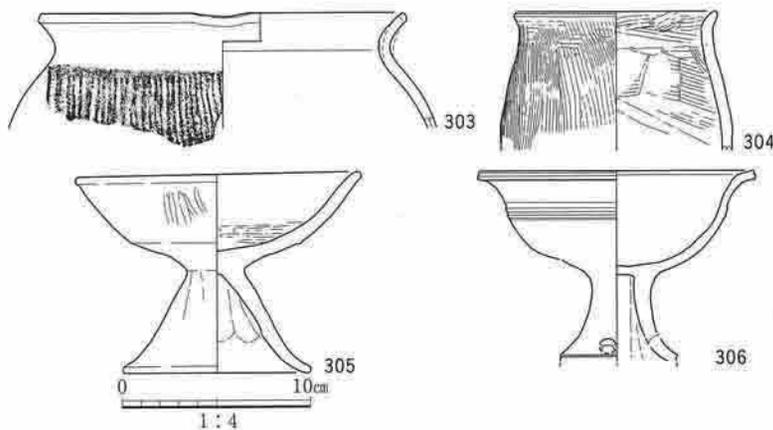


図102 SB7001出土土器

0.35mで、底に直径0.12m、深さ0.14mの柱痕跡が認められた。SP04は直径が0.40m、深さ0.28mで、おもにオリブ黒色粘土質シルトで埋まっていた。

主柱穴以外にも柱痕跡の認められるピットがあった。SP05は直径0.30m、深さ0.27mであり西側の周壁溝を切って設けられていた。柱痕跡は直径0.14

m、深さ0.27mで、オリブ黒色粘土質シルトであった。また、堅穴のたち上りに沿って幅0.20mの周壁溝を検出した。

SB7003(図87・100・103・105・107、図版18・37) 調査地東側で検出した一辺5.70mの方形の堅穴建物である。この遺構はSB7004に切られ、SB7002を切っていた。検出した多数の柱穴の中で、対称な位置にあるSP01・02・03を主柱穴と判断した。柱間隔は2.20mであった。SP01は長径0.45m、短径0.42m、深さ0.44mで、柱痕跡は直径0.15m、深さ0.35m以上であった。SP02は直径0.40m、深さ0.20mであった。SP03は直径0.50m、深さ0.58mで、水平断層により柱穴が分断され、東西方向に20cmずれていた。

主柱穴以外にも柱痕跡の残るSP04・05・06や小穴が認められた。SP05は東西0.60m、南北0.70m、深さ0.40mであった。柱痕跡は直径0.18m、深さ0.36m以上で、その部分の堆積はオリブ黒色粘土質シルトであった。また、水平断層により柱痕跡が西へ0.15mずれていた。SP04は直径0.30m、深さ0.19mで、柱痕跡は直径0.18m、深さ0.36m以上であった。柱痕跡にはオリブ黒色粘土質シルトが堆積していた。SP06は直径0.20mで、周壁溝の中に設けられていた。これらのピット以外にも堅穴内の南西部には周壁溝に接して土壇SK01が設けられていた。SK01は東西1.00m、南北0.60m、深さ0.09mで、下層は偽礫を含む粘土質シルト、上層はオリブ黒色粘土質シルトで埋まっていた。

また、堅穴内の南西部の床面において焼土面が2箇所認められた。この南西焼土面には焼土・炭・灰が拡がっていたため、火を焚いた場所とみられる。焼土の範囲は南西焼土面東側は南北0.90m、東西0.70m、南西焼土面西側は南北0.60m、東西0.70mであった。焼土・炭・灰を採取して水選篩別したところ、カモ科、ナマズ属、カエル類の骨が出土した(第Ⅲ章第2節)。

そのほか堅穴のたち上りに沿って幅0.25mの周壁溝を検出した。

遺物は床面から307~309が出土した。307は韓式系土器平底鉢とみられる。外面は縦方向のハケで整える。内面は縦方向のハケを施したのち、右下から左上方向に強いナデを入れる。口縁部は横方向のシャープなナデを巡らせ、端部を先細に整える。

308は韓式系土器平底鉢とみられる。底部内外面に縦方向のハケを施す。裏面には広葉樹の葉脈の圧痕がある。

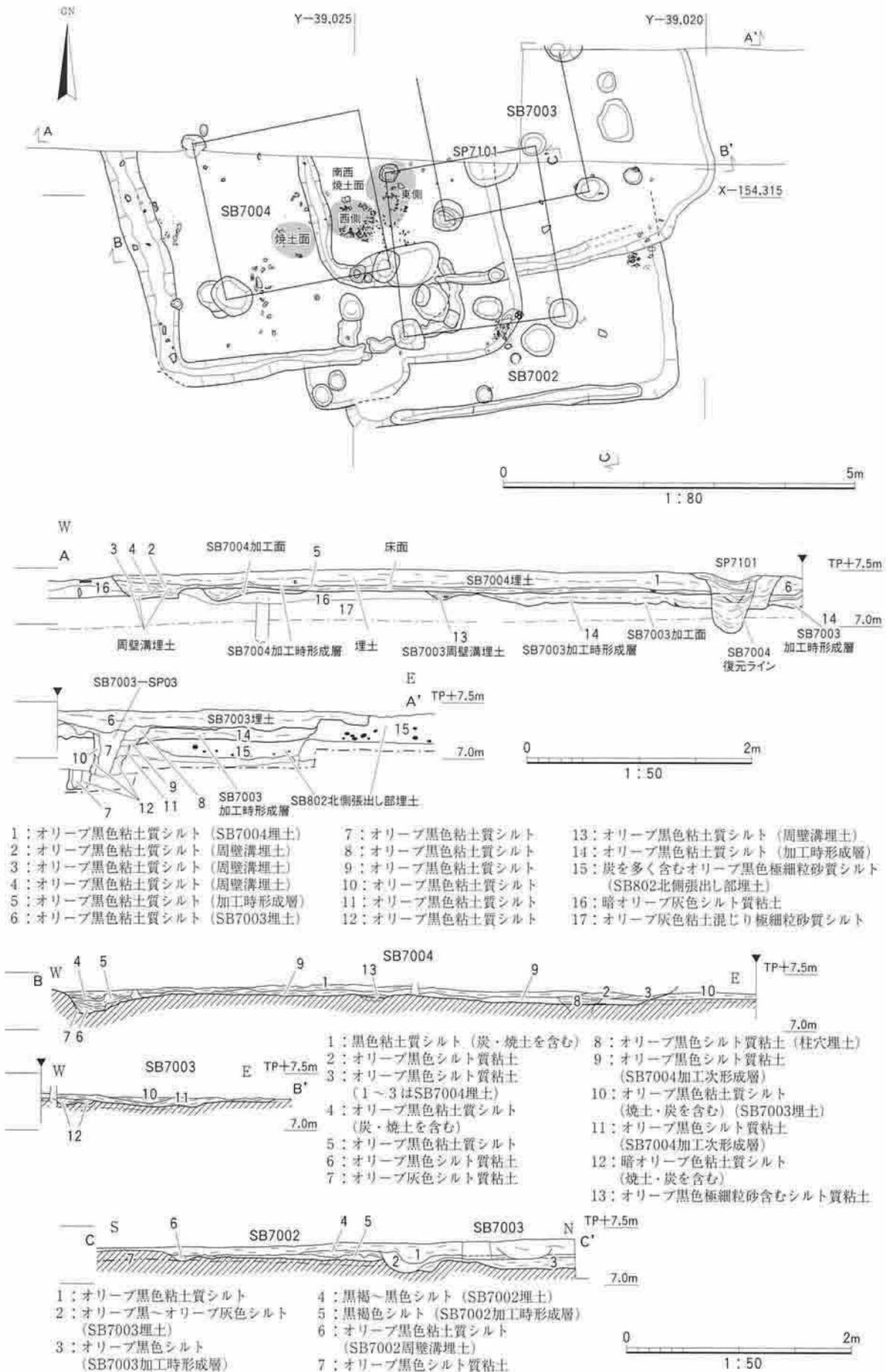
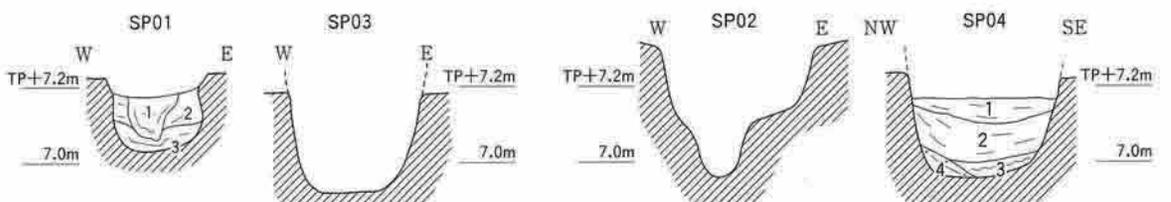
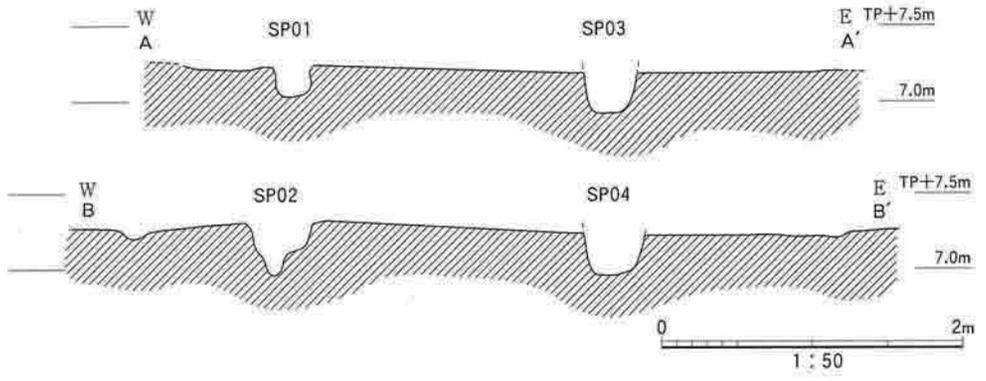
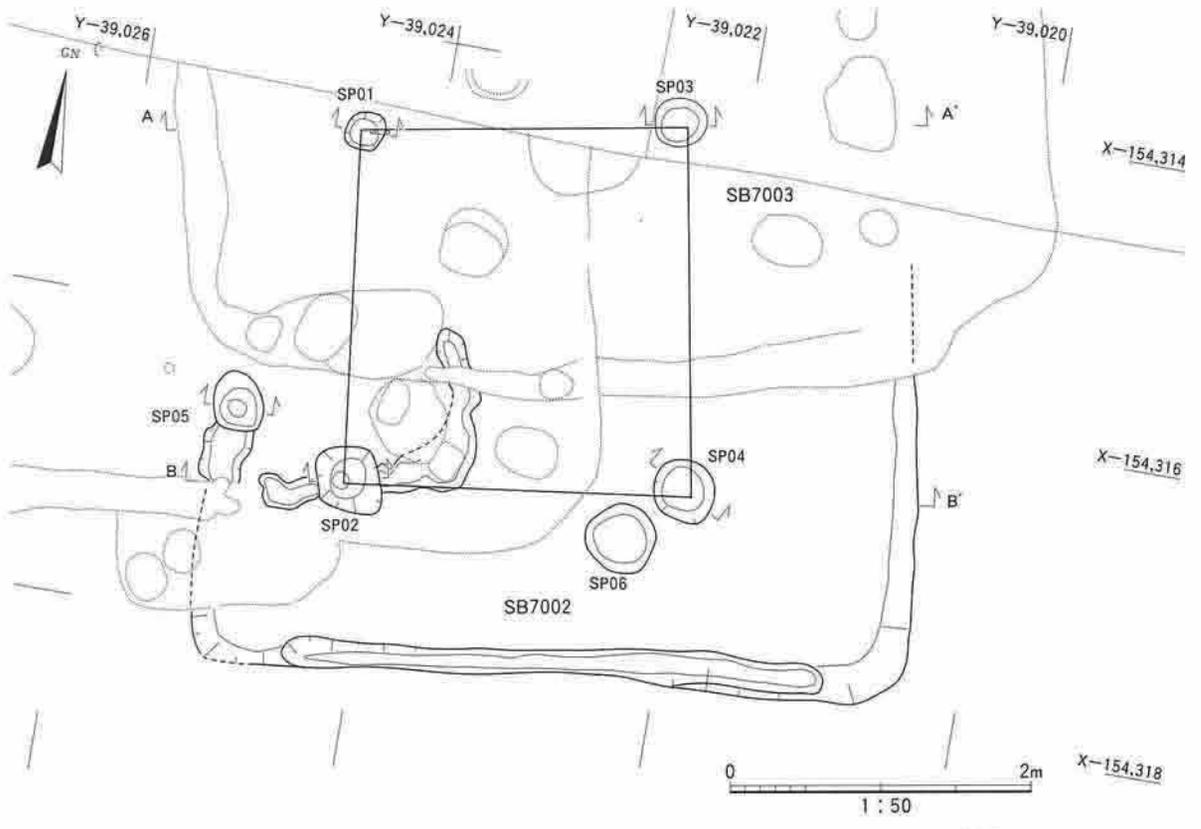
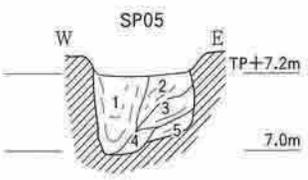


図103 SB7002~7004平面図・断面図



- 1: オリーブ黒色粘土質シルト (柱痕跡)
- 2: 黒色粘土質シルト
- 3: オリーブ黒色シルト質粘土

- 1: 暗オリーブ褐色粘土質シルト
- 2: オリーブ黒色粘土質シルト
- 3: オリーブ黒色シルト質粘土
- 4: オリーブ黒色極細粒砂混りシルト



- 1: オリーブ黒色粘土質シルト (柱痕跡)
- 2: 黒色粘土質シルト
- 3: 黒色シルト
- 4: オリーブ黒色シルト質粘土
- 5: オリーブ黒色シルト

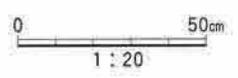
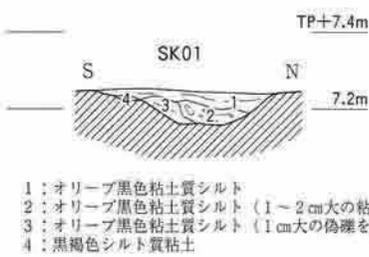
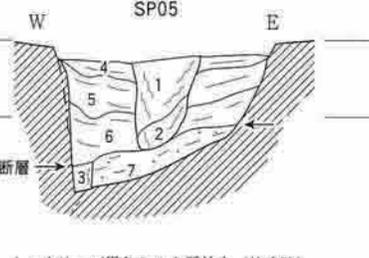
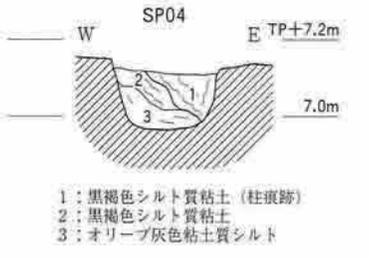
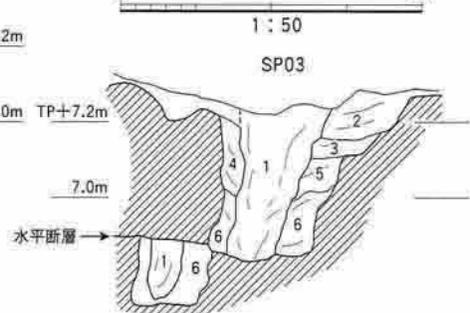
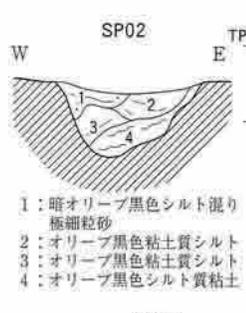
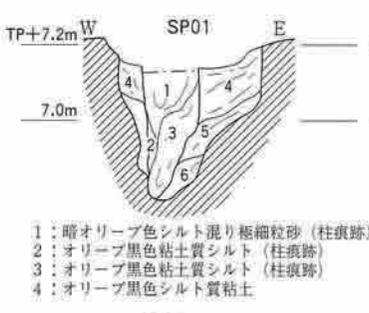
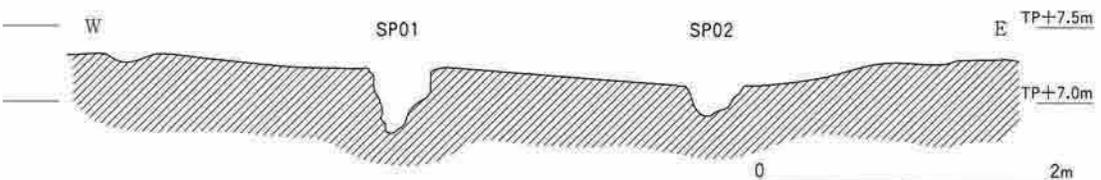
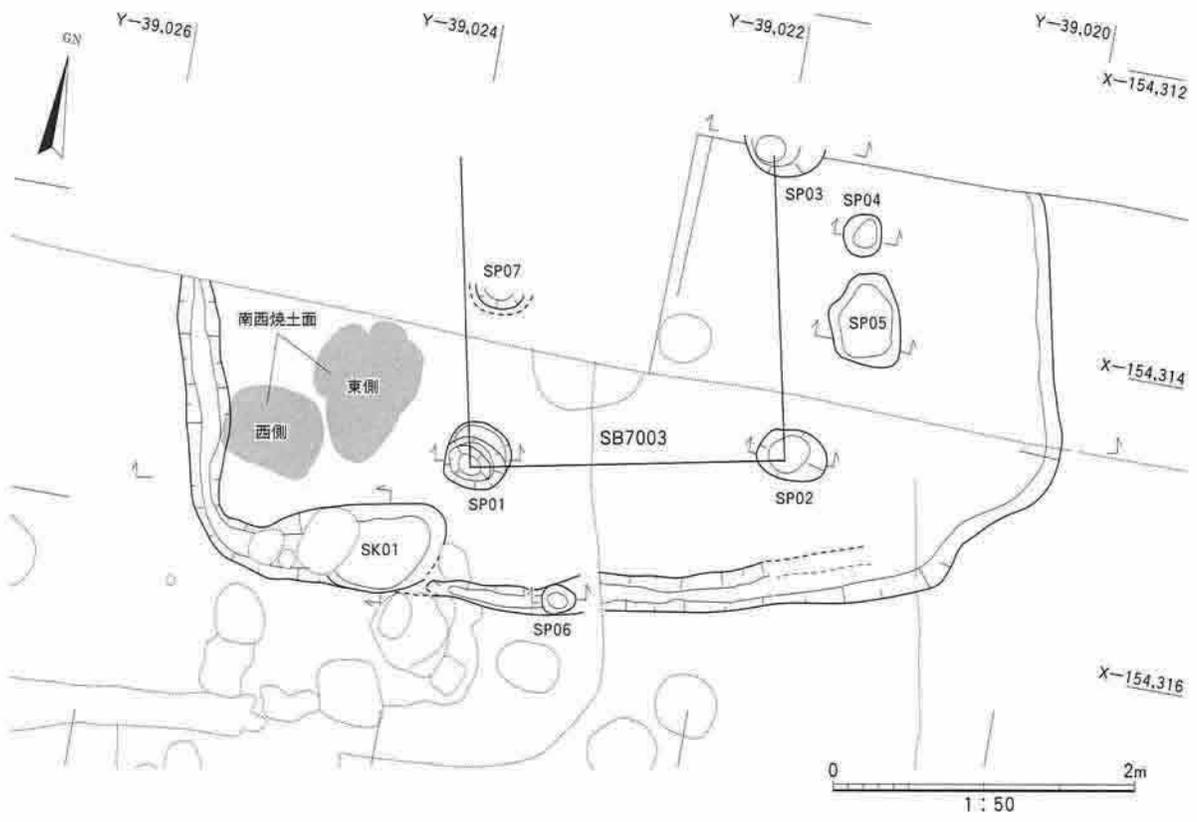
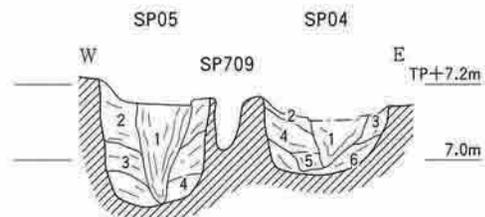
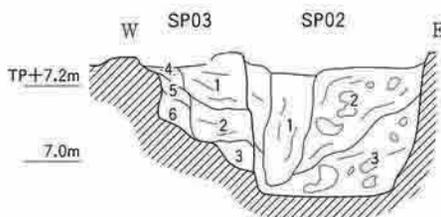
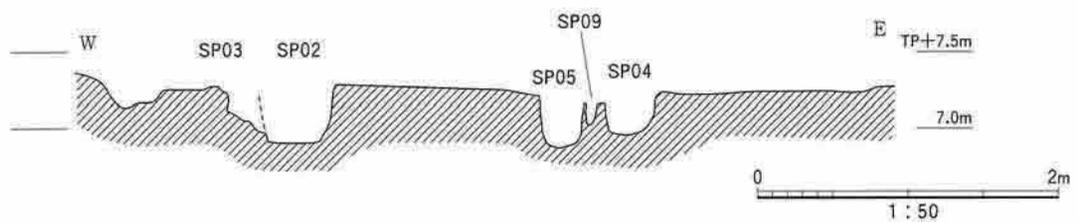
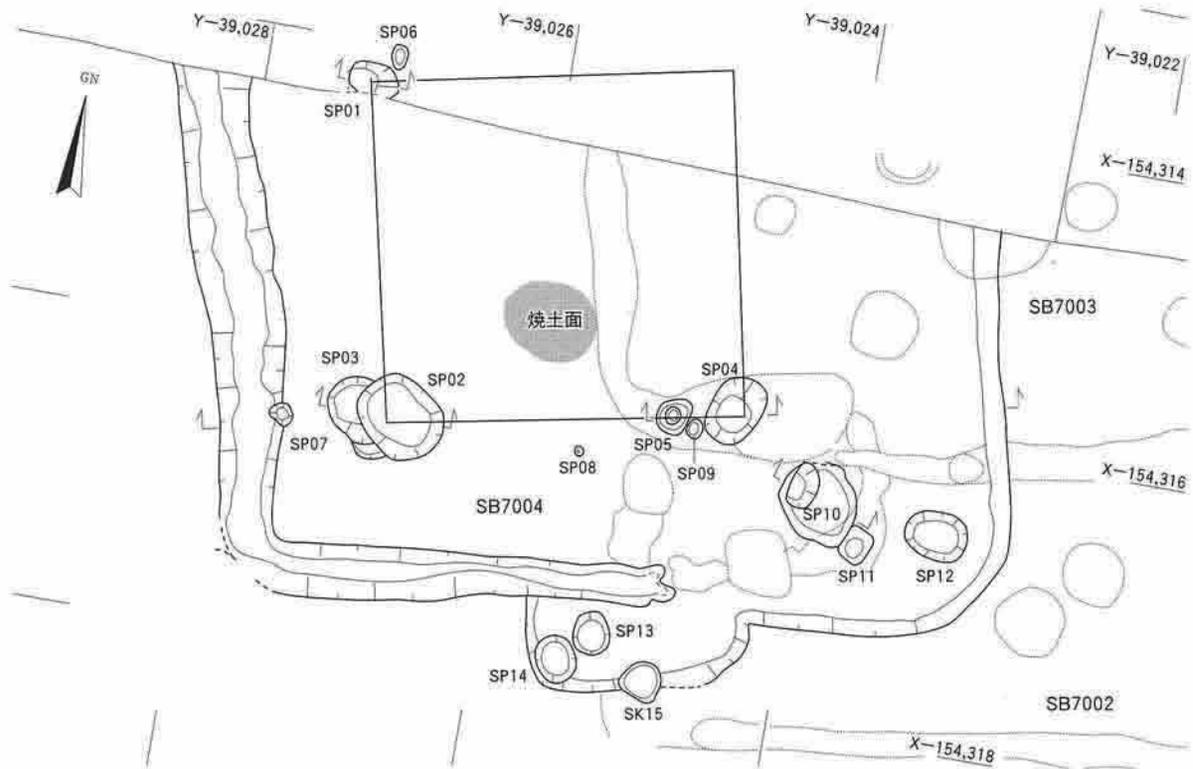


図104 SB7002平面図・断面図

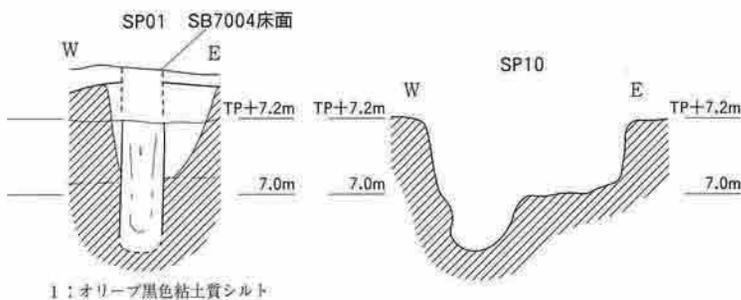


- 1: 暗オリブ色シルト混り極細粒砂 (柱痕跡)
 - 2: オリブ黒色粘土質シルト (柱痕跡)
 - 3: オリブ黒色粘土質シルト (柱痕跡)
 - 4: オリブ黒色シルト質粘土
- 1: 暗オリブ黒色シルト混り極細粒砂
 - 2: オリブ黒色粘土質シルト
 - 3: オリブ黒色粘土質シルト
 - 4: オリブ黒色シルト質粘土
- 1: オリブ黒色粘土質シルト (柱痕跡)
 - 2: オリブ黒色粘土質シルト
 - 3: オリブ黒色粘土質シルト
 - 4: オリブ黒色粘土質シルト
 - 5: オリブ黒色粘土質シルト
 - 6: オリブ黒色粘土質シルト
- 1: 黒褐色シルト質粘土 (柱痕跡)
 - 2: 黒褐色シルト質粘土
 - 3: オリブ灰色粘土質シルト
- 1: オリブ黒色シルト質粘土 (柱痕跡)
 - 2: オリブ黒色シルト質粘土 (柱痕跡)
 - 3: オリブ黒色粘土 (柱痕跡)
 - 4: オリブ黒色粘土質シルト
 - 5: オリブ黒色粘土質シルト
 - 6: オリブ黒色極細粒砂含む粘土質シルト
 - 7: オリブ黒色粘土・極細粒砂混りシルト
- 1: オリブ黒色粘土質シルト
 - 2: オリブ黒色粘土質シルト (1~2cm大の粘土塊を含む)
 - 3: オリブ黒色粘土質シルト (1cm大の偽塊を少量含む)
 - 4: 黒褐色シルト質粘土

図105 SB7003平面図・断面図



- | | | | |
|------------------------|---------------------|-------------------|-------------------|
| 1: オリーブ黒色粘土質シルト (柱痕跡) | 1: 黒色粘土質シルト (柱痕跡) | 1: 黒色粘土質シルト (柱痕跡) | 1: 黒色粘土質シルト (柱痕跡) |
| 2: 暗オリーブ灰色粘土質シルト (柱痕跡) | 2: 4~6cm大のシルトの偽礫を含む | 2: 4~6cm大のシルトの偽礫を | 2: 黒色粘土質シルト |
| 3: 黒色シルト質粘土 (柱痕跡) | オリブ黒色シルト質粘土 | 含むオリブ黒色シルト質粘土 | 3: オリーブ黒色粘土質シルト |
| 4: オリーブ黒色粘土質シルト | 3: 4~6cm大のシルトの偽礫を含む | オリブ黒色粘土 | 4: オリーブ灰色シルト質粘土 |
| 5: オリーブ黒色粘土質シルト | | | オリブ黒色粘土 |
| 6: オリーブ黒色粘土質シルト | | | |



1: オリーブ黒色粘土質シルト

図106 SB7004平面図・断面図

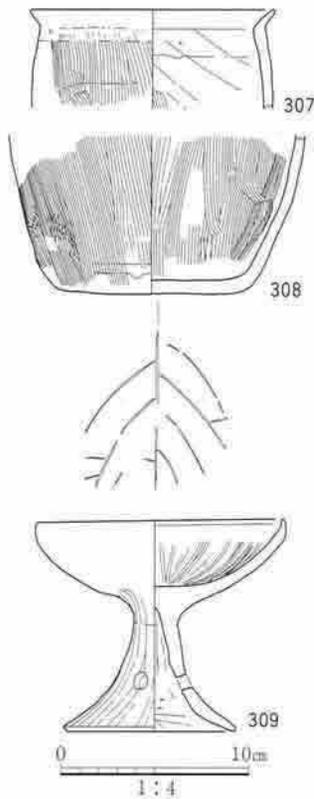


図107 SB7003焼土面
出土遺物

309は椀形高杯である。3箇所にスカシ孔を入れる。外面は脚部から杯部下半部にかけて縦方向のミガキで整える。内面にはシボリの痕跡が認められ、それを切って左から右方向のケズリを施す。杯部は内外面をそれぞれ横方向のナデで整えたのち、内面に放射状の暗文を入れる。

SB7004(図87・100・103・106・108、図版18) 調査地東側で検出した一辺5.30mの方形の竪穴建物である。SB7002・7003を切っており、SP7101に切られていた。

対称な位置にあるSP02・04を支柱穴とし、さらにそれらと直交する方向にあるSP01も支柱穴と判断した。また、SP02の西側にSP03がありこれはSP02に切られていた。SP04の西側にも柱痕跡の明瞭なSP05があることから、これらもSP02・04より前に設けられた支柱穴とみられる。支柱穴の間隔は2.30mであった。

SP01は直径0.30m、深さ0.48mで、柱痕跡は直径0.12m、深さ0.30m以上であった。柱痕跡にはオリーブ黒色粘土質シルトが堆積しており、柱の腐蝕とともに細粒の細屑物に置換されたものと判断された。SP02は直径0.50m、深さ0.39mで、柱痕跡は直径0.12m、深さ0.30mであった。柱痕跡には黒色粘土質シルトが堆積していた。SP03は直径0.30m以上、深さ0.30mで直径0.15m以上、深さ0.30mの柱痕跡が認められた。柱痕跡部分の堆積は黒色粘土質シルトであった。SP04は直径0.33m、深さ0.20mで、柱痕跡は直径0.15m、深さ0.14mであった。柱痕跡にはオリーブ黒色粘土質シルトが堆積していた。SP05は直径0.29m、深さ0.34mで、柱痕跡は直径0.14m、深さ0.26mであった。柱痕跡には黒色粘土質シルトが堆積していた。

これらの支柱穴以外にも柱痕跡の遺存するものがあつた。SP10は東西0.44m、南北0.55m、深さ0.37mであり、北側の底に直径0.18mの柱痕跡が認められた。埋土中から310が出土した。そのほか、

支柱穴周辺にはSP09など直径0.20m、深さ0.20mの小穴が分布し、南側の張出し部分には直径0.10mの小穴が認められた。

また竪穴内の中央には南北0.52m、東西0.62mの焼土面があり、その部分には炭・灰が拡がっていたため、この場所で火が焚かれたとみられる。焼土・炭・灰を採取して水選篩別したところ、多数の魚骨が出土した(第三章第2節)。柱穴や焼土面以外には幅0.24~0.50mの周壁溝を検出した。

出土した遺物にはSP10から出土した高杯310がある。杯部内外面をナデで整え、口縁部に横方向のシャープなナデを施す。脚部は外面に縦方向のナデを入れて面取りを行い、内面は右か

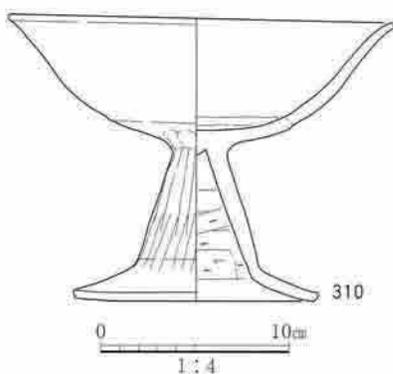


図108 SB7004内柱穴出土遺物

ら左方向のケズリで整える。また、裾部は内外面を横方向のシャープなナデで整える。

ii) 溝(図109~112)

竪穴建物の周囲において建物の各辺と平行した方向に設けられるSD7005~7009・7074と、それ以外のSD7072・7073とに区分された。以下、主なものについて記述する。

SD7006・7007はSB7001の南側に設けられており、前者が幅0.50m以上、深さ0.10m、後者が幅0.30m、深さ0.10mであった。

SD7009はSB7001の東側に設けられており、幅0.50~0.85m、深さ0.10mであった。

SD7072は長さ1.35m、幅0.45m、深さ0.05mであった。

SD7073は弧状に延びる溝で、幅0.30m、深さ0.05mであった。

SD7074はSB7002~7004の南側に設けられた東西方向の溝で、調査時に南側を削平したが、幅0.60m以上、深さ0.10m以上であった。

これらの溝は主にオリーブ黒色粘土質シルトで埋まっていた。平面配置から判断するとSD7005・7007・7009はSB7001の、SD7009・7074はSB7002~7004の周囲に巡らされた溝と考えられる。

iii) 土壙(図109・110・112・113)

SD7009の西側でSK7010~7017、東側で7075~7085を検出した。以下では主要なものについて述べる。

SK7015(図109) 南北2.00m、東西2.80m、深さ0.08mであった。下層は灰を多く含むオリーブ黒色シルト質粘土であった。土壙の埋土を採取して水選篩別したところ、イネの胚乳や穎、コムギ・アワーヒエ・キビ近似種・コムギの胚乳などの種実が見つかった(第Ⅲ章第3節)。

SK7016(図109) 南北0.50m以上、東西0.50mであった。埋土を採取して水選篩別したところ、イネなどの種実や魚骨が出土した(第Ⅲ章第2・3節)。

SK7075(図112) 南北0.65m以上、東西1.50m、深さ0.08mであった。遺構の東側がSB7004に切られていた。オリーブ黒色シルト質粘土で埋まっており、埋土を採取して水選篩別したところ、イネの胚乳が多数出土した(第Ⅲ章第3節)。

これらの土壙は住居の周囲に設けられており、食物残滓とみられる動植物遺存体が比較的多く見られるといった特徴が指摘される。

iv) ビット(図109~114)

ビットはSD7009より西側でSP7018~7071、東側でSP7086~7103を検出した。竪穴建物の各辺と平行して柱筋を復元できそうなものもあったが、それらが組み合って掘立柱建物や柵に復元されることはなかった。検出した71個のビットのうち、23個が柱痕跡が明確であり柱穴とみられる。小穴や窪みなどもビットとして報告しているが、以下では柱穴について記述する。いずれの柱痕跡においても細粒の細屑物が堆積しており、柱の腐蝕にともなって形成されたものと判断された。

SP7020は直径0.22m、深さ0.20mで、柱痕跡は直径0.10m、深さ0.07mであった。

SP7021は直径0.24m、深さ0.26mで、柱痕跡は直径0.13m、深さ0.26mであった。柱痕跡にはオリーブ黒色シルト質粘土が堆積しており、柱材の腐蝕とともに溜まったものと判断された。柱痕跡の

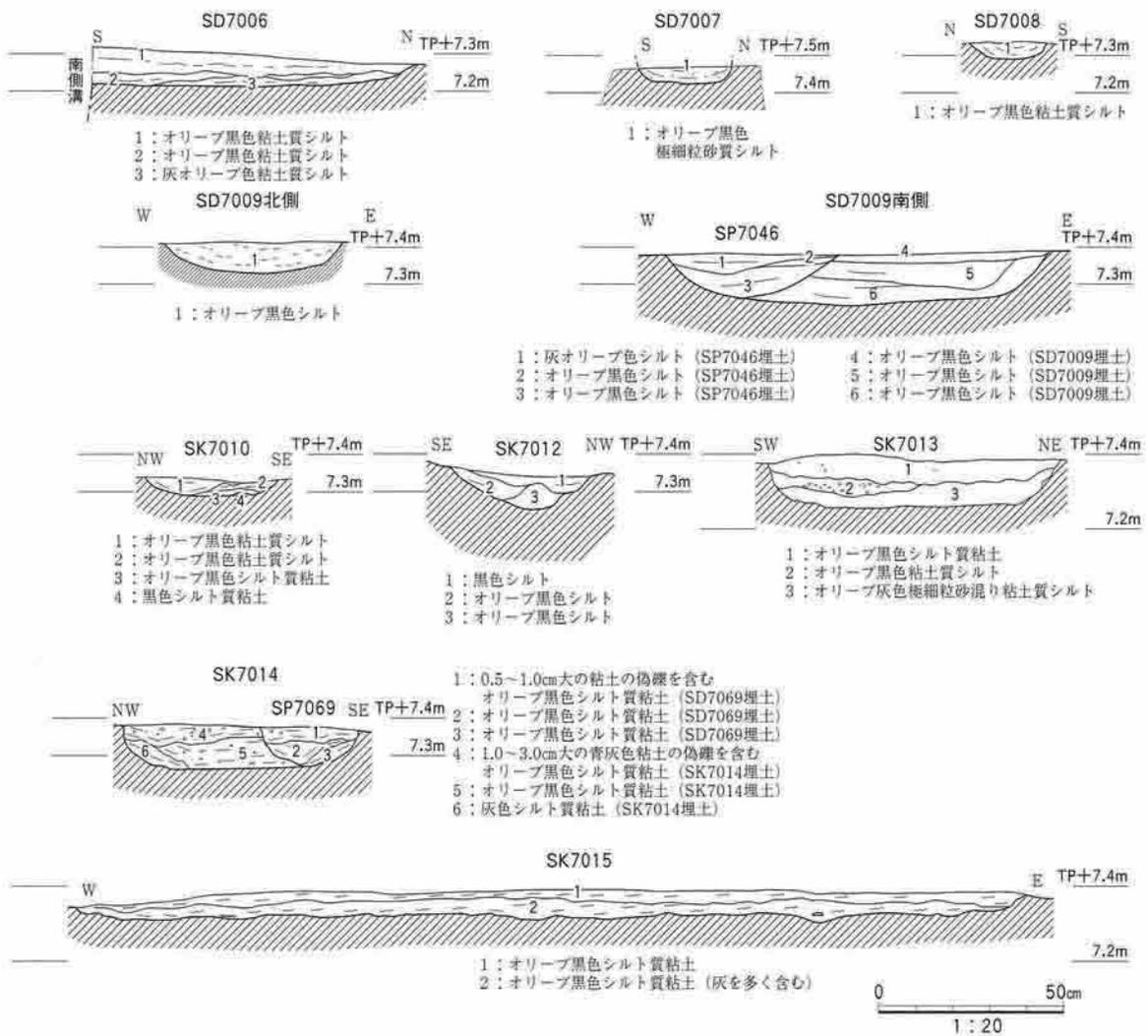
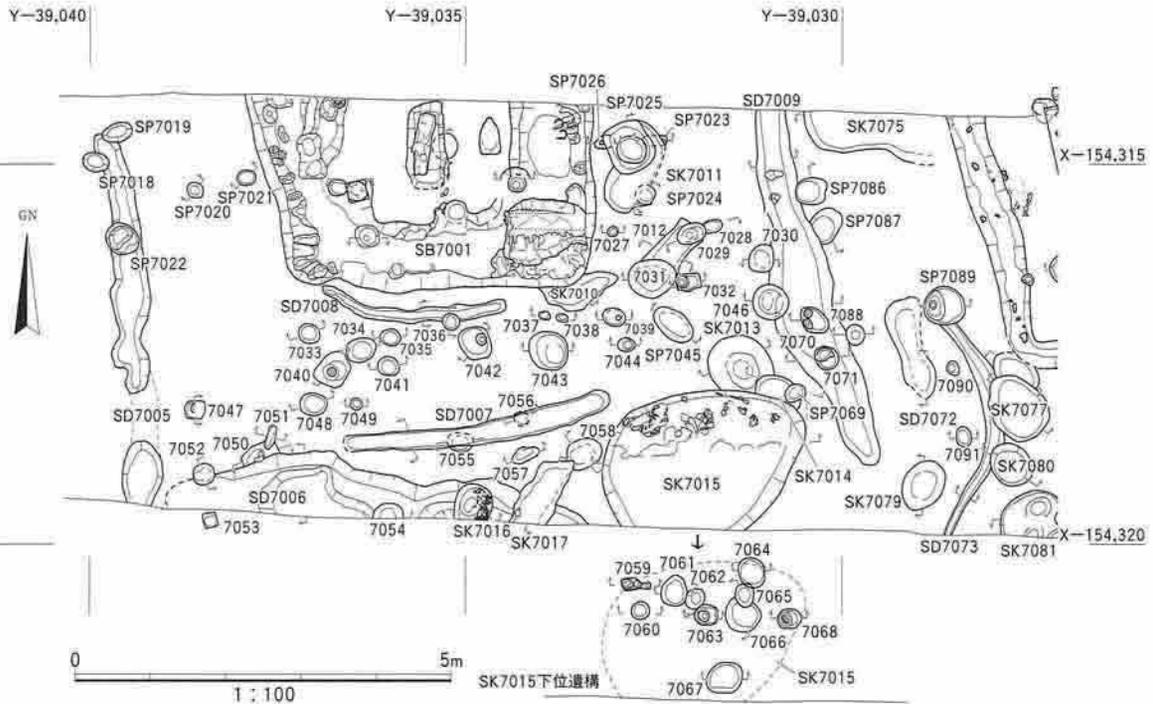


図109 調査地西半古墳時代中期溝・土壇・ピット平面図・断面図

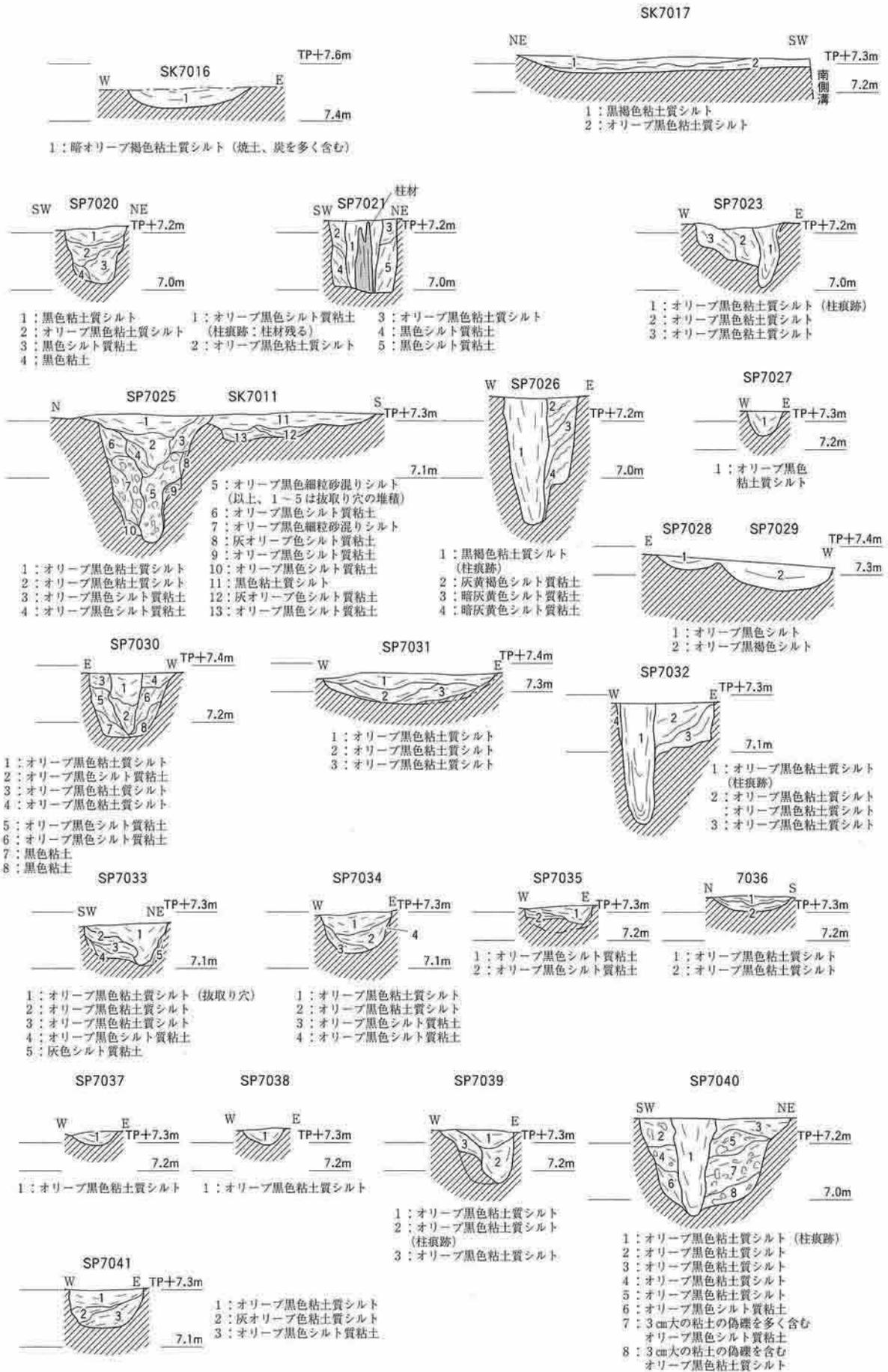


図110 調査地西半古墳時代中期土壌・ピット断面図

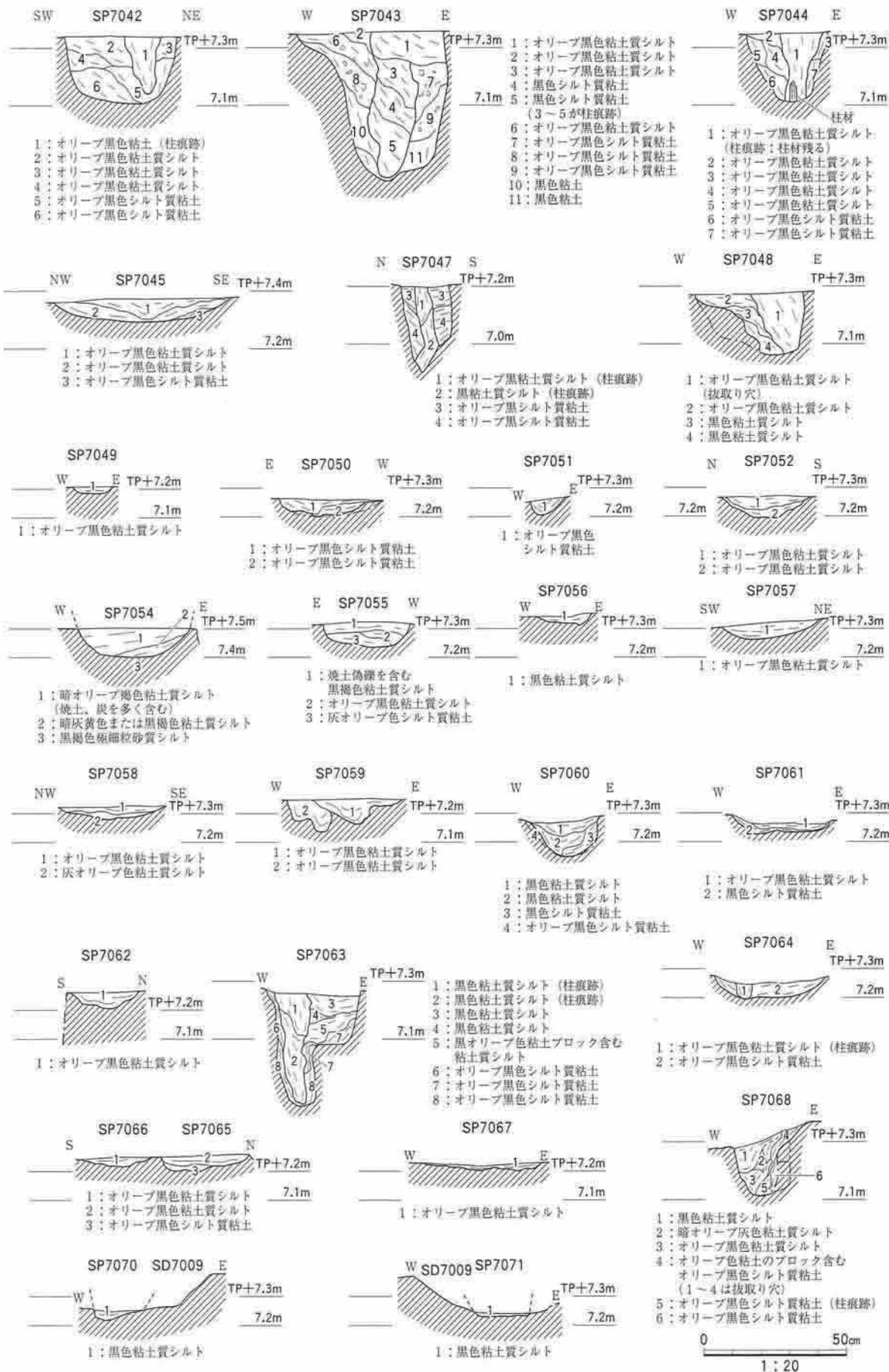


図111 調査地西半古墳時代中期ピット断面図

底の部分に柱材313が残っていた。

SP7023は直径0.31m、深さ0.24mで、柱痕跡は直径0.10m、深さ0.24mであった。柱痕跡にはオリーブ黒色シルト質粘土が堆積していた。

SP7025は直径0.48m、深さ0.45mで、柱の抜き取り穴は直径0.08m、深さ0.21mであった。この部分には2～3cm大の偽礫を含むオリーブ黒色細粒砂混り粘土質シルトが堆積していた。

SP7026は直径48m、深さ0.45mで、柱痕跡は直径0.08m、深さ0.21mであった。柱痕跡にはオリーブ黒色粘土質シルトが堆積しており、柱材の腐蝕とともに溜まったものと判断された。柱痕跡の底の部分には柱材312が残っていた。

SP7032は0.35m×0.23m、深さ0.42mで、柱痕跡は直径0.12m、深さ0.42mであった。柱痕跡にはオリーブ黒色粘土質シルトが堆積していた。

SP7033は直径0.30m、深さ0.15mで、抜き取り穴は直径0.06m、深さ0.06mであった。この部分にはオリーブ黒色粘土質シルトが溜まっていた。

SP7035は直径0.24cm、深さ0.10mで、柱痕跡は直径0.10m、深さ0.03mであった。柱痕跡にはオリーブ黒色シルト質粘土が堆積していた。

SP7039は直径0.27m、深さ0.19mで、柱痕跡は直径0.11m、深さ0.20mであった。柱痕跡にはオリーブ黒色粘土質シルトが溜まっていた。

SP7040は直径0.54m、深さ0.32mで、柱痕跡は直径0.16m、深さ0.34mであった。柱痕跡にはオリーブ黒色粘土質シルトが堆積していた。

SP7042は直径0.39m、深さ0.23mで、柱痕跡は直径0.12m、深さ0.20mであった。柱痕跡にはオリーブ黒色シルトが堆積していた。

SP7043は直径0.52m、深さ0.52mで、柱痕跡は直径0.15m、深さ0.51mであった。柱痕跡にはオリーブ黒色粘土質シルトが堆積していた。

SP7044は直径0.29m、深さ0.24mで、柱痕跡は直径0.07～0.12m、深さ24mであった。柱痕跡にはオリーブ黒色粘土質シルトが堆積しており、柱材の腐蝕とともに溜まったものと判断された。柱痕跡の底の部分には柱材311が残っていた。

SP7048は直径0.38m、深さ0.22mで、柱の抜き取り穴は直径0.20m、深さ0.20mであった。この部分にはオリーブ黒色粘土質シルトが堆積していた。

SP7063は直径0.33m、深さ0.40mで、柱痕跡は直径0.11m、深さ0.38mであった。柱痕跡には黒色粘土質シルトが堆積していた。

SP7064は直径0.37m、深さ0.08mで、柱痕跡は直径0.06m、深さ0.05mであった。柱痕跡にはオリーブ黒色粘土質シルトが堆積していた。

SP7068は直径0.26m、深さ0.25mであった。柱痕跡は抜き取り時に削られているが直径0.05m、深さ0.07mが残存していた。その部分には黒色粘土質シルトが堆積していた。

SP7097は直径0.36m、深さ0.07mで、柱痕跡は直径0.14m、深さ0.07cmであった。柱痕跡にはオリーブ黒色粘土質シルトが堆積していた。

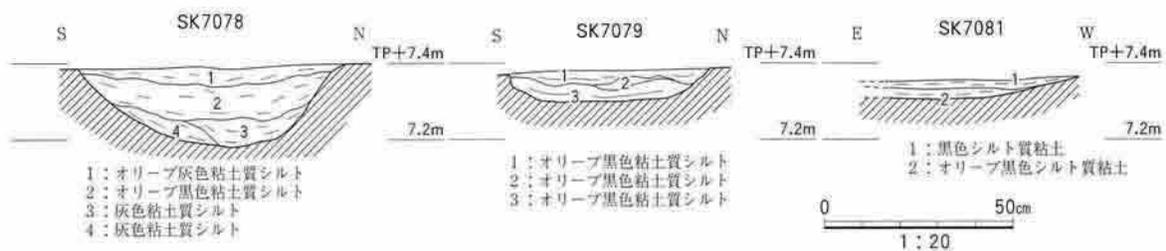
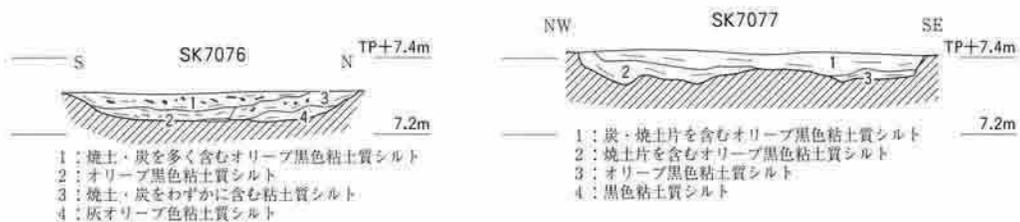
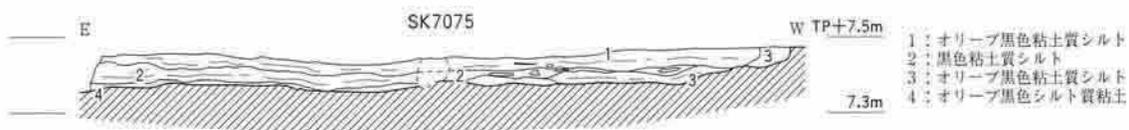
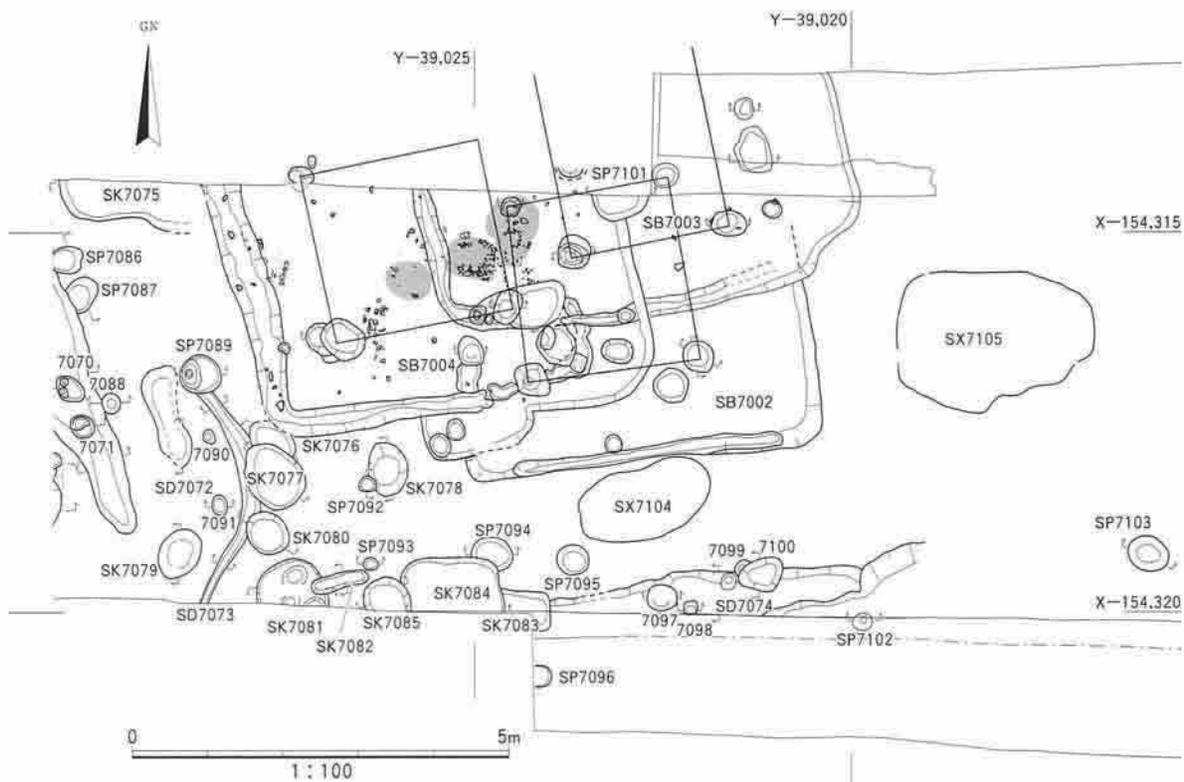


図112 調査地東半古墳時代中期溝・土壙・ピット平面図・断面図

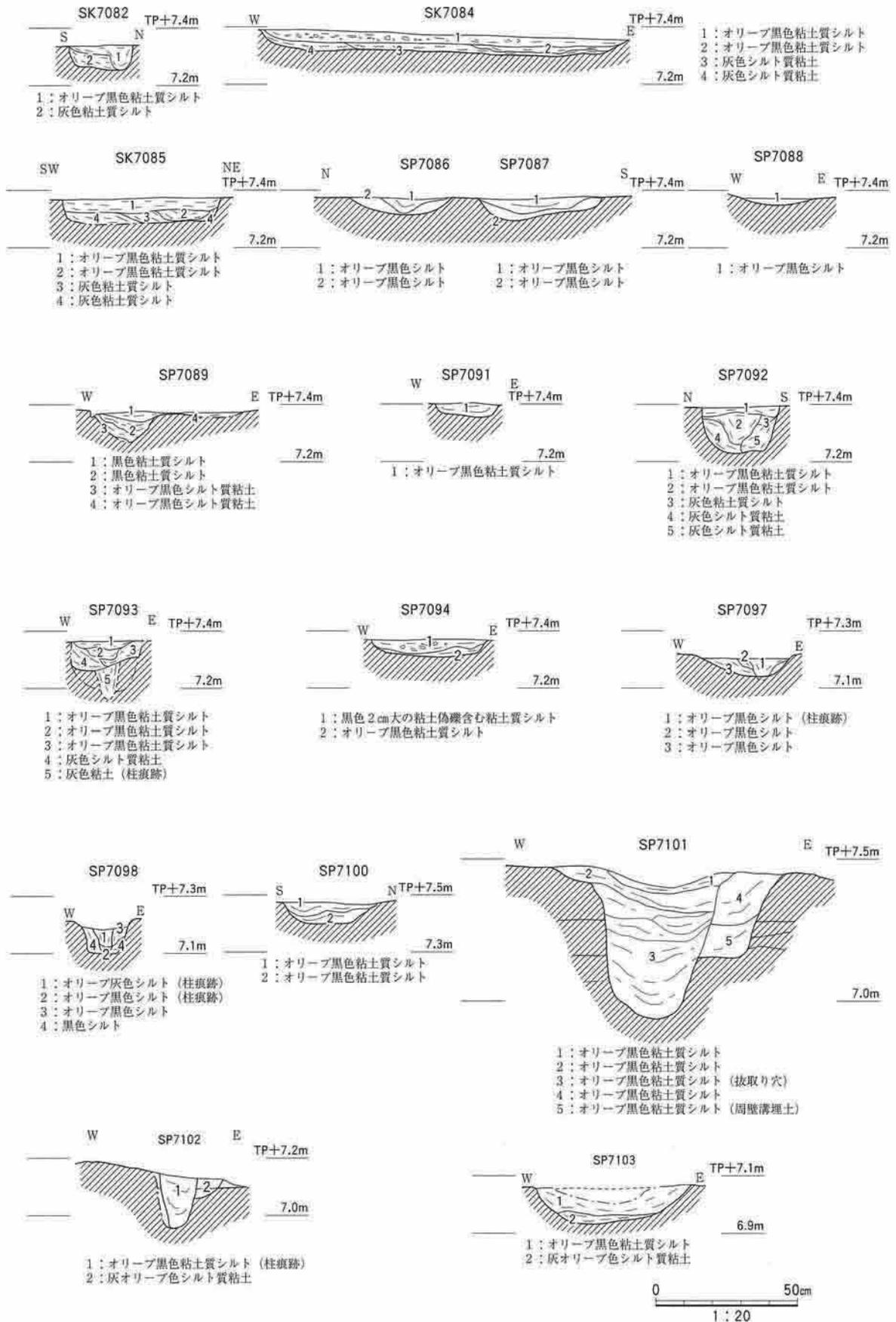


図113 調査地東半古墳時代中期土壌・ピット平面図・断面図

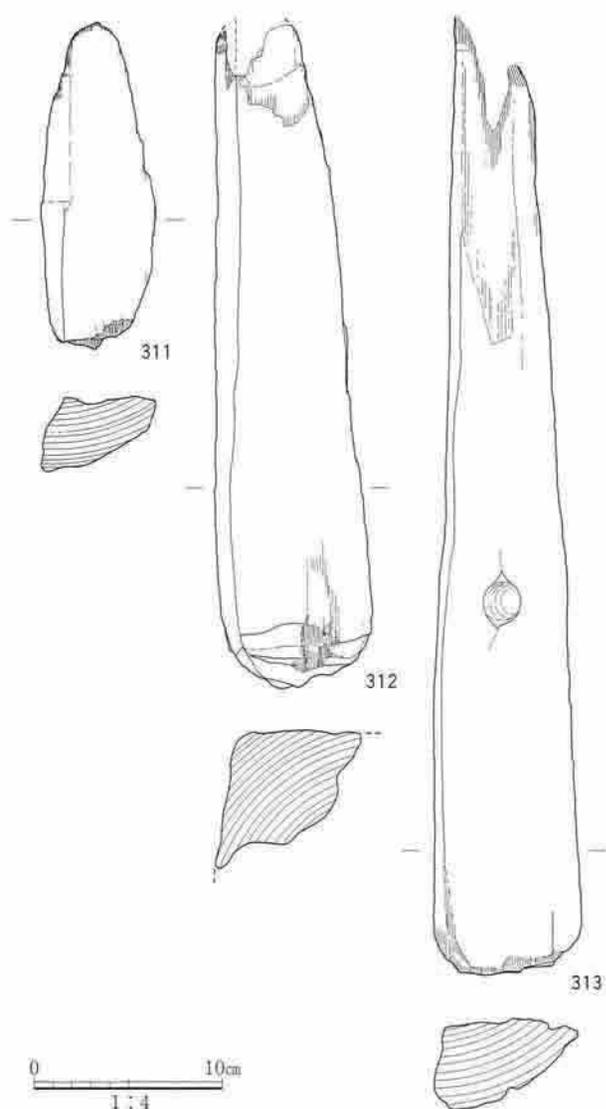


図114 出土した柱材

SP7021(313)、SP7026(312)、SP7044(311)

SP7098は直径0.21m、深さ0.12mで、柱痕跡は直径0.07m、深さ0.12mであった。柱痕跡にはオリーブ黒色粘土質シルトが堆積していた。

SP7100は直径0.28m、深さ0.18mで、柱痕跡は直径0.09m、深さは0.04mであった。柱痕跡には黒色粘土質シルトが認められた。

SP7101は直径0.82m、深さ0.54mで、柱の抜取り穴は直径0.40m、深さ0.46mであった。この部分にはオリーブ黒色粘土質シルトが堆積していた。

SP7102は直径0.24m、深さ0.18mで、柱の抜取り穴は直径0.14m、深さ0.18mであった。この部分にはオリーブ黒色粘土質シルトが堆積していた。

ピットからは土器の細片が出土したほか、柱材311～313が出土した。311はSP7044、312はSP7026、313はSP7021から出土した。311は残存長17.2cm、幅5.8cm、厚さ3.7cmであった。312は残存長35.3cm、幅8.0cm、厚さ6.3cmで、端部に加工痕が顕著であった。311・312はいずれもヒノキの分割材である。313は残存長50.6cm、幅7.6cm、厚さ4.7cmで端部に加工痕

が顕著であった。これはヒノキ科のミカン割材である(第Ⅲ章第4節)。

v) 落込み(図112・115、巻頭カラー、表7・8)

SX7104・7105は調査地東半で検出した落込みである。SX7104は南北0.90m、東西1.80mで、埋土中から白玉361・362が出土した。また、洗浄した土の中からイネの胚乳が出土した(第Ⅲ章第3節)。SX7105は南北1.90m、東西2.60mで、埋土中からガラス玉314・317・318・320～322、白玉363～383が出土した。

5) 各層出土の遺物

第14層中から白玉384～388が見つかったほか、389～402・404～418・420～422が出土した。第14・15層中から403、第19層中から419がそれぞれ出土した(図116・117、図版37)。

419は縄文時代前～中期、390は弥生時代前期、420～422は弥生時代前・中期、389・391～404は弥生時代後期、405～418は古墳時代中期にそれぞれ属する。

389は弥生時代後期の甕である。体部外面には接合痕が認められ、その上に直にタタキを施す。内面はナデで整える。口縁部は内面に横方向のハケを施したのち、端部から外面にかけてナデで整える。

390は弥生時代前期に属するとみられる甕の底部である。胎土に直径0.1～0.3cmの砂粒を多く含んでいる。外面は縦方向に縦方向の細かなハケを施す。底部外側縁には粘土紐を付加しており、短く外反して立ち上がる。

391は弥生時代後期の甕である。体部はやや球形を呈しており、外面上半部を横方向のタタキ、下半部を右上がりのタタキで整える。内面は右から左方向のハケを施したのち、頸部をオサエで整える。外面には接合痕が残るが、口縁部を横方向のナデで整える。

392は弥生時代後期前半の甕底部である。外面には接合痕が残るが、全体にナデを施す。内面は縦方向のハケを施す。

393は台付鉢である。外面をナデ、内面を横方向のナデで整える。脚台部には縦方向のオサエを連続的に施す。また全体的に赤く変色しており、端部が欠けた後、二次的に熱を受けたものとみられる。

394～404は弥生時代後期の文様あるいは記号文を施した土器である。

394は甕の底部である。内・外面をそれぞれナデで整えており、底部外面には平行する2条の線刻文がある。395は壺の肩部片で、4個の列点文がある。396は壺の頸～肩部の破片である。4個の列点文がある。397は壺の肩部片で、4個の列点文がある。398は壺の肩部片で、7個の列点文がある。399は体部の破片で、5個の列点文がある。400は体部の破片とみられる。5個以上の列点文を施す。401は壺の肩部片で、頂部から3条の線刻が伸びる。402は体部の破片とみられる八字状に線刻を施す。403は体部の破片で、具象文を施す。404は体部の破片で、櫛描直線文帯間にS字状文を施す。

405は韓式系土器平底鉢である。外面を平行タタキで整える。内面には横方向のナデを施す。口縁部は横方向のシャープなナデを施し、端部に面をもたせる。

406は韓式系土器平底鉢である。外面を縦方向の平行タタキで整える。内面は頸部を右下から左上、口縁部を横方向のナデでそれぞれ整える。

407は韓式系土器の甌と推測されるものの破片である。外面は縦方向の縄席文タタキ、内面は横方向のナデで整える。口縁部にはシャープなナデを巡らせており、端面が浅く凹む。

408は韓式系土器長胴甕である。外面は縦方向の平行タタキで整える。

409は韓式系土器平底鉢の底部である。外面は縦方向のハケ、内面は右下から左上のハケを施す。底部外面はハケが認められるが、基本的にナデで整える。

410は韓式系土器の体部片である。鳥足文タタキで整形しており、タタキの上から沈線を入れる。沈線があることから長胴甕や甌の一部とみられる。

411・412は製塩土器の細片である。外面を粗いタタキで整形する。

413は椀形高杯である。脚部には3個のスカシ孔がある。杯部外面は下半部をハケ、上半部をオサエで整えたのち、横方向のナデを施す。脚部は外面を縦方向のハケで整えたのち、ナデを施す。内面にはシボリの痕跡がある。頂部には内面を整形した時に用いたとみられる工具の刺突痕が認められる。

414は杯部の稜線が不明瞭であるため椀形高杯に分類される。杯部外面は縦方向のハケを施したの

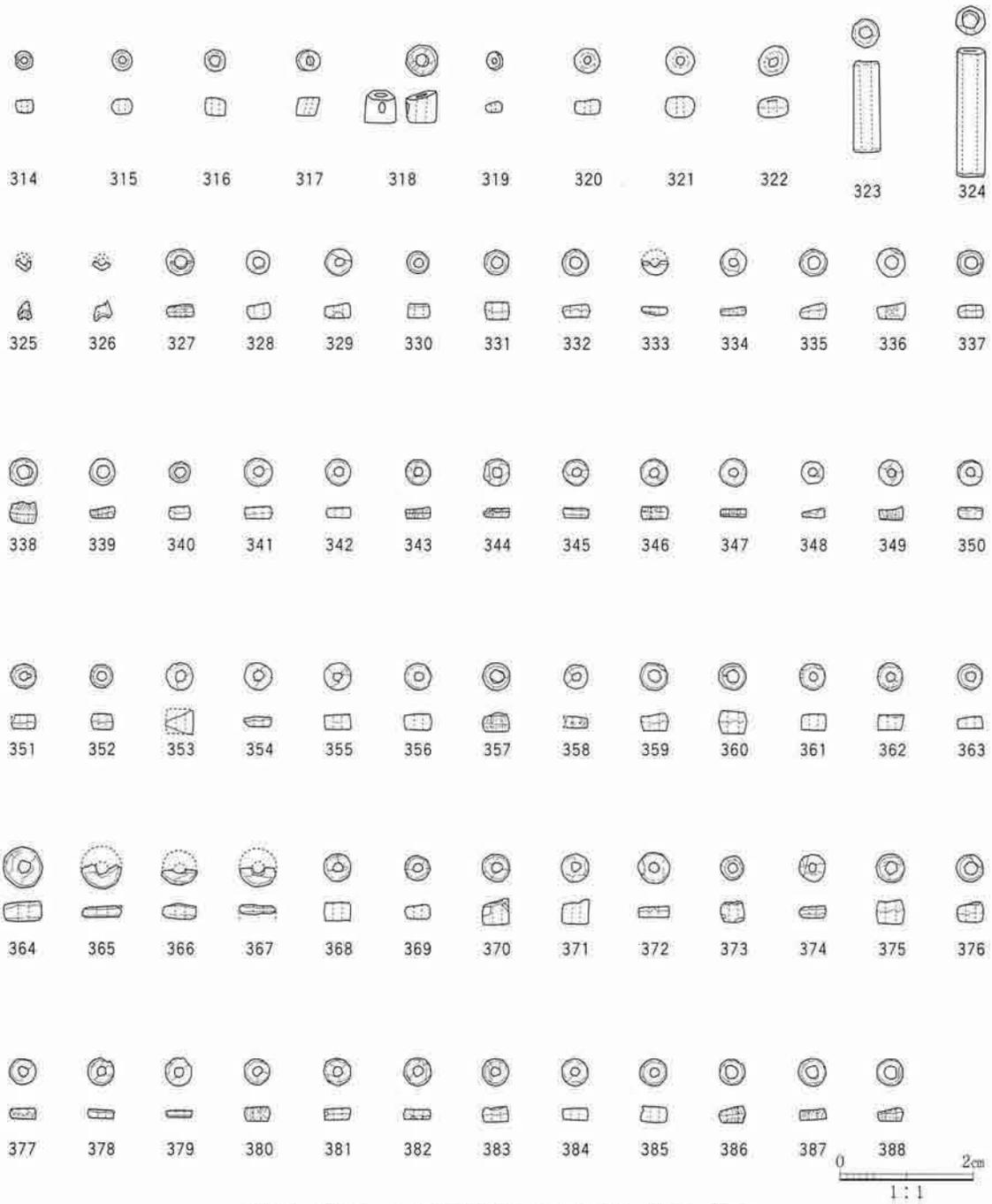


図115 NG06-4次調査地出土のガラス玉・管玉・白玉

表7 NG06-4次調査地出土ガラス玉一覧表

報告番号	製品種類	遺構	種類	直径(mm)	高(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色調
314	ガラス玉	SX7105	カリガラスあるいはソーダ石灰ガラス	0.260	0.230	0.08	0.0159	水色
315	ガラス玉	SB7004	カリガラスあるいはソーダ石灰ガラス	0.300	0.240	0.08	0.0280	水色
316	ガラス玉	SB801	カリガラスあるいはソーダ石灰ガラス	0.320	0.290	0.12	0.0342	水色
317	ガラス玉	SX7105	ソーダ石灰ガラス	0.300	0.300	0.08	0.0486	青灰色
318	ガラス玉	SX7105	ソーダ石灰ガラス	0.480	0.500	0.13	0.1355	青灰色
319	ガラス玉	SB7004	ソーダ石灰ガラス	0.240	0.190	0.05	0.0118	黄色
320	ガラス玉	SX7105	ソーダ石灰ガラス	0.390	0.250	0.10	0.0420	緑色
321	ガラス玉	SX7105	ソーダ石灰ガラス	0.430	0.330	0.09	0.0783	緑色
322	ガラス玉	SX7105	ソーダ石灰ガラス	0.480	0.300	0.09	0.0778	緑色

表8 NG06-4次調査地出土管玉・白玉一覧表

報告番号	種類	材質	遺構	直径	長さ	高さ	孔径	状態	備考
323	管玉	滑石	SB802北群	0.230	0.086	0.267	-	破片	石材グリーンタフか?
324	管玉?	滑石	SB802東群	0.418	0.402	1.388	0.141	破片	
325	管玉	滑石	SB7001内東側粘土堆積	0.434	0.399	1.953	0.214	完形	
326	管玉	滑石	SX7104	0.420	0.400	0.137	0.018	完形	
327	白玉	滑石	SB7003	0.393	-	0.208	0.124	完形	
328	白玉	滑石	SB7003南西焼土(東)	0.418	-	0.351	0.136	完形	管玉が折れたものか?
329	白玉	滑石	SB7004	0.403	-	0.231	0.119	完形	
330	白玉	滑石	SB7004	0.398	-	0.217	0.109	完形	
331	白玉	滑石	SB7004	0.393	-	0.168	0.113	完形	
332	白玉	滑石	SB7004	0.393	-	0.223	0.126	完形	
333	白玉	滑石	SB7004	0.391	-	0.241	0.104	完形	
334	白玉	滑石	SB7004	0.393	-	0.226	0.106	完形	
335	白玉	滑石	SB7004	0.402	-	0.208	0.121	完形	
336	白玉	滑石	SB7004	0.328	-	0.203	0.103	完形	やや茶色
337	白玉	滑石	SB7004	0.382	-	0.241	0.144	完形	
338	白玉	滑石	SB7004	0.401	-	0.187	0.138	完形	
339	白玉	滑石	SB7004	0.374	-	0.113	-	半欠	
340	白玉	滑石	SB7004	0.392	-	0.129	0.103	完形	やや茶色
341	白玉	滑石	SB7004	0.394	-	0.232	0.166	完形	
342	白玉	滑石	SB7004	0.421	-	0.341	0.136	ほぼ完形	
343	白玉	滑石	SB7004	0.405	-	0.259	0.171	ほぼ完形	
344	白玉	滑石	SB7004	0.423	-	0.224	0.150	ほぼ完形	
345	白玉	滑石	SB7004	0.353	-	0.228	0.152	完形	
346	白玉	滑石	SB7004	0.390	-	0.187	0.161	完形	
347	白玉	滑石	SB7004	0.384	-	0.245	0.165	完形	
348	白玉	滑石	SB7004	0.412	-	0.178	0.147	完形	
349	白玉	滑石	SB7004	0.423	-	0.313	0.144	ほぼ完形	
350	白玉	滑石	SB7004	0.398	-	0.163	0.168	完形	
351	白玉	滑石	SB7004	0.320	-	0.189	0.158	完形	
352	白玉	滑石	SB7004	0.405	-	0.143	0.172	完形	
353	白玉	滑石	SB7004	0.398	-	0.195	0.165	完形	
354	白玉	滑石	SB7004	0.419	-	0.247	0.170	完形	
355	白玉	滑石	SB7004焼土	0.588	-	0.293	0.138	ほぼ完形	
356	白玉	滑石	SB7004焼土	0.574	-	0.157	-	破片	
357	白玉	滑石	SB7004焼土	0.492	-	0.220	-	破片	表面が熱を受けて焦げている
358	白玉	滑石	SB7004焼土	0.585	-	0.141	-	破片	表面が焦げて煤付着
359	白玉	滑石	SK7015	0.434	-	0.378	0.148	完形	管玉が折れたものか?
360	白玉	滑石	SK7016	0.412	-	0.276	0.137	完形	
361	白玉	滑石	SX7104	0.378	-	0.160	0.109	完形	
362	白玉	滑石	SX7104	0.355	-	0.148	1.180	完形	
363	白玉	滑石	SX7105	0.356	-	0.273	0.117	完形	
364	白玉	滑石	SX7105	0.390	-	0.151	0.055	ほぼ完形	
365	白玉	滑石	SX7105	0.425	-	0.325	0.141	完形	
366	白玉	滑石	SX7105	0.399	-	0.299	0.168	ほぼ完形	
367	白玉	滑石	SX7105	0.382	-	0.155	0.185	完形	
368	白玉	滑石	SX7105	0.399	-	0.107	0.104	ほぼ完形	
369	白玉	滑石	SX7105	0.399	-	0.078	0.094	完形	
370	白玉	滑石	SX7105	0.391	-	0.183	0.135	完形	
371	白玉	滑石	SX7105	0.408	-	0.141	0.104	ほぼ完形	
372	白玉	滑石	SX7105	0.393	-	0.146	0.103	ほぼ完形	
373	白玉	滑石	SX7105	0.394	-	0.177	0.100	完形	
374	白玉	滑石	SX7105	0.416	-	0.146	0.118	完形	
375	白玉	滑石	SX7105	0.364	-	0.125	0.107	完形	
376	白玉	滑石	SX7105	0.370	-	0.122	0.740	完形	
377	白玉	滑石	SX7105	0.392	-	0.131	0.110	ほぼ完形	
378	白玉	滑石	SX7105	0.384	-	0.122	0.770	完形	
379	白玉	滑石	SX7105	0.403	-	0.184	0.057	完形	
380	白玉	滑石	SX7105	0.402	-	0.119	0.065	完形	
381	白玉	滑石	SX7105	0.337	-	0.085	0.104	完形	
382	白玉	滑石	SX7105	0.367	-	0.129	0.079	完形	
383	白玉	滑石	SX7105	0.364	-	0.161	0.060	完形	
384	白玉	滑石	第14層中	0.372	-	0.199	0.114	完形	
385	白玉	滑石	第14層中	0.338	-	0.227	0.115	完形	
386	白玉	滑石	第14層中	0.428	-	0.357	0.141	完形	
387	白玉	滑石	第14層中	0.411	-	0.128	0.111	完形	
388	白玉	滑石	第14層中	0.475	-	0.168	0.107	ほぼ完形	

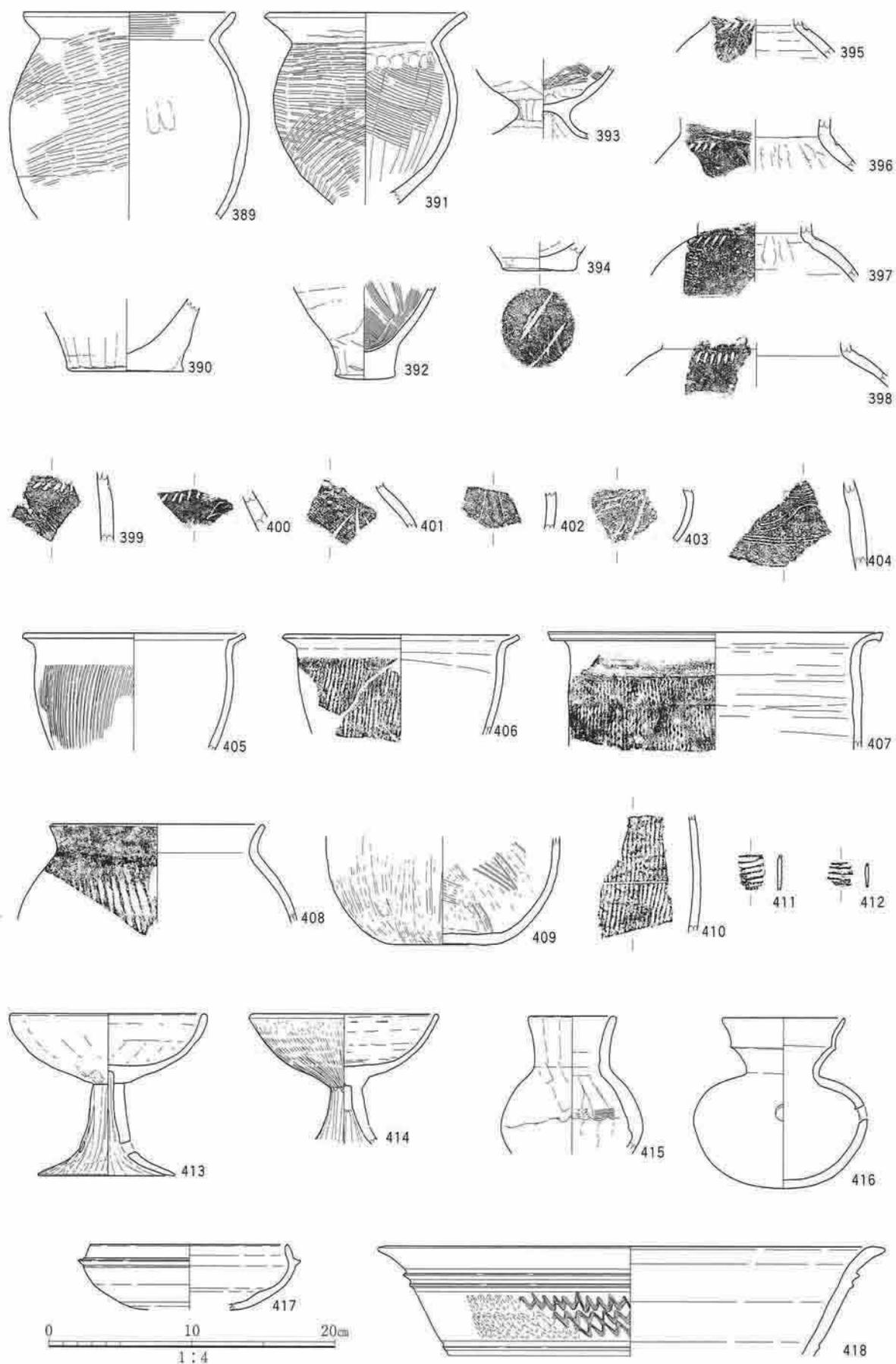


图116 各層出土遺物(1)
 第14層(389~402·404~418)、第14·15層(403)

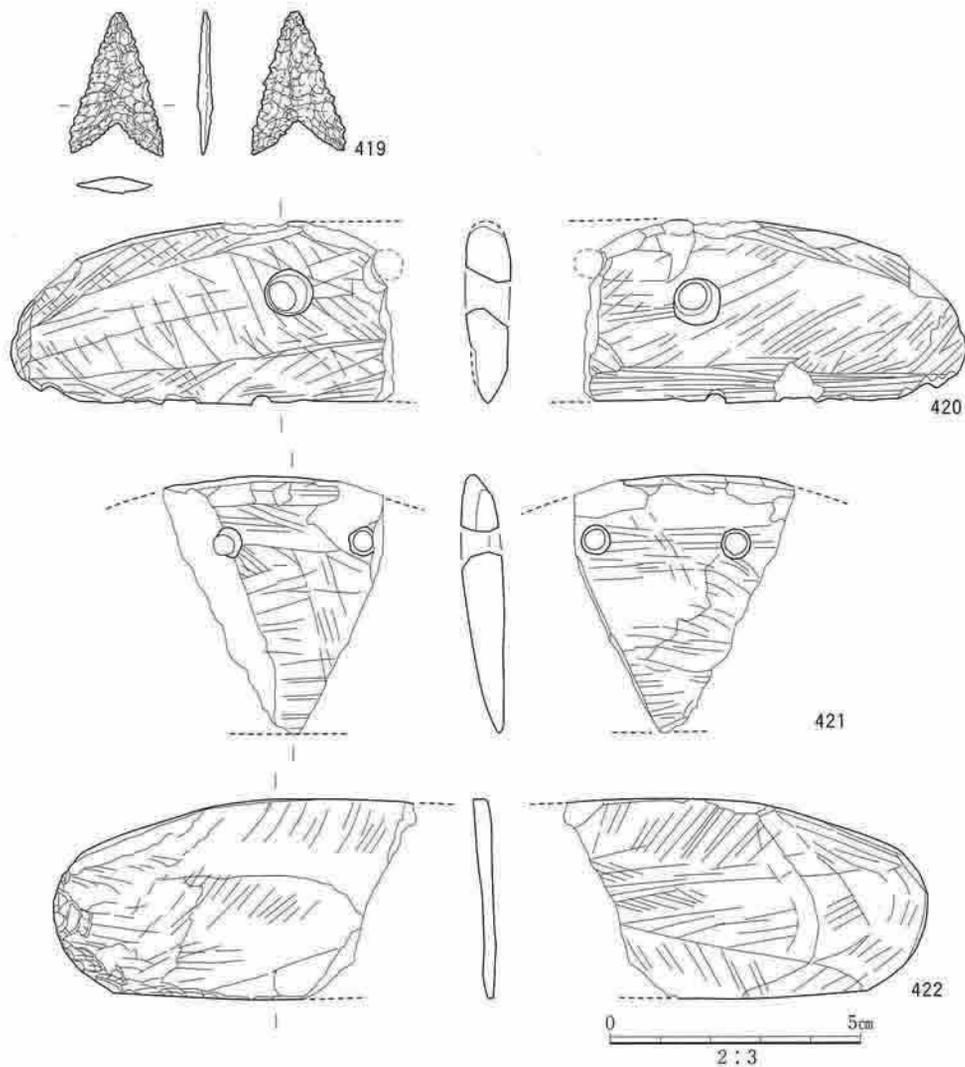


図117 各層出土遺物(2)
第14層(420~422)、第19層(419)

ちにナデで整え、内面は横方向のナデを施す。脚部外面は縦方向のミガキで平滑にし、内面はシボリの痕跡がある。

415は土師器短頸壺である。外面は縦方向のナデで整え、内面は下半部をオサエ、上半部を横方向のハケで整えたのち、縦方向のナデを入れる。また、胴部最大径の位置には粘土紐の接合痕が残る。

416は須恵器甗である。体部の中程に直径1.0cmの円孔を穿つ。体部から口縁部にかけて内外面を回転ナデで整える。TK216型式に属する。

417は須恵器杯身である。立上りの部分が短いことからTK10型式に属するものと判断される。

418は須恵器器台の杯部である。杯部中位に5条で構成される櫛描波状文を3帯入れる。TK208型式に属するとみられる。

419は縄文時代前~中期のサヌカイト製凹基式石鏃である。長さ2.8cm、幅1.85cm、厚さ0.3cm、重量0.9gである。

420は緑色片岩製の石庖丁である。両面穿孔によって直径0.9cmの紐孔を1.0cm間隔で設ける。全体

を研磨したのち、刃部を表裏から研ぎ出すが、裏面からの研磨の方が幅広い。また、刃部には細かな剥離が断続的に認められる。また背の部分も研磨を施しており、丸みを帯びる。

421は緑色片岩製の石庖丁である。両側穿孔によって直径0.6cmの紐孔を2.1cm間隔で設ける。刃部は浅い角度で研ぎ出しており、身の部分が細くなっている。また、背にも研磨を施し、平滑に整える。

422は石庖丁の未成品である。石材は片岩とみられる。裏面および背から短側縁にかけて研磨をしている。

第Ⅲ章 遺構と遺物の検討

第1節 NG03-5次調査地出土の動物骨同定とウマの埋葬

樽野博幸(大阪市立自然史博物館)

杉本厚典

1)はじめに

本節ではNG03-5次調査地において出土した動物骨の遺存状況について述べ、種類を同定し、性別・年齢・形質・外傷などの諸特徴について検討を行う。

当調査地の南東で行われたNG01-14次調査では、奈良時代の流路NR501から人面墨画土器とともに、ウシ・ウマ・イヌ・スッポンなどの骨が出土した。ウシには中手骨の変形が著しいものがあり、農作業などの激しい使役がなされたと推測されている[宮路淳子・松井章2004]。

また、調査地の南南西900mに位置する6世紀前~中葉の南口古墳(NG88-54次調査地)では、古墳の周濠からウマの遺存体出土し、ウマを用いた葬送儀礼が想定されている[久保和士1995]。

本調査地で検出したNR501はNG01-14・04-3次調査地で検出したNR501に連続しており、人面墨画土器や、ウシ・ウマ・イヌ・スッポンなどが出土した流れの下流に位置する。またSK702は、弥生時代の墳丘の高まりを用いて設けられた土壌であり、結論からいえばウマの埋葬である可能性が高い資料である。ここではNG03-5次調査地で出土した動物骨の同定を行い、ウマの埋葬について若干の事例を紹介しつつ、その位置づけを行いたい。

2)出土動物骨の同定

時代の古いものから順に遺構別に動物遺体について述べる。ウマの計測は[Driessh1976]の、イヌの計測は[斉藤弘吉1963]の方法に従った。

i)SK702から出土した動物骨

土壌の東端近くからウマの歯が出土している(図118)。残されているのはエナメル質のみで、象牙質やセメント質はすべて溶けており、保存状態は極めて悪い。しかし、歯列は生息時の状態をほぼ維持しており、最も北から切歯片群が発掘され、少し間隔を置いて下顎の小白歯と大白歯が南北に配列し、列の南端に左右の下顎第3大白歯が位置していた。左右の下顎白歯列は共に摩耗面を東に向けて半ば重なり、右白歯列が下位にあり、左白歯列はやや西にずれて重なっていた。また、右下顎白歯列のさらに東からは、わずかではあるが上顎白歯の破片も出土している。唯一概形をとどめている右下顎第3大白歯はよく摩耗しており、この個体が老齢であったことがわかる。この白歯の歯冠長は35mm

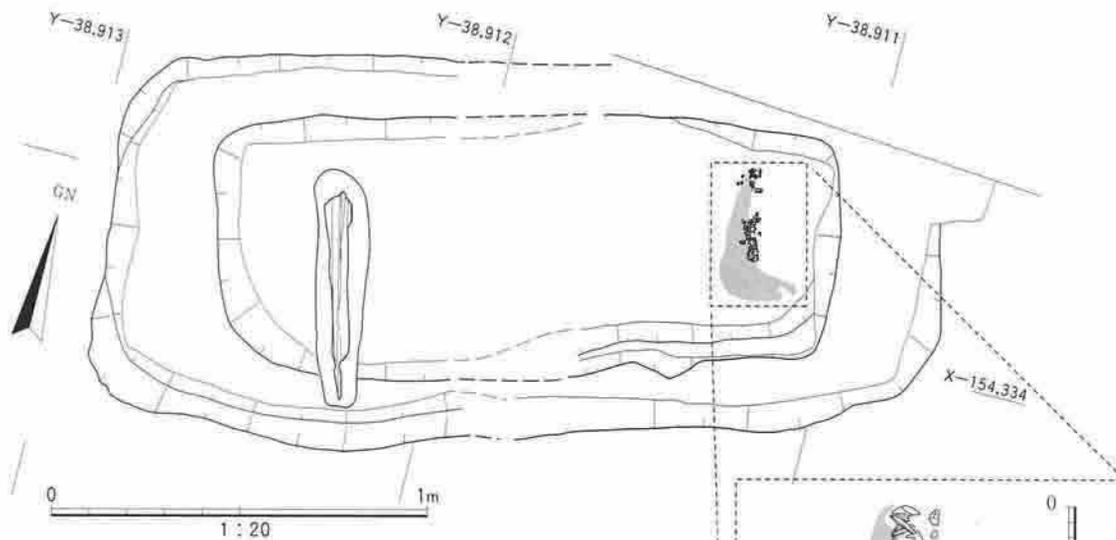


図118 SK702ウマの歯出土状況

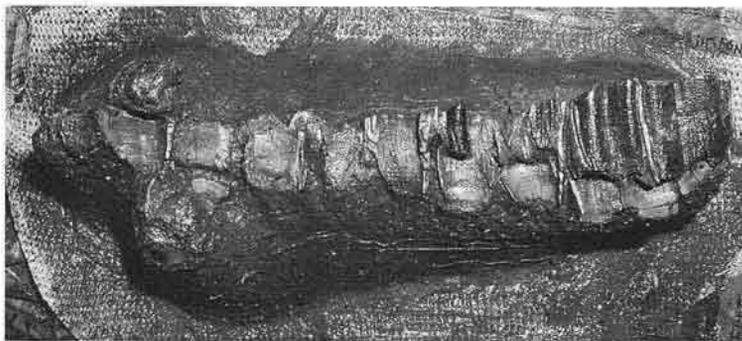
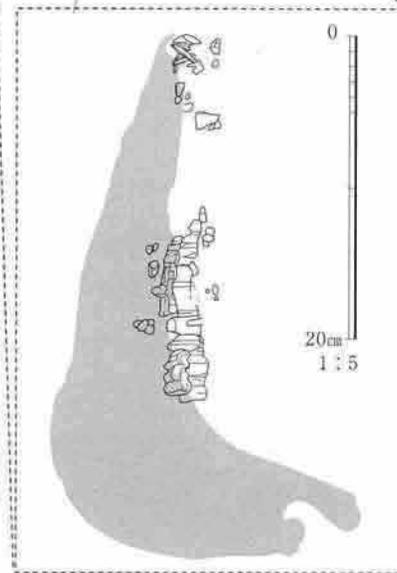


写真1 SK702から出土したウマの歯の取上げた直後の状況



である。

上記のような歯の配列から、ウマの頭部が北に吻部を向け、右側を下に埋没していたものと考えられる。骨も象牙質やセメント質と同様、溶け去ったのであろう。さらに、頭部の位置が土壌の東端に近いことから、後述するように、おそらくこの土壌には1頭のウマが埋葬されていたと考えてよいであろう。

ii) SD705から出土した動物骨

溝の埋土より、ウマの左上顎第2小白歯1点が出土している。歯冠の近心部と歯根は、失われている。歯冠の摩耗は進んでいる。また、歯根は破損のためほとんど残されていないが、形成されていることは明らかなので、老齢の個体の白歯と考えられる。近心-舌側での摩耗が著しく、摩耗面は強く傾斜している。歯冠長は29mm+、歯冠幅は23mmである。

iii) NR501から出土した動物骨

流路内堆積物より、ウマの左上顎犬歯1点、イヌの左下顎骨と左上腕骨各1点が出土している。ウマの左上顎犬歯は、表面がやや摩滅しているがほぼ完全な形をとどめている。歯髓腔はほぼ埋まり、根尖孔も極めて狭いことから、老齢個体の歯であると考えられ、歯冠頂部の舌側には摩耗面が形

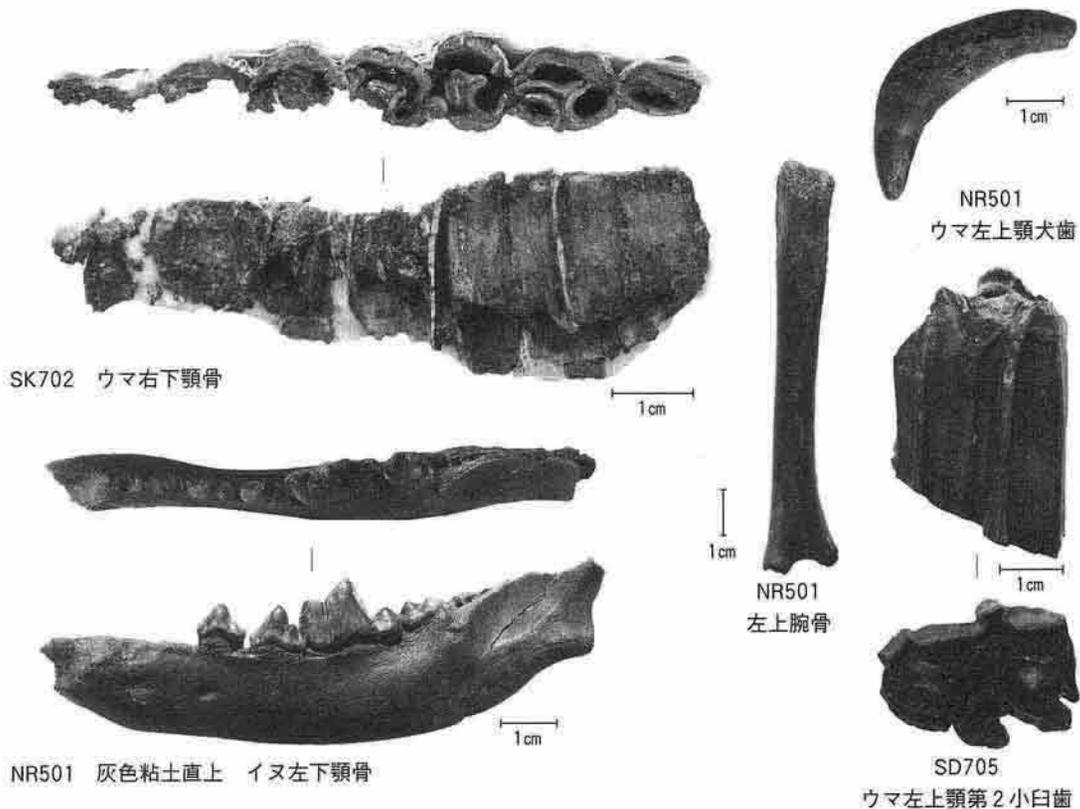


写真2 NG03-5次調査地出土の骨

成されている。歯冠長は10mm、歯冠幅9mm、歯冠高17mmである。

イヌの左下顎骨では、下顎体の大部分が保存され、第3、第4小白歯ならびに第1、第2大白歯が植立している。一方、下顎枝、下顎角、関節突起、そして切歯の歯槽部分は失われており、保存されている部分の端は丸く摩滅している。下顎体の保存されている部分の表面でも、かなりの風化あるいは摩滅が見られる。第3大白歯歯槽付近のみは、発掘時に破損したようであり破面が新鮮である。第1/第2大白歯接触点腹側の下顎体舌側面と、第3大白歯歯槽部腹側の下顎体腹側面2箇所には、解体痕が見られる。歯の計測値は表9、下顎骨の計測値は表10のとおりである。

3) 河内における古墳時代中期のウマの埋葬について

SK702では老齢のウマが、右側を下にして頭部を東に(吻部は北向き)向けた状態で見つかった。摂津・河内地域では古墳時代中期頃からウマの出土例が多くなる。出土状況も多様であり、墓壙を掘りその中に埋葬したもの(四條畷市部屋北遺跡、讃良岡山古墳群、長原遺跡NG83-32次調査地)、周溝状遺構(四條畷市奈良井遺跡)、流路(四條畷市鎌田遺跡)、溝(四條畷市南野米崎遺跡)、井戸(四條畷市中野遺跡)、落込み(大東市鍋田川遺跡)から出土するものなどがある。また、古墳の周溝から出土する事例として古墳時代中期後半の東大阪市段上遺跡1号墳、古墳時代後期の大阪市南口古墳、四條畷市清滝2号墳が挙げられる。これらの資料の中で確実にウマの埋葬とみられるものと比較して、SK702とのがウマの埋葬であるか、またそうであるならばどのような特徴をもつのか検討してみたい。

長原遺跡NG83-32次調査地ではウマの骨が出土した土壙が3基見つかっている(SK10~12)。そ

表9 イヌの歯の計測値(単位はmm)

歯種	第3小白歯	第4小白歯	第1大白歯	第2大白歯
歯冠長	8.8	10.1	18.0	7.7
歯冠幅	3.7	4.7	7.1	5.8
歯冠高	6.2	7.5	11.1	4.6

表10 イヌの左下顎骨の計測値(単位はmm)

計測部位	計測値
第3小白歯/第4小白歯間における下顎体高	16.1
第4小白歯中央における下顎体高	17.5
第4小白歯/第1大白歯間における下顎体高	17.3
第1大白歯中央における下顎体高	17.7
第1大白歯/第2大白歯間における下顎体高	20.8
縫合面後下点における下顎体高	16.6
縫合面中央における下顎体厚	9.8
第3小白歯腹側における下顎体厚	7.3
第1大白歯腹側における下顎体最大厚	9.3
縫合面背腹径	11.2

1.0mである。

古墳時代中期のウマの埋葬は河内地域以外で中部高地でも見られる。長野県伊那市の新井原遺跡4号土壌墓は帆立貝形古墳である新井原12号墳に隣接して設けられており、1.8×1.1mの隅丸方形の土壌に轡・杏葉などの馬具を装着した状態で埋葬され、南西頭位で左を下に、吻部を南東に向けていた[小平和夫1991]。また、同市茶柄山古墳では円墳の周囲に土壌を設けウマが埋葬されていた。とりわけ9号墳の東側周溝からは6基の埋葬が連なって検出されている。薮屋北遺跡、新井原遺跡4号土壌墓の事例から、ウマの埋葬はその大きさにほぼ対応する土壌が掘られて埋葬され、頭部が土壌の一方に偏り、薮屋北遺跡のように土壌の壁に「持たせ掛けた」状態で見つかるといった共通性が指摘される。

SK702のウマの下顎骨は土壌内の一方(東側)に偏った状態で出土しており、諸事例と共通する。しかし、下顎骨は土壌の壁から離れた位置から出土しており、墓壙も東西2.27×1.05mとこれまでに知られているウマの埋葬事例より一回り大きい規模である。

この問題についてはSK702の形状が手がかりとなる。第2章1節で述べたように、SK702は土壌の一部を掘下げた二段墓壙であり、コウヤマキの棺材とみられる木製品が出土していた(図28)。土壌の規模は大きいですが、下段墓壙の規模は1.66×0.7mであり、コウヤマキの材を棺小口として、それより東にウマの遺骸を置いたとみると、1.3×0.7mの規模となる。この部分を遺骸をおさめた空間とすると、下顎骨の見つかった場所は土壌の壁に近接する位置となり、土壌いっばいに遺骸を置くといったこれまでのウマの埋葬事例と合致する。

二段墓壙であり木棺、あるいは仕切りを伴うとみられる点がSK702の特徴であるが、土壌いっばいに遺骸をおさめるといったウマの埋葬の基本的特徴はここでも認められると考えられる。

のうちSK10は1.88×0.52mの長方形の土壌で、東半が一段掘下げられていた。土壌内からは須恵器および土師器の高杯の他、ウマの右中手骨とウマまたはウシの上腕骨が出土し、ウマの埋葬の可能性が指摘されている[積山洋2005]。

また、薮屋北遺跡2次調査では2基のウマの埋葬が見つかった。SK940ではウマの全身骨格、SK1345では上下顎骨が出土している。いずれも頭骨を土壌の壁に「持たせ掛けた」状態であった[宮崎泰史・山上弘2005]。土壌の規模は前者が2×1.5m、後者が1.8×

第2節 NG06-3・4次調査地出土の動物遺存体同定

丸山真史(京都大学大学院人間・環境学研究科)

松井章(奈良文化財研究所埋蔵文化財センター)

1) 概要

報告する動物遺存体は、長原遺跡(NG06-3・4次)の弥生時代後期の遺構の埋土、出土した土器の1つに充填されていた土壌、古墳時代中期の遺構の埋土から出土したものである。出土資料は、破片総数62点以上を数え、そのうち種類と部位を同定できたのは12点である(写真3、表11・12)。ニホンジカの枝角1点を除き、すべて強く火熱を受けて白色に変化しており、微細な破片となっている。そのため、それらを含めた総数を把握することは困難である。なお、これらの動物遺存体は、発掘中に肉眼で確認して取上げたものと、フルイを用いて埋土等の水洗選別を行って採取したものが含まれている。

2) 種類別の特徴

魚類は古墳時代中期のSB7003から、ナマズ属の椎骨3点、擬鎖骨(右2)2点の計5点、SB7004からナマズ属の胸鱗棘(左)1点、SK7016からナマズ属の椎骨1点が出土している。いずれも現生のナマズの骨格標本と比較すると、体長20cm以下の個体と推定される。ほかにコイ科と思われる鱗棘の棘条部が出土しているが、破片のため同定には至らない。古墳時代中期のSB7004からタイ科の円錐状の歯が顎骨から遊離した状態で出土している。これらのほかに属、種が判明しなかった椎骨がある。同じ特徴を持つ椎骨が内陸部の他の遺跡でも見つまっていることから、淡水魚の可能性が高い。後日、同定ができることを期して、写真に不明魚類として掲載する。

両生類は古墳時代中期のSB7003からカエル類の上腕骨(右)が1点、脛・腓骨(左右不明)が1点、計2点が出土している。大きさは、トノサマガエルとほぼ同大である。

鳥類は古墳時代中期のSB7003から、カモ科の橈骨(左)が1点出土している。大きさはトモエガモと同大で、カモ科のなかでは小型の種類である。また、カモ科と思われる橈骨(左)も1点出土しており、これもトモエガモと同大である。

哺乳類は古墳時代中期のSD713から、ニホンジカの枝角が1点出土している。火熱を受けた痕跡はなく、地下水に含まれる鉄イオンと鹿角に含まれるリンとが化合した深青色のピビアナイトが析出している。この枝角は、自然に頭蓋骨から脱落した落角である。また、角幹部が切断されている可能性があるが、表面の風化が進み、切断痕は明瞭ではない。

3) 考察

本遺跡では、これまでの発掘調査でも動物遺存体が出土しており、なかでも注目されるのは古墳時代から中世まで、継続的にウシとウマが出土することである。特にNG96-66次調査では、古墳時代

後期後葉から飛鳥時代前半の柱穴の中に、ウシの四肢骨を意識的に配置し、埋納した遺構が発掘され、建物の取り壊し、あるいは建て替えに伴った漢神信仰に関係する祭祀と考えられている[久保和士・松井章1999]。また、6世紀中葉に築造された長原南口古墳の周濠から出土したウマの遺存体は、古墳に四肢を立てたまま固定し、傍らに頭蓋骨を配置するという『日本書紀』の垂仁紀に見られる埴輪の起源の説話を彷彿とさせる出土状態であった[久保和士1995]。また、NG01-14次調査では奈良時代前半の流路から、ほぼ1個体分のウシや部分的なウマの骨が特定の地点に集中して出土しており、祭祀や駄馬などとの関連が指摘されている[宮路・松井2004]。このように本遺跡では、ウシとウマを中心として、ほかにイヌ、ニホンジカ、スッポンなどがこれまで同定されている。

ところが今回、同定した哺乳類はニホンジカ1点のみで、その他は魚類、両生類、鳥類であり、従来の動物種の構成と大きく異なる。魚類は淡水産のナマズ属が多く、海水産はタイ科のみである。種を同定できなかった個体に海水魚が含まれる可能性もあり、淡水魚の利用が優勢であったと即断することはできないが、今回の動物遺存体の特徴と指摘できるだろう。種が判明しなかった魚類はいずれも小型種が多く、これまで縄文貝塚や海浜部の遺跡から一般的に出土するマダイ、クロダイ、スズキといった大型の魚類はほとんど見られない。これらの小型魚類と、カエル類、カモ科は、強い火熱を受けて白色に変化しており、それ故に微生物からの分解を免れたものであろう。特に古墳時代中期のSB7003やSB7004からの出土状況は住居内の炉の焼土が溜まった部分であり、食料残滓の動物骨が炉の灰の中に投入されたのであろう。ただ、古墳時代中期のSD713から出土したニホンジカの枝角は、人為的に切断された可能性があることや、落角であったことを考えると、骨角器の素材として拾われて搬入された可能性が高いといえる。

焼けた骨は変形や破損が著しい場合が多いが、無機化することによって腐朽を免れ、遺跡に保存されやすいという性質がある。当遺跡で利用された動物の骨の一部が、このように火熱を受けることで保存され、その他は腐朽してしまった可能性があり、本資料は本来の動物利用の一端を垣間見るに留まる。しかし、従来の長原遺跡における発掘で出土した動物遺存体は、ウシとウマなどの哺乳類を主体としており、本資料とは様相が大きくことなる。今後もこのような微小な動物遺存体を採集、蓄積することで、長原遺跡における食生活の実態に迫ることができよう。

4) まとめ

今回の発掘で出土した動物遺存体の特徴は、魚類、両生類、鳥類のなかでも小型の個体が多く、大型動物はニホンジカの枝角のみである。また、ニホンジカの枝角を除いて、全て火を受けて無機化したため遺跡に保存されたと考えられるが、そのために碎片となり、種類、部位を同定することができなかったものが多い。同定できた種類には、ナマズ属、タイ科、カエル類、カモ科とニホンジカがあり、ニホンジカを除くと、すべて住居内の炉周辺に堆積した焼土層から出土しており、住民の日常食料残滓であったと考えられる。

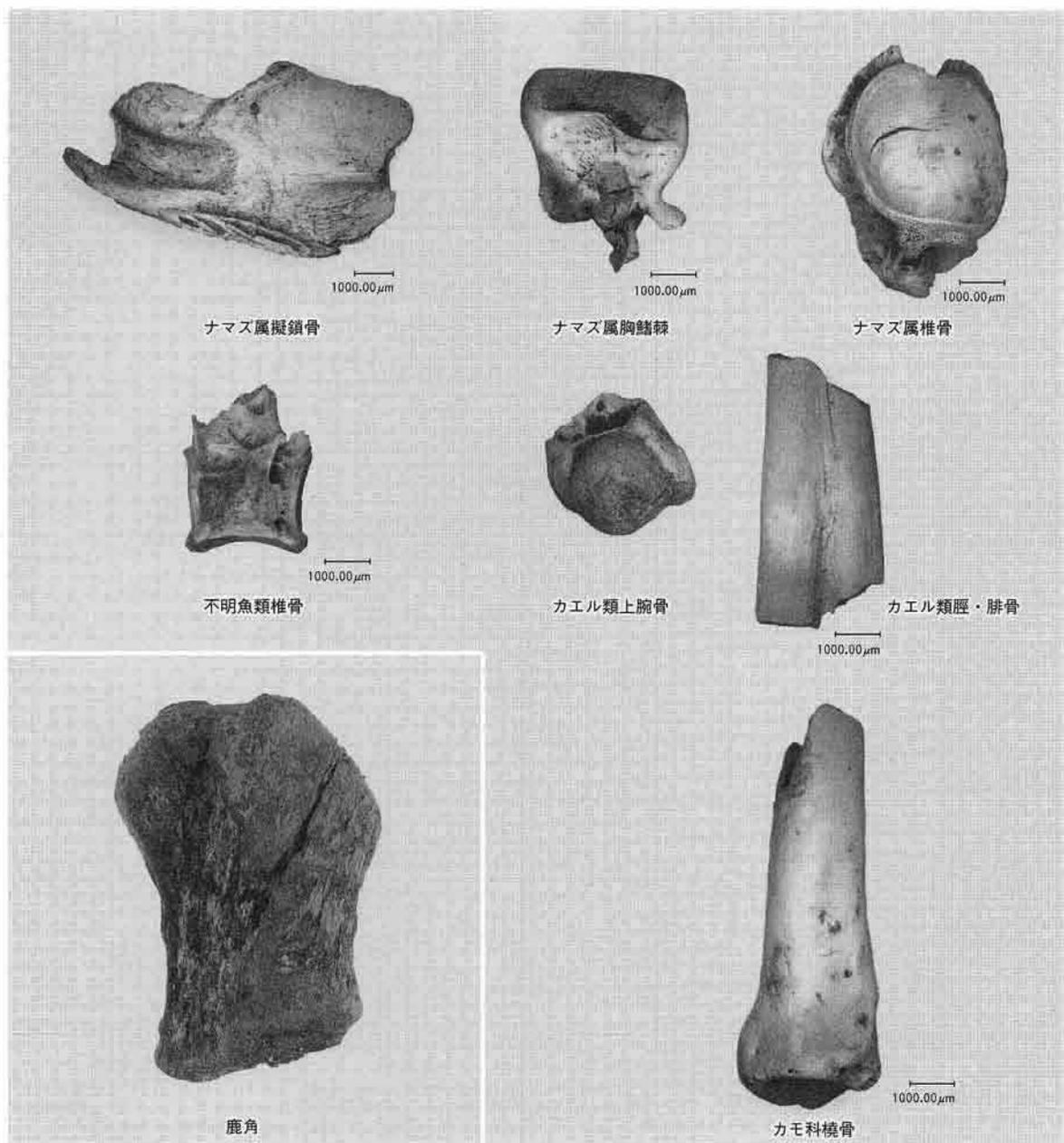


写真3 NG06-4次調査地出土の骨

表11 NG06-4次調査地出土骨種名表

硬骨魚綱 Chondrichthyes	鳥綱 Aves
ナマズ目 Siluriformes	カモ目 Anseriformes
ナマズ科 Siluridae	カモ科 Anatidae
ナマズ属の一種 <i>Silurus sp.</i>	カモ科の一種 Anatidae gen. et sp. indet.
スズキ目 Percidae	哺乳綱 Mammalia
タイ科 Sparidae	偶蹄目 Artiodactyla
タイ科の一種 Sparidae gen. et sp. indet.	シカ科 Cervidae
両生綱 Urodela	ニホンジカ <i>Cervus Nippon</i>
無尾目 Anura	
カエル類 Anura gen. et sp. indet.	

表12 NG06-3・4次調査地出土骨一覧

調査地	遺構名	時代	遺構の性格・状態	大分類	小分類	部位	部分	左右	備考	
1	NG06-3	SB702	古墳時代中期	炉	不明	不明	不明	-	小片複数	
2	NG06-3	SB702	古墳時代中期	炉	不明	不明	不明	-	小片複数	
3	NG06-3	SB702	古墳時代中期	炉	不明	不明	不明	-	小片複数	
4	NG06-3	SB702	古墳時代中期	炉	不明	不明	不明	-	小片	
5	NG06-3	SB703	古墳時代中期	北東、床加工面	不明	不明	不明	-	小片複数	
6	NG06-3	SB703	古墳時代中期	炉	不明	不明	不明	-	小片複数	
7	NG06-3	SB703	古墳時代中期	北東、周壁溝	不明	不明	不明	-	小片複数	
8	NG06-3	SB703	古墳時代中期	南西、周壁溝	不明	不明	不明	-	小片複数	
9	NG06-3	SB703	古墳時代中期	南西、周壁溝	腹足網	不明	穀輪	-		
10	NG06-3	SB703	古墳時代中期	炉	不明	不明	不明	-	小片複数	
11	NG06-3	SB703	古墳時代中期	南東	不明	不明	不明	-	小片複数	
12	NG06-3	SB703	古墳時代中期	南東	不明	不明	不明	-	小片複数	
13	NG06-3	SB703	古墳時代中期	炉	不明	不明	不明	-	小片複数	
14	NG06-3	SB703	古墳時代中期	炉	不明	不明	不明	-	小片複数	
15	NG06-3	SB703	古墳時代中期	炉	不明	不明	不明	-	小片複数	
16	NG06-3	SB703	古墳時代中期	炉	不明	不明	不明	-	小片複数	
17	NG06-3	SD713	古墳時代中期	埋土	哺乳綱	ニホンジカ	枝角	角座付近	左	ピビアナイト析出、 火熱なし、落角、 角幹切断？
18	NG06-4	SB801炉跡周辺	弥生時代後期	炉周辺	不明	不明	不明	-	小片複数	
19	NG06-4	SB802	弥生時代後期	土器群（西群） 広口壺244内の土	不明	不明	不明	-	小片複数	
20	NG06-4	SB802	弥生時代後期	土器（R682）	不明	不明	不明	-	小片複数	
21	NG06-4	SB802	弥生時代後期	住居床面	不明	不明	不明	-	小片	
22	NG06-4	SB7003南西焼土（西）	古墳時代中期	炉	鳥綱	カモ科	機骨	近位	左	トモエガモ大
23	NG06-4	SB7003南西焼土（西）	古墳時代中期	炉	鳥綱	カモ科？	機骨	近位	左	トモエガモ大
24	NG06-4	SB7003南西焼土（西）	古墳時代中期	炉	硬骨魚綱	ナマズ属	椎骨	腹椎	-	体長20cm以下？
25	NG06-4	SB7003南西焼土（西）	古墳時代中期	炉	硬骨魚綱	ナマズ属	椎骨	腹椎	-	体長20cm以下？
26	NG06-4	SB7003南西焼土（西）	古墳時代中期	炉	硬骨魚綱	ナマズ属	椎骨	尾椎	-	体長20cm以下？
27	NG06-4	SB7003南西焼土（西）	古墳時代中期	炉	硬骨魚綱	ナマズ属	擬頸骨	屈曲部	右	体長20cm以下？
28	NG06-4	SB7003南西焼土（西）	古墳時代中期	炉	硬骨魚綱	ナマズ属	擬頸骨	屈曲部	右	体長20cm以下？
29	NG06-4	SB7003南西焼土（西）	古墳時代中期	炉	両生綱	カエル類	脛・腓骨	骨幹部	-	
30	NG06-4	SB7003南西焼土（西）	古墳時代中期	炉	両生綱	カエル類	上腕骨	遠位端	右	
31	NG06-4	SB7003南西焼土（西）	古墳時代中期	炉	不明	不明	不明	-		
32	NG06-4	SB7003南西焼土（西）	古墳時代中期	炉	不明	不明	不明	-		
33	NG06-4	SB7003南西焼土（西）	古墳時代中期	炉	不明	不明	不明	-		
34	NG06-4	SB7003南西焼土（東）	古墳時代中期	炉	不明	不明	不明	-	小片複数	
35	NG06-4	SB7004焼土	古墳時代中期	炉	不明	不明	不明	-	小片複数	
36	NG06-4	SB7004焼土	古墳時代中期	炉	硬骨魚綱	不明	椎骨	椎体	-	
37	NG06-4	SB7004焼土	古墳時代中期	炉	硬骨魚綱	不明	椎骨	椎体	-	
38	NG06-4	SB7004焼土	古墳時代中期	炉	硬骨魚綱	不明	前上顎骨？	-	-	小型魚類
39	NG06-4	SB7004焼土	古墳時代中期	炉	硬骨魚綱	ナマズ目？	胸鰭棘？	-	-	
40	NG06-4	SB7004焼土	古墳時代中期	炉	硬骨魚綱	ナマズ属	胸鰭棘	関節部	左	体長20cm以下
41	NG06-4	SB7004焼土	古墳時代中期	炉	不明	不明	不明	-	-	小片複数
42	NG06-4	SB7004焼土	古墳時代中期	炉	硬骨魚綱？	不明	椎骨	椎体	-	
43	NG06-4	SB7004焼土	古墳時代中期	炉	硬骨魚綱	コイ科？	鰭棘	破片	-	胸鰭棘/臀鰭棘
44	NG06-4	SB7004焼土	古墳時代中期	炉	不明	不明	不明	-	-	小片複数
45	NG06-4	SB7004焼土	古墳時代中期	炉	硬骨魚綱	不明	椎骨	椎体	-	
46	NG06-4	SB7004	古墳時代中期	埋土	硬骨魚綱	タイ類	遊離歯	-	-	
47	NG06-4	SK7013	古墳時代中期	土壌埋土	不明	不明	不明	-	-	小片複数
48	NG06-4	SK7016	古墳時代中期	埋土	不明	不明	不明	-	-	小片複数
49	NG06-4	SK7016	古墳時代中期	埋土	硬骨魚綱	不明	鰭棘	棘条部	-	
50	NG06-4	SK7016	古墳時代中期	埋土	硬骨魚綱	ナマズ属	椎骨	-	-	体長20cm以下
51	NG06-4	SK7016	古墳時代中期	埋土	硬骨魚綱	不明	椎骨	-	-	小型魚類
52	NG06-4	SK7016	古墳時代中期	埋土	硬骨魚綱	不明	角骨	-	左	中屈から大型魚類
53	NG06-4	SK7016	古墳時代中期	埋土	硬骨魚綱	不明	擬頸骨？	-	-	
54	NG06-4	SK7016	古墳時代中期	埋土	硬骨魚綱	不明	不明	-	-	
55	NG06-4	SK7016	古墳時代中期	埋土	不明	不明	不明	-	-	小片複数
56	NG06-4	SK7016	古墳時代中期	埋土	硬骨魚綱	不明	尾部椎状骨	-	-	
57	NG06-4	SK7016	古墳時代中期	埋土	硬骨魚綱	コイ科？	鰭棘	-	-	胸鰭棘/臀鰭棘
58	NG06-4	SK7016	古墳時代中期	埋土	硬骨魚綱	不明	椎骨	椎体	-	
59	NG06-4	SK7016	古墳時代中期	埋土	硬骨魚綱？	不明	不明	-	-	
60	NG06-4	SX7014	弥生時代後期～ 古墳時代中期	落込み、 白玉など出土	不明	不明	不明	-	-	小片複数

第3節 NG03-5・06-3・4次調査地出土の種実同定

辻本裕也・松元美由紀(パリオ・サーヴェイ株式会社)

1)はじめに

本分析では、NG03-5・06-3・4次調査区で検出された弥生時代後期および古墳時代中期の竪穴建物内や周辺のゴミ棄て穴等より出土した種実の同定を実施し、当時の植物利用に関する情報を得る。

2)試料

試料は、NG03-5次調査区(3点)、NG06-3次調査区(23点)、NG06-4次調査区(41点)の各遺構より検出された種実計67点である。大半の試料は1点に1~152個の種実が入っているが、NG06-4次調査区の試料135・138・140・141は500~3000個入っており、一括試料とされる。また、NG06-4次調査区の試料125・126・142は非破壊試料とされ、多量の炭化種実が集合、固結した黒色の塊状炭化物が1~複数個確認される。各試料の詳細は、結果とともに表13に示す。

3)分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、種類と部位を同定し、個数を数える。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は、ハイフォンで結んで表示する。

非破壊試料は、塊状炭化物の表面観察による同定を実施し、重量を求める。一括試料は、概観より殆どがイネの胚乳と判断される。試料138は、状態の良好な個体が多いため、全てを同定対象とする。試料135・140・141は、状態の良好な100個程度を抽出・同定・重量測定後、残試料を粒径(1mm以上・0.5mm以上)別に観察し、イネ以外の種類の抽出・重量測定を行う。

4)結果

i)種実検出状況

結果を表13に示す。木本7分類群29個、草本20分類群1260個+59.34g、計1289個+59.34gの種実が同定されたほか、種類不明の種実(不明種実)、木材、炭化材、植物のトゲ、種類、部位不明の植物片(不明植物)や炭化物片(不明炭化物)、昆虫、礫、土の塊、不明物質などが確認された。一括試料は、ほぼ全個体がイネの胚乳であった。非破壊試料は、NG06-4次調査区の試料126・142は、イネの胚乳が確認された。一方、試料125にイネの胚乳は確認されなかった。イネより小型の粒状物質の癒着がみられる部分が確認されるものの、表面が焼け爛れ不明瞭のため種類の特定に至らず、不明炭化物とした。

本分析で得られた種実遺体群には、栽培植物10分類群1219個+59.34g(スモモ1個、モモ22個、イネ1133個(イネ?117個含む)+59.34g、アワーヒエ2個、コムギ4個、ムギ類1個、マメ類18個

(マメ類? 3個含む)、ヒョウタン類36個、メロン類1個、スイカ近似種1個)が確認され、全検出個数の大半を栽培植物が占める。

一方、栽培植物を除いた分類群は、木本5分類群(コナラ属、サクラ属、キイチゴ属、アカメガシワ、サンショウ属)6個、草本12分類群(イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ科、タデ属、アカザ科、ナデシコ科、キンボウゲ属、キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属、マメ科、エノキグサ、チドメグサ属、キク科)64個、計70個が確認された。

各調査区の検出状況は以下の通りである。

NG03-5次調査区

SK702からは、落葉低木のキイチゴ属1個、草本9分類群(イネ科、カヤツリグサ科、アカザ科、ナデシコ科、キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属、エノキグサ、チドメグサ属、キク科)43個が検出された。

NG06-3次調査区

SB702からは、栽培植物のモモ2個、イネ6個、アワーヒエ2個、コムギ1個、マメ類1個、スイカ近似種1個と、落葉小高木~高木のサクラ属1個、落葉小高木のアカメガシワ2個、草本のマメ科2個、キク科1個が検出された。スイカ近似種、アカメガシワ、キク科以外は確実に炭化している。

SB703からは、栽培植物のイネ3個(イネ? 1個含む)、ムギ類1個、マメ類4個(マメ類? 1個含む)と、草本のイネ科、カヤツリグサ科計4個が検出された。イネ、ムギ類、マメ類は炭化している。

SD713からは、栽培植物のモモ11個、イネ3個、コムギ3個、マメ類4個(マメ類? 2個含む)、ヒョウタン類36個、メロン類1個と、草本のホタルイ属1個、タデ属1個、マメ科4個が検出された。イネ、コムギ、マメ類、マメ科は炭化している。

SK712からは、栽培植物のイネの炭化胚乳3個が検出された。

NG06-4次調査区

各遺構より、栽培植物のスモモ1個(SB7003南西焼土(東側))、モモ9個(SB7004、SK7077)、イネ1121個(イネ? 116個含む)+59.34g(ほぼ全遺構)、マメ類9個(SB7001炭灰、SB802高杯267脚部下、SK7015、SB802東側土器群)と、常緑または落葉高木のコナラ属1個(SB7004)、落葉低木のサンショウ属1個(SB7004焼土)、草本のイネ科1個(SB802高杯267脚部下)、タデ属6個(SB7004焼土)、マメ科1個(SB7004焼土)が検出された。サンショウ属、タデ属以外は確実に炭化している。イネは、SB802高杯267脚部下と広口壺244の土器の中より多く検出され、多量癒着した塊状炭化物も認められる。

ii) 判明した種実について

木本

・コナラ属(*Quercus*) ブナ科

子葉の破片が検出された。炭化しており黒色で、長さ13mm、径8.5mm程度の卵状楕円体である。2枚からなる子葉の合わせ目に沿って縦半分に分れている。子葉は硬く緻密で、表面には縦方向に走る維管束の圧痕がみられる。合わせ目の表面は平滑で、正中線上は僅かに凹み、頂部には径1mm程度の

小さな孔(主根)がある。

・サクラ属(*Prunus*) バラ科

核(内果皮)の破片が検出された。炭化しており黒色である。完形ならばレンズ状広楕円体で、1本の明瞭な縦の縫合線が発達し、背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。破片は縫合線に沿って割れた半分以下で、長さ7.5mm、幅5.5mm程度であった。基部は丸く臍点がある。内果皮は厚く硬く、表面には浅い窪みが散在する。内側には長さ6.5mm、幅5mm程度の広楕円形で偏平な仁(種子)が入る楕円状の凹みが1個あり、表面は平滑である。

・スモモ(*Prunus salicina* Lindley) バラ科サクラ属

核(内果皮)の破片が検出された。炭化しており黒色である。完形ならばレンズ状広楕円体で、1本の明瞭な縦の縫合線が発達し、背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。破片は縫合線に沿って割れた半分以下で、長さ1.1cm、幅9mm程度であった。基部は丸く臍点がある。内果皮は厚く硬く、表面には浅い窪みが散在する。モモやウメなどに見られる深い彫紋はない。内側には長さ8mm、幅5mm程度の広楕円形で偏平な仁(種子)が入る楕円状の凹みが1個あり、表面は平滑である。

・モモ(*Prunus persica* Batsch) バラ科サクラ属

核(内果皮)が検出された。灰褐色、炭化個体は黒色である。長さ2-2.5cm、幅1.5-1.6cm、厚さ1-1.3cm程度のやや偏平な広楕円体で頂部はやや尖る。基部は切形で中央部に湾入した臍がある。1本の明瞭な縦の縫合線が発達し、背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。縫合線に沿って割れた半分以下の個体や、齧歯類などの動物による食痕と考えられる円形の孔をもつ個体(NG06-4試料115)が見られる。内果皮は厚く硬く、表面は縦に流れる不規則な線状の深い凹みがあり、全体として粗いしわ状に見える。内側には長さ1.5cm、幅1cm程度の広楕円形で偏平な仁(種子)が入る楕円状の窪みが1個あり、表面は平滑である。

・キイチゴ属(*Rubus*) バラ科

核(内果皮)が検出された。灰褐色、長さ2.1mm、幅1.2mm程度の半円形で腹面方向にやや湾曲する。表面には大きな窪みが分布し網目模様をなす。

・アカメガシワ(*Mallotus japonicus* (Thunb.) Mueller-Arg.) トウダイグサ科アカメガシワ属

種子の破片が検出された。黒色、完形ならば径3.5-4mm程度の歪な球体である。破片は基部にあるY字形の稜に沿って割れており、大きさは3mm程度。種皮は硬く、表面は瘤状突起が密布する。断面は柵状組織が内側に湾曲する。

・サンショウ属(*Zanthoxylum*) ミカン科

核(内果皮)の破片が検出された。黒色、完形ならば長さ3-4mm、幅2.5-3mm、厚さ1.5mm程度のやや偏平な倒卵体である。破片は大きさは3mm程度で、腹面正中線上基部に斜切形の臍がある。内果皮は厚く硬く、表面には浅く細かな網目模様がある。

草本

・イネ(*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

胚乳が検出された。炭化しており黒色である。長さ4～5mm、幅2～3mm、厚さ1.5mm程度のやや偏平な長楕円体で、基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2～3本の隆条が縦列する。穎(果)が付着した個体は認められない。火を受けたことによる焼け膨れ、胴切れ(短軸方向に割れている)や、個々の胚乳表面が癒着した状態が見られる。

NG06-4次調査区の試料126・142は、多量の胚乳が固結した塊状炭化物の状態であった。大きさは、最大で5×5×1.5cm程度である(試料142)。胚乳個々の配列は不規則である。密接する胚乳表面が癒着するなど不明瞭な部分も見られるが、胚脱落部や表面の縦溝が確認される明瞭な部分(特に試料142、写真6の11)を同定根拠とした。

・アワーヒエ(*Setaria itarica* (L.) P.Beauv. - *Echinochloa utilis* Ohwi et Yabuno) イネ科エノコログサ属-ヒエ属

胚乳が検出された。炭化しており黒色である。径1mm程度のやや偏平な広楕円体で、背面は丸みを帯び、基部正中線上に幅広い胚の窪みがある。腹面は平らで、表面はやや平滑である。同定根拠となる穎(果)の付着は認められない。

・イネ科(Gramineae)

果実と胚乳が確認された。果実は淡一灰褐色、長さ1.5～3mm、径1～2mm程度の半狭卵体で背面は丸みを帯び腹面は偏平である。果皮表面には微細な縦長の網目模様が配列する。胚乳は炭化しており黒色、長さ1.5mm、径0.7mm程度のやや偏平な長楕円体であった。背面は丸みがあり、基部正中線上に幅広い胚の窪みがある。腹面は平らで、表面はやや平滑である。

・ホタルイ属(*Scirpus*) カヤツリグサ科

果実が検出された。黒褐色、径1.9mm、厚さ1.3mm程度の片凸レンズ状広倒卵体で、頂部は尖り、基部は切形で刺針状の花被片が伸びる。背面正中線上は鈍稜である。果皮表面は光沢があり、不規則な波状の横皺状模様が発達する。

・カヤツリグサ科(Cyperaceae)

果実が検出された。ホタルイ属以外の形態上差異のある複数種を一括している。淡一黒褐色、径1.5～2.5mm程度の三稜またはレンズ状倒卵体で、頂部の柱頭部分は伸び、基部は切形である。果皮表面は平滑または微細な網目模様がある。

・タデ属(*Polygonum*) タデ科

果実が検出された。形態上差異のある複数種を一括する。黒色、長さ2.2mm、幅1.5mm程度の背面正中線上に鈍稜のある広卵体で頂部は尖り、基部は切形、果皮表面には網目模様がある個体や、径3.5mm程度の鈍三稜状広楕円体で頂部はやや尖り、基部は切形、果皮表面は粗面の個体が存在する。

・アカザ科(Chenopodiaceae)

種子が検出された。黒色、径1mm程度のやや偏平な円盤状である。基部は窪み、臍がある。種皮表面は臍を取り囲むように微細な網目模様が放射状に配列し、光沢がある。

・ナデシコ科(Caryophyllaceae)

種子が検出された。灰褐色、径0.8mm程度の腎状円形でやや偏平である。基部は窪み、臍がある。

種皮は薄く柔らかい。種皮表面は瘤状突起が臍から同心円状に配列する。

・キンボウゲ属(*Ranunculus*) キンボウゲ科

果実が検出された。淡黄褐色、非対称広倒卵形で扁平である。長さ2.5mm、幅1.9mm、厚さ0.5mm程度で、頂部や基部はやや尖る。果皮は薄く海綿状で表面は粗面である。

・キジムシロ属—ヘビイチゴ属—オランダイチゴ属(*Potentilla—Duchesnea—Fragaria*)バラ科

核(内果皮)が検出された。灰褐色、径0.9mm程度のやや扁平な腎状楕円体で、内果皮は厚く硬く、表面は粗面で数個の隆条が斜上する。

・マメ類(*Leguminosae*) マメ科

種子が検出された。炭化しており黒色である。長さ3~8.5mm、幅2~6mm、厚さ1.25~3.5mm程度の長楕円体—やや扁平な長楕円体と形状にばらつきがあり、複数の系統が含まれている可能性がある(計測可能な個体の大きさを表1に記す)。焼け膨れ、表面が崩れている等状態は悪く、腹面子葉の合わせ目上にある長楕円形で縁が隆起する臍は欠損または不明瞭であった。子葉の合わせ目に沿って半分に割れた破片も見られるが、内面の幼痕や初生葉は不明瞭である。種皮はやや平滑で薄く、焼け膨れて短軸方向の裂け目が見られる。なお、小型(長さ2.5mm、幅1.6mm、厚さ1mm程度)で腹面が窪む部分に臍が見られる個体は、野生種に由来する可能性があることから、マメ科と区別している。

・エノキグサ(*Acalypha australis* L.) トウダイグサ科エノキグサ属

種子が検出された。黒褐色、長さ1.7mm、径1.3mm程度の倒卵体で、基部はやや尖り、Y字状の筋がある。種皮は薄く硬く、表面には粒状の微細な窪みが密布しざらつく。

・チドメグサ属(*Hydrocotyle*) セリ科

果実が検出された。淡灰褐色、径1mm程度のやや扁平な半月形で、一端には太い柄があり、合生面は平坦である。果皮表面には1本の明瞭な円弧状の稜がある。

・ヒョウタン類(*Lagenaria siceraria* Standl.) ウリ科ヒョウタン属

種子が検出された。灰褐色、長さ1.3~1.5cm、幅6~7mm、厚さ1.5mm程度の倒広皮針形で、頂部は切形で角張り、基部は切形で臍と発芽口がある。種皮表面は粗面で、両面外縁部の幅広く低い稜に2本の縫線がある。

・メロン類(*Cucumis melo* L.) ウリ科キュウリ属

種子の破片が検出された。灰褐色、狭倒皮針形で、長さ6.8mm、幅3mm、厚さ1mm程度と中粒のマクワ・シロウリ型(長さ6.1~8.0mm)(藤下典之1984)に該当する。基部に倒「ハ」の字形の窪みがある。種皮表面には縦長の細胞が配列する。

・スイカ近似種(*Citrullus cf. lanatus* (Thunb.) Matsum. et Nakai.) ウリ科スイカ属

種子の破片が検出された。灰褐色、長さ8.5mm、幅4.5mm程度、厚さ1mm程度の長楕円形である。基部は切形で、倒「ハ」の字形の窪み(長さ2mm程度)がある。種皮は厚くやや堅く、表面は粗面である。

・キク科(*Compositae*)

果実が検出された。形態上差異のある複数種を一括する。灰褐色、長さ2.5mm、幅約1.6mmの扁平な倒狭皮針体で、タカサブロウの海綿状果皮を欠損したものに似る個体(写真6-30)や、淡灰褐色、長

さ1mm、径0.3mm程度の線状長楕円体、頂部は切形で円形の臍があり、冠毛が伸びる(冠毛を含めた長さは4mm程度)個体が見られる。頂部は切形で円形の臍があり、果皮表面には網目模様が縦列する。

5) 考察

NG03-5・06-3・4次調査地で見つかった種実は、栽培植物のスモモ1個、モモ22個、イネ1133個(イネ?117個含む)+59.34g、アワーヒエ2個、コムギ4個、ムギ類1個、マメ類18個(マメ類?3個含む)、ヒョウタン類36個、メロン類1個、スイカ近似種1個(註1)である。スモモ、モモ(一部)、イネ、アワーヒエ、コムギ、ムギ類、マメ類は炭化していることから、火を受けたとみられる。

これらの栽培植物は、ヒエを除き渡来種とされる。スモモ、モモは、観賞用のほか、果実が食用、薬用等に広く利用される。イネ、アワーヒエ、コムギ、ムギ類は、胚乳が食用される植物質食糧である。最も多く確認されたイネには、多量癒着し固結した塊状炭化物も確認された。胚乳表面に穎(果)が確認されない点(ただし穎は壊れやすいため、単粒で確認された胚乳には水洗等の検出過程で穎が脱落した可能性もある)と、縦隆条が確認されるなど明瞭に胚乳の形をとどめる部分が認められる点から、脱穀後調理前の生米(玄米)の状態です火を受けたことが推定される。

マメ類は、種子が食用や調味料の原料として利用される。ヒョウタン類は果実が食用や容器等に、メロン類やスイカ(近似種)は果実が食用に利用される。

これらの栽培植物の可食部である種実が、弥生時代後期および古墳時代中期の竪穴建物内や周辺のゴミ棄て穴等より出土したことから、当該期の本遺跡周辺域における利用と遺構内への廃棄等の人為的行為が推定される。長原遺跡では、NG02-8次調査の畠状遺構よりイネとヒョウタン類が[上中央子2005]、NG03-6次調査の畠より炭化したイネが、弥生時代中期の竪穴建物SB015よりコメ、コムギ、ウリ科が確認されている[大阪市文化財協会2005b]。

一方、栽培植物を除いた分類群は、木本は、常緑または落葉高木のコナラ属、落葉小高木~高木のサクラ属、落葉小高木のアカメガシワ、落葉低木のキイチゴ属、サンショウ属が確認された。伐採地や崩壊地、林縁などの明るく開けた場所に先駆的に侵入する樹種が多いことから、本遺跡周辺域の森林の林縁部などに生育していたものに由来すると考えられる。

なお、コナラ属は、一部の種(イチイガシ)を除きアク抜きすれば堅果が食用可能な有用植物である。NG06-4次調査区のSB7003より確認されたコナラ属は、供伴する栽培植物のモモ、イネと共に炭化していることから、周辺の山野から採取され、栽培植物とともに利用され、火を受けたことが推定される。NG03-6次調査の弥生時代中期の竪穴建物SB015でも、ドンダリが穀物と

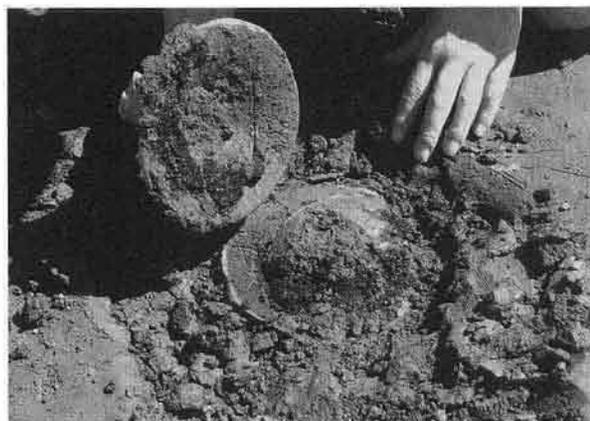
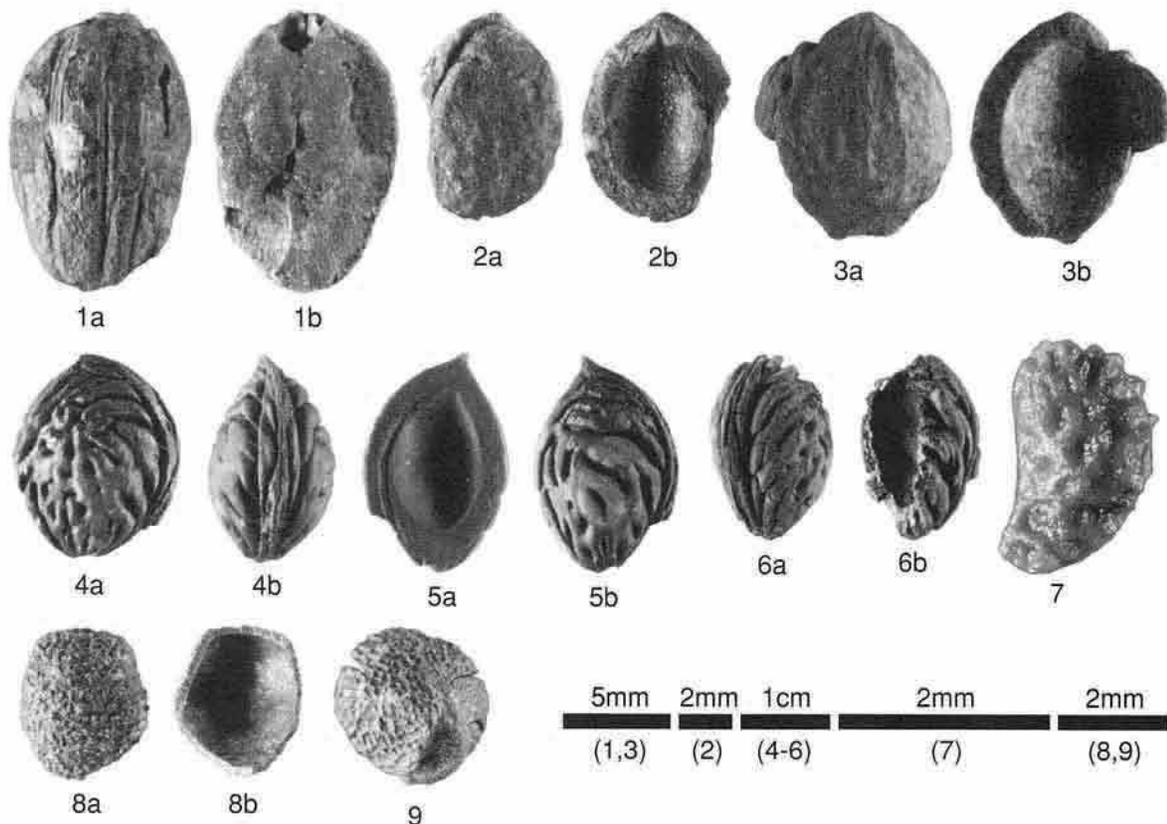


写真4 SB802炭化米出土状況
高杯(267)の下より出土



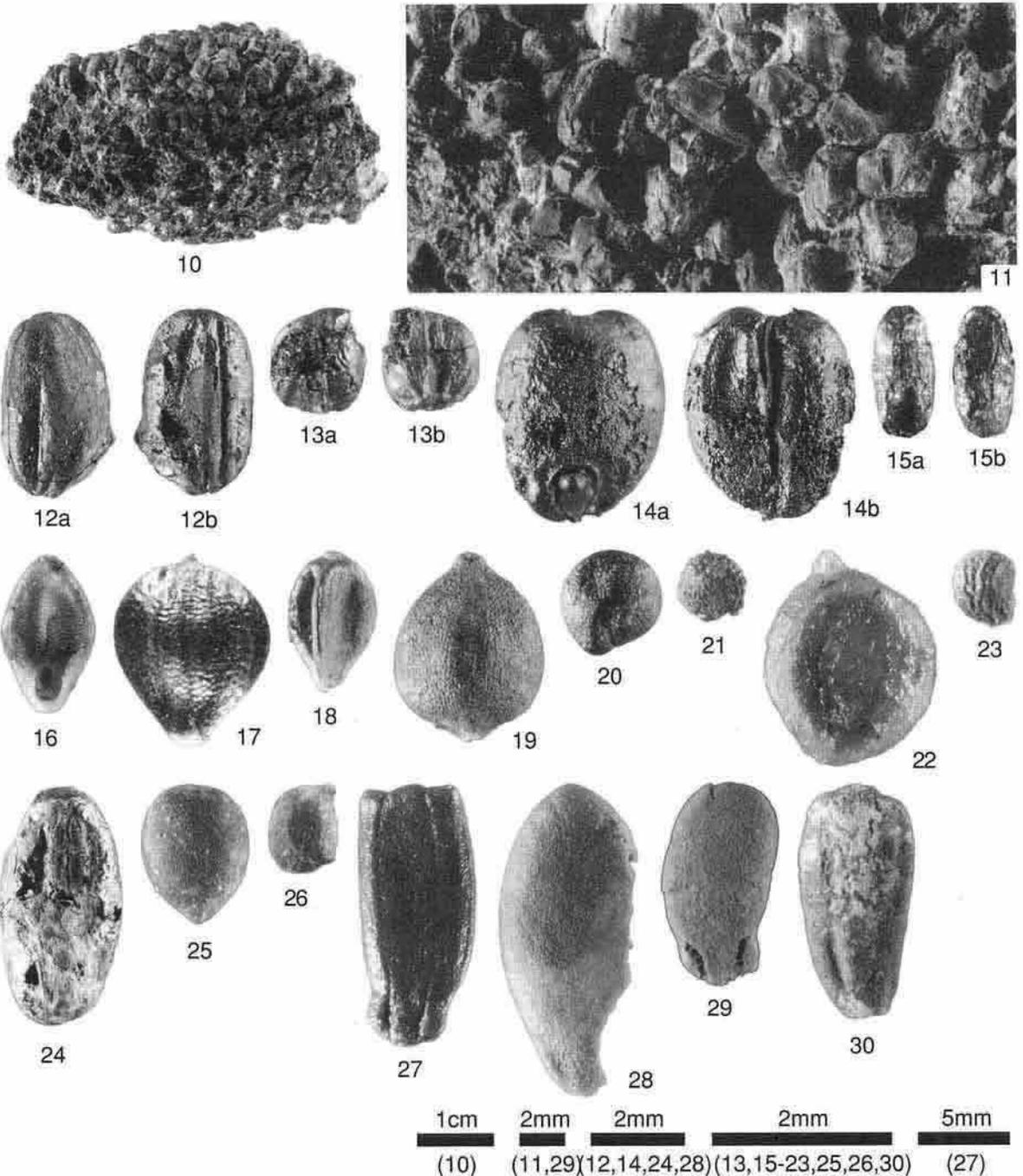
- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| 1. コナラ属 子葉(NG06-4;113) | 2. サクラ属 核(NG06-3;109) |
| 3. スモモ 核(NG06-4;111) | 4. モモ 核(NG06-3;1) |
| 5. モモ 核(NG06-3;1) | 6. モモ 核(食痕)(NG06-4;115) |
| 7. キイチゴ属 核(NG03-5;3) | 8. アカメガシワ 種子(NG06-3;38) |
| 9. サンショウ属 核(NG06-4;132) | |

※調査回数以下の番号は試料番号

写真5 種実遺体(1)

共に確認されており、穀物と木の実類の利用が指摘されている[大阪市文化財協会2005b]。

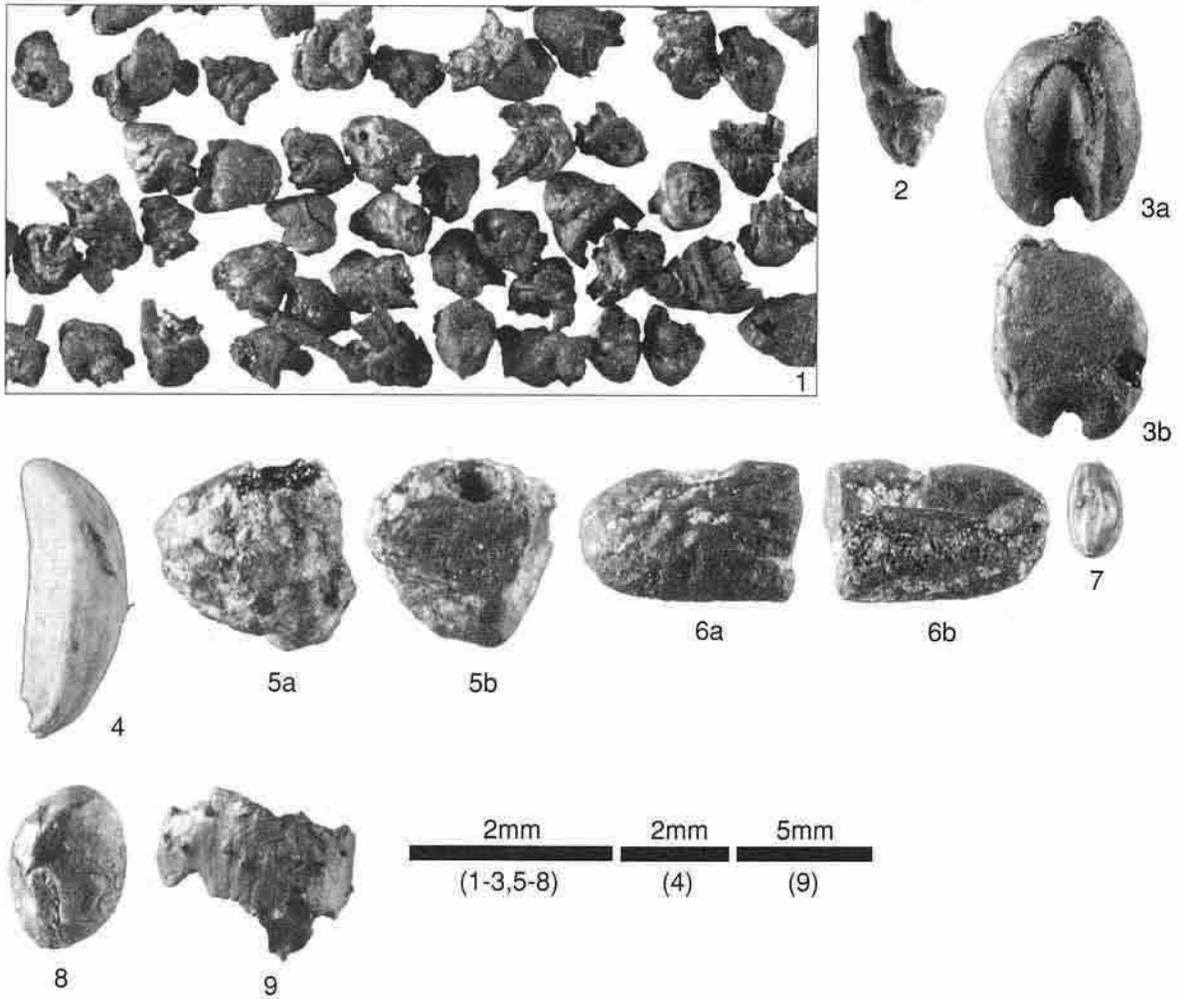
草本は、イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ科、タデ属、アカザ科、ナデシコ科、キンボウゲ属、キジムシロ属ーヘビイチゴ属ーオランダイチゴ属、マメ科、エノキグサ、チドメグサ属、キク科が確認された。NG02ー8次調査の畠状遺構の出土種実についても同様の分類群が確認されている[上中央子2005]。明るく開けた場所などに生育する、いわゆる人里植物に属する分類群が多いことから、調査区周辺域の草本群落に由来するものと考えられる。また、少量ではあるが、ホタルイ属などの水生植物を含む分類群や、湿った場所に生育するキンボウゲ属などが認められることから、水湿地の存在が推定される。



- | | |
|--|--------------------------|
| 10. イネ 胚乳(NG06-4;142) | 11. イネ 胚乳(NG06-4;142) |
| 12. イネ 胚乳(NG06-4;102) | 13. アワーヒエ 胚乳(NG06-3;36) |
| 14. コムギ 胚乳(NG06-3;49) | 15. イネ科 胚乳(NG06-4;129) |
| 16. イネ科 果実(NG03-5;5) | 17. ホタルイ属 果実(NG06-3;60) |
| 18. カヤツリグサ科 果実(NG03-5;5) | 19. タデ属 果実(NG06-4;132) |
| 20. アカザ科 種子(NG03-5;1) | 21. ナデシコ科 種子(NG03-5;1) |
| 22. キンボウゲ属 果実(NG03-5;3) | |
| 23. キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属 核(NG03-5;3) | |
| 24. マメ類 種子(NG06-4;109) | 25. エノキグサ 種子(NG03-5;3) |
| 26. チドメグサ属 果実(NG03-5;5) | 27. ヒョウタン類 種子(NG06-3;3) |
| 28. メロン類 種子(NG06-3;3) | 29. スイカ近似種 種子(NG06-3;41) |
| 30. キク科 果実(NG06-3;30) | |

※調査回数以下の番号は試料番号

写真6 種実遺体(2)



- | | |
|------------------------------|-----------------------------|
| 1. イネ 穎(NG06-4;SK726炭灰) | 2. イネ 穎(NG06-4;SK726炭灰) |
| 3. キビ近似種 胚乳(NG06-4;SK726炭灰) | 4. クロガネモチ 核(NG06-4;SK726炭灰) |
| 5. ツユクサ 種子(NG06-4;SK726炭灰) | 6. イボクサ 種子(NG06-4;SK726炭灰) |
| 7. ミズアオイ属 種子(NG06-4;SK726炭灰) | 8. マメ科 種子(NG06-4;SK726炭灰) |
| 9. オナモミ属 総苞(NG06-4;SK726炭灰) | |

写真7 種実遺体(3)

第4節 NG03-5・06-3・4次調査地出土の木製品の樹種

高橋敦・辻本裕也(バリノ・サーヴェイ株式会社)

1)はじめに

今回の分析調査では、NG03-5・06-3・4次調査地から出土した弥生時代後期、古墳時代中期、古代の木製品について樹種同定を行い、各時期の木材利用状況に関する情報を得る。

2)試料

試料は、木製品2点、木棺1点、建築部材6点、垂木とみられる材1点の合計10点(試料番号1～10)である。このうち、垂木とみられる材(試料番号10)は炭化材である。各試料の詳細は結果と併せて表14に示す。

3)分析方法

木製品9点は、木取りを観察した上で剃刀を用いて木口(横断面)・柀目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察する。

炭化材は、自然乾燥させた後、木口・柀目・板目の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察する。

それぞれの試料で観察された木材組織の特徴を現生標本と比較して種類を同定する。なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、[島地謙・伊東隆夫1982]、[Wheelerほか1998]、[Richterほか2006]を参考にする。また、各樹種の木材組織は、[林昭三1991]、[伊東隆夫1995・1996・1997b・1998・1999]や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

4)結果

表14 樹種同定結果

番号	調査次	遺構	試料番号	図番号	器種名	時期	状態	木取	樹種
1	NG03-5	NG7B 層 層中	R97	83	杓子状	古墳時代中・後期	生木	柀目	コナラ属アカガシ亜属
2	NG03-5	SD706	R128	66	杓子状	古墳時代中・後期	生木	柀目	コナラ属アカガシ亜属
3	NG03-5	SK702	R446	58	棺材	古墳時代中期	生木	分割材	コウヤマキ
4	NG03-5	NR501	R447	76	柱材	奈良時代	生木	芯持丸木	マツ属複雑管束亜属
5	NG06-3	SD713	R102	113	柱材	古墳時代中期	生木	分割材	ヒノキ科
6	NG06-3	SB704SP01	R466	114	柱材	古墳時代中期	生木	節部分	ヒノキ科
7	NG06-4	SP7021	R737	313	柱材	古墳時代中期	生木	ミカン割材	ヒノキ科
8	NG06-4	SP7044	R738	311	柱材	古墳時代中期	生木	分割材	ヒノキ
9	NG06-4	SP7026	R748	312	柱材	古墳時代中期	生木	分割材	ヒノキ
10	NG06-4	SB802 北側張出部	R801		垂木?	弥生時代後期	炭化材		コナラ属コナラ亜属コナラ節

樹種同定結果を表14に示す。木製品は、針葉樹4種類(マツ属複維管束亜属・コウヤマキ・ヒノキ・ヒノキ科)と広葉樹1種類(コナラ属アカガシ亜属)に同定された。一方、炭化材は広葉樹のコナラ属コナラ亜属コナラ節に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属(*Pinus* subgen. *Diploxylo*) マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成され、観察した範囲では垂直樹脂道や樹脂細胞は認められない。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1～10細胞高。

・コウヤマキ(*Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Sieb. et Zucc.) コウヤマキ科コウヤマキ属

軸方向組織は仮道管のみで構成され、樹脂道および樹脂細胞は認められない。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は窓状となる。放射組織は単列、1～5細胞高。

・ヒノキ(*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～10細胞高。

・ヒノキ科(*Cupressaceae*)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1～10細胞高。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節(*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属アカガシ亜属(*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸から厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

第5節 出土木製品の樹種の傾向

高橋敦・辻本裕也(パリオ・サーヴェイ株式会社)・
露原有紗(大阪大学文学部)・杉本厚典

1) 弥生時代後期の建築材の樹種

NG06-4次調査竪穴建物SB802北側張出部(図88)から出土した炭化材はコナラ節に同定された。SB802は火災で焼け落ちた住居跡である。試料は東西方向に延びて分布する炭化材の一部であり、竪

表15 大阪市内出土柱材の樹種

	コナラ属コナラ亜属クスギ節	コナラ属コナラ亜属クスギ節	コナラ属アカガシ亜属	コナラ属コナラ亜属コナラ節	ヒノキ科	ヒノキ属(ヒノキあるいはサワラ属)	シイ属の一種	ハイノキ属の一種	スギ	コウヤマキ	総計
弥生時代前期	1										1
弥生時代中期前葉		2									3
庄内期			1								1
古墳時代前期		1									1
古墳時代中期		2		1	3						6
飛鳥時代						7	1	1	2	6	17
合計	1	2	1	1	3	7	1	1	2	6	23

表16 コウヤマキ製の木製品

番号	種類	遺跡	遺構など	時期
1	楔	奈良県星塚1号墳	周濠SD18	6世紀前半
2	楔	奈良県平城宮下層	6AAW・X区SD6030	4世紀後半～5世紀前半
3	楔	奈良県平城宮下層	6AAW・X区SD6030	4世紀後半～5世紀前半
4	田下駄	京都府鶴冠井遺跡	7ANEIS地区SD8214	弥生Ⅲ～Ⅳ
5	糸巻きの支え	和歌山県田屋遺跡	自然河道	5世紀中葉～6世紀
6	経(布?)巻具	奈良県平城宮下層	6ACA・WD53区河川SD8520	4世紀
7	儀仗?	大阪府四ツ池遺跡	FH55・56溝E溝	弥生Ⅱ～Ⅲ
8	片口	大阪府鬼虎川遺跡	7次調査7pSE区貝塚	弥生Ⅰ新～Ⅲ
9	四脚盤	三重県北掘池遺跡	C-4-9区旧河道	弥生Ⅴ～4世紀
10	團脚盤	大阪瓜生堂遺跡	H地区包含層	弥生Ⅴ
11	剣形	兵庫県玉津田中遺跡	竹添3トレンチ3区旧河道黒色シルト	弥生Ⅲ
12	剣形	兵庫県玉津田中遺跡	竹添1トレンチ4・5区間黒色シルト層	弥生Ⅲ
13	剣形	兵庫県玉津田中遺跡	竹添1トレンチ7区溝3第4-1層	弥生Ⅲ
14	剣形	兵庫県玉津田中遺跡	竹添1トレンチ4区5層上面	弥生Ⅲ
15	鳥形	大阪府亀井北遺跡	(その3)調査区Iトレンチ自然流路NR3201	弥生Ⅴ
16	鳥形	兵庫県小夫丸遺跡	包含層	古墳～奈良時代
17	笠形	奈良県植口丘陵古墳	東外堤第Ⅵ層(周濠堆積土)	6世紀前半
18	笠形	京都府今里車塚古墳	周濠	5世紀前半
19	笠形	大阪府応神陵古墳	内濠	5世紀前半
20	盾形	奈良県つじの山古墳	南周溝内堆積土	5世紀後半
21	叩き板	大阪府東奈良遺跡	溝Ⅴ	弥生Ⅴ
22	部材	大阪府西岩田遺跡	Bトレンチ河川I	弥生末期～4世紀
23	部材	和歌山県田屋遺跡	自然河道	5世紀中葉～6世紀
24	部材	大阪府山賀遺跡	YMG3包含層	弥生Ⅱ

[※奈良国立文化財研究所1993年]をもとに作成

穴建物の上屋を構成した垂木の一部であった可能性が考えられた。

NG03-6次調査地で見つかったSB015も焼失住居であり、炭化した材57点の試料の同定が行われている。同定された炭化木材はコナラ属コナラ節14点、コナラ属クヌギ節13点、サカキ2点、アカガシ亜属とシイ属各1点で[福田さよ子2005]、コナラ属の卓越が認められた。今回分析した資料は1点のみであるが、弥生時代中期に引き続き、後期においてもコナラ節を用いていたことがうかがえる。

近年行われた集成作業[小矢部市教育委員会2005年]に掲載された資料の中で、中部・北陸・東海・近畿・中四国地方を対象に垂木材の樹種を調べたものが表18である。垂木材に用いられる樹種は58種類と多様である。弥生時代中期以前の出土例はヒノキやスダジイなど数種類が認められるのみだが、弥生時代後期になると種類が増加している。

垂木材として比較的頻繁に使用されるのはヒノキ、スダジイ、モミ属、クリ、スギ、カヤである。このうちスダジイとモミ属が特に多く用いられる。ヒノキ、クリ、スギ、カヤは柱材と垂木材の双方で用いられる樹種であるが、スダジイとモミ属は垂木のみで現在のところ認められ、ほとんど柱材として用いられていない。一般的に柱材は一定の長さや強度をもった耐久性の高い材が必要であるのに対して、垂木材では軽くて丈夫な材を大量に集めることが必要となる。柱材と垂木材に用いられる樹種が異なることは、弥生～古墳時代においてある程度、木材の特性を生かした建築材の樹種選定が行われた可能性を示唆する。

大阪平野およびその周辺地域における弥生時代後期の柱材の樹種同定事例は、平野中央部に位置する久宝寺南遺跡でクリ、西岩田遺跡でシイノキ属、高柳遺跡でスギ・ヒノキ科・ヤマグワ・カツラ、平野北部芥川東岸の扇状地にある芥川遺跡でブナ科・ヤマグワの利用が確認されている。今回の結果も含めると、弥生時代後期の柱材の樹種は各遺跡で異なっているようである。しかしながら、弥生時代後期の柱材の樹種同定結果は少なく、当該期の建築部材の利用状況については、今後の資料蓄積と合わせて、建物の規模・用途などの考古学的調査成果、各遺跡周辺の古植生などの情報を含む複合的な評価検討が必要である。

2) 古墳時代中期の柱材の樹種

古墳時代中期の柱材はヒノキ科ないしヒノキに同定された。ヒノキおよびヒノキ科の木材は、木理が通直で割裂性が高く、加工が容易で耐水性が高い材質を有する。木取りを見ると、114が節部分であるため不明であるが、113・311・312は分割材として利用されている。分割材をそのまま柱として用いていることから、割裂性が高いヒノキの特徴を生かして利用されていたと推定される。

柱材にヒノキを用いることは、前出の集成[小矢部市教育委員会2005年]では弥生時代から古墳時代前期の静岡県島田市矢崎遺跡、弥生時代終末期から古墳時代前期の岐阜県大垣市今宿遺跡の事例が古事例となるが、大阪市内では弥生時代中期から用いられていたことが知られている(表15)。また葺屋北遺跡では11棟の掘立柱建物から、52点の柱材が出土しており、48点がヒノキ、4点がコウヤマキであることが明らかにされている。コウヤマキは3点が転用材であるため、柱材としてヒノキが多

用されている傾向は長原遺跡と同様である。

このようなヒノキの多用傾向は大阪市内では古墳時代中期に顕著になる。大阪市内の遺跡から出土した柱材の樹種について各時代の変遷を示したのが表15である。弥生時代の森小路遺跡から出土した資料ではクスギ、ヒノキが用いられている。また、弥生時代中期後葉の焼失住居であるNG03-6次調査住居跡SB015から出土した炭化した柱材はコナラ属クスギ節であった。古墳時代前期にはヒノキとアカガシ亜属、古墳時代中期にはヒノキ、コナラ節があり、ヒノキの使用例が多い。また飛鳥時代以降、スギ、コウヤマキが見られるようになる。

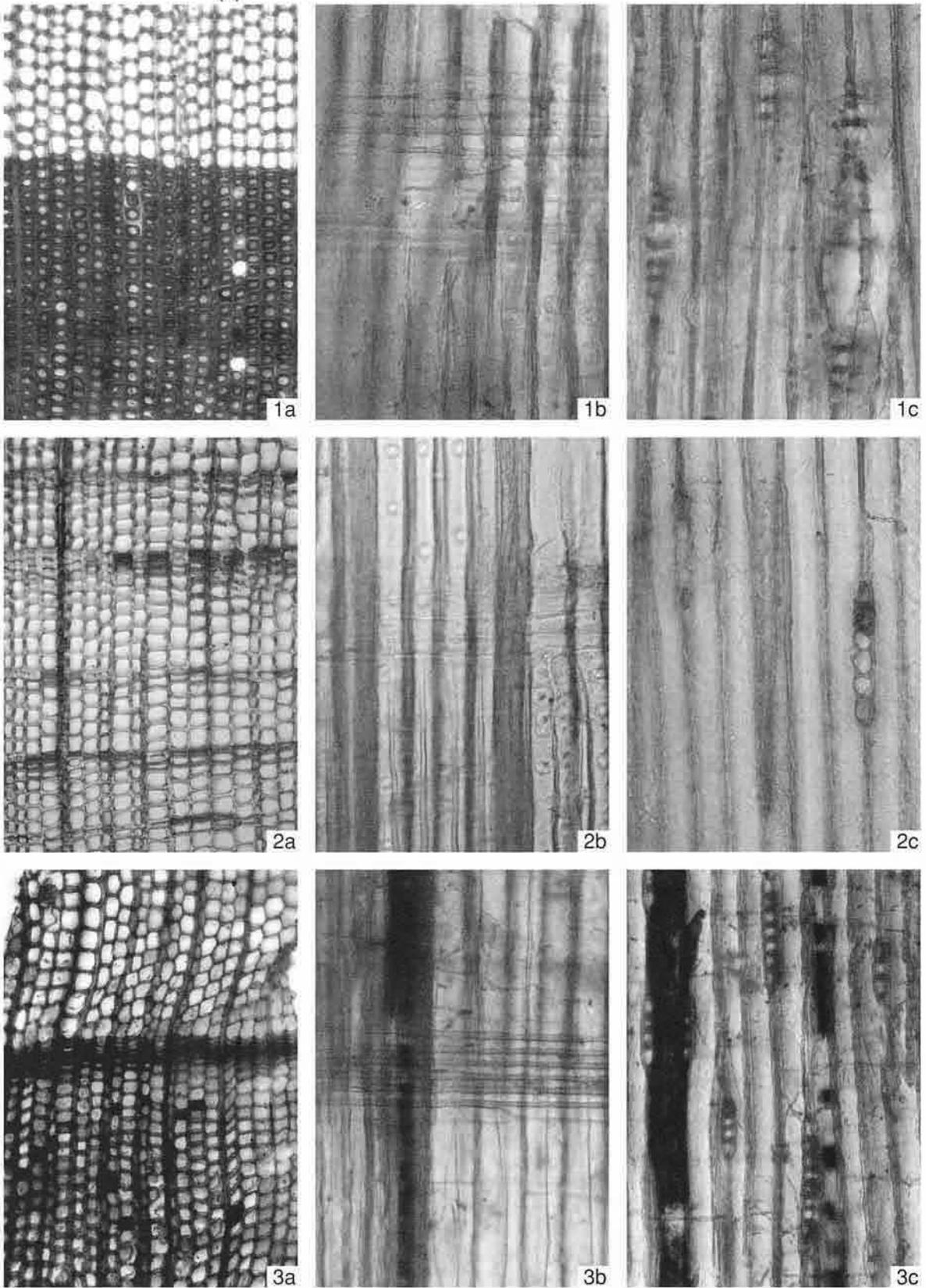
大阪市内の弥生時代後期～古墳初頭の柱材の資料は出土していないが、大阪平野およびその周辺地域における弥生時代後期の柱材の樹種同定事例は、平野中央部に位置する久宝寺南遺跡でクリ、西岩田遺跡でシイノキ属、高柳遺跡でスギ・ヒノキ科・ヤマグワ・カツラ、平野北部芥川東岸の扇状地にある芥川遺跡でブナ科・ヤマグワの利用が確認されており、場所によってばらつきがある。弥生時代後期以前も同様の傾向がうかがえるが、泉北台地に位置する池上曾根遺跡では大型建物にヒノキが多用されている[秋山浩三1999]。しかしこれは特異な事例であり、大阪平野において弥生時代後期以前は柱材に用いられる多様な樹種の中の一つであったヒノキが、古墳時代中期に多くなることはいえそうである。

前出の集成資料から中部・北陸・東海・近畿・中四国地方の柱材の樹種変遷について表17にまとめた。柱材として使用が確認されている樹種は50種類に上る。クリ、スギ、マキ属、イヌマキ、カヤ、ヒノキが10点以上認められる。これらの比較的多い樹種でその変遷を概観すると、柱材は縄文時代はほとんどがクリであり、弥生時代になってスギ、マキ属、イヌマキ、カヤ、ヒノキが見られるようになる。古墳時代中・後期においてヒノキの柱材は表17の中には認められず、このことは葦屋北・長原遺跡の特異性を示すものかもしれない。

また、全国的にみて柱材としての使用例が少ないコウヤマキが大阪市内では6例にのぼる。いずれも飛鳥時代の資料であり、難波宮域での出土が顕著である。コウヤマキは下で述べるように弥生時代から古墳時代にかけて木棺の棺材として用いられることが多かったが、飛鳥時代になると掘立柱建物で使用される頻度が高い。コウヤマキの耐久性はスギやヒノキより高く、材質の差異による選択的利用の可能性はあるが、大阪平野および周辺の花粉分析結果では古墳時代から古代にかけてスギやヒノキ科が減少傾向を示す地点が多く、森林資源としてのヒノキやスギの減少が関係している可能性がある。また、建物建設に際して多量に木材を用いる場合は他地域から搬入していたことも考えられる。古墳時代中期に多用され始めるヒノキの柱材と飛鳥時代に使用が増加するコウヤマキの柱材とにどのような使用・供給の違いがあるのか、今後検討されるべき課題であろう。

3) NG03-5次調査SK702出土材の性格について

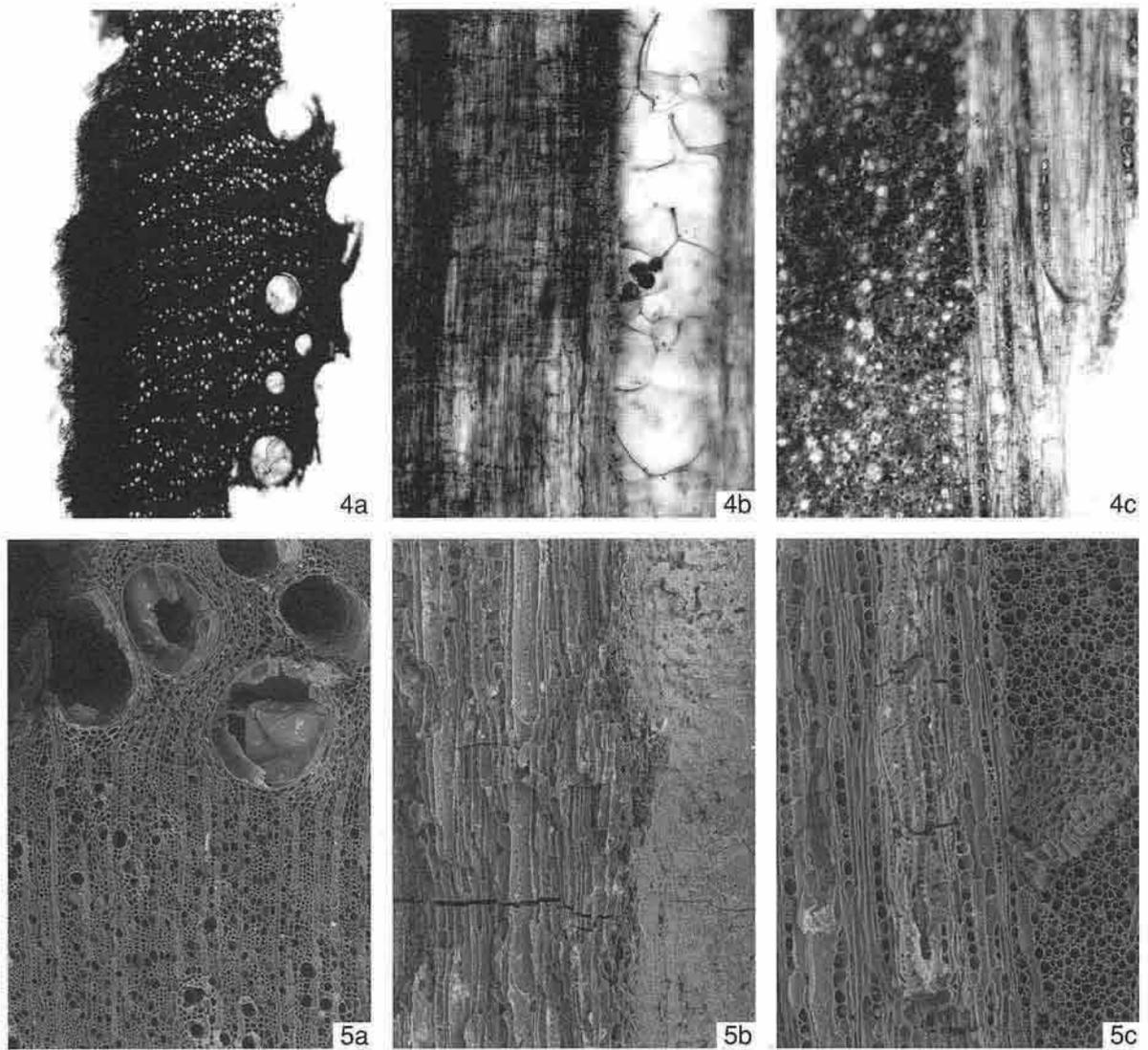
ウマの下顎骨が出土した古墳時代中期のSK702で見つかった58はコウヤマキに同定された。コウヤマキは木理が通直で割裂性が高く、加工が容易で耐水性の高い材質を有しており、近畿地方では弥生時代から古墳時代にかけて棺材として多く認められる樹種である。弥生時代中期の四條畷市雁屋遺跡、



- 1. マツ属複維管束亜属 (試料番号4)
- 2. コウヤマキ (試料番号3)
- 3. ヒノキ (試料番号8)
- a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 μ m:a
 100 μ m:b,c

写真8 木材・炭化材顕微鏡写真(1)



4. コナラ属アカガシ亜属 (試料番号2)
 5. コナラ属コナラ亜属コナラ節 (試料番号1)
 a: 木口, b: 柁目, c: 板目

300 μm:4a
 200 μm:4b,c
 200 μm:5a
 200 μm:5b,c

写真9 木材・炭化材顕微鏡写真(2)

東大阪市瓜生堂遺跡、八尾市山賀遺跡などではヒノキと並んで組合せ式木棺の材として報告されている。

四條畷市雁屋遺跡3次調査で出土した組合せ式木棺はヒノキのものとコウヤマキの二種類あり、ヒノキの組合せ式木棺は腐朽が著しいのに対して、コウヤマキのものはそのままの状態出土し、ヒノキよりも腐蝕に強いことが想定されている(註1)。また、5世紀末の高井田山古墳で木棺材と考えられる木片がコウヤマキに同定された例もあり[バリノ・サーヴェイ1996]、弥生時代から古墳時代中期末にかけて棺材として選択的に用いられたことがうかがえる。山賀遺跡や雁屋遺跡では出土した木棺の半数がコウヤマキであり、高率にのぼる。一方、棺材以外にコウヤマキはどのような製品の材料として用いられているかを表16に示した。楔、形代などに使用頻度が高いが、棺材ほど高率ではない。58は材質がコウヤマキであること、出土した位置がウマの骨が出土した墓壙の小口板に相当する部分であることから棺材である可能性が高い。

4) 古代の木製品

古代の杓子状木製品は2例とも重硬で強度が高い材質を有するアカガシ亜属の木材が利用されており、いずれも平坦面が柁目となる木取が行われている。当該期の杓子状木製品(杓子・篋杓子も含む)の樹種同定事例は、大阪府内では存在しないが、周辺地域では京都府、兵庫県、奈良県において出土がある。それらの地域の事例を見ると、針葉樹のヒノキが多用されており、広葉樹材の利用例が少ないことがうかがえる。今回の結果は、周辺地域とは異なる結果であり、同時期の杓子あるいは杓子形木製品の木材利用を考える上で注目される。この原因の一つとして材質の違いが関係している可能性があり、アカガシ亜属が強度、針葉樹材が割裂性等の加工性を考慮した木材利用がうかがえる。現時点では類例は見られず、今後の資料蓄積が必要である。

註)

(1) 四條畷市教育委員会の野島稔氏にご教示いただいた。

第Ⅳ章 まとめ

1)はじめに

本章では調査地周囲の既往の調査成果を踏まえつつ、出戸自然堤防北端部での土地利用の変化について概観し、まとめとしたい。

本書で報告した各調査地での変遷を要約すると次のようになる。NG03-5次調査地では弥生時代中期に墓域が形成される。また古墳時代中期にウマの埋葬が設けられることからうかがえるように集落の縁辺部となり、古墳時代後期に耕作地へと変遷する。NG06-3次調査地南区では弥生時代中期の墓域が形成され、古墳時代中期になると居住域に変遷する。一方、同調査地北区では古墳時代中期の高まりが設けられており、同時期の居住域は広がっていない。NG06-4次調査地は弥生時代後期に居住域が形成される。これは古墳時代前期に中断するが、古墳時代中期において再び居住域として土地利用される。

これらの3つの調査地において弥生時代中期から古墳時代中期にかけての遺構・遺物が検出されている。しかし、古墳時代後期から飛鳥時代にかけて耕作地となり、奈良時代には湿地へと変化している。今回調査した主要な遺構について、周辺での発掘調査成果と関連づけて捉えてみたい。

2)弥生時代中期

同時期の長原遺跡東北地区西半で見つかった遺構は図119に示した。NG06-4次調査地では弥生時代中期後葉の土器集積が調査地東部で検出されたが、遺構の密度は希薄であり、西に向って地形がやや下っていた。NG06-4次調査南調査地と、NG03-5次調査地南区ではそれぞれ方形周溝墓のものとみられる溝と方形周溝墓が検出された。これらの遺構から出土した土器は弥生時代中期中葉から後葉の前半期にかけてのものであり、ほぼ同時期の墳墓群とみられる。

方形周溝墓SX801は南北13.0m×と東西9.0m、SX802は南北12.0m以上×11.5mであった。SX801の面積は117.0m²であり、河内地域最大の加美遺跡のY1号墳丘墓(26.0m×15.0m)の約1/3の規模であり、隣接する城山遺跡で見つかった同時期の周溝墓の平均面積125.6m²にも達しておらず、墳丘規模は小さいと判断される。

この墳墓の埋葬施設として判明したものは1基のみであるが、組合式木棺であったとみられる。棺内に朱やベンガラなどの赤色顔料は検出されなかった。SX801の墳丘の西側溝からは多くの供献土器が出土した。供献土器として残存率が50%以上の土器23点を図示した。これらのうち19点が70%以上の残存率であり、全体として残りのよい個体が多かった。生駒西麓産の土器は23点中4点であり、17.4%を占める。残存率が悪いため図化しなかったが、土器棺の東で出土した生駒西麓産広口壺は供献土器の可能性が高く、これを含めると生駒西麓産の土器は20.8%となる。また、壺の中には火をかけて使用した痕跡があり、穿孔はその後に施されていた。穿孔部位は底部底面が多く、外側から孔を



図119 弥生時代中期の長原遺跡東北地区西半の遺構分布図

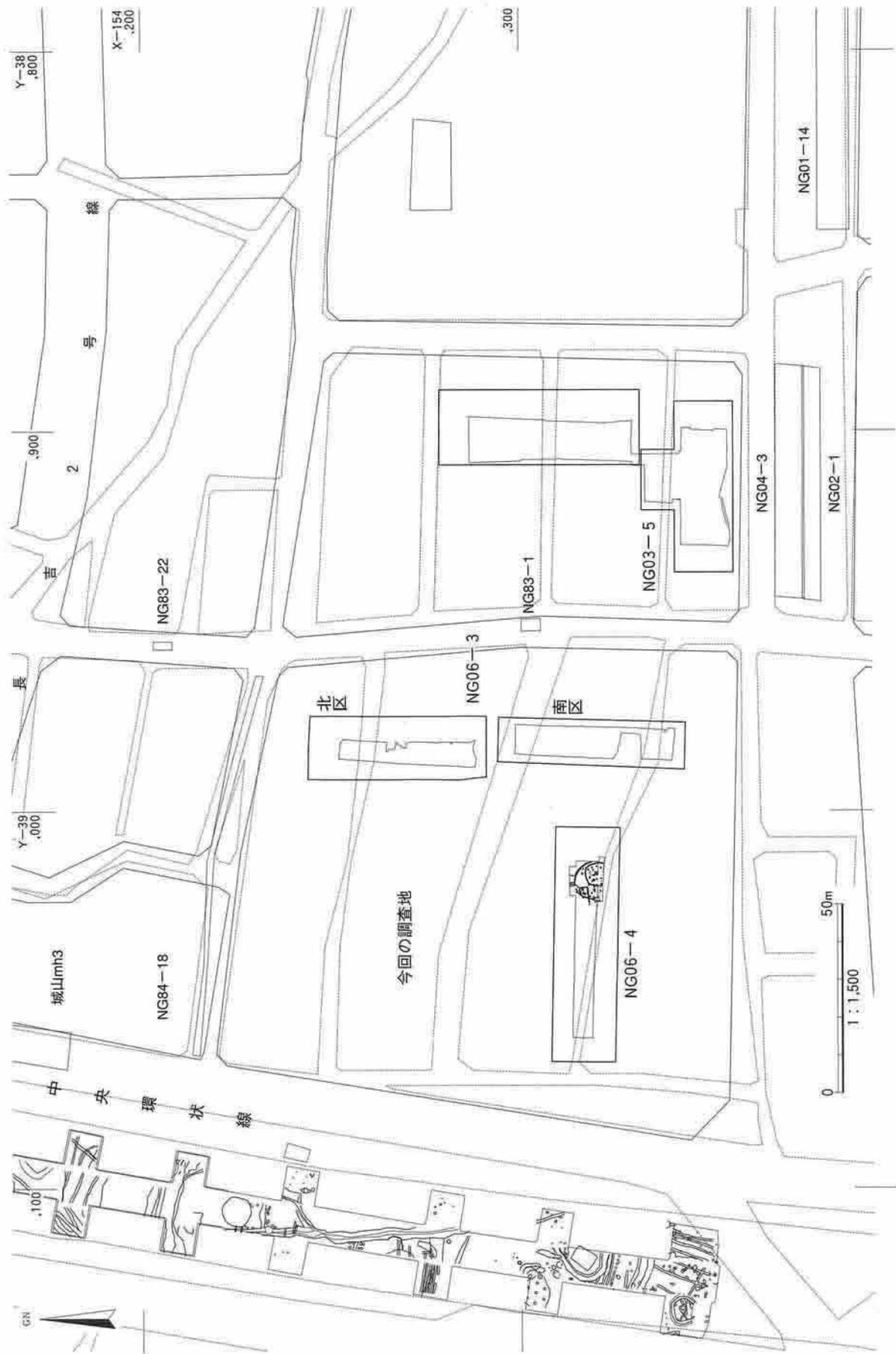


図120 弥生時代後期の長原遺跡東北地区西半の遺構分布図

開けている。

SX802は南東部を検出したのみであったが、南側と東側の周溝からは供献土器が多数出土している。残存率の低いもの(図22-29・30・32・33)も合わせて図化しているため、それらと時期のやや下の47・弥生時代後期の48を除外した15点を供献土器とする。これらの供献土器のうち5点が生駒西麓産であり、33.3%を占める。SX801のものと同様に、壺には火をかけて使用した痕跡があり、穿孔はその後には施されている。穿孔部位は底面のもとの胴部最大径の位置に施すものが認められた。

また、NG06-3次調査地で見つかった溝からは体部下半に穿孔をもつ土器が多数出土している。墳丘として想定される部分は調査範囲外にあり、古墳時代中期の遺構が墳丘に当たる部分の上部に形成されていたため、主体部は確認できなかったが、溝は方形周溝墓のものである可能性が高い。

このようにNG03-5次調査地とNG06-3次調査にかけて弥生時代中期の墓域が広がっていたとみられる。

さらにこれらの墓域の南側には同時期の居住域が認められる。NG02-1次調査地では、河内Ⅳ様式の住居が2基と井戸1基が検出されている。SB801は直径7.5mに復元される円形プランの住居である。この住居跡のものとみられる排水溝SD805が北東に伸びており、NG04-3次調査地でその続きが見つかっている。NG03-5次調査地からNG06-3次調査地にかけて分布する墓域は、NG02-1次調査地でその一部が見つかっている居住域に対応して設けられたものと考えられる。

3) 弥生時代後期

弥生時代後期前半古・中段階にかけての遺構は認められず、遺物もほとんど出土していない。後期前半新段階から後半古段階において竪穴住居が出現する。この時期、長原遺跡の長原東中学校、NG99-15次調査地、NG02-8次調査地、城山遺跡D地区において竪穴住居が出現し、以後、城山遺跡E地区、NG89-8次調査地、八尾南遺跡でも竪穴住居が見られるようになる(図120)。後出する城山遺跡E地区、NG89-8次調査地、八尾南遺跡では、周堤をもち、方形プランのものが多い。

NG06-4次調査地で検出したSB802は直径10.00m大型住居であり、同地区の中では城山D地区SB1002・NG95-36次調査地SB201に次ぐ規模である。大型住居は集落を構成する世帯群のうち、とりわけ中心的な建物に多いことが和泉市観音寺山遺跡、河南町東山遺跡の事例からうかがえる。今回発見されたSB802からは同時期の竪穴建物からの出土事例が少ない鉄鏃や不明鉄製品、ガラス玉1点が出土しており、規模・内容ともに周辺の竪穴建物群において核となる存在であったと推測される。

また、SB802は焼失住居であり、多くの土器や炭化物が残されていた。土器は住居跡内で3群に分かれて置かれた状態で出土し、北群と東群は竪穴の側壁に接して置かれ、西群も側壁沿付近から出土した。各群とも甕、高杯が多く、壺と器台、大型壺がほぼ1個体ずつあった。器台と壺は近接した位置から出土しており、体部が無花果形の長頸壺276が深い受部の器台277と対応し、扁平な体部の細頸壺258が受部の浅い器台262と対応して出土した。こういった出土状況から、器台が中型の壺とセットで用いられており、体部の形状に応じて使い分けされていたことがうかがえる。また広口壺からは炭化した穀物塊が出土した。自然科学分析の結果、生米が蓄えられていたことが判明しており、土器

の用途や貯蔵形態を検討するための重要な資料といえる。

4)古墳時代中期

古墳時代前期の遺構・遺物は少ないが、古墳時代前期末から中期にかけて、NG06-3・4次調査地では竪穴住居、総柱建物、ピット、溝が検出され、NG03-5次調査地では溝や馬の埋葬が見つかった。このような発見を周辺での発掘調査成果と併せて図示したものが図121である。

竪穴建物はNG06-4次調査地で4棟、NG06-3次調査地で3棟が見つかっており、NG06-3次調査地では竪穴住居に隣接して総柱建物が存在し、竪穴住居と総柱建物とがセットで設けられ、1つの居住単位を構成していたことがうかがえる。

また、NG06-4次調査地SB7001床面からは多くの粘土が出土した。埋葬施設の可能性を想定して調査を進めたが、棺の痕跡は認められず、とりわけ南東部粘土塊では、拳大の粘土を集めた状況が観察された。これらの粘土は、土器の原料としての他、粘土槨や竈材、柱の根巻きや貼床材として備蓄されていた可能性が想定される。

馬の埋葬は大阪市内ではNG83-32次調査地SK10でその可能性が指摘されているが[積山洋2005]、出土位置などの検討も踏まえてウマの埋葬と特定できたのはこの事例が初めてである。1.3×0.7mの規模の墓壇に頭部を東、^{みんぶ}刻部を北に向けて埋葬していたもので、尾側からはコウヤマキの加工材が出土しており、棺を伴っていた可能性が高い。ウマの埋葬は四條畷市部屋北遺跡でも発見されており、ともに韓式系土器が多く出土する遺跡であることから、ウマの飼養と渡来人とのかかわりが示唆される。

また、居住域が広がっていたNG06-3・4次調査地の南東に隣接するNG02-1・04-3次調査地では畠の畝間とみられる小溝群が分布しており、居住域の北西の城山遺跡D地区では水田が見ついている。NG06-3・4次調査地に居住していた集団は、このような水田や畠の経営主体であった可能性が高い。

5)古墳時代後期

NG03-5次調査地で古墳時代後期の小溝群が検出された。小溝群はKM01-4次調査地ではイネ、アワ、ヒエの種子が、NG02-8次調査地ではイネなどの植物種実が検出され、畠の畝間溝と考えられている。本調査地の小溝群については本報告に先立って行われた分析の結果、イネ科の花粉が多出していることから耕作地であり、他の調査地と同様に畠の畝間溝であった可能性が高い。古墳時代中期の小溝群はNG03-5次調査地の南に位置するNG02-1・04-3次調査地でも見つかっており、畠が古墳時代中期から後期にかけて連続して営まれていたものと考えられる。

引用・参考文献

- 秋山浩三1999、「池上曾根遺跡中樞部における大形建物・井戸の変遷(下)」：大和弥生文化の会編『みずほ』第31号、pp.36-63
- 石川茂雄1994、『原色日本植物種子写真図鑑』石川茂雄図鑑刊行委員会、p.328
- 伊東隆夫1995、「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」：京都大学木質科学研究所編『木材研究・資料』31、pp.81-181
- 1996、「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」：京都大学木質科学研究所編『木材研究・資料』32、pp.66-176
- 1997a、「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」：京都大学木質科学研究所編『木材研究・資料』33、pp.83-201
- 1997b、「美乃利遺跡から出土した木製品の樹種」：兵庫県教育委員会編『兵庫県文化財調査報告第165冊 兵庫県加古川市美乃利遺跡 本文編 一級河川別府川河川改良事業に伴う発掘調査報告書』、pp.339-344
- 1998、「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」：京都大学木質科学研究所編『木材研究・資料』34、pp.30-166
- 1999、「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」：京都大学木質科学研究所編『木材研究・資料』35、pp.47-216
- 伊藤隆夫・林昭三・島地謙1984、「鬼虎川遺跡から出土した建築用材の樹種」：(財)東大阪市文化財協会編『鬼虎川遺跡第7次発掘調査報告3-遺構編-』、pp.55-72
- 上中央子2005、「長原遺跡NG02-8次調査における畠状遺構の花粉分析および種実同定-古環境の変遷と古代農作物について-」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告XII-市営長吉長原東住宅6・7号館建設に伴う発掘調査報告書-』、pp.283-294
- 上中央子・大庭重信2006、「長原遺跡(NG03-5次)・瓜破遺跡(UR00-8次)における畠状遺構の花粉分析および種実同定」：大阪市文化財協会編『大阪歴史博物館研究紀要』第5号、pp.79-100
- 大阪市教育委員会・難波宮址顕彰会1978、「Ⅳ 長吉六反(推定・城山古墳跡)試掘調査」：『平野遺跡群試掘調査報告書』、pp.12-16
- 大阪市文化財協会 1978、『長原遺跡発掘調査報告』
- 1979a、『大阪市下水道管渠工事に伴う平野区所在遺跡発掘調査(NG12次)報告書』
 - 1979b、『大阪市下水道発進口建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG16次)報告書』
 - 1979c、『関西電力管路埋設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG17)略報』
 - 1980、『大阪市下水管渠築造工事(到達堅穴)に伴う長原遺跡発掘調査計画書』
 - 1981a、『大阪市下水管渠築造工事(押込口)に伴う長原遺跡発掘調査(NG80-1)略報』
 - 1981b、『八尾~富田林局間同軸ケーブル方式工事(土木)に伴う長原遺跡発掘調査(NG80-2)略報』
 - 1982、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ
 - 1984a、『下水工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-1)略報』
 - 1984b、『大阪市住宅供給公社長原六反用地ボーリング調査(NG83-5)略報』
 - 1984c、『大阪市平野区长吉出戸における下水道工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-22)略報』
 - 1984d、『大阪市出戸六反地区幹線下水管渠築造工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-43)略報』
 - 1984e、『仲東産業店舗建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-54)略報』
 - 1984f、『吉内邸新築工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-63)略報』
 - 1984g、『関西電力管路新設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-65)略報』
 - 1985a、『六反下水管渠推進工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-4)略報』
 - 1985b、『長吉出戸地区下水管渠築造工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-18)略報』
 - 1985c、『地中送電線工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-49)略報』
 - 1985d、『関西電力管路新設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-86)略報』

- 1986、『大阪市土木局カルバート建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG85-17)略報』
- 1989、『(株)ビーバーハウスによる建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG88-6)略報』
- 1996、『大阪市教育委員会によるクラフトパーク建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG95-77)略報』
- 1997、『平成8年度大阪市都市整備局による長吉六反第1住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG96-79)略報』
- 1998a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』I
- 1998b、『平成9年度大阪市都市整備局による長吉六反第1住宅建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG97-41)完了報告書』
- 1999、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』II
- 2000、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』III
- 2001、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』IV
- 2002a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』V
- 2002b、『長原遺跡発掘調査報告』VIII
- 2003a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』VI
- 2003b、『平成14年度大阪市住宅局による長吉六反住宅建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG02-9)完了報告書』
- 2003c、『加美遺跡発掘調査報告』I
- 2004a、『長原遺跡発掘調査報告』XI
- 2004b、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』VII
- 2005a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』VIII
- 2005b、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』XII
- 2006a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』IX
- 2006b、『平成17年度長吉東部地区土地区画整理事業に伴う長原遺跡発掘調査その2(NG05-3)完了報告書』
- 2006c、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』XV
- 2007a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』X
- 2007b、『平成18年度長吉東部地区土地区画整理事業施工に伴う長原遺跡発掘調査(NG06-1)完了報告書』
- 2007c、『平成18年度大阪市住宅局による長吉徳端住宅建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG06-2)完了報告書』

大阪の部落史委員会2005、『考古』：『大阪の部落史』第一巻史料編 解放出版社、pp.1-124

大阪文化財センター1980、『亀井・城山』

1986a、『城山(その1)』

1986b、『城山(その2)』

1986c、『城山(その3)』

大阪府文化財調査研究センター1996、『下田遺跡一都市計画道路常盤浜寺線建設に伴う発掘調査報告書一』、pp.184-285、第3章 第2節 遺物・木器

大阪府教育委員会2005、『葎屋北遺跡発掘調査概要・II』

大阪府教育委員会2006a、『葎屋北遺跡発掘調査概要・III』

大阪府教育委員会2006b、『葎屋北遺跡発掘調査概要・V』

大庭重信・杉山拓己・中久保辰夫2006、『スギ・コケからみた長原遺跡古墳時代中期の煮炊具の使用法—小型鍋(平

- 底鉢)を中心に」：大阪市文化財協会編『大阪歴史博物館研究紀要』第5号、pp.21-40
- 小矢都市教育委員会2005、「出土建築材資料集—縄文・弥生・古墳時代—」第1分冊・第2分冊・第3分冊
- 絹川一徳2007、「長原遺跡で見つかった弥生時代後期の大型堅穴住居」：大阪市文化財協会編『葦火』第129号、pp.4-5
- 久保和士1995、「第V第5節 南口古墳出土ウマについて」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ、pp.407-415
- 古代の土器研究会1992、『都城の土器集成』I
- 小平和夫1991、「第三編 補遺 第一章 農業社会の発展 古墳時代」：下伊那教育会編『下伊那史』第一巻、pp.723-894
- 小山正忠・竹原秀雄1967、『新版 標準土色帳』 日本色研事業株式会社
- 斉藤弘吉 1963、『イヌ科動物計測法』 自費出版、東京、pp.1-138
- 嶋倉巳三郎1981、「木櫃片について」：奈良県立橿原考古学研究所編『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第43冊 太安萬侶墓』、p.89
- 島地謙・伊東隆夫1982、『図説木材組織』 地球社、p.176
- 島地謙・伊東隆夫(編)1988、『日本の遺跡出土木製品総覧』 雄山閣出版、p.296
- 下伊那教育会1991、「第三編 補遺 第一章 農業社会の発展—古墳時代—」：下伊那教育会編『下伊那史』第一巻pp.723-894
- 杉本厚典2007、「長原遺跡の古墳時代中期の住居」：大阪市文化財協会編『葦火』第128号、pp.6-7
- 積山洋2005「考古Ⅱ 河内地域 24 長原遺跡」：大阪の部落史委員会編『大阪の部落史』第一巻史料編、pp.95-102
- 田中清美2005、「長原遺跡の後期須恵器」：『財団法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館2005年度共同研究成果報告』、pp.275-292
- 田辺昭三1981、『須恵器大成』 角川書店
- 辻美紀2004、「二つの方形周溝墓」：大阪市文化財協会編『葦火』第108号、pp.2-3
- 2005、「方形周溝墓を再利用？ウマを納めた穴」：大阪市文化財協会編『葦火』第114号、p.5
- 寺井誠2006、「近畿地方出土三韓・三国系土器の再検討」：大阪市文化財協会編『大阪歴史博物館研究紀要』第5号、pp.1-20
- 寺沢薫・森井貞雄1989、「河内地域」：『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』 木耳社、pp.41-146
- 趙哲済1995、「本書で用いる層位学的・堆積学的視点からの用語」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ、pp.41-44
- 2001、「長原遺跡の地層」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』ⅩⅥ、pp.7-28
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志2000、『日本植物種子図鑑』 東北大学出版会、p.642
- 奈良国立文化財研究所1984、『木器集成図録 近畿古代篇』Ⅰ(図版)・Ⅱ(解説)
- 奈良国立文化財研究所1993、『木器集成図録 近畿原始篇』Ⅰ(図版)・Ⅱ-1(解説)・Ⅱ-2(解説)
- 林昭三1991、『日本産木材 顕微鏡写真集』 京都大学木質科学研究所
- パリオ・サーヴェイ株式会社1996a、「高井田山古墳から出土した木材と赤色物質の材質」：柏原市教育委員会編『柏原市文化財概報1995-Ⅱ 高井田山古墳(本文編)』、pp.197-201
- 1996b、「鬼虎川遺跡第33次調査出土木製品の樹種同定」：東大阪市文化財協会編『鬼虎川遺跡第33次発掘調査報告』pp.173-182、pp.187-188
- 福田さよ子2005、「第IV章第1節 焼失住居(SB015)出土炭化材の樹種」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告ⅩⅡ』pp.247-252
- 藤下典之1984、「出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法」：古文化財編集委員会編『古文化財の自然科学

- 学的研究』 同胞舎、pp.638-654
- 星川清親1995、「日本のスイカ」：『週刊朝日百科 植物の世界7』 朝日新聞社、pp.21-22
- 宮崎泰史・山上弘2005、「考古二 河内地域 13 四條畷市・葦屋北遺跡」：大阪の部落史委員会編『大阪の部落史』第一巻史料編、pp.57-60
- 宮路淳子・松井章2004、「長原遺跡(NG01-14次)調査出土の動物遺存体について」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅶ、pp.55-69
- 村元健一2003、「長原遺跡東北地区の基本層序」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅵ、pp.9-18
- 森島康雄・尾上実・近江俊秀1995、「瓦器椀」：中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社、pp.315-337
- 八尾市文化財調査研究会、2000a、「Ⅴ 太子堂遺跡第7次調査(TS97-7)」：『(財)八尾市文化財調査研究会報告』66、pp.59-73
- 2000b、「Ⅵ 太子堂遺跡第8次調査(TS98-8)」：『(財)八尾市文化財調査研究会報告』66、pp.75-93
- 吉崎昌一1992、「古代雑穀の検出」：『考古学ジャーナル』355 ニューサイエンス社、pp.2-14
- 渡邊正巳2002a、「第1節 長原遺跡東北地区における花粉・珪藻・プラントオパール分析」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅴ、pp.87-96
- 2002b、「NG00-11次調査に係わる花粉分析」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅸ、pp.56-65
- 2003、「第2節 長原遺跡(NG00-6)出土木質遺物の樹種鑑定」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅵ 2000年度大阪市長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書』、pp.83-85
- Driesh, Angela von den ,1976, A guide to the measurement of animal bones from archaeological sites. Peabody Museum Bull., 1, i-ix, pp1-137
- Richter,H.G.,Grosser,D.,Heinz,I. and Gasson,P.E. (編)2004,IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification(伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘(日本語版監修)2006、『針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡の特徴リスト』 海青社、p.70)

あ と が き

本書は『長原遺跡発掘調査報告』のシリーズ17冊目にあたる。本書では弥生時代中期の墓域、弥生時代後期の竪穴建物、古墳時代中期の建物跡やウマの埋葬、古墳時代後期の畠、古代の流路などを報告した。数々の発見を一冊にまとめてみると、あらためて長原遺跡が長期間にわたって発展してきた事実に驚かされる。

昨今の埋蔵文化財の発掘調査を取り巻く情勢は厳しい。調査や報告書作成に与えられる時間は必ずしも十分とは言えない。しかしながら遺跡の破壊を伴う発掘調査では、より一層自らを律し、困難な課題に取り組まなければならない。過去の事実を網羅し、遺跡の本質を捉えるためには、不断の努力が必要なのである。

調査地で明らかにしえた数々の発見と共に新たに生じる疑問も多い。さらなる探究を続け、より多くの方々に、発掘調査から知られる歴史のおもしろさ、重要性について伝えていくことができればと思う。本書がその一助として、広く活用していただけるように願ってやまない。

(積山 洋)

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と地名・遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

- う 白玉 …………… 3
ウマの歯 …………… 3, 129~132
ウマの下顎骨 …………… 34, 129~132
- お オオタニシ …………… 40
- か 滑石製勾玉 …………… 3
加耶系の陶質土器 …………… 40
- き 黄鳥式 …………… 3
畿内第Ⅲ様式 …………… 32
畿内第Ⅳ様式 …………… 14
- こ コウヤマキ …………… 36, 150, 151, 156, 162
- し 敷葉工法 …………… 2
人面墨画土器 …………… 3
- す 水平断層 …………… 109
- た 打製大型石庖丁 …………… 21
敲石 …………… 92
土製品 …………… 92
- て TK10型式 …………… 127
TK73型式 …………… 46
TK216型式 …………… 37, 65
TK216~208型式 …………… 82, 127
TG232~ON232型式 …………… 40
鉄鏃 …………… 101
- と 土製勾玉 …………… 3
- な 長原式 …………… 79
- に ニホンジカの枝角 …………… 133
- ふ 船橋式 …………… 60, 84
布留式 …………… 37
- も 木簡 …………… 6
- ゆ 有茎式銅鏃 …………… 92
- わ 和同開珎 …………… 3

〈地名・遺跡名など〉

- あ 芥川遺跡 …………… 150
跡部遺跡 …………… 2
新井原遺跡 …………… 132
- い 池上曾根遺跡 …………… 151
今宿遺跡 …………… 150
- う 瓜破遺跡 …………… 156
- お 老原遺跡 …………… 2
- か 鎌田遺跡 …………… 131
加美遺跡 …………… 157
亀井遺跡 …………… 2
雁屋遺跡 …………… 151
観音寺山遺跡 …………… 160
- き 木の本遺跡 …………… 2
久宝寺南遺跡 …………… 150
清滝2号墳 …………… 131
- さ 讃良岡山古墳群 …………… 131
- し 葎屋北遺跡 …………… 131
城山遺跡 …………… 2
- た 太子堂遺跡 …………… 2
高井田山古墳 …………… 156
高柳遺跡 …………… 150
段上遺跡 …………… 131
- ち 茶柄山古墳 …………… 132
- な 中野遺跡 …………… 131
鍋田川遺跡 …………… 131
奈良井遺跡 …………… 131
- に 西岩田遺跡 …………… 150
- ひ 東山遺跡 …………… 160
- み 南口古墳 …………… 129
南野米崎遺跡 …………… 131
- や 矢崎遺跡 …………… 150
山賀遺跡 …………… 156

**Archaeological Report
of the
Nagahara Site
in Osaka, Japan**

Volume XVII

A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Municipal Apartment house complex
in fiscal 2003 and 2006

March 2008

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text

SB : Building

SD : Ditch

SK : Pit

SP : Pit or Posthole

SX : Other features

CONTENTS

Foreword

Explanatory notes

Chapter I Progress of research	1
S.1 Geographical setting of the site and progress of research	1
1) Geographical setting of the Nagahara site	1
2) Current researches	2
S.2 Progress and outline of excavation	7
Chapter II Research results	9
S.1 NG03-5	9
1) Standard stratigraphy	9
2) Features and remains of Middle Yayoi period	12
i)The square tombs with moat ii)Ditches and natural streams	
3) Features and remains of Middle Yayoi Period to Middle Kofun Period	32
i)Narural streams	
4) Features and remains of Middle Kofun period	34
i)Pits ii)Ditches and natural streams	
5) Later Kofun period to Asuka period	39
i)Cultivated fields ii)Diches and natural rivers	
6) Features and remains of Nara period	45
7) Features and remains of Heian period to Modern period	47
8) Finds from each stratum	47
S.2 NG06-3	49
1) Standard stratigraphy	49
2) Features and remains of Middle Yayoi period	54
i)Ditches	
3) Features and remains of Middle Kofun period	62
i)Pit dwellings ii)Houses and postholes	
iii)Pits and Ditches iv)Features of moat	
4) Features and remains of Later Kofun period to Asuka period	82
5) Finds from each stratum	84
S.3 NG06-4	85
1) Standard stratigraphy	85
2) Features of Middle Yayoi period	88
i)Pottery consentration	
3) Features and remains of Later Yayoi period	89
i)Pit dwellings ii)Pottery concentration iii)Ditches	
4) Features of Middle Kofun period	106
i)Pit dwellings ii)Ditches iii)Pits iv)Pits v)Depressions	
5) Finds from each stratum	122

Chapter III Examination of excavated features and remains	129
S.1 Identification of animal bone excavated at NG03-5 and the burial of horse	129
1) Foreword	129
2) Identification of discovered animal bones	129
i)Animal bones from SK702	
ii)Animal bones from SD705	
iii)Animal bones from NR501	
3)Examination about burials of horses in Kawachi	131
S.2 Identification of animal remains excavated at NG06-3 and NG06-4 area	133
1) Outline	133
2) Character of each animal bones	133
3) Consideration	133
4) Conclusion.....	134
S.3 Identification of seed from NG06-3 and NG06-4 area	137
1) Foreword	137
2) Samples	137
3) Method of analysis	137
4) Result	137
i)Situation of excavated seeds ii)Identified seeds	
5) Consideration	143
S.4 Identification of wooden objects excavated at NG06-3 and NG06-4 area	147
1) Foreword	147
2) Samples	147
3) Method of analysis	147
4) Result	147
S.5 Trend of the wood species using for house and tools	149
1) The species of the rafter of pitdwelling Late Yayoi period	149
2) The species of pillar of Middle Kofun period	150
3) The species of wood object excavated from SK702 at NG03-5 area	151
4) Ancient wooden tools	156
Chapter IV Conclusion	157
1) Foreword	157
2) Middle Yayoi period	157
3) Later Yoyoi period	160
4) Middle Kofun period	162
5) Later Kofun period to Asuka period	162
References	163

Postscript / index

English Contents and Summary

Extract

ENGLISH SUMMARY

Introduction

This volume reports the results of excavation undertaken at the Nagahara site, during fiscal 2003, 2005 prior to the development of a public housing project.

The Nagahara site is located in Hirano ward, in the southeastern part of Osaka city, in central Japan. It is a complex site, bearing archaeological remains from the Late palaeolithic through to the Pre-modern period.

The excavation area is located in the northeastern sector of the site, and geographically situated on a natural levee, which was formed during the Late Jomon period along the north-eastern edge of the Kawachi upland.

Outline of Research results

These investigations unearthed archaeological remains from the Jomon to Pre-Modern period. But most noteworthy are results Yayoi and Kofun period. The discovery of the pit dwelling of the Late Yayoi period, which was struck by fire, is the most remarkable result of this investigation. Major points of investigation are summarized below.

Middle Yayoi period

In this period, the square tombs with surrounding moats were discovered at the sites NG03-5, NG06-3. The remains of wooden coffin were found at SX801 in NG03-5 and there were many ceramics recovered from the surrounding moat that appeared to be used for funerary rites.

Late Yayoi period

Pit dwellings of the Late Yayoi period were found at the site NG06-4. The dwelling SB802 was destroyed by a fire, and many ceramics were found *in situ* from the time of used. Carbonized brown rice was found preserved in a pot. This evidence is very important in the reconstruction life ways of the Late Yayoi period.

Kofun period

This area had been a settlement during the Kofun period. Several pit dwellings were discovered and many post holes enable us to assume raised buildings existed neighboring the pit dwellings.

Fish bones, Rice, foxtail millet and wheat were recovered by water-screening and floatation of sand from a fireplace in the pit. The results of these analyses are very valuable for reconstructing the diet of the Middle Kofun period at the Nagahara site.

There were many Korean style ceramics recovered as well. These are thought to be evidence of immigration from Korean peninsula in the AD 5th century.

The results of this excavation will be important for furthering our understanding of the development of the ancient Nagahara site.

Further Reading

Osaka City Cultural Properties Association

1978-2005 *Archaeological Reports of the Nagahara site* Vols. I-XIII, Osaka.

(In Japanese, with English Summary)

Osaka City Cultural Properties Association

1989-2003 *Archaeological Reports of the Nagahara and Uriwari sites* Vols. I-XX, Osaka.

(In Japanese, with English Summary)

Osaka City Cultural Properties Association

1998-2005 *Archaeological Reports of the Eastern sector of the Nagahara site*

Vols. I-VIII, Osaka. (In Japanese, with English Summary)

報告書抄録

ふりがな	ながはらいせきはつくつちょうさほうこく17							
書名	長原遺跡発掘調査報告 XVII							
副題	平成15・18年度大阪市営長吉出戸南住宅建設工事にかかる発掘調査報告書							
編著者名	杉本厚典・樽野博幸・丸山真史・松井章・辻本祐也・高橋敦・松本美由紀・露原有紗							
編集機関	財団法人 大阪市文化財協会							
所在地	〒540-0006 大阪府中央区法円坂1-1-35 TEL 06-6943-6833							
発行年月日	西暦 2008年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながはら 長原遺跡	おおいさか し ぴらの 区 大阪市平野区 ながよしで 区 長吉出戸8丁目	27126	—	34° 36′ 00″	135° 34′ 40″	NG03-5次 20030526~20031018 NG06-3次 20061225~20070331 NG06-4次 20061225~20070331	1,180m ² 1,361m ² 862m ²	市営長吉出戸南住宅 1号館の建設工事 市営長吉出戸南住宅 2号館の建設工事 市営長吉出戸南住宅 3号館の建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			
長原遺跡	その他	弥生時代前期			長原式土器			
	墓	弥生時代中期	方形周溝墓		弥生土器			
	集落	弥生時代後期	竪穴建物・焼失住居		弥生土器・銅鏃・鉄鏃・ガラス玉・炭化米			
	集落・墓	中期古墳時代	竪穴建物・総柱建物 ・柱穴・土壇・溝 ・ウマの埋葬		須恵器・土師器・陶質土器・韓式系土器・白玉・ 管玉・ガラス玉・柱材・ウマ下顎骨			
	耕作地	古墳時代後期 ～飛鳥時代	畠		炭化米			
	その他	奈良時代	流路					

原 色 図 版



NG03-5次調査地SX801出土土器



NG03-5次調査地SX802出土土器



NG06-4次調査地SB802北側土器群



NG06-4次調査地SB802東側土器群

版 圖

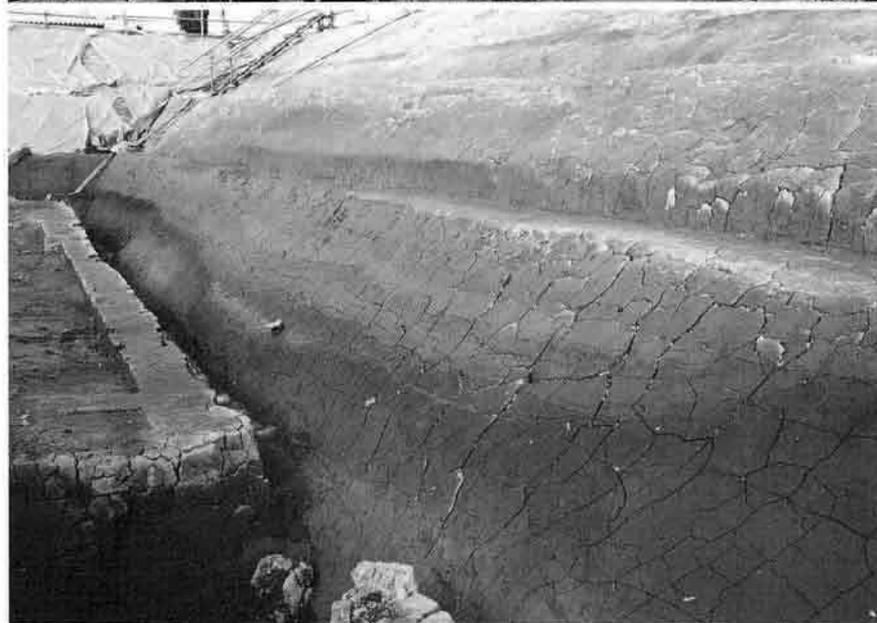
NG03-5次
I区東壁北半断面
(南西から)



NG03-5次
I区西壁南半断面
(東から)

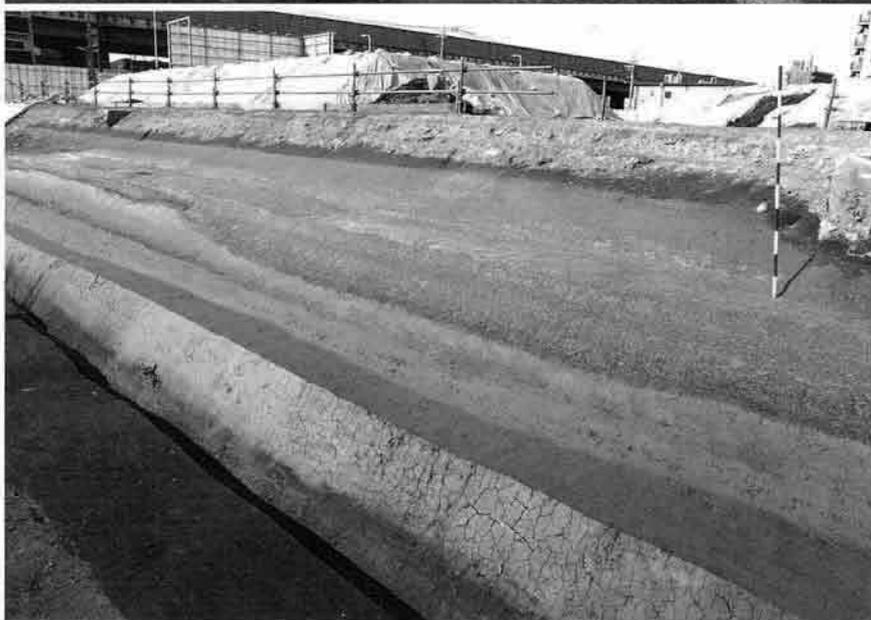


NG06-3次
北調査地東壁
地層断面
(南西から)

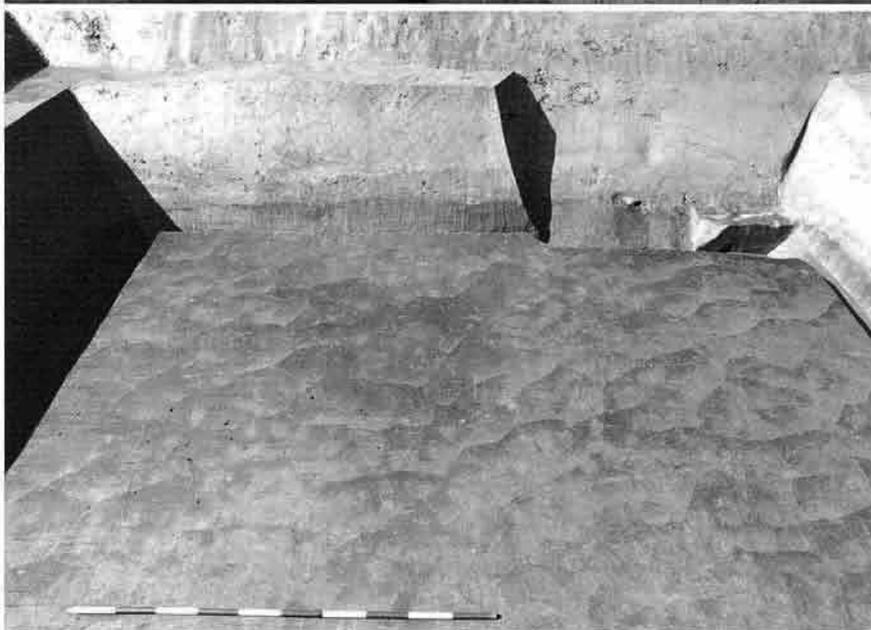




NG06-3次
南調査地
東壁地層断面
(西から)



NG06-4次
北壁断面
(南東から)

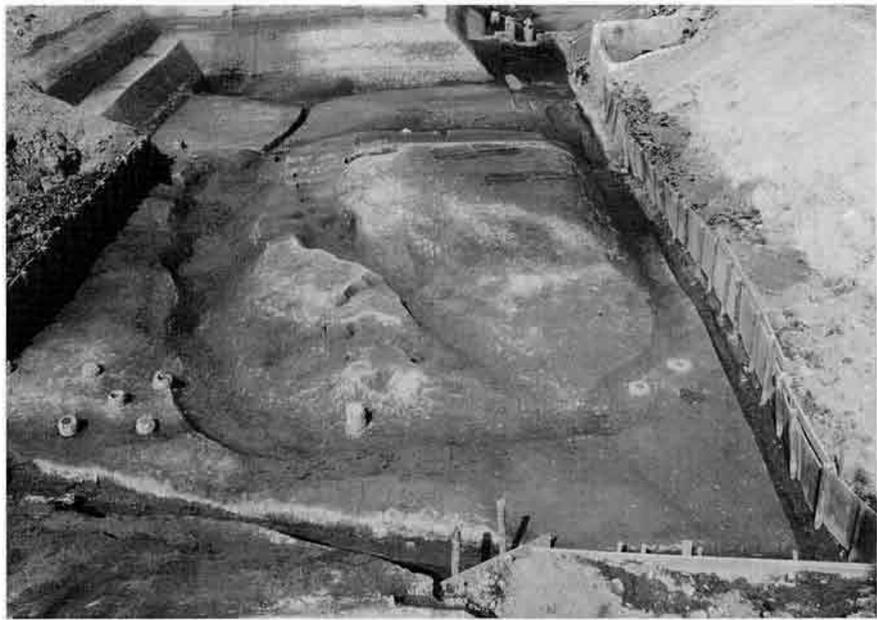


NG06-4次
14層上面地震痕跡
(東から)

I区SX801
(北北西から)



I区SX801
(南から)

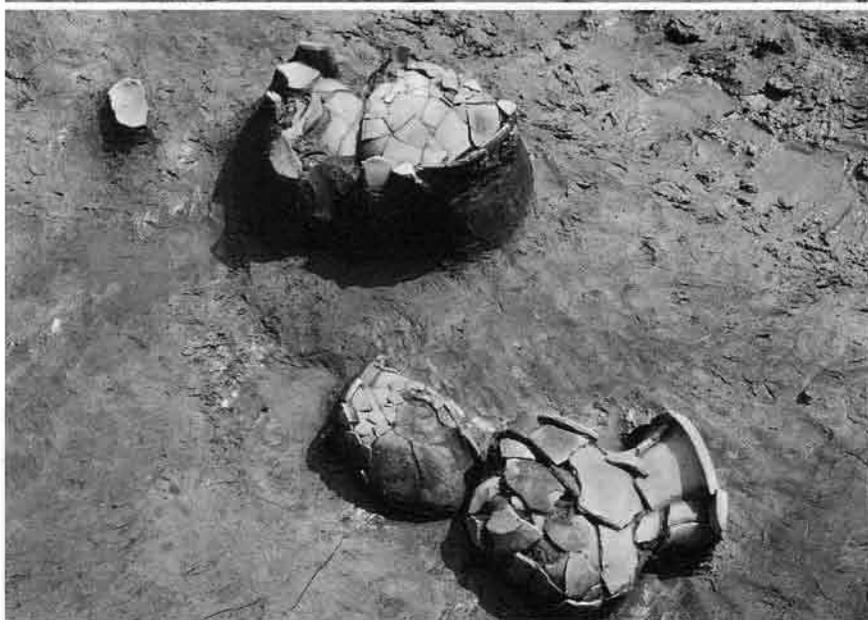


I区SX801
西側周溝南部
土器出土状況
(西から)





I区SX801
土器棺出土状況
(南東から)



I区SX801
西側周溝北部
土器出土状況
(北西から)



拡張区SX802
掘削状況
(南東から)

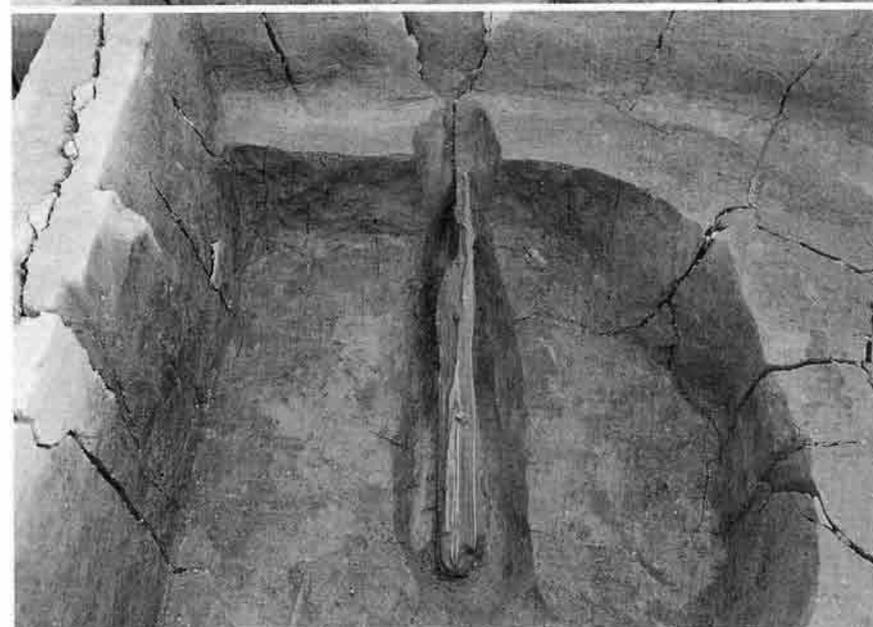
SK702
掘削状況
(東から)



SK702断面
(東から)

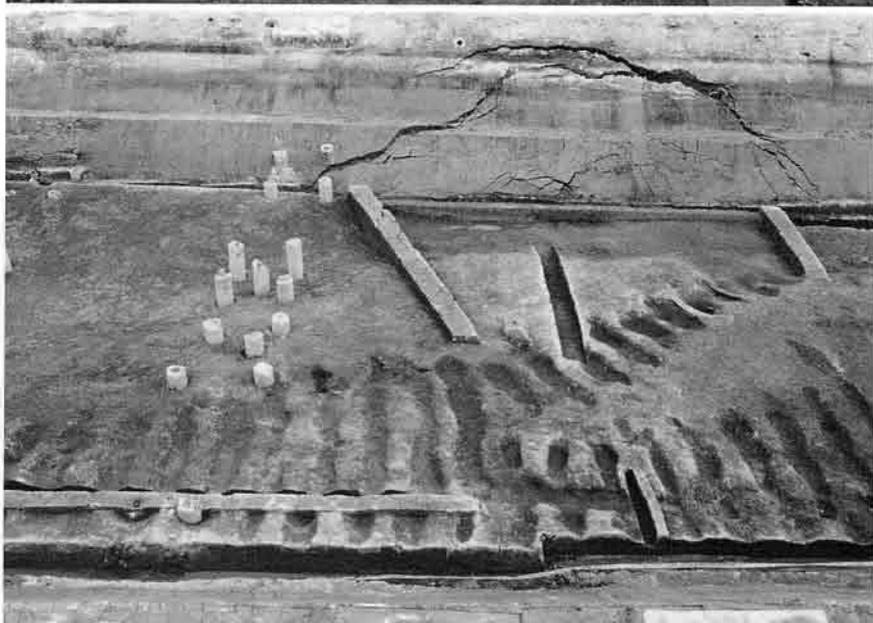


SK702
コウヤマキ材
出土状況
(北から)





II区畠掘削状況
(北から)

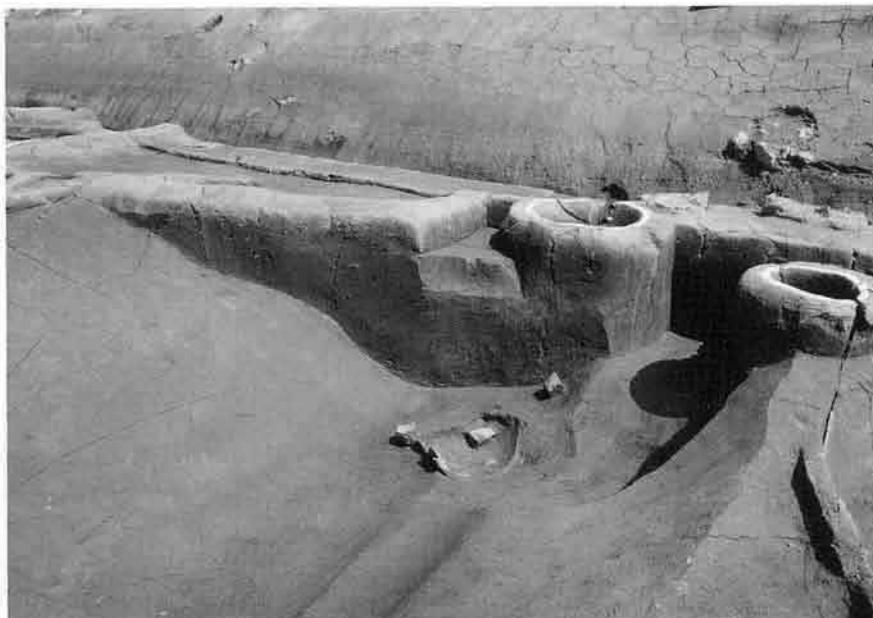


II区畠掘削状況
(西から)

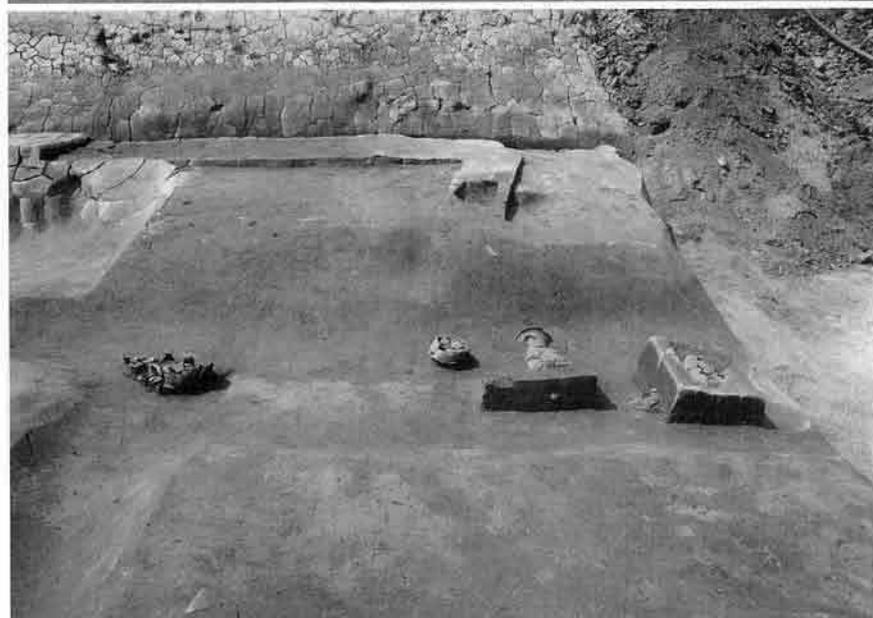


II区畠断面
(北東から)

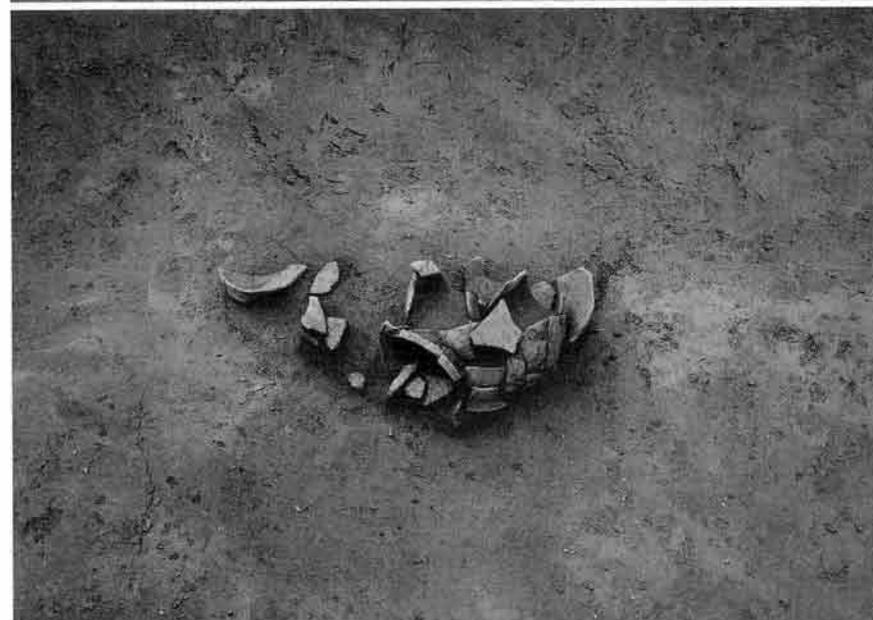
SD801断面及び
SK806検出状況
(南西から)

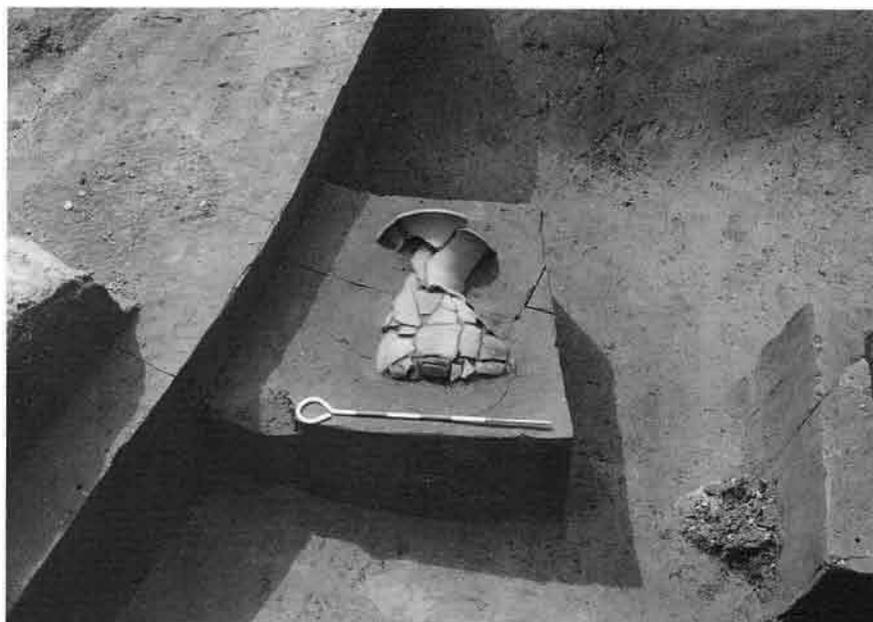


SD803完掘状況
(東から)



SD803
土器出土状況
(東から)





SD803
土器出土状況
(東から)



SK806
遺物出土状況
(南西から)



SK812
遺物出土状況
(南から)

SB701~704
掘削状況
(北東から)



SB703
掘削状況
(北東から)



SB703炉
掘削状況
(南東から)





SB702
掘削状況
(南西から)

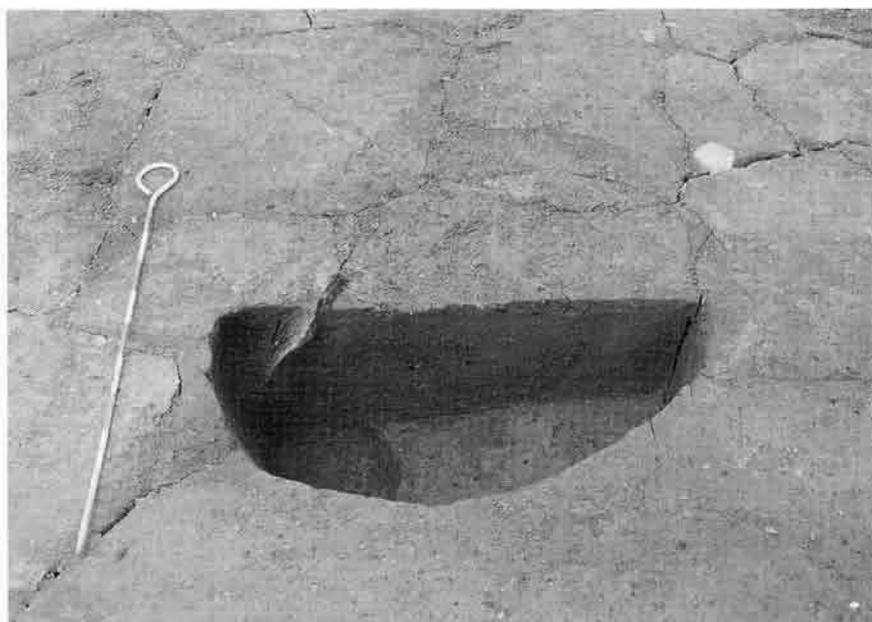


SB702炉
掘削状況
(西から)

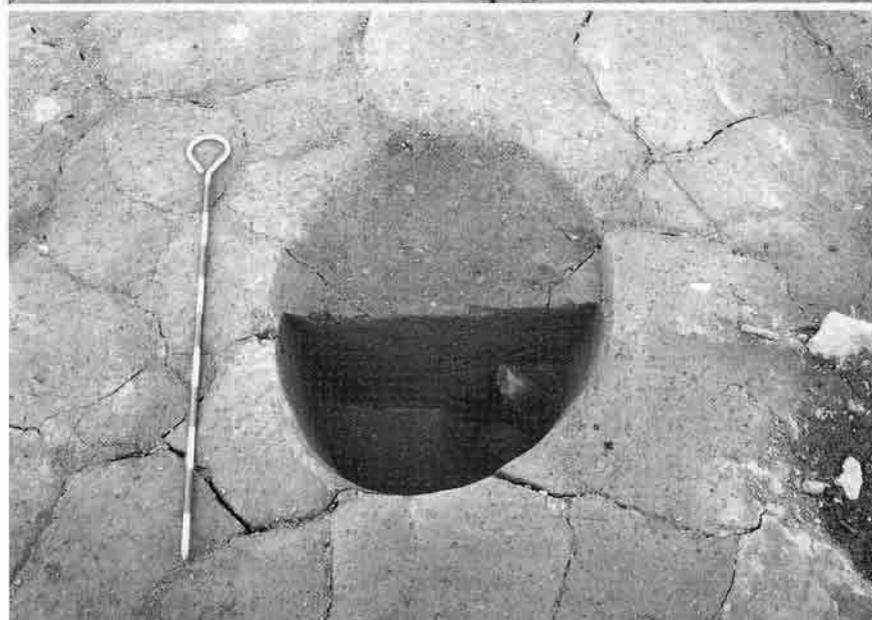


SB701・704
完掘状況
(空中写真)

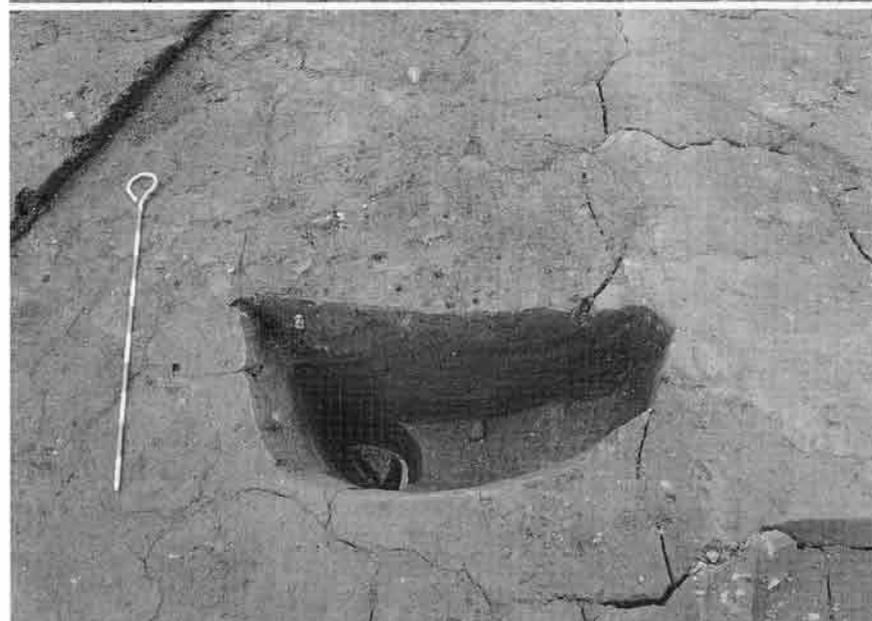
SB704-SP05
断面
(南東から)



SB704-SP01
断面
(南東から)



SB704-SP02
断面
(南東から)





SD713
掘削状況
(南東から)



SD601
掘削状況
(南西から)

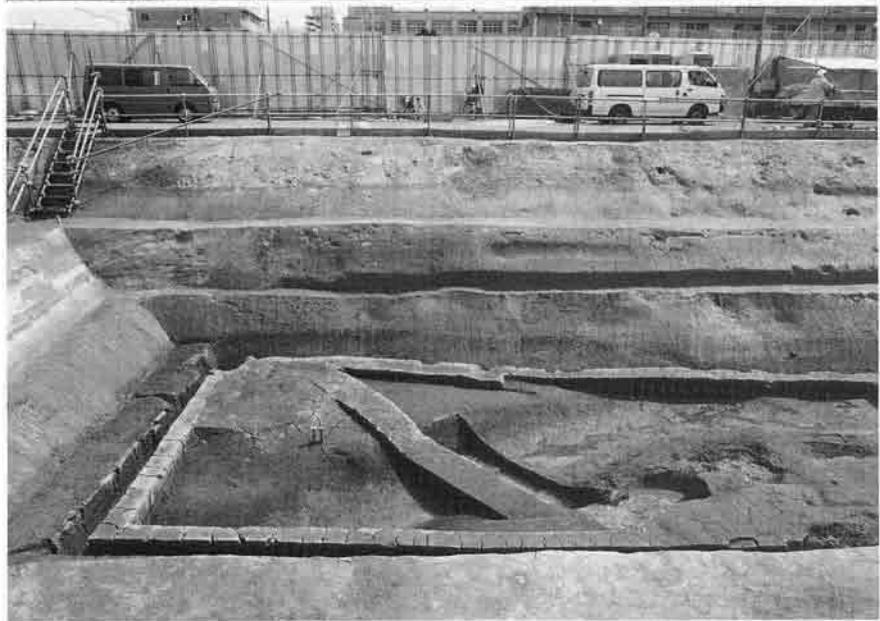


NR602
完掘状況
(東から)

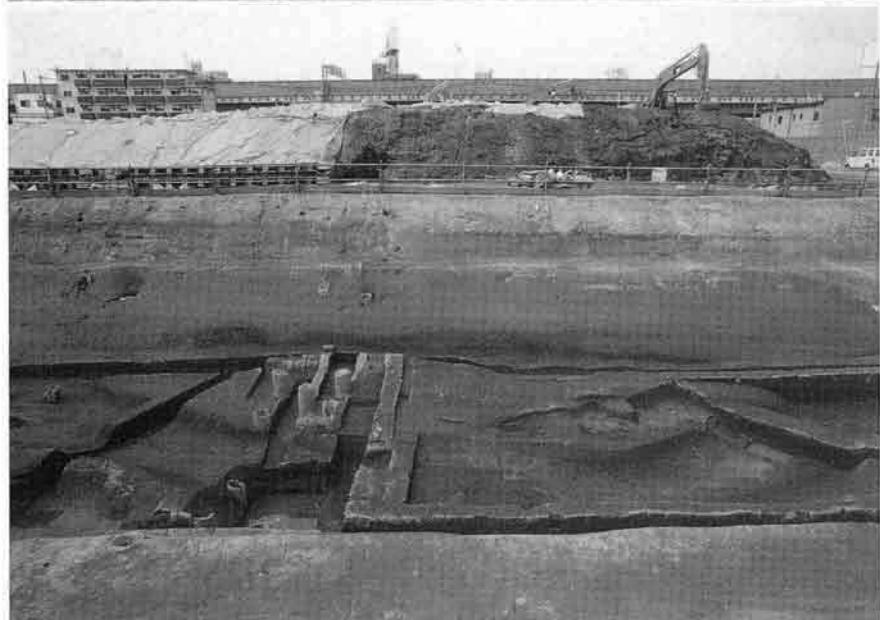
SX714~717
掘削状況
(北から)



SX714
掘削状況
(西から)



SX715
掘削状況
(東から)





SX716
掘削状況
(南西から)



SX717
掘削状況
(北西から)

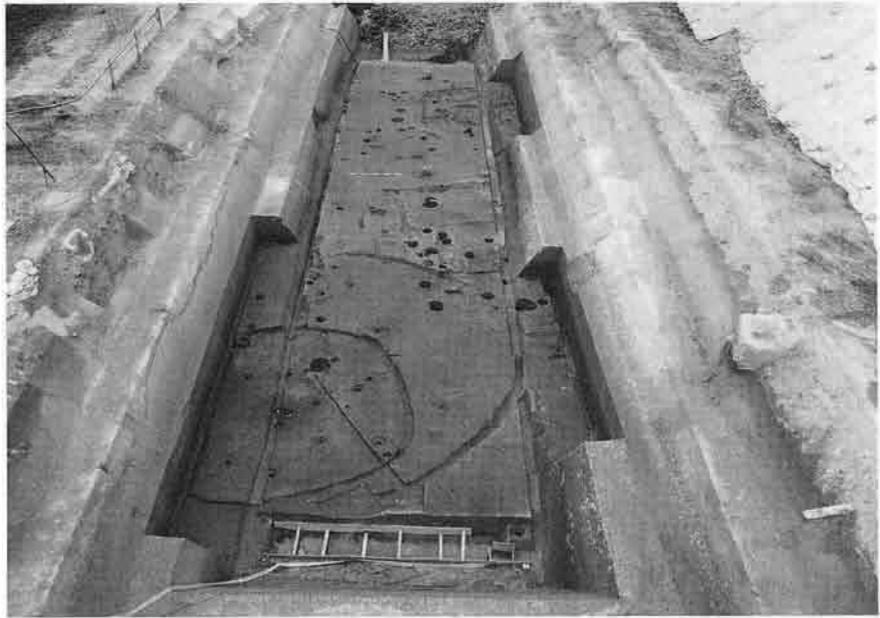


SX714-715間
溝断面
(南東から)

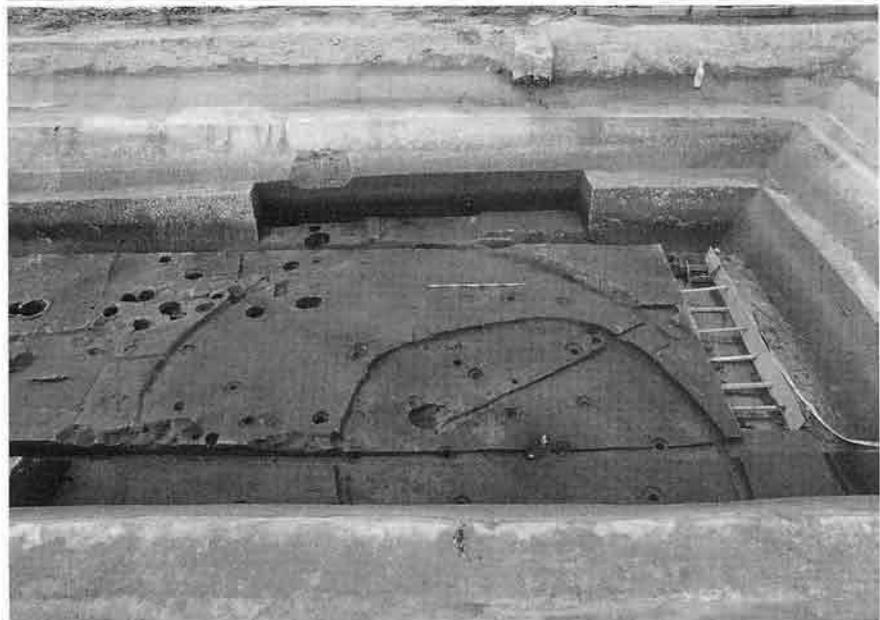
SD804
完掘状況
(北から)



SB801・802
完掘状況
(東から)



SB801・802
完掘状況
(南から)





SB802東側土器群
出土状況
(北西から)



SB802北側土器群
出土状況
(西から)

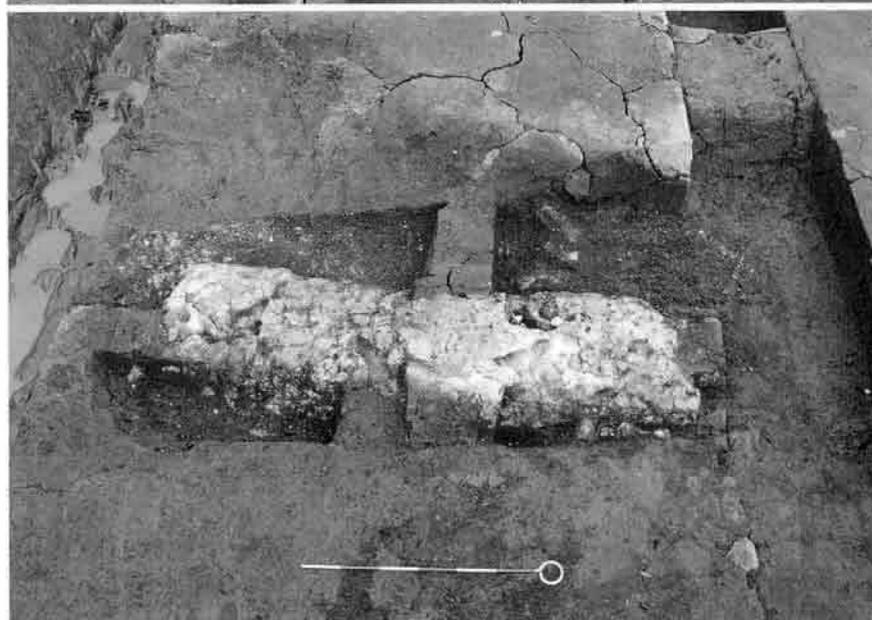


SB802北側土器群
出土状況
(南西から)

SB7001
掘削状況
(南東から)



SB7001内
中央粘土堆積
(西から)



SB7001
完掘状況
(南から)





SB7002~7004
掘削状況
(南から)



SB7004
完掘状況
(南から)



SB7004
完掘状況
(西から)



NG03-5次調査地
SD703出土土器



NG06-3次調査地
SD803出土土器



NG06-4次調査地
SB802西側土器群



1



11



4



12



10



13





21



24



22



25



23



31



34



38



35



39



36



37



41



42



45



43



46



44



47





62



69



64



72



67



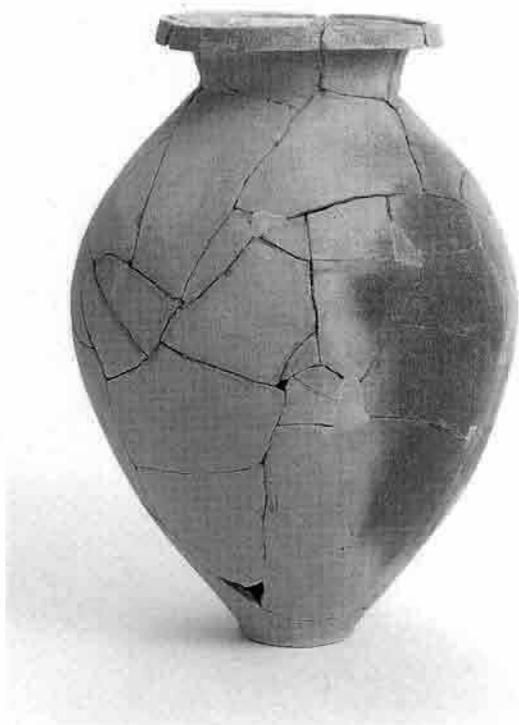
73



75



81



89



82



90



88



91



92



94



95



109



119



123



126



135



128



136



129



137



132



138



139



156



149



157



152



158



155



160





240



244



241



245



246



243



247



249



253



250



254



251



255



252



256



257



260



258



261



259



262



263



267



264



268



265



270



266



271

SB802東側土器群(263~268・270・271)



272



275



273



277



274



285



大阪市平野区 長原遺跡発掘調査報告 XVII

ISBN978-4-86305-007-5

2008年3月31日 発行©

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

<http://www.occpa.or.jp/>

印刷・製本 株式会社 ヨシダ印刷株式会社

〒532-0003 大阪市淀川区宮原5-1-18

**Archaeological Report
of the
Nagahara Site
in Osaka, Japan**

Volume XVII

A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Municipal Apartment house complex
in fiscal 2003 and 2006

March 2008

Osaka City Cultural Properties Association

**Archaeological Report
of the
Nagahara Site
in Osaka, Japan**

Volume XVII

A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Municipal Apartment house complex
in fiscal 2003 and 2006

March 2008

Osaka City Cultural Properties Association